女子文壇

第九年六月號　第八號

明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十）
大正二年四月二十五日印刷納本（五日印刷納本）
大正二年六月一日發行（毎月一回一日）

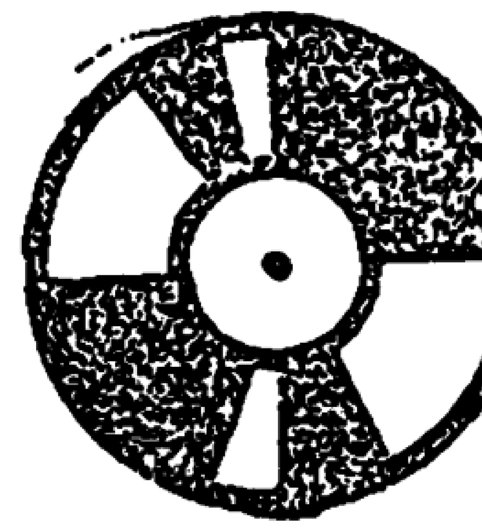


東京女子文壇社發行

新音譜賣出し



蓄音機が娯樂品たりし時代は既に過去に屬せり多年弊店に於て製造せる精巧無比なる八種の器械と肉聲をも凌がんとする三千餘種の音譜とは家庭に於て學校に於て進んでは廣く社會のあらゆる階級に於て殆ど必要品として其需要日に増加しつゝあり



括目して見られよ今月賣出し左記の新音譜を

（一）歌劇家としての原のぶ子女史の妙音絶調聞く者をして覺えず血沸き肉躍るの感あらしむ

（二）前古來曾有なる調和歌此れ實に澤田澤山遠藤の三名が苦心惨膽巧みに和洋の音樂を調和せし者

（三）次は納所文子孃獨得の聲調文部省發行の新唱歌五種兒童諸君が喝采の聲山野に滿つる日蓋し近きにあるべし

唱歌（ピアノ入）

一九四〇 一九四一 赤鷲印兩面盤 日の丸の旗、鳩、おきあがりこぼし 人形、ひよこ、かたつむり

一九四三 一九四二 同 牛若丸、夕立、池の鯉 桃太郎、菊の花、犬

一九四四 一九四五 同 木の葉、兎、花咲爺、軍艦マーチ

調和歌

二三〇九 二三一〇 鷲印兩面盤 埴生の宿 故郷の廢家

二三一三 二三一四 同 梅にも春 春雨（ピアノ、ヴァイオリン フリュート）

納所文子 同辨次郎 同同 同同 同同 同同 同同 同同 同同 同同 同同 原のぶ子 澤田柳吉 同 同 澤田柳吉 横川國太郎 遠藤和一

（赤鷲印兩面盤金貳圓 鷲印兩面盤金壹圓五拾錢）

全國に四拾の支店と四百の特約店あり

東京市京橋區銀座二丁目

株式會社 日本蓄音器商會本店

長電話京橋 （三五八番 二五七番）

女子文壇

六月號

第九年第八號

目次

夏木立



講談世界

第二年第六號

正價
一冊送料共金廿二錢
三箇月 金七十五錢
半年分 金一圓四十錢
一年分 金一圓七十錢

發行元
東京神田區旅籠町一丁目
文光堂
振替東京一九五五番
電話下谷四八一九番

六月號目次

——(賣捌所は全國各地書籍雜誌店にあり)——

奧田文部大臣の雜誌觀本號揭載

婦人世界

六月一日發行 八卷七號 定價一冊 拾五錢 郵稅一錢五厘 半年七冊一圓五錢 一年十四冊金二圓五錢

▲朝の暮らし方……嘉悅孝子、吉崎學士夫人、鳩山學士夫人、林學士夫人、福井菊三郎氏夫人

◎內氣な女と快濶な女と……下田歌子

◎華族の姬君と徒步旅行……木村貞子

◎麥飯を召上れ……原田彥左衞門

◎新聞賣する女學生……矢島揖子

◎孫を見に米國まで行つたお婆さん……

村井弦齋氏の小說 子寶 は愈よ佳境に入り益す大評判です。是非御一讀を乞ふ

▲婦人雜誌に望む……文部大臣 奧田義人

◎日本婦人に旅行を勸む……木下博士

◎流產の原因は何が多いか……產婆 西尾京子

◎我が家の廢物利用實驗……比志島夫人

◎藝者のやうな服裝する奧樣……棚橋絢子

◎唇の形は變り易いもの……志村誠麿

△小兒と胎毒……加藤博士

△夏向きの料理……櫻井近子

△大阪の婦人博覽會見物記

△教科書以外の教科書……

△弦齋夫人の家庭叢談……

△若き旅人より……鐵火鞭

▲實說不如歸……天下の疑問に答へて眞事實を語るものは本篇也、涙ある人は一讀せられよ

發行所 東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 振替口座三二六番 賣捌 全國書店

誌友小集花の會



（記事参照）

（前列右より）小笠原貞子、松井月草、西崎花世、杉浦翠、赤田よし子（後列右より）吉田清子、水野葉舟、河井醉茗、白木絲子、澤村胡夷、杉浦氏令妹百合子、山田わか葉、今井邦枝子、杉浦非水、平塚白百合

青嵐



醫學博士中濱東一郎氏令嬢あや子



會社員小川誠氏夫人

白頭巾樋口麗陽著

岡本一平氏裝幀及書

新しき女の裏面

定價金五十五錢　郵税金六錢

四六判洋裝頗美本　本文三百二十餘頁

現今社會の大問題として喧噪せられたる所謂新しき女の裏面を最も眞面目に最も露骨に解剖したるものなり。

東京淺草區福井町壹丁目　池村書店　振替東京六一三三番

東京市淺草區下平右衞門町　岡村書店　振替東京一九〇六五

山師的の廣告と同一視するなかれ

最新發見 **わきが必治法** 藥物攝生對症療法

元來わきが症なるは難治の慢性症にて未だ該療法の完全したるなし◎當所は如何にもして本症の全治法を發見なさんと最新化學を應用し多年研究に研究を重ねし結果漸やく完成せるを以て該病患者數百人に實驗せし處殆んど百發百中の好成績を認め得たり、豈當所の光榮たらんや、該病にて困難の諸彥は最後の試驗として本療方法を試みられよ根本的に以て苦惱を去り得べし◎本療法僅かにして天賦の幸福を全ふせられん事を◎詳細なる使用法攝生法等は現品に添付す

販賣定價
輕症用 一人分 一圓五十錢
重症用 一人分 二圓五十錢
慢性症用 一人分 五圓五十錢
送料各八錢

化學療法研究所

東京市下谷區御徒町一ノ九　安蒜製藥部　振替東京九八四八番

最も人にきらはれる

わきが

の病に罹られたる御方又永年慢性わきがにて色々の治療を施されても治らずに苦まるゝ御方の爲めに不思議によくきく治療法を御知らせ致します御望みの御方は御遠慮なく只返信料三錢切手御送り下されば御知らせ致します

東京神田區錦町三ノ三　中村喜三郎

秘密で内々お知らせ

梅毒新藥

バイドクトル

梅毒一切ひえしつかさ横根かんそ等の大妙藥にて實に**ビツクリ**するほど妙によくきく

壹週六拾五錢貳週壹圓廿錢參週壹圓六拾錢五週貳圓半

麻病新藥

リンドクール

りん病せうかち唯一專門の特効藥にして面白いほど**ヨク**なほる不思議の靈藥なり

壹週六拾五錢貳週壹圓廿錢參週壹圓六拾錢五週貳圓半

陰萎新藥

強精丸

神經衰弱●陰萎●遺精●早漏●過房手淫の障害等總て生殖器能の疾患を治癒する新劑也

小包七拾錢 中包貳圓 大包三圓 特別五圓

秘密珍劑

長命丸

昔より名高き四ツ目屋の長命丸にして効能は皆さん能く御存じの男女外用粹藥也未だ知らぬ人は早くお試しあれ

小器入廿錢中器卅錢大五拾錢别壹圓

花柳粹藥

春雨（はるさめ）

極柔かき局部外用の珍劑にして花柳病を豫防し毛ぎれたゞれ等を治す妙効用ひて知るべし**ホント**に妙な藥

小器入廿錢中器入卅錢大器入五拾錢

月やくおくろし

月經丸

月やくの滯りを無害に安全に流下する月さらへの妙藥

五拾錢、壹圓、貳圓、參圓、五圓

毎月三日分宛飲み置ば月經とまらず

子の出來る藥

妊娠藥

更に子の出來ぬ人又は姙娠しても流産する人等に用て健全なる兒を姙娠せしむる秘藥也

七十錢壹圓四拾錢貳圓八拾錢三圓半

子の出來ぬ器

避妊玉

アトシヤと稱する新發明の避妊具にして之を用れば姙娠せず極小形の愉快なる閨房具なり

說明書付一組壹圓

最新毛はえ藥

毛生劑

頭、口ひげ、まゆげ及陰部等すべて有るべき所に毛なき人用れば美毛發生する妙劑也

廿錢五拾錢壹圓

やせる藥 八十錢壹圓半三圓五十錢

高等美顏料

美白劑

色を白くしキメをこまかくしツヤを美くする高等美顏料なり廿錢五拾錢

懐中香水紙 十二枚壹袋參拾錢

婦人必要品

子宮サック

子の出來て困る時に用れば姙娠せず**ゴム**製何十回も使用し得て便利也

並製七拾錢上壹圓

ルーデサツク 四個廿錢十二個五十錢廿七個壹圓

和合の礎

いもり黒焼

男女の中の悪き人うばの小兒になつかぬ等總て中を善くする和合の奇藥

並五拾錢特製壹圓

寢小便袋 男用壹圓四拾錢 女用壹圓卅錢 小兒用男女各壹圓

大阪 高麗橋壹丁目 振替三三〇番 **長命堂藥房**

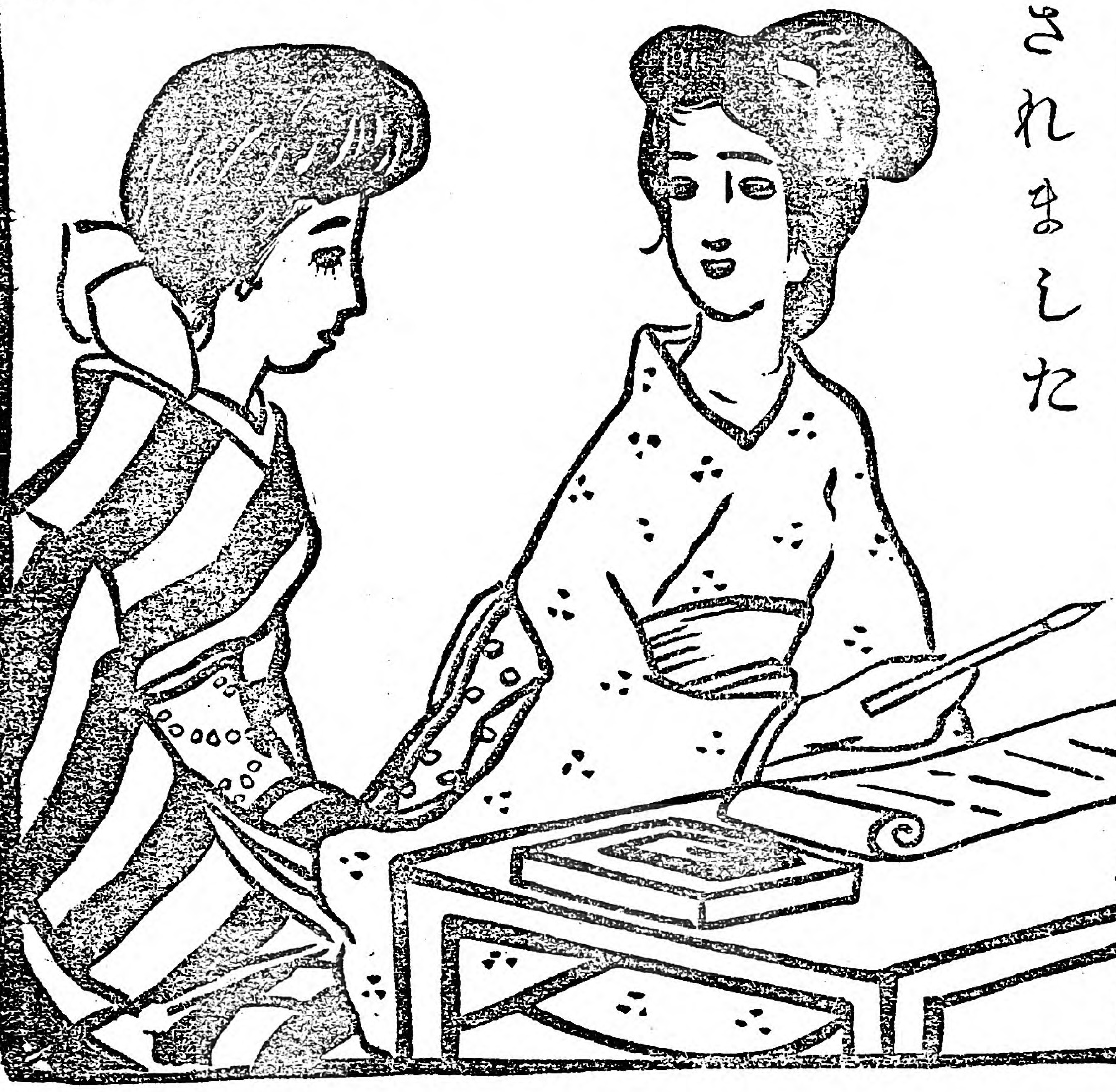
此廣告の品御入用の節は振替又は爲替にて御送金次第直に郵送可仕候

悪筆で泣かされました

（某女流教育家の懐舊談）

妾は今日まで悪筆の爲め隨分泣かされました。幼い折は習字が非常に嫌いで。父からひどく叱られて始終泣きました。嫁いでから字が汚いといつて夫から、叱られ、親戚の者から笑はれて、悔し泣きに泣いたことが幾度あつたか知れません。併し今日の若い方は誠に仕合せで、妾の娘などは專賣特許の習字速成法で練習した爲めに妾よりも巧くなりました女として字の下手なほど恥かしいことはありません若い方でも年を老つた方でも速成法で練習して一日も早く能筆におなりになるやうに御勸めいたします。それは東京本郷大學正門前帝國習字速成學會へ「ハガキ」を御出しになれば見本と會則を無代で送りてまゐります。

類似物が出來ました



青葉の雫



鍋島侯爵令嗣夫人禎子　前田侯爵夫人漾子

休める胡蝶



大濱喜一郎氏と夫人しげ子



梅雨とキモノと、夫と妻の對話

妻『あゝ又梅雨が來ましたわねえ、梅雨には着物に蟲がついたり、濕氣を含んだりしますから、心配ですわ』

夫『心配しなくてもいゝよ

衣裳比薫

と云ふ香料を箪笥に入れて置くと、蟲害は防ぐし、濕氣は拂ふし、其上、何とも云へぬ好い移り香がするさうだ』

妻『さう！では着て出た時に、着物からいゝ匂ひがしていゝでせうねえ、早速買つて來て頂戴な、會社の御歸りに！』

夫『ウン、呉服屋や化粧品屋、小間物屋には何所にでも賣つて居るさうだから、買つて來てやらう！』

發賣元　大阪市北區源藏町　飯田東籬園

各地著名なる呉服店、小間物、化粧品店にて販賣せり

好評圖書八種

（女子文壇讀者諸君に限り無送料）

ズーダーマン著　島村抱月譯及補
故郷（マグダ）
文藝協會公演脚本
中澤弘光畫　金九拾錢

ウイルヘルム、ハイデルベルヒ著　松居松葉譯
おもひで（アルトハイデルベルヒ）
文藝協會公演脚本
中澤弘光畫　金九拾五錢

正宗白鳥著
生靈
箱入五百頁
名取春仙畫　金壹圓

柳川春葉著
生さぬなか
上卷中卷　下卷後編
杉浦非水装釘　鰭崎英朋彩畫　各金九拾五錢

柳川春葉著
女一代
前編後編
杉浦非水装釘　鏑木清方彩畫　各金壹圓

柳川春葉著
花賣女
箱入五百頁
中澤弘光装釘　鏑木清方彩畫　金壹圓

佐藤紅緑著
礎（いしずゑ）
前編後編
名取春仙畫　各金九拾錢

菊地幽芳著
秘中の秘
近刊
杉浦非水装釘　鏑木清方彩畫　金壹圓

發兌元　東京市麴町區平河町五丁目五番地　特電話（番町二〇三九）（振替三八一七）　金尾文淵堂

未來の立身を望む者は必ず見よ

催眠術通信教授

説明書無代進呈



不可思議なる幽理と靈怪學の幻術とを應用せるが如き方法にて我が心の儘に人々の身心を統御し得ると云ふことは、如何なる事業に於ても成功の捷徑である。諸子よ冷靜なる頭腦を以て、立身成功家の過去の行程を考へらるゝの時、吾人の斷定の僞で無いことをいなみ難いであらう。催眠術及心力波及術はこれが法則を研究する科學であつて單に人を眠らしむるに止まる術ではない。これを應用して疾病を治療し惡癖を矯正し得るは今や確固なる事實であつて進んでこの原理を應用し處生上大なる利益を得るは實に理の當然である斯術は正則完全なる本會の通信教授法により、僅少の學費と日時とを以て確實に習得する事を得べし斯術の説明及實驗、本會々則等を詳述せる書冊は、葉書にて申込次第送呈すべし

大阪市東區生玉町

帝國神秘會

綠室



醫學博士稻垣長次郎氏夫人

白き鳩



男爵岩崎彌太郎氏令弟夫人八百子



ドクトル難波輝秀氏夫人里久子



黒澤次久氏夫人千代子



安川清三氏夫人幸子

專賣特許

植木式簡便哺乳器

兼完全消毒塲

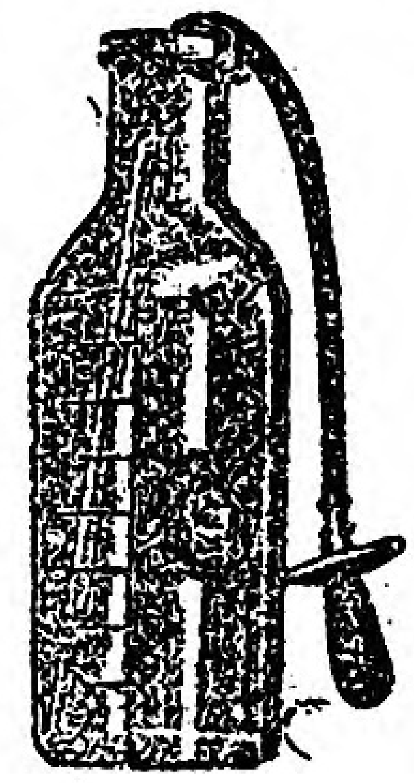
醫學博士瀨川先生
醫學博士榊先生
其他諸大家稱賛

（完全消毒塲）

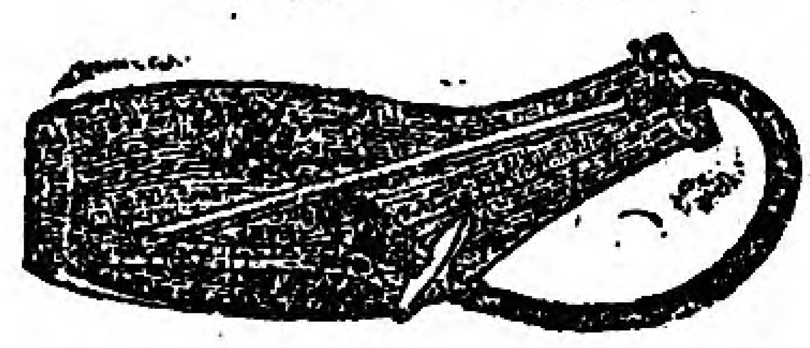
壹號（劃度附）
貳號（無度）



簡便哺乳器
壹號
參號　四號



松印　竹印



各藥店に販賣せり
御最寄にて御問合を願ふ

但し類似擬製品あり
藥劑師植木雄飛製造の
貼紙に御注意を乞ふ

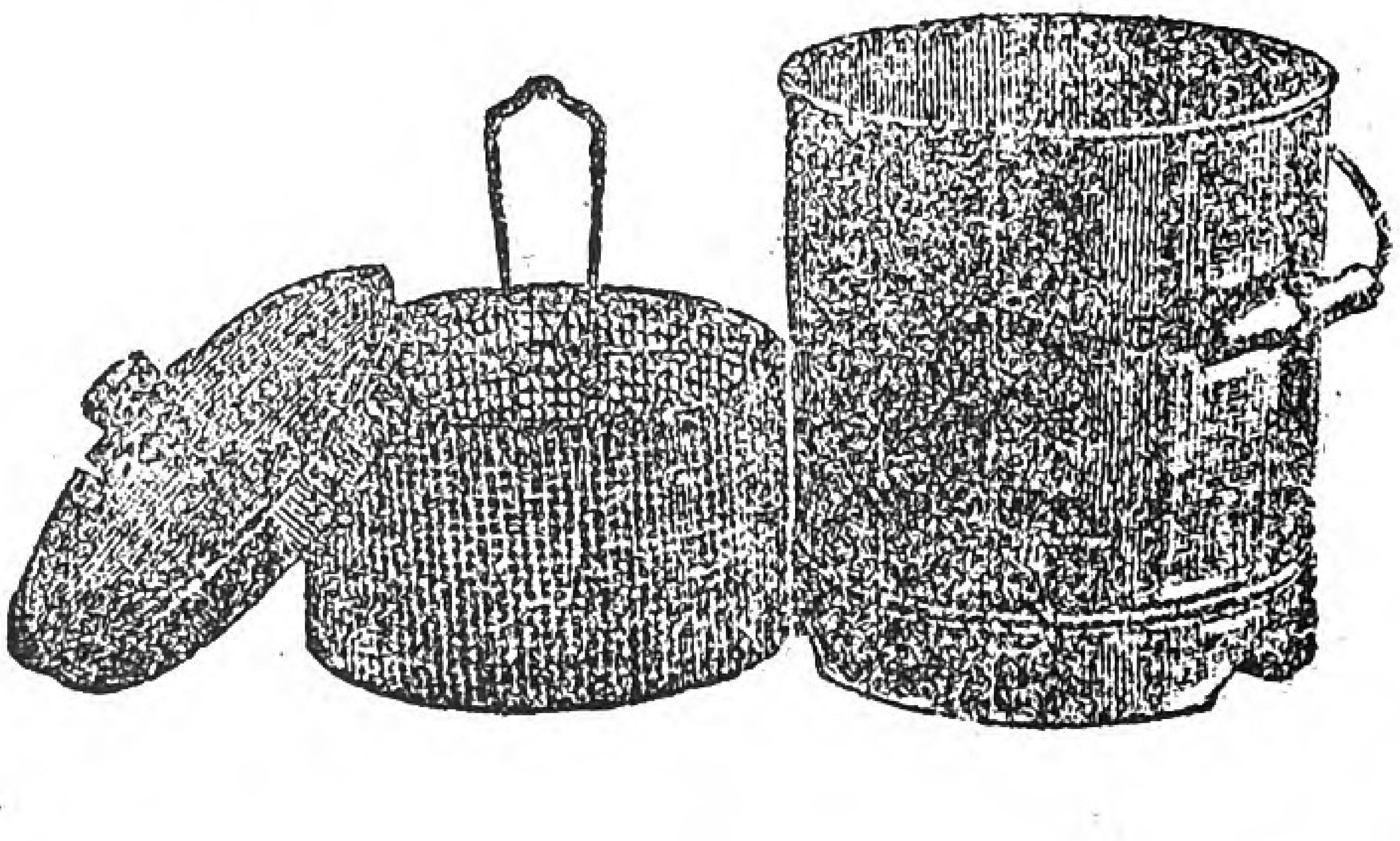
好評嘖々

專賣特許植木式輕便防腐器

特裝五本用
並製六本用
並製三本用

輕便防腐器は内部の金網も從來のものより丈夫親切なる拵へで且底の構造により湯の沸き早く炭の入用少なく甚丈夫便利にして殊に體裁優美です

輕便防腐器（ニツケル製）



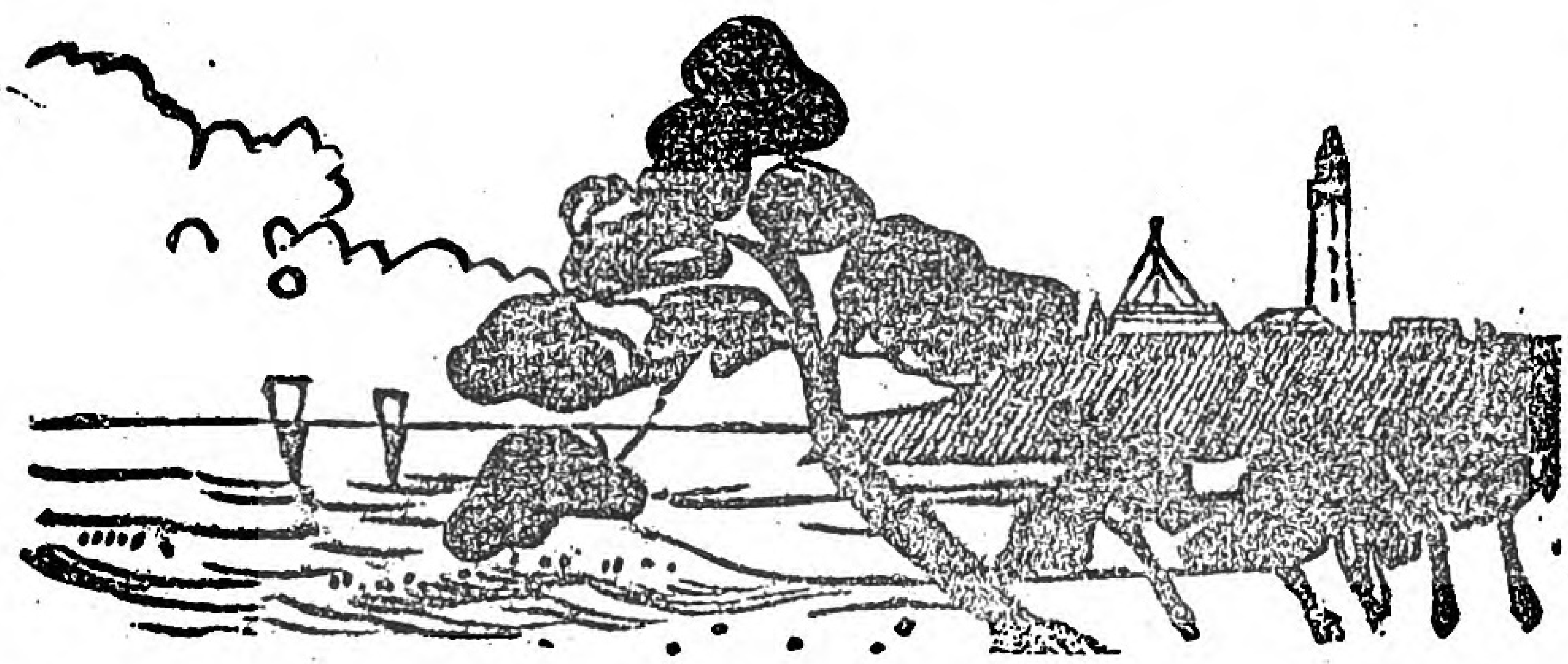
製造兼發賣元　乳呑問屋
藥劑師　植木雄飛
東京市神田區表神保町一番地
電話本局三七五六
振替貯金六二九一

（に一）

山十印

銚子 犬吠岬と君ヶ濱と

最上醤油



醸造元 千葉縣銚子港 岩崎重次郎

（電話銚子三〇番 振替口座五七二番）

人若し藥を需めんとせば須く撰擇を要す清心丹の三大特色は

一 効能の確實

二 品質の善良

三 價格の低廉



主治効能

心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、過飲過食、惡心嘔吐、溜飲宿食、中暑中寒、下り痢、疝痢、舟車不快、咯痰咳嗽、咽喉不調、齒痛口臭、

定價 壹圓箱入 五拾錢箱入 參拾錢鑵入 拾五錢鑵入 拾貳錢瓶入 貳拾錢紙包 拾錢紙包 五錢紙包

本舗 東京市日本橋區元大坂町八番地 高木與兵衛

若き日の幸



長咲子孃

新井松子孃



島崎いま子孃
渡邊きち子孃
加茂きく子孃

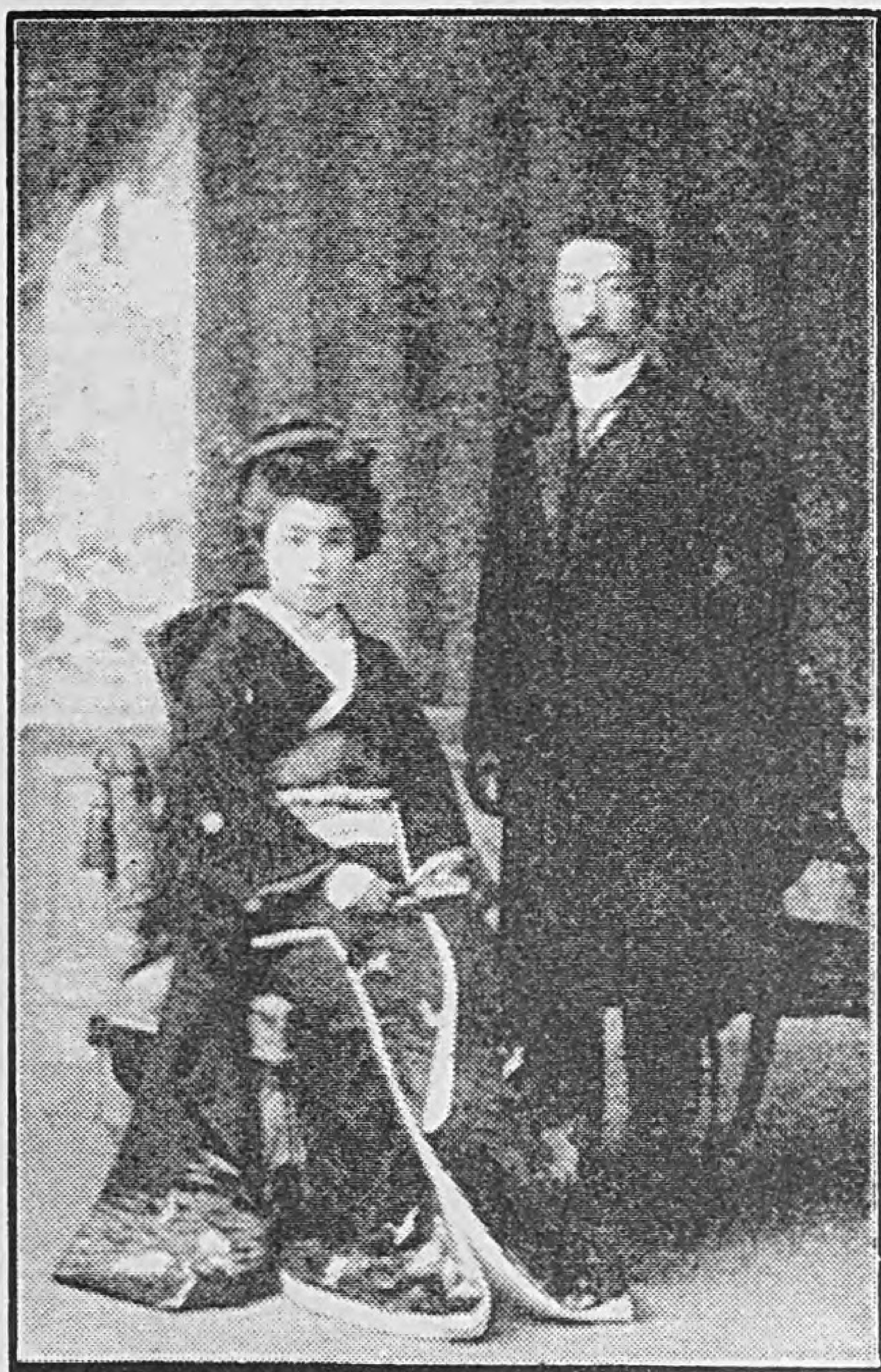


杉村まつ子孃

富田てる子孃



三條公輝氏と夫人妙子



高澤工學博士令嗣と夫人龍子



前田侯爵家家令羽野友二氏と夫人給子



會社員都筑秀雄氏と夫人千代子

THE LADY'S GRAPHIC
婦人畫報

六月一日發行 六月の卷 定價廿五錢 郵稅二錢五厘 六冊前金稅共一圓五十三錢 十二冊郵稅共二圓九十四錢

畫報

▼東宮殿下御遠足▼初夏の新宿御苑

▼御入洛中の山階宮妃殿下▼結婚式

●貴婦人の相談會●流行の髮●藤波式お化粧

●女官風俗●元祿ぶり●自働車●古き女の會

●薄茶の手前●潮音●匂へる髮●手柄杓

●新婚●諸名家令嬢●竹柏會●玄關前

▼各女學校の修學旅行▼飛驒の花嫁

▼若夫人及び令嬢の蠶業講習所參觀

●口繪∴夕風……二頁大原色版・平岡權八郎氏筆

讀物

▲柔と剛との調和……小笠原子爵

●新しき意味の良妻賢母……上杉博士●川柳の女……久良岐

●私の見た各地の婦人……巖谷小波●飛行家の家庭……虛生

●エレンケー……浩々歌客●六月家事……嘉悦孝子

●婦人界見聞錄……飛耳張目●婦人衞生……磐瀨博士

▼生花を時代に適應せしめよ……遠山博士

●淺草公園の半夜……宮田修●茶の煙……境野明子●名流婦人訪問

●後の五十錢會……W學士●六月……與謝野晶子●櫻かゞみ……時雨

●其日々々……三宅花圃●米國の女……原口つる●娘氣質……しらん

●東京の女……蕪子●此頃の遊覽……若月學士●裁縫とお料理

▼脫線した女……大木伯爵

東京市麹町區飯田町四ノ四 振替口座東京一八一八番
東京社
電話番號番町二三三九番 各地到る所の書店に有り

●少年少女達の家庭最良讀物

佐々木邦氏作
好評

三人やんちやん

再版

▼中判美裝 武田壽氏石版彩色畫 木版色刷挿畫六葉入

正價金參拾五錢 送料金六錢

いたづら小僧日記で有名の、佐々木邦先生の作ですから、大人にも小供にも面白いてと請合の書物です。世の中に出ると、到る處評判になつて、何處の家庭でも爭ふて購求され。此頃の好著として、持て囃されて居ります。

（諸新聞好評あり）

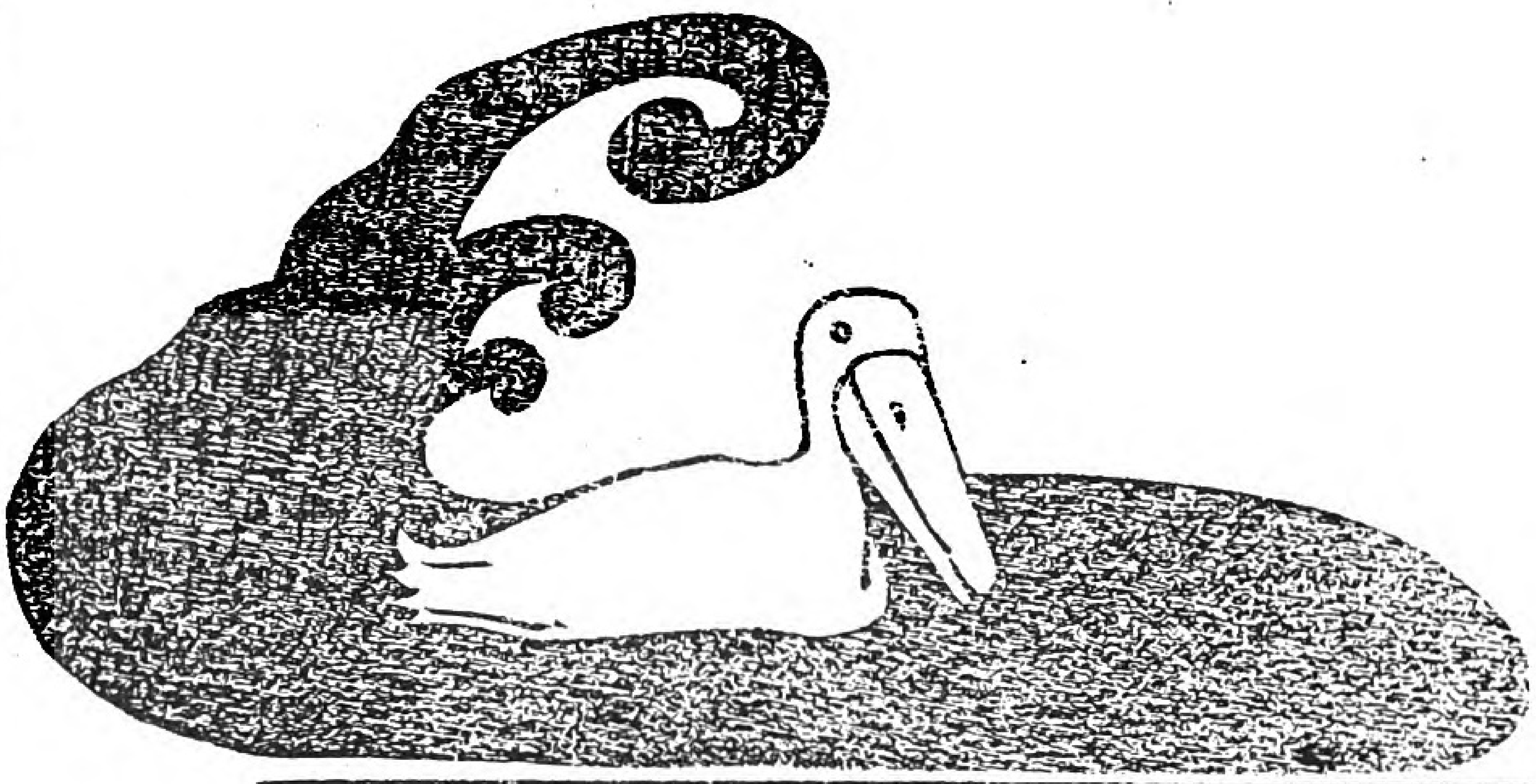
出版元 東京 京橋區大鋸町十一 振替東京壹七貳九一 女子文壇社

どこの本屋でも取次販賣して居ます

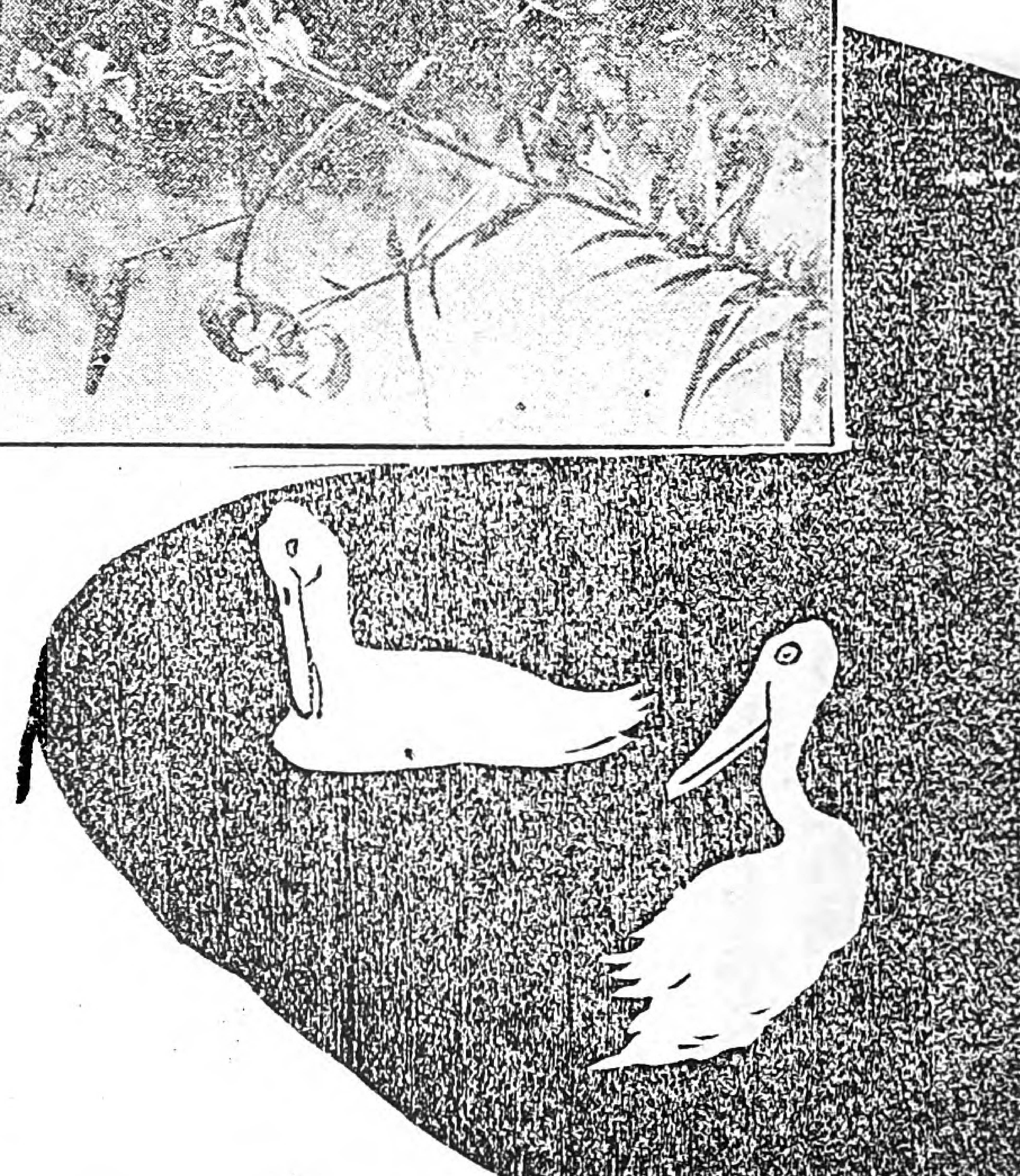
女子文壇

第九年第八號

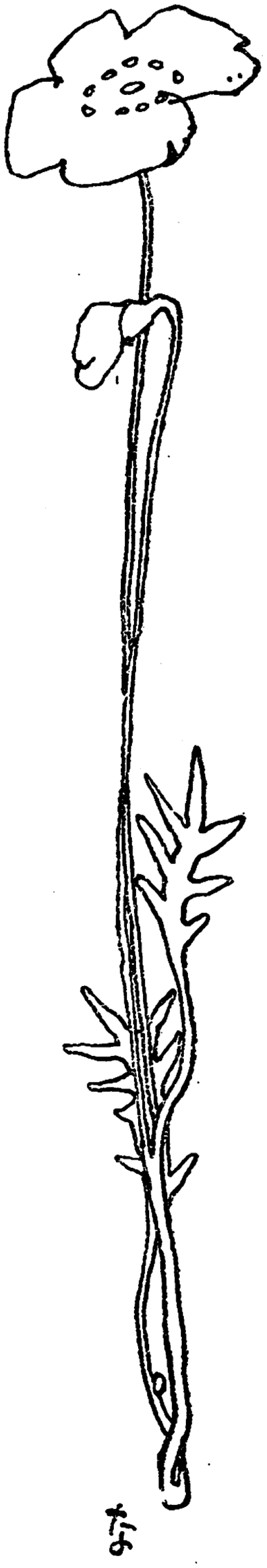
大正二年六月一日







うつむいて
なにをおもふ
百合の花



婦人研究

菊地幽芳

前號には近代の所謂婦人問題と勞働問題との交渉について解説したが、私は更に婦人問題を硏究するには心理的觀察、生理的觀察、社會的觀察と、この三方面の觀察を試むるを必要と考ふるものである。

全體新しい人が常に社會に必要なるが如く、新しい女も社會を改善進歩せしむる上に必要である。そして新らしい人が舊思想の反抗を受けるやうに、新らしい女も多くの反抗を受ける事は當然である。只所謂日本の新らしい女は、社會の反抗といふほどに深刻な意味の反對ではなく、只冷笑を受けて、眞面目な人に齒されぬ傾がある。社會から少しの敬意も拂はれぬ事は日本の新しい女の大なる侮辱であらねばならぬ。併し飜つて考へて見るのに、彼等が社會から敬意を拂はれぬ事は寧ろ當然であるかのやうに思はれる。なぜと云へば彼等は思想の上の新しい女ではなくて、行爲の上の新しい女であるからである。異樣の行をなし異樣の姿

をするだけで、根本思想の上には何等着實の主張があるのではない。深い心の奥の叫びが表はれる深刻なところがない。只放縦な無節制な生活を遂げ、所謂生の慾望を充すに都合のいゝ、舊道德の無權威、人格の獨立といふやうな近代的の詞を使用するに過ぎぬ傾きがあるやうに思はれる。

併しいつの世にも新しい人が生れゝば、はき違へた新しい人が多數について生れるのは免かれ難い現象であるから、日本の新しい女も時勢の進歩の上には無くてならぬ捨石と見ねばなるまい。

私は今こゝに日本の新しい女を論ずるのではない。男子と婦人との相對的地位を改善し、近代婦人の新運動について、前記の三個の觀察を試み、前後に聊か評論を加へやうとするのである。



甲斐御嶽より富嶽を望む

△生理的觀察

男子に對し優越なる點

男女を生理的にまた生物學的に研究して、その優劣を斷定しやうとした事は、古來屢々試みられたが、常に失敗に歸して居る。男子も女子も互ひに一長一短で、いづれを何れとも定め難いのであるが併し生理上から見て女子の優越な點は可なりにある。例へば抵抗力の強い事、耐忍力に富む事、生活力の強い事、長命である事、これ等は諸家の議論の一致するところである。女は男よりもヨリ多く缺乏に堪へ、病氣に抵抗し得る素質を持つて居る。女の細胞は建設的乃ちアナボリックで



外國より

男の細胞は破壞的乃ちカタボリックである。男子は浪費するが女子は貯藏する。また統計に依ると重い病氣にかゝるものは女子よりも男子に多い。生物學の大家アベルヂーン大學のトムソン博士は最近生物學的に女子の特質を左の通り擧げて居る。

生活の執着力男子よりも強き事。男子よりも長壽なる事。體質上忍耐力ヨリ大なる事。病氣に對する抵抗力最も強き事。天才の少なき事。發狂及び犯罪の少なき事。

生理上に弱さうに見ゆる女子が、その實男子よりも強い事は、いろ／＼の統計が示して居る。亞米利加の保險組合醫師の統計によると、男子の死亡率が女子よりも常に高い。それは男子が女子よりも冒險であるからといふのではない、詳しい統計表をこゝに擧る事は避くるが、女子の死亡率の高いのは十二歳から十六歳迄で、その他の年齢においては概して男子の死亡率が高い。三十歳から四十五歳までは双方の死亡率が平均して居るが、四十六歳から五十六歳までは男子の死亡率が急に高まり、五十六歳以後の長壽者はずつと婦人が多くなる。

また佛國現代の大醫ベルチヨン氏の統計によると、死兒の生れる數は百分中男子の五以上に對し女子の四以下である。また生後二三週間内に死亡する數も百人中男兒の四、七六に對し女兒の三、八六である。これは明らかに男の胎兒の生活力の弱い事を示すものである。この弱さは終生男に禍するのである。また同じ

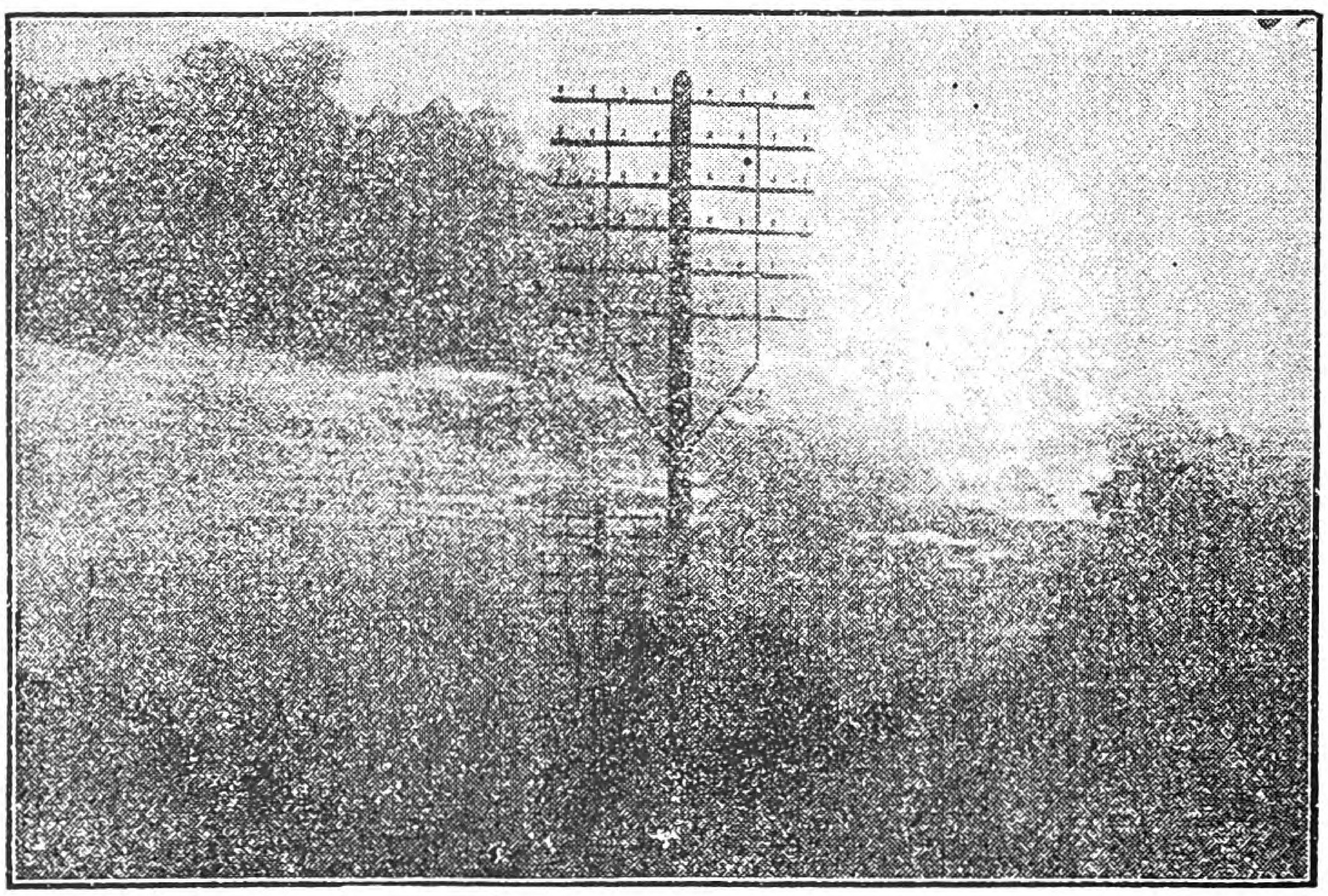
佛國のルゼアル氏が生物學協會で胎兒の比較研究を發表したが、それはベルチヨン氏の說を確かめるものでこれによると同一日數の胎兒は、常に女兒の方が完全して居る。卽ち營養機關淘汰機關等が男兒よりも備はつて居て、腎臟、腎臟靭帶、肝臟、心臟、胸腺等は男兒のものよりも充實し目方が重い。卽ち女は生れる前から完全に武裝されるので、女の生活力に富み、抵抗力に富む事の偶然でない事を示すものである。日本でも女の兒は育て易いと云ふのは男の兒よりも强健に生立つ素質を持つて居るを證するものであらうと思ふ。

女は睡眠などが不足でもよくその疲勞に堪ふる事が出來る。病院で手術などを行ふ際にも、女の方が善く堪へるさうである。體力において優る男子は、必ずしも體質においての優者ではないのである。所謂柳の枝に雪折は無しで、生理的に見れば、却つて女子を優れりとせねばならぬやうな事にもなつて來る。次に心理的に觀察すればどうであらうか。

△心理的觀察

女子とその智力的向上

これも心理的の男女の優劣を極めるといふ事は甚だ困難である。女子の心理は直覺的であり、感情的であり、主觀的であると共に、男子の心理は抽象的であり、理性



露領ブラゴウエスチエンスク市の夕照

的であり、客觀的である。一方にないところを以て一方を貶しめる事は出來ぬから、その點で優劣をつける事は素より出來ない。男は智において優り、女は情において優るとは、人の云ふところであるが、男は智において優るといふ事は、今の婦人運動には大變な影響を持つ事になるのであるから、たゞ漠然さう極めて了ふ事を許さない。女は果して智力において男子に劣るのであらうか。これはモ少し突込んで考へて見る必要がある。たゞ少なくとも過去の事實は智力的方面に男の卓越せる事を示して居るが、併しそれには長い時代に亘る歴史、慣習、教育の影響を考へて見ねばならぬ。女は二千年來男子の隷屬視せられて、智力的方面の事にはたづさはるべきものとされなかつたのであるから、その方面には伸びる事が出來なかつたといふ事も考へて見ねばならぬ。それにも拘はらず、文學に藝術に、科學に、時に或は哲學にさへも、既に幾多の俊秀な女子を出し、殊に婦人の自覺を來せる現代においては、ます〳〵婦人の智力的方面に關係するものを生じ、侮るべからざるその能力を發揮しつゝある事實は何人も拒む事が出來ないのである。今後若し社會が女子に對し、何等の束縛を加へず、智力上の自由競爭を許すに至つたならば、女子の智力的向上と飛躍は著るしいものがあらうと思はれる。私は女に向つて男子に對する智力上の競爭を態々勸むる必要はないと信ずるが、お前達の領分は情の世界だから、智の世界に足蹈する事は許さんのだと鎖國主義を唱へる必要は更にない事を思ふものである。智の世界に走らうとする女があるなれば走らせて見るがいゝではないかと思ふ。

次に西洋の本などには女子の心理的缺陷として、女子の公明正大を缺く事と、詐欺陰謀に長ずるといふ事を擧げて居るものがある。これは果して女子の先天的缺點であるかどうか。婦人が奴隷として賣買された時代には、婦人の僞と陰謀は實に巧妙を極めたものであつた。それは僞と陰謀は、その境遇に處して自ら衛る唯一の手段であつたからである。若し今日の婦人になほその缺陷が殘つて居るといふなれば、それは婦人の人格を無視し、手枷足枷をはめて來た二千年來の歴史が、女の心理狀態に一の習慣性を作らしめたと見るの外はあるまい。（つゞく）



新しき女の立脚地

男女兩性の對抗ではない

早稻田大學教授　金子筑水



近頃婦人問題が大分やかましくなつて來た樣である二三年前までは婦人問題はまだ所謂机の上の空論であつた傾があるが、近頃になつては段々それが事實上の問題となつて來たやうである。

世間では實際の婦人運動や、是れに關する議論を一種厄介なもの、危險な事柄のやうに見做す人もあるが大體に於いては我々は寧ろ喜ぶべき現象であると信ずる。

今日の婦人問題が猶渾沌として、其中には樣々見當違ひな観方や間違つた論説があるにも拘はらず、かう云ふ時代は一度は必らず通らなければならぬ譯であるから、吾々は寧ろかゝる時機が捗々しく運ばれる事を希望する。

近頃の婦人問題についてひそかに遺憾だと思つてゐる點は樣々あるが、第一此の問題が私などの觀るとてろでは、一種妙な具合に取り扱はれてゐるやうに思ふ。

例へば婦人の方面からは、男子に對する反抗がこの問題の中心であるかの如き氣勢が示され、また男子の方面からも、其の特權を侵害される事が今日の婦人運動であるかの如くに、議論されてゐる傾がある。婦人

問題と云ふよりは兩性の對抗問題と云ふ感がある。是れは問題が妙な方に外れた結果と考へられる。眞實の婦人問題は、必ずしも、唯さういふ風な對抗問題にあるのではないと思ふ。

そこで私は近頃の婦人問題を取り扱ふ人々に向つて次のやうな注文をして見たい。元來婦人問題は極めて複雜な問題である。一通りや二通りで中々片付く譯のものでない。問題の性質が餘程こみいつて居る。其の點から、私どもの考によると、極めて粗雜に別けても第一義的問題と、第二義的問題との區別があると思ふ此の區別を混同する事が、問題をして益々紛糾させる源だと信ずる。第一義的問題と云ふのは、云ふ迄もなく女性の自覺問題である。嚴密な意味で云ふ自覺問題である。イブセンが人形の家で呈出した類の問題である。つまり、女性が妻たり母たるに先立つて、一個の人間としての立場を自覺すると云ふ問題である。

是れは必ずしも、職業とか獨立とか云ふ問題から、切り放して考へられない問題ではない。近世の生物學上の假定に從つて、男性と女性とは、其の本源に於ては渾沌として一であつたものが、分業の結果、次第に今日の如く分れて來たものとすれば、よし、兩性が互に相異なるものであつても、人間としては、平等の意味を持つてゐるものでなければならない。

生物學者の說によると、動物と植物も最初は不二の源から分れて來たもので、進化の結果動物は植物に勝る地位を占め、動物が主で、植物が從たる關係を取つたのであると云ふ。

動植兩界に於ける關係と、男女の兩性に於ける關係とは、其の意味が餘程違つて居る。進化の結果、女性が從で、男性が主であるとか、男性が從で女性が主であるとか云ふ事が、現在の事實から歸納されない限り、男女兩性は互に相補ひ合ふもの、合して完全な位置を爲すべきものとすれば、人間としては、女子も男子と同じく第一義的自覺の境に進まなければならない此の意味の自覺は如何にしても、婦人問題の根本、若しくは最高のものであると思ふ。

然るに第二義的問題は、是れとは多少趣を異にして居る。たとへば、職業問題、獨立問題乃至女子の特性問題の如きが此の種類に屬する此の種類の中では、女性の特長問題の如きが矢張主なるものであらうが、然しながら、便宜上第一義のものとは區別して考へて差支がない。

女子に男子と異なつた特長があるか、女子は果して男子と同じ職業を取るべきか、それらに關する解決は如何にあらうとも、必ずしも、此れが爲めに第一義的問題を消して了ふ譯には行かない。

畢竟第二義的問題は、先づ第一義的問題を解決して後の手段方法に關する問題である。人間としての立場を明にして、然る後に賢母良妻となるか、又は其の外の道を行くかの問題である。此處の區別が極めて大切だと信ずる。



青葉の頃の靖國神社

近頃の婦人論には此の區別がいつも混同されてゐるやうに見える。假令ば或る種類の若い婦人が、第一義的問題を提出しやうとしながら、實際は第二義的問題に關する事柄を取り扱つて居る。折角問題の中心を捉へながら、世間からはたゞ男性に對抗する運動であるかの如くに誤解されて了ふ。「青鞜」の人々及び後から出來たところの「眞新婦人」の人々も、此の點に就いて、混同した考がありはしないかと云ふ疑がある。

新聞雜誌に現れた新しい女の判斷は、どうしても、此の二つがいつも誤解されて居る。たとへば、婦人運動の方面では

第一義的のつもりで、男女平等の立場から下した論說でも、直ちに第二義的に解釋して、兩性の差別から此の第一義的問題を批評する傾がある。又第二義的の意味で提出された問題をも、世間はこれを第一義的の如くに批評する傾を持つて居る。此れが今日の婦人問題が渾沌として、少しも形のつかない一つの原因であると思ふ。

勿論婦人問題は、議論や批評によつて解決されるものではなく、實際の事實の解決を俟つものであるには相違ないが、深く此の問題の性質を理解しやうとするには、どうしても、今述べたやうな着眼によつてゆく必要があると信ずる。

女性の謎を解け

浩々歌客

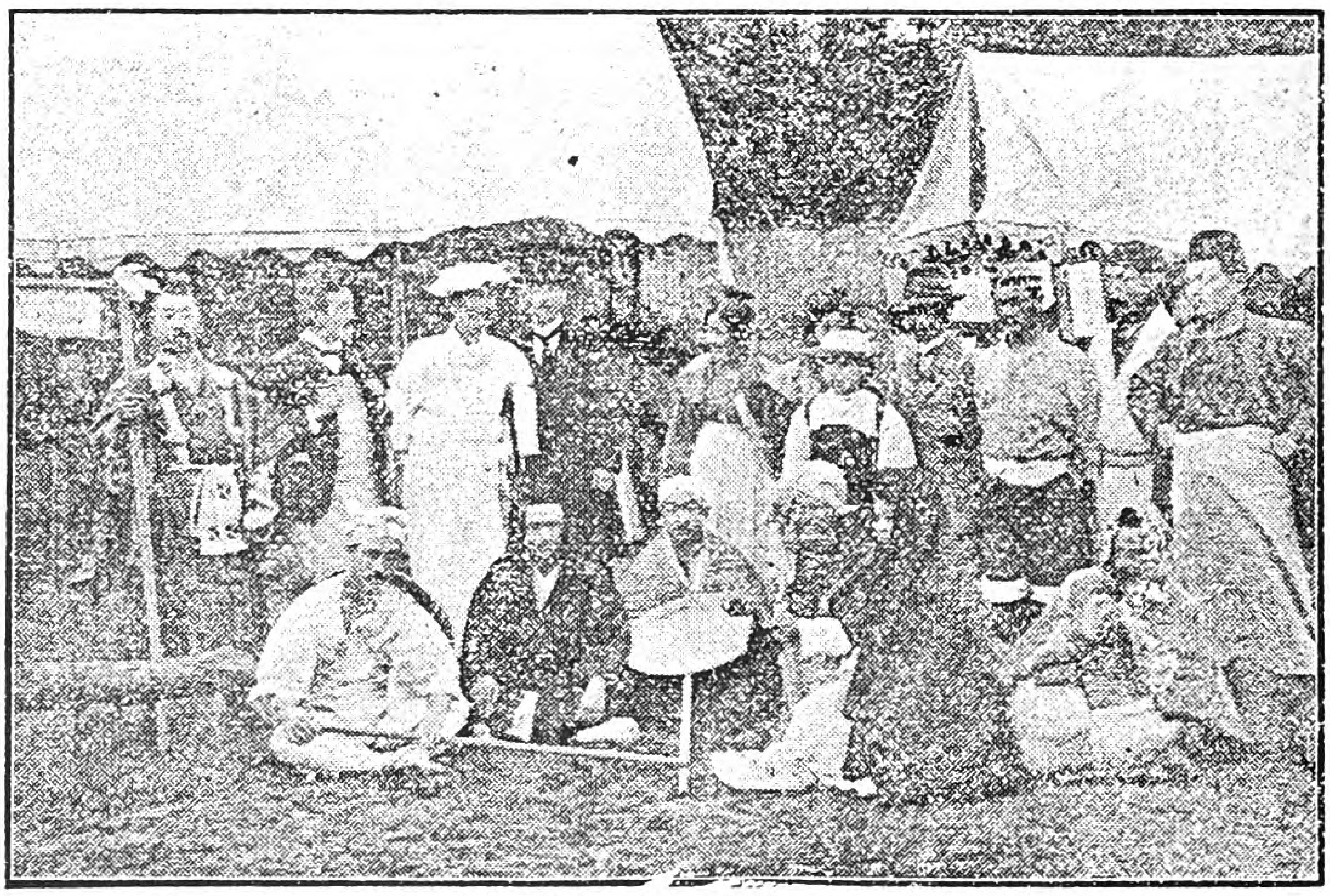
（一）

『女子文壇』には菊池君其他が外國に於ける女の運動や其の立場を毎號書いてゐられるから、女がその位置や自由を欲する歷史的の經路は略わかつてゐるでせうが、今日の女の運動は當然の運動であり、當然の現象で、誰かゞこしらへたり、物好きに問題としたのではなくして、女の當然の主張がそこに來たものに相違ない。

女の其の主張の根底は、十九世紀の末から二十世紀にかけて世界の思潮に瀰漫した個人主義であつて、ニーチエのやうな思想家によつて、盛に人間の自由、人間の權威と云ふ事が唱道されて、人間は自己を尊ばなければならない、自己以外に價値のあるものはないとの思想が波及して、男も女も皆同じく人であるとの自覺に立つた。

それに呼應して文學方面には、イブセン以來ズーダーマンの如き人々がノラよりマグダなどの、日本で流行の女の個人主義の見本を提出した事によつて一層覺醒を促されたものである。

イブセンの書いた人形の家のノラは、女も亦人であると云ふ覺醒がもつとも強く現はされてゐるものとして、新しい女の渇仰する處となつてゐるが、一體イブセンは女の自由、女の權威等を多く取りあつかつた文豪であつた。何故イブセンが女を殊に描く事が多かつたと云ふに、それには相當の理由があつたので、イブセンの生れたスイーデンあたりの當時の風俗では女はまつたく奴隷の如く、人形扱ひにされたもので、女は自由もない權威もない位置もない極めて下等なものに思はれてゐたものである。



太平洋畫會幹事ポブシ倶樂部の假裝會

それでイブゼンは女も亦人なりと云ふ事を主張して、女の自由女の感情を尚び、女の思想女の位置を重じて、男の享受するだけの權威を女も亦享受するのが正當であると描いたのである。

此れは結構な事で、私が男と女とを離れて、一個の人間として其の思想を批評すれば、まことに當然の思想で、此れは一つの「デターミネーション」卽ち「永久決定」の事實であつて、イブセンが斷定しなくとも、人間にはきまつた事と信ずる。

（二）

既に女も人である事がきまつてゐる。然るに特に、イブセンが是れを唱説した事につ

いて考へて見ると、イブセンの眼に映じた時代の女、イブセンの立場に見えたノールエイ邊の女がどういふ狀態であつたかと云ふ事が思はれる。

即ち其の時代に於て女が如何に不自由であつたか、いかにその感情が重んぜられなかつたか、女の位置が如何に壓迫されてゐたかと云ふ事がわかる。女がさう壓迫されてゐたからこそイブセンは其れを自分の思想の根底としたのである。

然しながら一面から見ると、イブセンは必ずしも女と云ふものを描かんが爲めに、そのドラマに對つたのではない。人間のライフ、人間の個性、人間の權威の重んずべく尙ぶべき事を、人間としてもつとも窘められてゐると見える女をかりて描いたのであると思ふ。

私から見れば、イブセンは女を描いたと云ふよりも人を描いたものであると云ひたい。即ち女と云ふものを取り扱ふ上に女の權威を主張するよりも、人間の權威を主張する事が、イブセンの眼目であつたに相違ない。從つてイブセンは女と云ふものはどういふものであるとは說いてゐない。女も亦人なりとは云つてゐるが、眞の女と云ふものは、少くともノラやヘッダには描かれては居ないのである。そこでイブセンの劇に女が學んで可いところは、女は人であると云ふ事であつて、女は女であると云ふ解釋は決して與へられてはない。

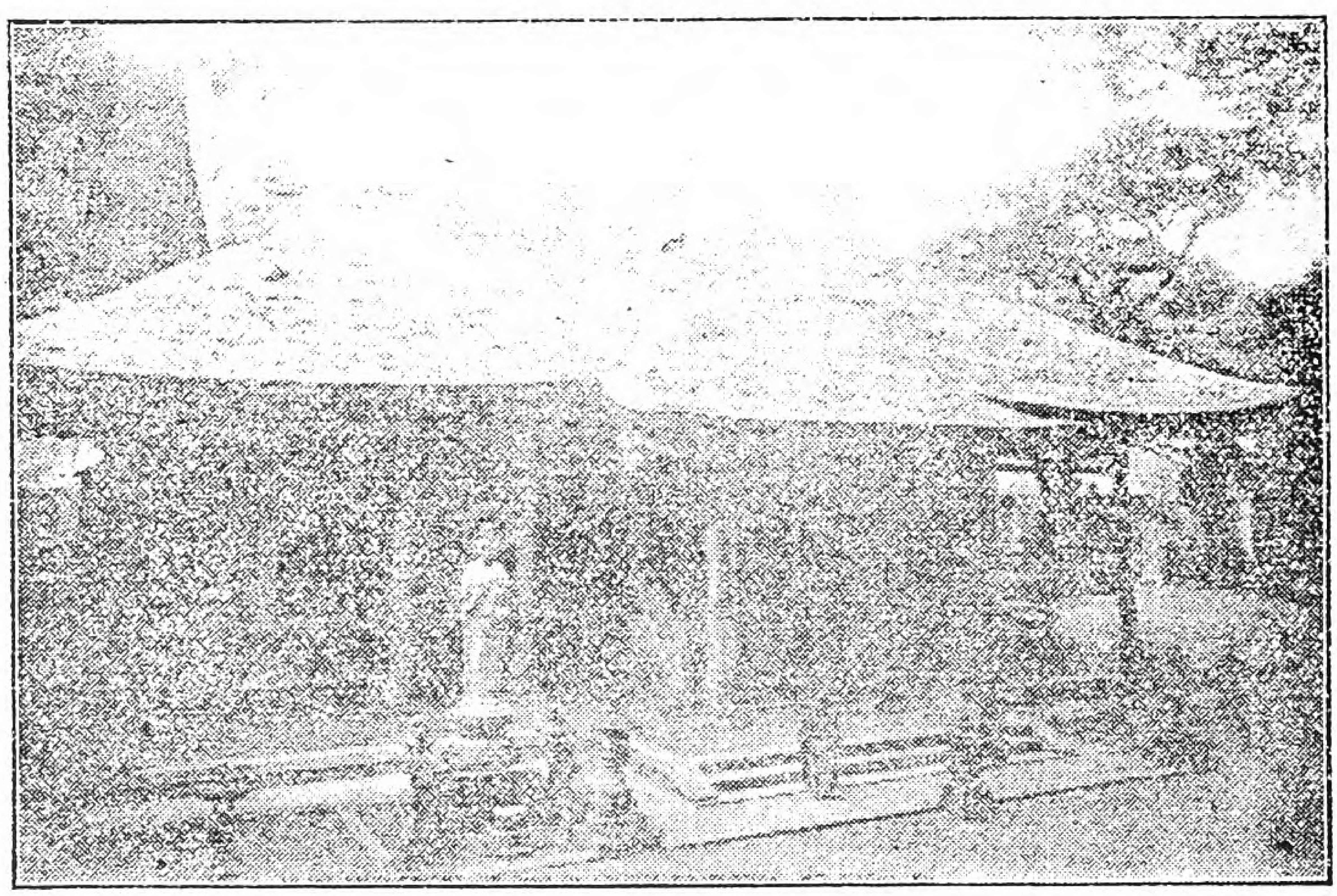
それを今日の女子たちは、新しき女と云ひ、新しき女の眞の生活と云ひ、或は英國の女子參政權の運動などをイブセンの「女」と見做すやうであるが、それはイブセンの思想に對する誤解であると思ふ、イブセンが女も亦人なりと云つた眞意のある處を根本的に誤解したものが、今日の所謂新しき女の運動ではないかと思はれる。

(三)

イブセンを生んだ諾威の女が其の位置を壓迫され自由を束縛され、思想を無視されてゐた爲めに、イブセンにノラを書かせたやうに、果して日本に於ける婦

人の狀態が諸威の婦人のやうなものであらうかと云ふ事を考へたい。

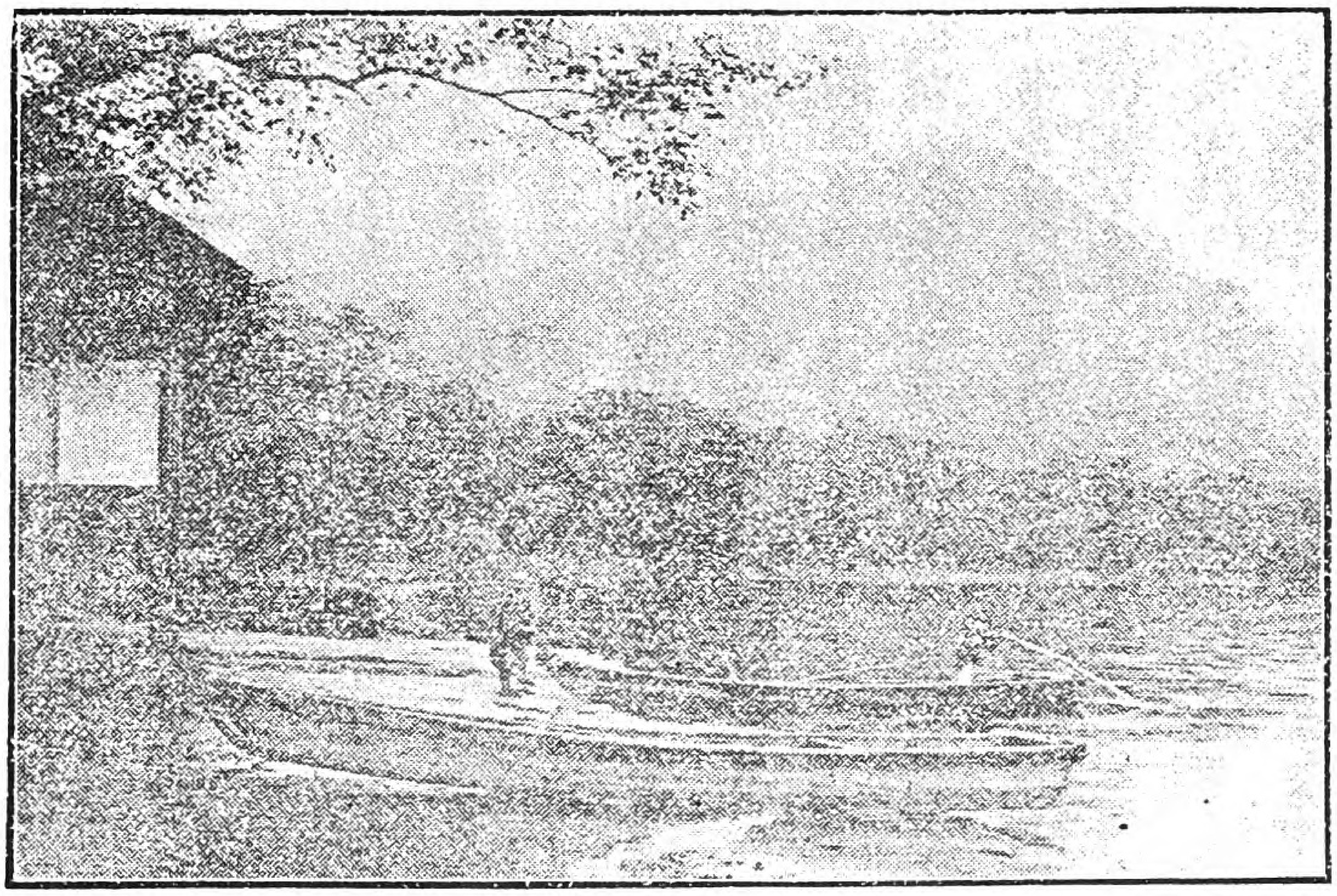
いかにも日本の婦人も傳來因襲の久しい間に、女は飽く迄も男に制服されてゐるやうに見えてゐる然し女が果して制服されてゐるのであらうか。寧ろ服從してゐるのではあるまいかと云ふ事は問題である。制服されると云ふ事と、服從してゐると云ふ事とは一寸違ふ其れは截然と區別しなければならない、制服されるのは不平を抱いて抑へられるので、服從するは不平なく自分の意が滿足して居るのである。しかしそれが今服從は自分の滿足で無いとの意思が動いて來たものとすれば、女が不平を起すのは當然の事でなければならない。



西國第一番札所那智山本堂

そこで女が人として立つと云ふ事について、男と全然同じ人として立つと云ふ意味となるか、若くは男と對立しての人として立つと云ふ意味になるかと云ふ事を考へなければなるまいと思ふ。是れは私は見易き理屈であると思ふので、男と女との差別を考へれば、誰れにでも解るであらう。男と女との差別は相逢へば直ぐ解る、直ぐアンダースタンドされる自明の理である

自明の理と云ふ事はどう云ふ言葉であるかと云ふと、同じく男と男との中に於ても此の男とかの男との區別があるやうに、女と女との中にも此の女と彼の女との區別がある。その區別に從つて適應する處も違つて來る。此の男に適しない事も彼の男には適する事があるやうに、男の適す



榛名湖畔の風光

る處と女の適する處とが同一でないと云ふ事は、男女としての區別がある上は當然の事であつて、それを自明の理と云ふのである。

男も女も其の性の示す自明の理に從つて、その適する處に身を處してゆく事が當然であり、且自然であるとすれば、今の女が男の如くと云ふ、其の如くがどう云ふ意味であるかは分らうと思ふ

そこで女は男と同じとは云へない。と云ふのがその結論である。女はどこまでも女の適したる處に生きてゆかなければならないものである、それが「女」である。

（四）

すべてものを論ずるには先入主に囚はれたり、偏見を持つて居たりしては其の正鵠を得る事は出來ないのは申すまでもない、さう云ふ人々によつて論ぜられる事は、いつまで繰返されても問題の解決される筈はない。

女と云ふ事を云ふのにも、男と云ふ事を云ふのにも頭から男と云ふものは女より秀れたものと云ふ事を思つて云つたり、女の方でも男がすぐれたものとせられてゐると云ふ傳習的先入主があつて考へる間は決して正當な解決を得る事は出來ない。

申さば女が女を論ずる場合には僻みを以て論じてゐる。男が女の問題を説くのにも弱い奴が強い事を云つてゐるといつたやうな偏見を持つて之に臨む、女の問

題がさわがれてゐて決定されない譯は其處にある。

私はこの問題の解決を簡單に、然も公平にかうしてする事が出來ると思ふのである。卽ち

○○○○○○○○○○

男は男なり、女は女なり。

此の短かい言葉で充分に解釋し得られるものであると思ふ。我は我なり、汝は汝なり、我と汝とを混同する事は出來ない。此の理に從つて私は女の自覺を、女の生きるのは女の型に生きよと謂つて居る。それが女の眞理、女の自由、女の權威である。私はかう云ふ風に極くプリミチーブに極く簡單に考へたいのである。

早い話が男と女とは體が違つて居ると云ふ事がもつともよく解つて居る。殊に女には女獨得の權能がある。落語家が男が姙娠して子供を生んだと云ふ話をするが、それは奈何云ふ奇蹟があつても信ぜられない事で、釋迦は摩耶夫人の脇腹から生れても男の脇腹からは出て來なかつた。基督は大工の子として馬屋から生れたと云ふが、矢張お母さんの腹から生れて、ジヨセフの腹からは生れて來なかつた。男は奈何しても子を生む權利を有つて居らないので女は男の持たざる權能を持つて居る事を感謝せざるまでも滿足せねばならない。

一部の婦人には子を生むのを義務と考へ、苦痛の如く思つてゐる人もあると云ふが、それはその人がさう思つてゐる丈であつて、婦人全體から云へば、子を生む事は義務ではなくして權能である。男の持たざるも



おばさんごつこ

のを女が持つて居るのであつて、男はどう云ふ風にしても、女の此の權利を得る事は出來ない。其の權利を持てるのを何故不足に思ふのであらう、既に此權能がある以上、女がその權能を振舞ふのは女の自由である。

（五）

既にさう云ふ物質的に肉の關係が男女に違つて居ると云ふ事が解れば、肉に一致してゐる靈の方の作用も矢張男と違つたものを女が持つてゐるに違ひない。その持てるものを發達させてゆくと云ふ事が女の女たる處であると思ふ。

女の値はあたへられてある權能に應じて發達してゆく處にあるのであつて、女も亦人なりと云ふより更に進んで、女は女なりと云ふ思想に到達する事が女の眞の自覺だと私には信ぜられる。

そこで今の新しき女は女も亦人なりと云ふ第一歩の運動をしてゐるのであらうと思ふが、その運動は、私の考へる女の自覺に依れば、まだ眞の自覺ではないやうに思はれる。

女も男と同等の待遇を受けなければならないとか、女も男と同じ仕事をするとか、女も男と同じ職業に就くのであるとか云つて騷ぐのが、今の新しい女の主張であり、立場であるとすれば、私の見る眼からすれば低い處でさうしてゐるとしか思はれない、必らず今一歩進まねばならないであらう。

道理、或は理性の經驗から考へて見ても、女は女なりと云ふ外に歸着點はないかと思ふ。もつともそれをある特別の事情ある女——ある婦人の自覺と云ふ事になれば問題は具體的になり、もつとも狹くなつてゆく要するに私の單純な女の論を、抽象的に一般的にお話をしたのである。

女の生きて行く道

高井光太郎

△本當に生きてゐる女

私は新しい女と云ふ名稱は嫌である。殊更に新聞だの雜誌だのでそれを非常な意味の違つた言葉に取つてゐるからそれを使ふのが嫌である。字としても生硬であるから使ふのが厭である。其の厭な言葉を使つて話をするのは、其の人人に對して侮辱を加へるものである。

新しいと云ふのは古いと云ふのに對照して出來て來るのであるが古い女をかうしなければならない新しい女をかうしなければならないと云ふ二つの道があるのではない。私の頭の中に生きてる世界には古い女と云ふのも新しい女と云ふのもない。唯眞實に生きてゐる女と云ふのがある。殊更女に新しいと云ふ名を附ける必要がない、眞實に生きてゐる女が唯一つあつて、それでない外は古くても新しくても私に取つては厭なのである。


沼津千本松原の遠望

私は女の問題に就いて自然科學者が草木を分類すると云ふやうにではなく其の生命の深い處へ突進する道を考へたいのである。無論達觀と云つたやうな大きな觀方でないと云ふ事は解つてゐる。高い所から地圖を見るやうに彼處に何があつて此處に何があると云ふのでは無い。歩いて行く左右を觀るに過ぎない。

私は自分の眼に見える是れより外にないと云ふ事を考へたい。それを人から達觀されなければならないと思つて居る。

新しいと云ふのも古いと云ふのも達觀してから云はれる言葉であつて、私には新しいも古いも問題にならない、私が使ひたいのはたゞ女である。

△考へる丈愚である

新しい女と云はれてゐる人は從來の習慣を破壞してゐる人、或は或る主張を持つて進んで行く人の事に相違ない。私はさういふ人を侮辱をして居ない。又輕んじても居ない。寧ろさういふ態度――意氣込だけでも尊敬をして居る。唯其の人達が言つたり書いたりして居るのを見ると、まだ〳〵途中に居るやうに思はれ、自分が出て居ないやうに思はれて殘念である。

先づさう云ふ女の人で自分は男でも女でもないと云つてゐるが此の男でもない女でもないと云ふのは自分は人間だと云ふ事となる。私はそれについて解釋をするといゝ事だと思ふ。

若しそれが女としての機能――能力を無視してさう云ふのならば滑稽なものである。さうではなく是れまで人間を外れて考へられてゐた女と云ふものに人間的の意味をつけて、而して男でもなく女でもないと云ふのならば自分にはよく了解が出來る。

女は元より人間であるには違ひない。然し矢張女でなければならないといふやうに說明する人に對つて、私は其處らで愚圖々々してゐては駄目であると云ひたい。同じ處で胴々廻りをして居てはどこまで行つても駄目である。早く其處を通り過ぎなければならない。

例へば生理的に見て女は女以外である筈がないと云ふのは當り前であるが、然らばどう云ふのが女であるかと云ふと生理的にはわかるが、人間的にはわからない。生理的に男女をわけて女の行く可き道はどこまでも子孫を傳へてゆく處にある。子女を養育して自分のライフを止めてゆく事が肝腎であると云ふならば非常に詰らない。それは動物學者などが動物等に比較してすべてさうでなければならないとよく云ふ。如何にも人間を人間に近い猿だの犬だのに比べると男女の區別は直ぐ解る事であつて、人間が動物であるかぎりは相

違のある筈がない。寧ろ考へる丈愚な事である。

△止めるのは餘計な事である

男がどういふ事をしても構はないやうに女もどういふ事をしても構はない。男に自由があるやうに女にも自由がある。是れが男女を通じて其の生活の根本である。どう考へて見ても此の根本は動かない。其の根本の上に立つて男は男の自由、女は女の自由に従つて動いてゆけばいゝ。兩性とも、其の自由の動き方によつて眞實であるか噓であるかゞ分れて來る、偉いか偉くないかと云ふ事が岐れて來るのであると私は考へてゐる。

眞實でない自由の動き方をするものがあるならば、自分に對する罪惡、人類に對する罪惡である。又古來の習慣とか、傳習的道德に對してもよくない。其の動き方が兩方によくない時は云ふ迄もないが、若し片方によくて片方によくない時があるとしたならば、傳習的の方を捨てゝ了つて人類の爲めに罪惡でない方を取らねばならない。それが人間の進むべき道であつてさう云ふ人が出て人類は進んでゆく事が出來る。



慈母と愛兒

何時の時代にも傳習的道德と戰つて人類の自由を叫ぶ人は自然に出て來る、假令どんな壓力を置いても其れを止める事は出來ない。丁度草木が崩え出す時が來ればどんなにそれを妨げても自然に芽を出すやうなものである。女の自由も人類としての自由を求めやうとして出るのであつた

時、それを止めるのは餘計な事でもあり惡い事である。

△眞の良妻賢母

女が動いてゆくと云ふ事に關しては色々考へなければならない。それには女と良妻賢母とについて云はなければならない。良妻賢母主義と云ふと古い女の道とされてゐるけれども、主義としては取るに足らない主義であるが、良妻賢母は女として成可理想的である。良妻賢母であつて女になれないと云ふ事は世界がひつくりかへつてもない。主義などゝ云ふと幼稚な滑稽な氣持がするが、良妻賢母と云ふ事は決して笑ふべき事ではない。唯それを間違へて困るのは其の內容である。

良妻賢母として世間で一般に認めて居るのは今も猶女大學のやうなものである、是ればかりには限らず、人間は其の人の心によつてどういふものが良で、どういふものが賢であるか、其の內容が變つて來る。

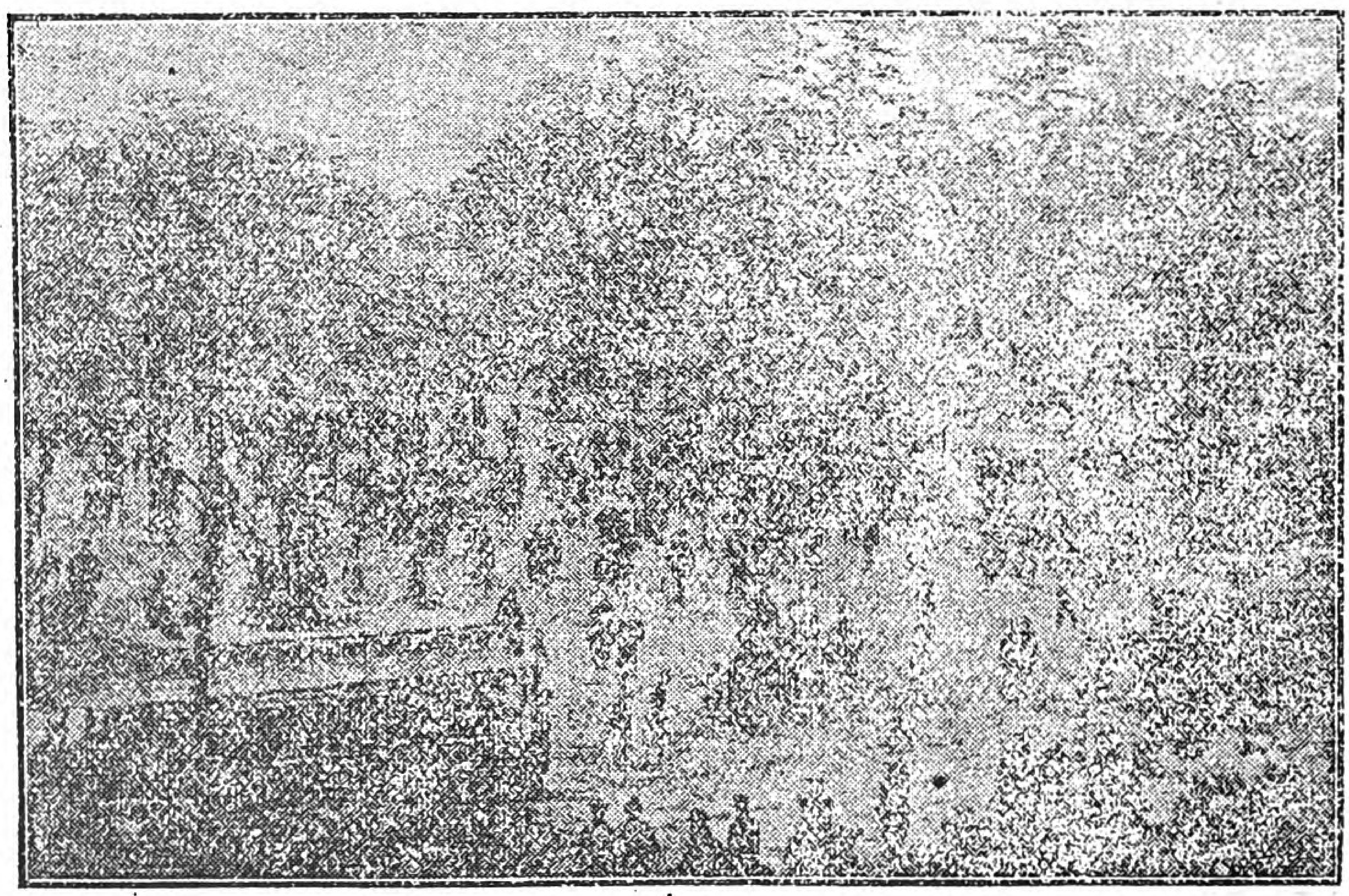
良妻賢母の內容は是れ迄どほりに考へたら價値はないが、良妻賢母を惡いと思ふのも不當な考へ方である其の處に妙な錯誤が起つて、自分の道を歩く人は間違つても良妻賢母になつてはいけないといふのは隨分滑稽な話である。假令無意識でそれを嫌惡してゐるのであつてもよろしくないと思ふのである。

自分に生きてゆくと云ふ事と良妻賢母とは矛盾もどうもしない。寧ろ自分に生きる人でなければ良妻賢母にはなれない、あらゆるものゝ人工的な外形を破壞して、人間本來のもつと人間的な生き方をしてゆく人は屹度良妻賢母になれる資格がある、さうでない人は形は良妻賢母の形をしてゐても、第一義的に考へてそんな人は奴隷に過ぎない、單に人工の奴隷に過ぎない、さういふ人がどれ丈あつても世の中の何の益にもならない。

世の中を下等な狀態から救ふのは自分の道を歩いてゆく良妻賢母でなくてはならない。自然から噴き出すやうな本然の力で本然の法則に從つて、自然の眞を摑み得た人は非常に美しくて非常に賢い譯である。さういふ人は自分に對すれば自分を何處までも押し進めて

ゆくし、社會に對すれば社會の缺陷が目の前に明に見えて來る。さう云ふ人が異性にあれば、明かな確かな解釋が出來るから本當の意味の戀愛も成り立つ。

そう云ふ人が結婚問題に突打かれば實に自然に結婚をする。さう云ふ人が子供に對すれば其の慈悲が、たゞ子供がかはいゝと云ふのではない、一層進みたる人類的の愛を持つ事が出來る、だから一緒に居る男に對して良妻である、子供には賢母とならなければならない。さういふ良妻賢母であつて始めて世の中に眞の生命を與へる事が出來る。



東京上野山下のにぎはひ

良妻賢母と云ふものは古い道德の生み出した立派なものである。自分で眼のさめた人がものを批判していゝ事は取り惡い事を排するのは當然であるが、良妻賢母を惡妻愚母と思ふのは見當の外れた見方である。さう云ふ意味から良妻賢母と云ふ事と、自覺して進まうとする事とを二元的に考へる譯にはゆかない。

自覺して自分で活きてゆく人であつて獨身で居てもそれは偶然に過ぎない。若しさうでなければ自分の道が歩めないと云ふのならば至らないのである。結婚を排斥するとか非難する人があるならば矢張其の人は間違つてゐるのである

△重大問題ではない

然し結婚をするしないは重大問題ではない。自分で自分の道を意識して、人間本來の道を歩くと云ふ方が

重大問題である。或る人は結婚しないでゆく事もあるだらうし、或る人は結婚して矢張進んでゆくであらうそれは境遇だの色々な事によつて出來て來る偶然の事である、善惡の意味を附する事は出來ない。

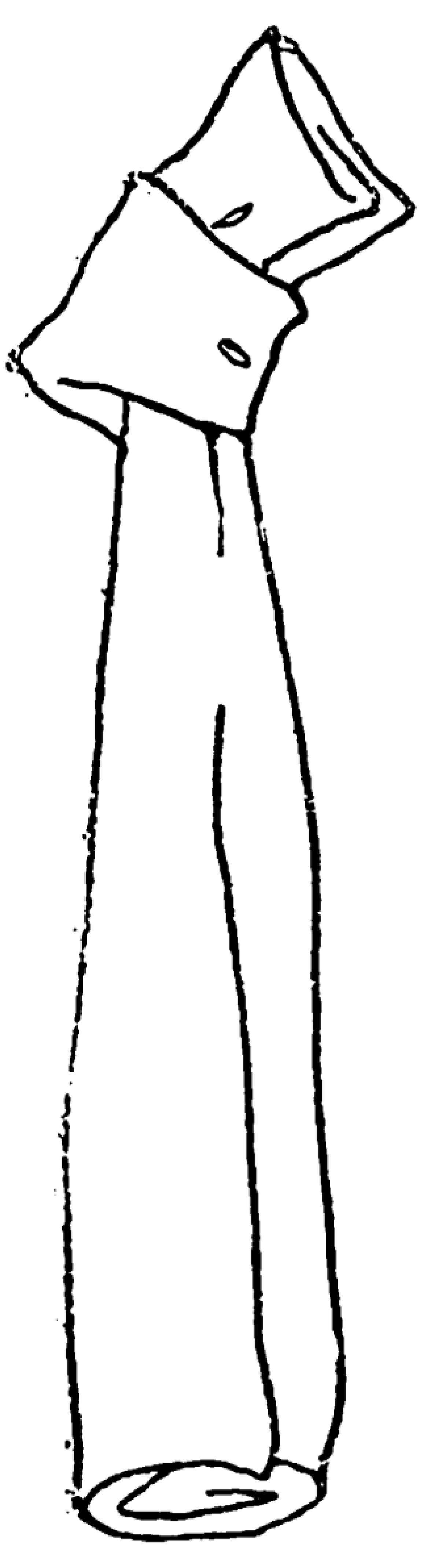
何處の國でも自分の道を歩いてゆく女は獨身に傾くと云ふ傾向はある。けれどもそれだから危險であるとは云へない、女にそれがあるやうに男にも矢張りさう云ふ人がある。茲に思想上の問題に燃えるやうに打突かつて進んでゆく人があつて、とても滿足するやうに異性と手を取つて行く事が出來ない、さう云ふ場合には仕方がない、さういふ人が獨身でゆく事はその人に取つての自然である。

萬人皆新しく眼の醒めた人が皆さうであるとするのは可笑しい事である。その人の境遇と性情と社會狀態とにあるので、其の上から云ふと結婚問題等は、附屬した問題であつて其の人が生きてゆくに就いての本來の問題ではない。

日本の今の狀態で考へて見ると隨分事が面白くなつて居る。恐らく、眞に眼をさました女が滿足して、十分に尊敬して手を取つてゆく男の人は稀れであらう。それは女に取つて隨分不幸な事である。それだから日本のやうな思想の幼稚な國では、さういふ眼の醒めた女が獨身に傾くのは已むを得ない、第三者から見れば非常に殘念な事であるけれどもそれは仕方がない。

若し今日本當に眼を醒ました女が袖をそろへて悉く獨身であつてもさういふ人が罪ではない、社會が惡い日本の生活が惡い、善惡を云へばわるいのは社會であつて其の人が惡いのではない。獨身が良い事でないのは云ふ迄もないが社會的に見て善い惡いを云へばその人を罪とする事は出來ないのである。

かゝる問題から押し進めてゆけば、自然女對社會の問題となる。然も其が婦人問題の本論なのである。(談)



工夫の上手な婦人を求む

文學博士　芳賀矢一

新しい女とかいふ聲が大分聞えるが、今日少數の此の種の女性のあらはれるのは、已むを得ない趨勢であらう。併しこれは決して望ましい事ではない。多數の婦人は健全な立場に居つて、此の國家、家庭をしてますます健全な發達を遂げさせなければならぬ。大多數の婦人が健全な立場に居れば、少數の新しい女があつても、決して恐れるには足らぬ。それは兎も角余はさし當り、最も工夫の上手な婦人を要求したいとおもふのである。

女中の中から詩人が出來たり、科學者が出來たりするのも結構ではあるが、併しそれは少數の知識のすぐれた婦人に限るのである。大多數の婦人に望ましいのは、やはり家庭の人として、母といひ妻といふ立場から、常識を發達せしむることで、日常の生活に於て、適當な處置を取り得る事が何よりも大切な事である。即ち衣食住に就いて、婦人の新しい工夫が今日のやうな過渡時代に於て何よりも緊急のやうに考へられるのである。

今日の日本の家庭は何事にも和洋兩式の混合が行はれて居る。紋付羽織袴の外に一と通りの洋服も必要であり、隨つて下駄足駄の外に靴もなければならぬ、帽子や洋傘は兩方に共通としても、ホワイトシヤツや

ネクタイや洋服特殊の附屬品も要る。食物に於ては、從來の日本料理の外は西洋料理も幾分か加へなければならぬ場合もある。少くとも鳥肉獸肉を膳に上せなければならぬ場合が尠くない。茶の外に珈琲を飲むこともある。日本酒の外にビールや葡萄酒を用ふればそのコップも入用といふ有樣である。又稍高い生活をしてゐる家では西洋館の部屋もあらうといふ譯、何事も和洋二つを併用して居る現代の狀態に於ては、手數の上に非常に面倒であるのみならず、經濟上にも甚だ不便なことが多い。之を如何に折衷し、如何に調和して行くかといふ事が時代婦人の工夫すべき重大な任務であらうとおもふ。

新らしい敎育を受け、科學の知識を受けた婦人は、須らくまづその和洋兩式の家庭の不便を改善して行くといふ考を持たねばならぬ。新舊を巧みに混和し、東西を融合して、新時代の要求に適合するやうな工夫をしなければならぬ。いつまでも不便を忍んで居るのはつまり婦人の工夫の足らぬためではあるまいか、例へば兒童の服なども學校の制服と家居の制服と別々にしておく方が便利か、或は折衷した家居の服で何かもう一層便利なものは出來まいか。

或西洋人の書いた物に、日本の貴婦人は家に上る時靴を脫ぐが、自分の家に歸つた時はともかく、他家を訪問した時、美しい手で汚い靴を脫ぎながら、其の手を洗ふことの出來ないのは不便であると書いてあつた潔癖の日本人として、之を忍んで居るのはどういふ譯であらう。

料理などでは殊に折衷の工夫が出來さうにおもふ。鳥獸の肉類を膳に上せるにしても、必ずしもフオークやナイフを持出さずとも、日本化した西洋料理も出來る筈であり、西洋風を加味した日本料理も出來るに違ひない。學校の割烹科で習つた知識を應用して、兩式の混和を工夫することは、出來得べく、又努めねばならぬ事かとおもふ。小供の食物、菓子の類も、種々の點から考へて新しい工夫を凝す餘地があるやうにおもはれる。

住居の事は富裕の人で無くてはむづかしいが、それにしても戸締の事や、臺所のこと湯殿、雪隱等の設備は工夫次第で左程の費用を要せずに改良の出來ぬ事はあるまい。小供の勉强遊戯等の設備も、少しの工夫をして莫大な便益を得るといふやうな事がある。要するに之れ等すべて注意深い細かい所に氣の附く婦人の考ふ可き事で、學校で習つた家政學といふものは、つまり此等の應用の爲めに豫備知識と思はなければならぬ。今日の女子教育の通弊は應用が出來ぬ、融通がつかぬといふ點にあるらしく、最も顯著な例として聞いた話に、ある學校で立派に割烹科を學んだ新夫人が、ある地方に赴いた所がその地方の魚類には珍しいものが多く、却つて學校で



大和談山神社

學んだ鯛や比目魚が無かつた爲めに、折角の腕前も何の役に立たなかつたといふ事である。裁縫で小袖の裁方を覺え、十二單衣の拵へ方まで習ひながら、小供の襦袢一つ碌に縫へぬといふやうな極端な話を度々耳にした。女子の特殊教育として課せられる裁縫や割烹も、應用が最も大切であることを常に心掛て居らねばならぬ。さうして家庭の事情に應じて、工夫斟酌することが大切なのである。琴柱に膠するといふ杓子定木が何よりの禁物である。精神界の自由とか、思想の發展とかいふ事を考へるばかりが新しい女ではない。むしろ手近な衣食住に於て新しい女のすることが澤山にあるやうに考へるのである。

訪問みやげ（三）

婦人記者

＊＊

醫學博士小金井良精氏夫人

小金井　喜美子

▲嫌だつたことは●●●●●●　越後の鯨波と申す所へ行つた時です。宿屋へ着きますと、一番よい座敷は塞がつて居ると申します故、それでは何所でもよいからと申しますと、宿屋の方でも特別に扱つてくれたのでせう、一番よい座敷にゐた客を態々他の室に移して、その座敷へ通してくれましたこゝまでは宜しかつたのですが、いざ寝やうとする頃、番頭が兩手を揉み揉みやつて來まして、誠に御迷惑様ですが、前の客が細帯をお忘れになりましたさうですから、一寸御免をと言つて、這入らうとしますから此方はもう寝ましたから、明朝まで待つて下さいませんか、明朝になれば此方から前の御客様の方へお屆けいたしますと申しましたが、肯かないで、ずん〴〵座敷へ這入つてきまして、衣桁に掛けてあつた着物を皆下ろして了ひ、そこら中を掻きさがすのでせう、一度で越後の旅行は懲り懲りしたのです。

＊＊

前兩内親王殿下御用掛

小川　直子

▲一生のうらみは●●●●●●

夢駭秋風眠不成　酒邊拂袂狂書生
義膽一片未全盡　獨員月光鳴劍行

と一首の詩を吟じて宅を出ましたのは、元治元年七月の末、朝風涼しき頃でありました。八月二十六日に良人のお友達の新田久彌様と申す方がお見になりまして突然『幸藏殿は御殘念』といひかけられましたので、傍にゐました母が驚いて如何いたしましたかときゝますと、『殘念なことにはこれ〳〵の罪によりまして刎首の刑に行はれました』との仰せです驚くまいことか助からぬ命とはかねて覺悟はしてゐたが、責めては武士の面目、切腹なりとも仰せ下さるならばまだしも、盜賊等を罪するやうに、刎首とは何事であらう、とこれが私の一生の恨みでございます。

**

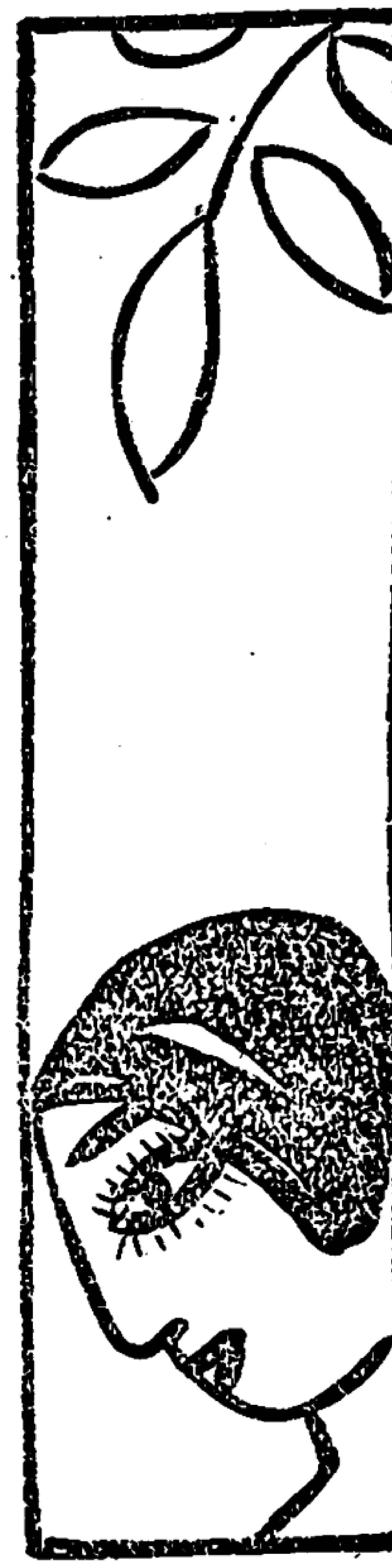
代議士小久保喜七氏夫人　小久保政子

▲苦しかつたことは　良人が一年間未決監に囚はれて居ります間、家族の面會を嚴禁され、樣々の事情を申立てましても、一回も許されませんでした。唯食物などの差入物が通つて居る間は、良人が無事であると推するだけのことでございました。良人の實母は家付の獨り娘で良人を擧げますと直ぐに死亡いたしましたので、祖母は一粒種の良人を掌中の玉と大切にして居つたのですから、その心配は一通で御座いませんでした私は心を勵まして老人に力を添へて居りましたが、事によると死罪になるかも知れぬと云ふ噂を聞て居りましたから、表面に平氣を装ふのが、却々の苦痛で御座いました。待ちあぐんだ一年後無事に出獄してホッと息を付く間もなく、二箇月ばかりの後に又大阪事件で囚はれたので御座います、丁度明治十八年のことでした。

**

醫學博士濱田玄達氏夫人　濱田捨子

▲つらかつたことは　丁度主人が洋行致しました翌年、私は長女を亡ひました。此れが只今までの經驗で一番苦しい出來事で御座いました。主人も長女を大層可愛がつて居りましたものですから、行く先々から、よく長女の消息を聞いてよこしましたが、恰も亡りました後に、久し振りでさぞ大きくなつたらうから、是非寫眞を送つてくれと申して參りました。當時、私はその不幸な出來事を海外に居ります主人に知らせてやるに忍びなかつたので御座いますから遂惡いこと丶は存じながら、長い間かくしておきました。それで何も存じません主人はまだ生きてゐるものと思つて、寫眞を送つてくれと申して、その手紙に寫眞〔といつても、熊本市まで出なければ寫すことは出來ないから、子供の手形を墨で捺して送れと申すやうな事まで、細々と書き添へてありました。その手紙を受取りました時には、手形を捺さうにも何うするにも長女は、もうこの世に居りませぬので御座いました。あんな辛い思ひを致しましたことは全く私の一生涯に無いのであります



葵まつり

廣江曉子

古き世の夢の中なる人なつかしき花たちばない香りいづる五月なかば、雨の後の若葉の匂ひも、さわやかな朝、比叡も愛宕も、新みどりあざやかに、滴るばかりのうるほひを見せて、仰ぎ見る胸も廣やかに、わけて東山は浪打ち重なる人家のすぐ上に立つかとばかり近々と見えわたる。

清々しい朝日の光に、都九條の町々も、さ青に澄みて、道ゆく人々のあゆみも急がず、をくれず、何處となふ靜寂の香ひ潜みて、蟬の小川を行く水も音かわる心持ち。

葵まつりの道筋は早うより、さながら低き處に水の落ちゆくやうに、集ひ來る群集に充ちて靜かにかゞやかな色どりをつくる。

清和院御門外に、仙洞御所の御溝に添ふて、私は一人、しばしの待つ間を樣々の想ひにふけつた。

石川や蟬の小川の清ければ、月も流れをもとめてぞすむ、と歌はれた加茂川の水上なる、賀茂の宮の、神秘な昔をしのぶによき、おだやかな心持ちの日よ。

あの森の樹のまだうら若かりし昔、天地の神々に捧げたてまつるべく、冬は霜白き朝まだき。夏は雑草の露にぬれつゝ、河原に下り立ちて水を汲みし、秦の氏女と云ひし姫は、髪長う。みめかたちすぐれて清らかに、眼なざしのさわやかな、人の世の汚れに染まぬ、どんなにか美くしい面影であつたらう。

ある朝、その水桶に流れかゝつた白羽の矢を、そのまゝに流しもやらず持ち歸つて、軒にはさみおき給ひしに、何時しか處女のまゝに身ごもり、玉のやうなる御子をまふけしと聞くさへも不思議なるに、その御子三才の時、御父君はと、人々集ひて尋ねしに、御子は

小さい手を上げて、軒なる白羽の矢を指さすと見る間に、矢は軒をぬけて紫の大空に、雷の神となつて登り給ふ。姫も御子も地をはなれて天上へ、神去りしより合せて三柱の神と、いつき奉りつ、別雷の大神と崇めまゐらせてより久しき年月、森の樹は暗く立ちこめて、露のうるほひしめやかに、思ひやるだに神々しく、わが代を守りの神と立ゝせ給ふ。

卯月中の酉（今は五月十五日）なる葵まつりには、かしこくも御所より御勅使をたまはる、その行列こそ昔は上なき見物として、源氏物語にも、葵の上と六條の御息所との車爭ひとなりて現れ、小松殿の空車には、深き教訓をさへ殘す、衰へて昔の影もなしとは云へど、今も眼のあたりにむらがる群集は潮のやうにみち來て、町々の氣色もあらたまる。

かゝる太しき宮柱を、いたゞきて加茂の里人は都人にもまして誇らしく、いづれの里にも下らぬ品位を示して居る。王城の水上に位してまことに神秘な床しい土地である。やがてその森かげには、ほとゝぎすの初音も聞かれやう。

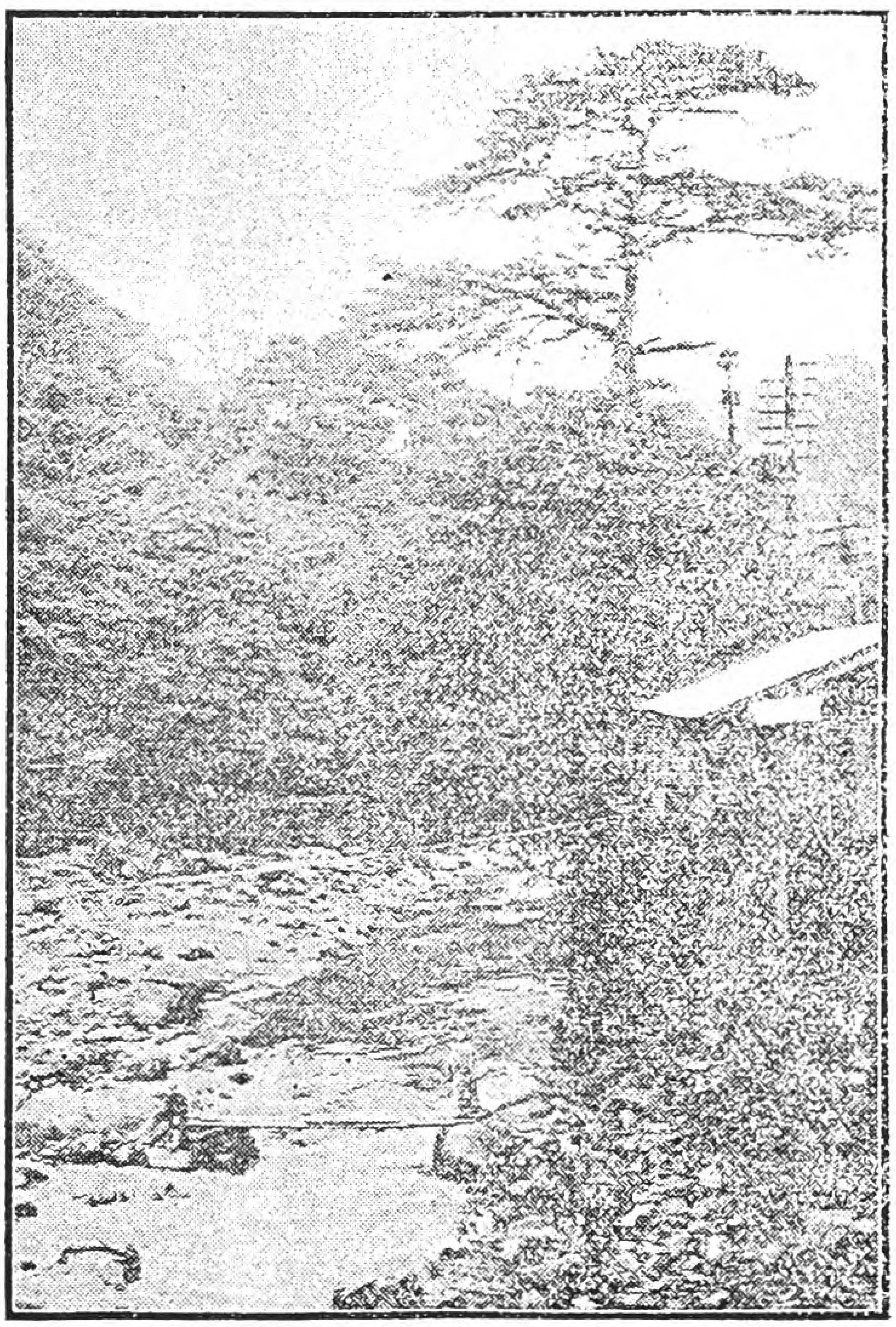


唱歌をうたふ前

人々の聲に、私の想ひははしなくも破れた一しきりざわめいて、やがて群集はひつそりと靜まりかへつた、はるかに御所の中より警護の人々の馬上姿が見え初める、仙洞御所の森の樹々に一しきりさわやかな風の音の渡るのをきゝつゝ、私は遠く眼を馳せた。あゝ今々、御苑の松にふさわしい紫や、青や、黄や、美はしい色の袖の一つ〳〵その後

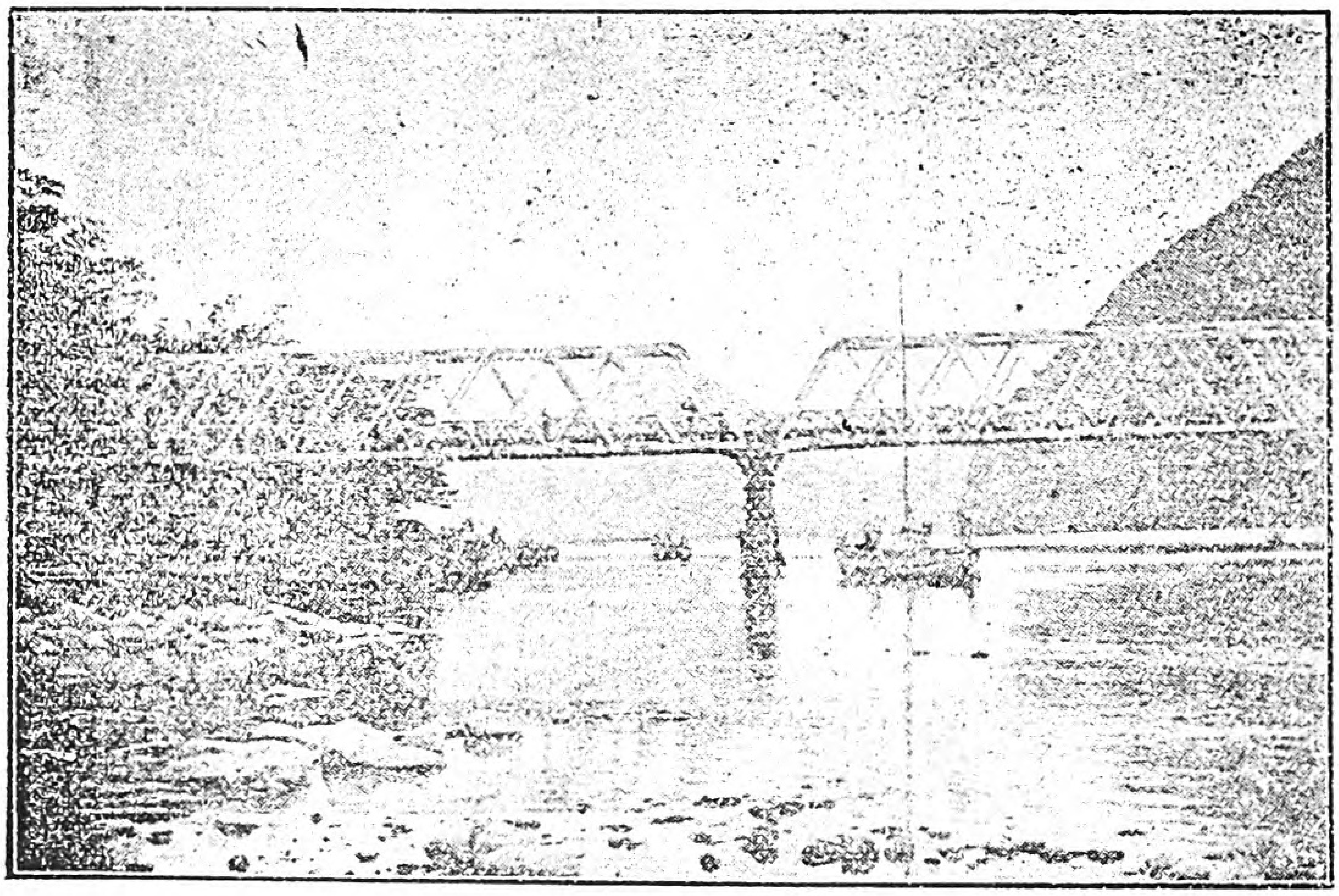
に現はれる。今御車の、日の御門前を過ぎ給ふ頃か群集の上には、寺町の堤にならぶ老松の影さして、あざやかな明暗をゑがいて居る。

やがて近き眼のあたりを、金棒の音、昔めかしく過ぎて麻木のやうな物を持つて白丁が行く、名も知らぬ、言ひ現しやうもないやうな調度をさゝげて幾人も過ぎた後、青や黄の徒歩の一群の行くと見る間に、錦、唐綾、位々の衣冠ゆかしき馬上の人々は靜かな蹄の音をのこして渡る。それら高き位の人々より布衣、雜色の末迄も、一樣にみどりあざやかな葵をかざし、桂のあかい枝をさして、思ひあがれる面持ちに渡りゆく。風雅やかな裝ひに眼も心も醉ひしれて恍惚となる時、ゆさ〳〵を搖れる音して、御勅使の花傘は現はれた。大輪の牡丹の、緋は花やかな日光に燃ゆるやうに、白はさわやかな大氣に搖れつゝ、綠り葉の上より下より入りみだれて、持ちゆく人の姿も半ば花にかくれて今日は肩いかりき雜人もうら優しう思はれる。十餘りの童は垂れ髮に濃化粧の頰の紅の後にほやかに額にゑがくこねずみのなつかしき。紅梅の上衣にくゝり袴つけて、やゝ面恥ぢの伏目がちに榊の枝をさゝげゆく髮にかゝる葵と共に、何時迄も、忘れともない美はしさを、身も心も溶け入るやうに眺めやるまに、御所車のきしり重く、花やかに紅き綱もてかざられし、漆のやうな黒牛は今日を上なき榮として、歩みもゆるく來かゝる。角にかけし葵のさゆらぎ、御所より神の森へ尊きみ車を曳きゆく床しの牛よ、黒き小さ



箱根塔の澤

き眼を砂に落して、黒ぬりに黄金のかざり美はしく、きらく／＼と日にかゞやく御車のゆらめく御簾のめぐりに枝垂るゝ絲櫻の、すらく／＼と黒くつやゝかな車輪にふるゝ匂はしき。ぎいつと胸をふるはすひゞき、群集は仰ぐ程なく一樣に頭を垂れた、この重き尊きひゞきと、崇高の感に打たれしこの私とを置きて、廣き世の動ける



美濃長良川の鐵橋

物のすべての休止せし心持ち、やう／＼に見送れば替へ牛は同じ装ひして御車の後より曳かれゆく。賜はりし御車を、あまりに恐れ多ければ辭し奉りて後より御勅使は、紅深きあつ房に映えて葵のみどりいよ／＼あざやかな、蘆毛の駒に運ばせ給ふ、黄金のかざり具に馬の額は重さうである。

黒地の太い立枠に葵ちらしの地紋ある御裳束、この君もひとしく冠に葵かざして、御腰には太刀にそへて桂の枝をさゝせらる、替へ馬の後より、仕人たちは種々の織模樣美くしき袖をつらねて馬をやる。

山城使ひの花傘は藤の花たわゝに、美き人の袖しのばるゝゆかりの色を散らしつゝ行く、また、紅梅の上衣が見えて、白き手に榊持ちそへたうつくしい童が二人取りかこむ雜色たちの袖にまぎれて歩みゆく。

山城使ひは、あでやかな紋樣の浮きいでた紅の裳束つけて、同じくあつ房かけた馬にまたがり靜々と行き過ぎる、樂人たちは、花の圓、鳥の圓のあざやかに染めいだされた菊綴のうるはしい狩衣やうの物を着て

舞人たちは、龍を織り、鳳をとばした、不思議な裝ひをして從ふ。

琴や笙や、しちりきや樣々な樂器をさゝげた雜人につゞいて種々の調度を運ぶ一群を終りに、長き〳〵行列は盡きた。

散り〴〵に別れゆく人々のうちにまぢつて歩みながら、私は一人美くしい幻影を、眼に浮べつゝ、心は遠く加茂の宮へとはせた。

あの花やかな人々の葵橋をわたるけしき、鳥居の下にて馬より降りる靜かな動搖、明神より七度半の御使ひに御勅使は淸き砂路を、樓門の內へと入らせ給ふ。奧ふかき宮の御前に舞樂を奏する微妙のひゞき、わけて森はいよ〳〵深く、水はいよ〳〵淸き上加茂の御手洗川に影を映す橋殿の舞樂はどのやうに神々しいものであらう、賤の女のうかゞひ難き限りと思へば、いよいよ床しく〳〵しのばれて。

桂の枝に葵かざして軒にさし淸らかによろこび祝ふその里のをとめたちのうらやましき、うるはしき古き都よ。・・・・

水は流れて常に新らしく、影をうつす山の姿は永遠に老ひず、女と生れしよろこびも此處にこそ深きもの戀しき人を夢に見つゝ古き都の女にて死なう、柳の糸のゝびやかに空より降りし雪の白きまゝ地に消ゆる如く、櫻の花のかつ咲き、かつ散る、うるはしき短き夢を命に。心に。

花たちばなの樹かげに葵かざす身ならねども、せめて古き世の夢に溶け入る、この心を抱いて、次第に深う夏に入る夜なく〳〵、私は一人ほとゝぎすの初音を待たう。

ザボンみのる筑紫戀しや秋の日の
　晴れたる夕べ泪こぼしぬ

わが生命のほかにも小さき生命すめば
　君戀ふる如く光戀ふらむ

凋落の秋の徑にふと思ふ
　わがみごもりは尊とかりけり

（きし子）

▼女子文壇化粧顧問　藤波芙蓉先生實驗發明▲

クセ毛なほし　美髪劑

●定價小瓶參拾錢、中瓶五拾錢、大瓶壹圓（送料）市内四錢地方八錢

「美髪劑」は十有三種悉く人體皮膚並に毛髪の攝養となる純植物性のものより成り、天性のチヾレ毛には些しも効能はありませんが、クセ毛なら何んなひどいものでも直ります、譬へクセ毛の人でなくとも、毛がやはらか過ぎて、ハエギハもビンも、タボも下り易い毛髪でも、之を防ぐことが出來ます、又毛髪が硬くて自由の利かない人でも、すなほな好い毛髪となります、加ふるに毛髪の色澤を美しく致します。

（清韓臺灣各送料參拾錢ヅヽ）

美髪香油

●定價一瓶金壹圓五拾錢（送料）市内四錢地方八錢

「香油」は美髪劑の總ての効能を具有してある外に、一時的にチヾレ毛を直し、毛をフクラマス力をもつて居りますから、如何なる毛の薄い御方でも、これをつけて髪を御結ひになれば、フツクリとして澤山の毛のやうに見えます、又皮膚が剝脫してフケが出たり、毛髪が赤く細く枯痩するのを直す權威を備へて居ります。

（清韓臺灣各送料參拾錢ヅヽ）

コールドクリーム

●定價一瓶金壹圓（送料）市内四錢地方八錢

『コールドクリーム』の美顔料としての効用は、之をお化粧なさる前によく御顔なり、御手なりに摺込み、紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方は、アブラの出るのを防ぎ、アレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ、光澤を出し、おしろいを翌日までも剝げずに落付かせ、殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持つて居ります。』但此クリームは美顔劑で、世のクリーム類の如く御化粧下用には立ちません、「艶肌劑」と「コールドクリーム」とは艶肌美顔の姉妹劑です。

（清韓臺灣各送料參拾錢ヅヽ）

艶肌劑

●定價一瓶金六拾錢（送料）市内四錢地方八錢

「艶肌劑」は顔のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にも、白粉下にもなり、而して白粉のノリをよくし、お化粧を落付かせる化粧料であります。

（清韓臺灣各送料參拾錢ヅヽ）

髑髏の歌

中

横瀬夜雨

六（つゞき）

……色有る衣を着せて晴の座に琴彈かせんとねがひ候。ねがふのみならずそれを事實とせんが爲にはあらゆる勞をしまず。すでに去る年のしも月にも若きと老たると見しらぬ人が會見せしめ候

賣物と母は言へれど、狼にむしろ投げよと父にせぶれど

賣物のむすめには花をかざれとのおよづれ言にわれを泣かしむ

幸かあらずか破談とはなりたれど、また遠からずして强られ申すべく候、さあれいかなる苦みを忍びても決して嫁ぎ申すまじく候。

忍ぶるは苦しかりけり、火つきたる心懷いて母と

きぬ縫ふ

嫁ぐまじと定めしは、生れざりしならばと思へば、更に苦しき生を與へて、わが子に生れざりしならばとかてはしむるに忍びざればに候、ソロモンの榮華の極も空の空なりと叫びしは、生は辛きが爲に候はずや。

髮に挿す花の一瓣を天地の富に換ふともわれは嫁がじ

母となるを、羞かる女一人有り吉備の中道に一人有り、われ

耶蘇こそ羨しけれ天地を覆ふ悲しみを有ちしますら夫

わが淚、英蘭土の王冠を冠にすともやはか乾るべき

吉備津彦父の劍にちぬるとも嫁とはならじ、よしや柔肌

されどさるよし父母に語りて其かうべに火をおかんは堪ふべきことに候はず……

……　……

さればこそ君に仕へ參らせんの志も立てしに候へ

御前にひざまづきなば善く來つと宣らせたまふや吉備の少女に

あめつちに一人有りとな思ほしそ月にも花にもわれ無はなくに

霧ふらば朝戸は明けじ月ささば夜は琴彈かむ君がやかたに

川長き常陸はお蠶の國どころ桑も摘まゝし茅生の中洲に

……君に仕へ參らせんには、君いかに情强うおはしますとも、わが衷心の苦みを知りたまふからは强て人の母たらしめんとはしたまはざるべし。妹と思したまはれ。

愚かしき己が心から、のがれ難き淵に溺れし有髮の尼をあはれみたまひて、今日より君が淡き御夢に生れし妹と思したまはれ。

朧月の夜に麝香袋拾ひ當てたらんほどのなまめかしさを愛でまさば、今生れし君が妹はやさしき女には候はじ。夢と現と理と情とを迷悟の界におきて、生れながらの空想に生き、過、現、來、切て三段のみだれがき

氣の向く方の折々にかはれば、さらに誓ひは參らせず

君に行く一の願ひを占ふと麝香袋を道に遺しぬ

おとしおきし匂袋をあかしにて逢はゞ强ても君のいたかむ

わが短き十九年の夢も書かば千ひろにあまり候はん新たに君に生るゝ身なれば、今まで參らせじと、これと竝せてわが書ける文字を燒き棄てさせたまへ、わけてこれは人に見らるゝが厭はしきに、辛き命を侘ぶる女をあはれと思さばたゞ燒かせたまへ。このまゝ御手にありと思へば夜半の夢もやすからず候。

われ、父母の許を去るまでは、うつしゑもかまへて

かまへて人に見せさせたまふな。
鷄はすでに三たび羽たゝきてあかつきとなり候。うす明り戸よりさし候、燈を消してこれより起くべく候

四十年一月四日　あかつき　朱鷺

七

荒陵と心はなりぬ君を憶ふ涙は土に瘞めてしものを

再は羞恥をな見せそ指組みて我母は泣けり獨子故に

彼女等「清く終れ」と我に言ふを忘れしは無し歸がぬも無し



於樺版画展覧會にて見たる女

嫁入を促きあぐねて危ふかる戀に遊びし御達なりけむ

發かれて足蹴せられし屍の白きを見ずや、君の戀なり

君のみは常久の少女に生くらむとかつて思ひしサンタマリヤか

新しう絡む涙よ女等は一人も男知らざるは無し

「歸がじ」と？戯ゆる勿男我さへ一人あるは辛きを

子を生まばかぐ土を生めかぐ土は火

を乳房にさへ放くる愛子ぞ

白き乳は壞疽に陷れ頭の毛は腐ちよと呪ふ棄てられし故に

弄ばれしかたはをとこは呪ふより泣くより外に術なかりけり

廢兵の藥賣かも恩被せて戀を賣りたる七人の少女等

少女等の涙を買ふは孤兒院の孤兒の藥を買ふが如けむ

誘拐佳名なるかな人の子に逃來よといひし我は誘拐者

誘拐汝墮獄の罪にゐて吾子娶るやと詈れる人

地獄へいざ二人は落ちむがき我にまづ衿明けて乳をのましめよ

せめて今宵君が召さする緋の肌着移香ながらたびて死なさね

吾戀ふる涙を今はうとむらむ死なば安しと君のうとむらむ

思人は戀を封じゝ懷に髑髏を抱きて我に來にけり

憎かりしなつかしかりし辛かりし殺したかりし君泣くからに

惡まれてある悲しさに家を脱けて來つとは言ひし遅かりし哉

妻とあらば落つる涙はわが膝に灑がむものを髑髏もつ人

罪人と我なりけらし髑髏もつ君に對へば涙流るゝ

懷の髑髏を我に取らしむと寛むる衿の衣のきしめき

髑髏ぞと今は言へどもなほ生くる君が面わは花なるものを

寒からむ入らせ内へと外椽に默してあれば悲し氣にいふ

月魂の昇るを見むと美しき髑髏とあ
りし夜の椽哉
柔かう伏せる眉かな撫
でつれば睫毛うるみて
灯を眩しがる
龍の火の羽翼もが
な髑髏ならぬ君を
拐ひて天驅けるべ
き
強きかもかたはを
とては美しき戀の
めじかを人とあら
そふ
山禽の尾上隔てゝ
寢むものか野火は
しを野の草を焼く夜に
髪の上に劍を安かむか
足の方に香を炷かむか夢が危ふき



火喰鳥二夜ながら火を喰ひて髑髏に
入るとわれ見しそのを

川底に沈く英日に霧ろふ
光も亡せて沈く英
花ちらちら乳の香甘酸き
懐に一夜はおか
む子羊の如く
餓鬼か我ある日
ある夜は戀人を
嫉む心に火のつ
きてあり
幾人に忍べば終
る宿命ぞあまり
に多き謀反の戀
一人生き一人死
ぬ我を哀みて髑髏に
見せし戀の「面」か
わが書ける戯曲の楔子これなりと賜

びつる君の髑髏なるかも
然ば君よ大團圓の幕下せ破局の戀に
(間)あらむや

八

歩め吾馬　月遠く　目路にあれども寂しきは流沙の
涯一人行く　人盗人の身なるもの
たゝるの青き狼に　乳を呑まされし我なれば　貂の
毛ごろも　さゝ熊の　袋も　着なれけむ
蒙古來てくりを謡ひては　母も泣きける搖籃の　緑
の夢よ　幼兒は　不可思議の世に目を明けぬ
　おつむてんてん　かいくり　かいくり　すつぽん
でんでん太皷は剃立の　頭叩いてならへども　肱の皷
は舌皷　繰るは手綱か　染分　はいどうどう
　いつちく　たつちく　太右衞門どんの乙の姫　お姫
さまといふものは　鼻へお白粉　頬へ紅つけて棕梠の
木擬のちんちちれつ毛　召すは月がさ　乘り懸　はい
どうどう

あよめ吾馬　月冴えて　裂けし蹄の疼くとも　われ
は盗人　雲珠鞍置きて　銀の鞭振る身でも無し
　さりながら　駒よ　我とても　戀しき君に逢ふ夜ら
は　芥屋の大門に打つ涙の　響は胸の知るぞかし
　丈夫なれど——氷室の花の凍れるは　いで頂懸る飾
玉　を指をおとす朔風の　鋭きは取佩く　刀——はゝ
にすら　かくし置きつる一人も　我れ取る先に人取り
て　盗むべき夢は亡くなんぬ
　竺志の文字の關　關の關守老ひにけり　びん白し
何とて据たる關の關屋の關守なれば　年の行くをば留
めざるらむ　われ等も老いにけり　おくの勿來の東に
思妻はありながら
　歩め吾馬　偸みをほせし美き人を　鞍の前輪に掻き
乘せて　逃ぐべく策を鳴さねば　寂しからめど、見よ
影を　われ等は月に伴へり　歩め吾馬。
　歩め吾馬　千里草絶えし砂漠を　一人行くも宿命の
み　涙はわれとわが胸に　流さば足れり　影を見よ
月はわれ等に　伴へり　歩め吾馬。

九

なが月一日

わが腕ひとかいなぐり打擲すこの悪夢さへ一人ぬるさへ

くたびれて机に凭つたまま咽ぶやうな蟲のねをきゝました。

梅村さんから返していただいた寫眞お送りしました

はつ島田！たぶん十七の正月と思ひます（さく子さんは私に面白い事を仰しやいます、たゞ默つてきいてをります）手の指の肉がつまめる程でございましたのがよほど細くなりました。私の指はマチ？で右より左が太うございます、太いといつてたゞさう見えるだけのでせうけれどむつちりして。それに左へはまらなんだ指輪が、この頃はまるやうになりました、一つおゝくりしませうか



でもまた文錢だらうなんてきつとおつしやるから………悪くちのお上手なお口を何かですつかり縛つて了ふ工風はないか知らと毎日考へてをります。梅村さんならきつといゝ工風があるのだけれど。

…………………………

夜ふけて

君より

うめぐさ

花世

▲街路を歩く快感…さう云ふ事を感じた。私は今町を歩いて歸つて來た。今日私は街路を歩くのに、たゞ快感を追ひ、心に震動をあたへるものをたづねる心持で心やすく歩いた。

普段のやうに何かを見付けやう、何かを知らう、何かを考へなしではならないと云つたやうに、努力的に自分をひきずるやうにする人工的な歩き方をしなかつた。然るにこの街路に對する私の新たな歩行のしかたは成功した。私はいつも努力的に歩いて歸つて來て、甚しい疲勞の爲めに自失する事もある位であつた。

然るに今日は生々した安靜が胸にある、（もつとも時間を多く要したと云ふ事はあるが）歩いたと云ふ事に快い印象が花のやうに匂ひ殘つて居る。是れあるかな！と思はないではをられなかつた。

街路を歩くのにも、人工的に歩くのと自然的にあるくのとはそこに斯の如く快感と疲勞との差別が岐れて居た。此の眞理はやがて私の生活の上にも置かれなければならない。私たちは私たちの心理狀態に對して非道な勞働をしてはならない。自分の心の正體にざつとねらいを定めて、その動かうとする氣勢に順應してあくまでも自分の狀態と目的とに順應した生きてゆき方をしなければならない。

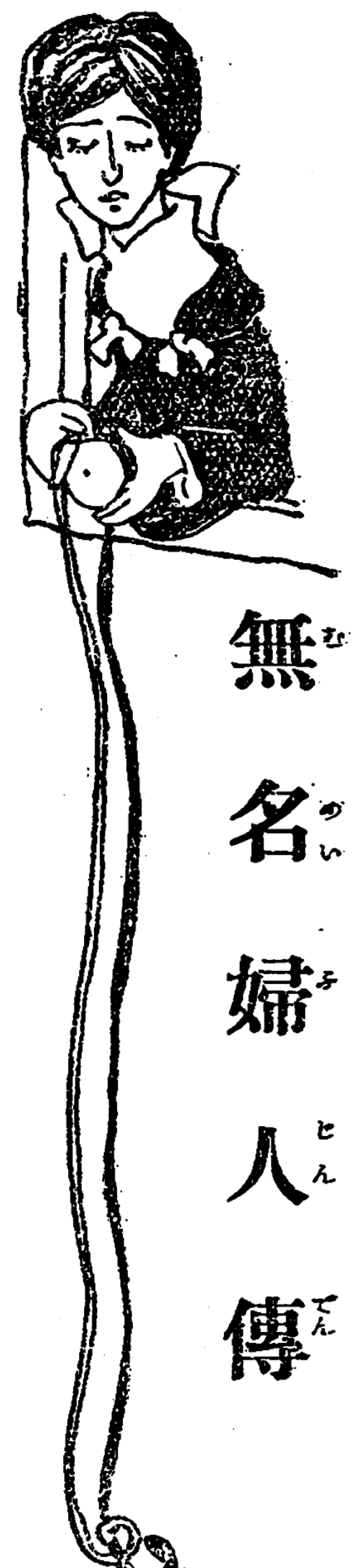
然も其の自然な自己の動かし方の中に生の快感と安靜とは光と熱とを輝かしつゝある。私たちはそれをのぞんで歩いてゆきたい。私は今日の二時間ほどの逍遙に燃えるやうな幸福を享けた事をよろこんでゐる。

▲曇つた朝の中で、比較的透明な今朝の私の直觀が私の意にかう耳語いた

お前がお前の生活に對してつねに怜悧であれ、努力を努力として忍從し勞働としてはならない。努力の裡に自己を置て自己を愛しむ心の震へて止まぬ其の勢力でゆけ。そこには快感がもたらされるに相違ない。

快感はあへて物質的にせいたくではないそれは確である。快感はまだ地位でも虚名でもない。それは言ふ迄もない。快感はたゞ／＼お前の心臟の上にお前の自らの愛の力で致されるのである。

無名婦人傳



（二六）心得違ひの母を諫める爲に女の美を犠牲にした若き婦人

藍の花（徳島縣）

彼岸櫻のほろ〳〵とこぼれる夕方でした。私は病後の祖母の手を引いて新らしく建築された停車場迄散歩に行きました。其歸るさ、さもなつかし相に語り乍ら畔道を町近くまで來て、殘り惜しげに暫らく立つて何か話をしてゐたが、振りかへり振りかへりして別れて行つた不思議な二人連れの女に出あひました。一人は二十五六位の女教師らしい紫の袴をつけた婦人でした。後一人は二十前後でありませう、美しい美しいやさしさうな尼さんでした。

尼さんに？女教師？？例の私の心は動きました、何か二人の中には深い〳〵物語りでもあるのであらうと？歸つてからも彼の夕方話し乍ら通つてゐた二人の姿が、目にちらついてしかたがありません。けれどもただ一度ゆきずりのどの方ともそれさへ知る由も厶いませんでしたが、其後二十日餘り立つた今日、ふしぎにもふとした事から、偶然彼の二人の方々の身の上を知る事を得ましたのです。

二十五六に見える女教師は、名を靜子樣と云つて濱江樣と云ふ今年二十一になるあの尼さんの義理の姉樣でお年は二十七ださうです。――私の心はいよ〳〵動かされました。――靜子さんのお母樣と云ふお方は、

靜子様が生れると間もなく何かの深い事情で、（其事情はまだ私には存じませんが）生れて間もない靜子様を置いて實家へ歸られたのです。お父様は表具師ですので赤ん坊を抱いては、他に家内のない家のどうする事も出來ませんから、靜子様が二つの時新らしい母様をもらひました、其お母様が濱江様の實のお母様です。

靜子様は男手で不自由勝に育てられて來ましたので新らしい母を、非常に慕つて喜びました、又母様は無邪氣な可愛いゝ子供に生みの母の様に慕はれるのを大そう嬉しがつて、私は幸福な幸福なと行末を樂しみに大事に育てゝゐました。

丁度靜子様が七つになつて小學校に入つた其年母様に濱江様が生れました、靜子様は大喜びで學校から歸ると何時もすぐ濱江様を脊負つては遊びました。それに又濱江様は姉様の靜子様に大そうなづいて、泣いてゐても靜子様に抱かれると母親に抱かれた子供の様に泣き止むと云ふ様な工合でしたので、母親も二人の子をへだてなく可愛がつて居りした。

其内に年月はよどみなく立つて靜子様は十四、濱江様は八つの春になりました。其時はお父様の表具屋さんも大變あたつて、もう三四人の職人をおいて何不自由なく豊かに暮せる様になつてゐました。けれども此時からお母様の素振りは一變しました。それは或時靜子様が編物か何かしてゐた傍で、おとなしく遊んでゐた濱江様が、どうしたはづみにか石につまづいてころんだので、あはてゝ抱へ起さうとした其處を、母様は御覽になつて、濱江様が泣いてゐたのを變に、靜子様がどうにかして泣かせた様に有仰つたのが初まりで其後は一言毎に義理だから義理だからとよそ〳〵しくなすつて、だん〳〵つらくおあたりになる様になつたのださうです。けれども生れつき怜悧な靜子様は、母様の御機嫌を取る様に何かとお話したり濱江様を可愛がつたりするのを、却つてうるさい物の様になるべく避け様避け様と遊ばすので、毎日〳〵どんなにすればお母様の御機嫌がよくなるのであらうと、傍の見る目も涙の流れる様な常の子供には知らぬ事を、案じては小

さい胸を痛めつゝ、オドくし乍らも十五になつて小學校を優等で卒業いたしました。學校を出ると間もなくお母様は、「女の子は我儘で仕方がない、他人の御飯を食べないと身のためにもならぬ」と云ふ口實で、靜子様を何處かへ御奉公にあげ様となさいました。お父様はさすがに見かねて、家にも手はなしするにと不賛成をお唱へなつたさうですが、「可愛い〻子には旅をさせよ」と云ふことわざゝへある通り、私は靜の身



のためと存じましてとたつての言葉に、萬事をだやかにとのお父様は不本意乍ら靜子様を御奉公に出す事に定まりました。

さて十五才の靜子様は、つゝじの花の眞盛り四月中旬に口入屋の叔母さんに連れられて、お母様とお姉様が、御奉公に上るのなら私も上ると泣く九つの濱江様とに送られて家を出ました。其時もう少しもう少しと云つては後について行く濱江様を、母様は町のはづれではなれない紅葉の様な手

をそげなくふりきつて、つれてかへられたさうであります。靜子樣は次第に遠ざかつて行く、お姉樣？お姉樣と呼ぶ濱江樣の泣き聲を、聞き乍ら涙にくれて町をはなれて市の或大家の孃樣附として傭はれ、かゝる身の上になつてもお母樣を露うらまず、可愛いゝ妹の事も案じつゝ忠實に立ち働きました。此時から自分は何か一人前の女になつて、生活したい？家は濱江樣につがせて一家平和に送りたいと云ふ望みを抱いて居りました。

噫？運命の神は何日まで斯くかれんなる少女を、苦しめませうぞ??

靜子樣の優しい心掛は孃樣に慕はれ、奧樣にはいたはられ、こゝにをいてかねての希望通りの何か一本立ちの生活の出來得る業を、同情の深い奧樣のお心によつて修める樣になりました。

靜子樣は御奉公に上つてわずかに三ヶ月後の六月、臨時入學を許されて或私立裁縫女學校に通ふ身となりました、靜子樣は御自分の身を此上ない幸福な者とし

朝は星のかゞやく頃から起き庭のお掃除萬端を手をちなくすませ夏等は水をまき手早く身のたしなみをして孃樣の御起床をまち（當時八才の）色々お世話をしてから、御一緒に孃樣の學校の方へまわつてそれからすぐ登校するのが例でした。夕方は授業が終ると、逸早く歸つて他の女中と共に働き、又夜は孃樣のお復習やらお相手やらをして、三ヶ年間一日の樣に勉强せられたさうでムいます。斯く好い心掛の方ですから成績の惡い筈はムいません。六月入學を許されて四月の新學期に入學した方々と共に卒業を證書を授けられ其後、望みによつて母校の裁縫助敎師として奉職しました。其時靜子樣はせめてもの御恩返しに長くお屋敷にゐて盡すお考へだつたさうですが奧樣の「それじや寶の持ちぐされと云ふ物故奉職した方がよからう」とのお言葉に、いなみかねてとう〳〵お屋敷から學校へ出る事となられました。時にお年は十九の秋でムいましたとか。……

其間に濱江樣は度々姉を慕つてお屋敷をたづねて行

きましたが、姉をとづれる毎の母の不機嫌!?行くのを止め樣止め樣とする事等を考へる樣になりまして、姉に似た怜悧な濱江樣ですから母親から、靜は義理である、義理であると云ふ言葉を聞かされる毎姉の淋しい心を察しては、色々云つては尙々慕つてたづねて行つたと云ふ事であります。

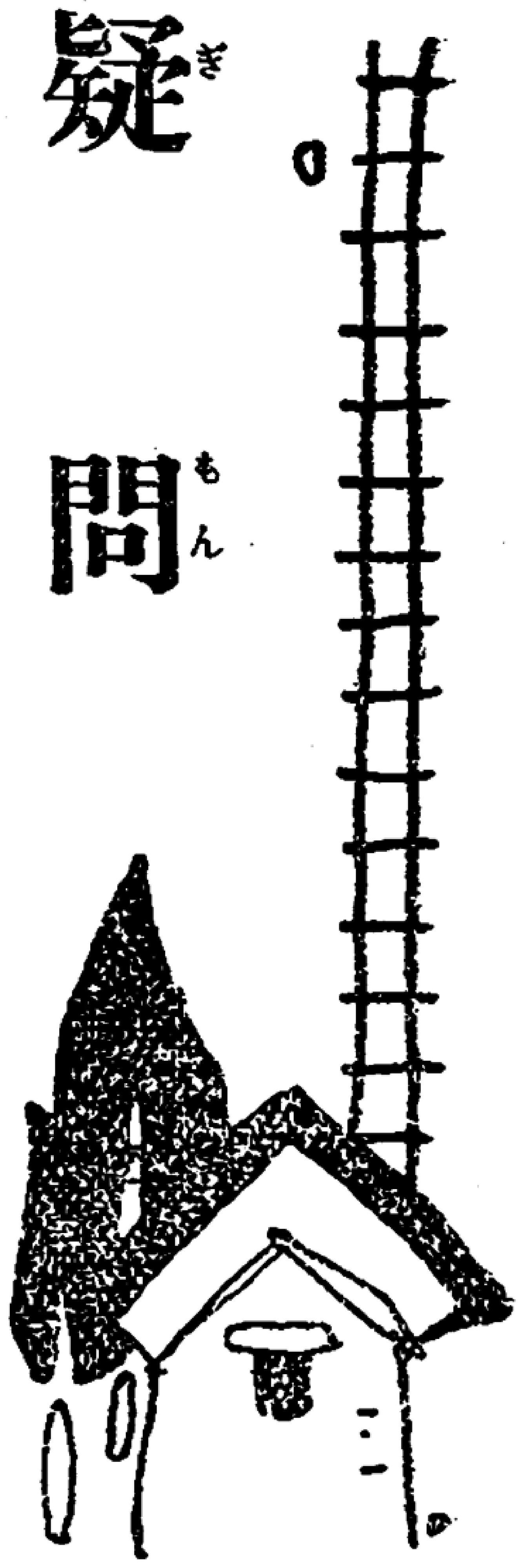
それから二年は事なく過しましたが、三年目濱江樣が十六になつた時優しい、はたをゝしい濱江樣によつてお目が覺め、お二人の前で御自分の今迄惡かつた行ひを悔られたとの事です。

それは或日、お母樣がお父樣に、靜は外へ出てゐて賴りになりませんから、ぜひ濱江に家をつがせたうでざいますとお願ひしてゐるのを聞いた濱江樣は、靜かに考へ考へた果、皆の寢靜まるのを待つて、お母樣のお心得違ひも、もとは私が生れたゝめと、さすがに淚をのんで、ふさ／＼とした黑髮を根もとからプッツリ切り落しました。うら若い少女の身で容易に行はれるわざでは厶いません、お母樣はたゞならぬ氣はいに、起き出でたら濱江樣が此有樣、一時は只茫然とあつけにとられてゐたさうですが、いきなり濱江樣の腕にとりつき、ハラ／＼つと淚をこぼして、早速靜子樣をお呼びよせになつて、驚いて歸つた紅芙蓉の樣な優しい靜子樣と、白蓮の樣な氣高い濱江樣の前で悔悟遊ばされたとの事で厶います。嗚呼以來六ヶ年、お母樣の二人を變らず愛せられるのを濱江樣は喜んで、淸い淋しい尼さんになつてお母樣のため、又お姉樣のために一身を投げ出されたのであります。

靜子樣は矢張り主家から學校に出てゐらつしやいますさうです。彼の夕方お目に掛つた時は、日曜日に靜子樣が妹を訪づれての歸り、町近く迄濱江樣の送つてお別れの處だつたのだと分りました。

靜子樣は日曜毎に必ず濱江樣をたづねて、種々慰められて夕方歸るのが例の樣になつてゐるとの事で、まだまだお二人の御心勞は大した事で厶いますが、私は自分のまはらぬ筆が恨みです。

唯々お二人のお身に益々御幸福の來らん事をかげながら祈つて居るものであります。



疑問

白木いと子

若葉に反射する光線がパッと青く明るく椽側に照つて、人は袷からそろ〳〵セルの單衣に移らうとする頃の、樹々の枝に茂り合ふ葉の一枚々々にも大空の下に生きてゆくもの丶溢る丶力が籠つてゐるかと思はれるばかり。其快い午後を私は庭を前にした自分の三疊で何の思ふ事もなく習ひかけの畫をかいたり止したり魂は青葉の裡に吸はれて、何ものかに憧れる瞳はとかく宙にさまよふのでした。

茶の間の方から上草履の音がしたので、あゝ、祖母が土藏へゆくんだなと思ひましたが、廊下を鳴らす女らしい草履の音は私の三疊の前へ來るとふと止まりました。

「オヤ、寫眞があるね」

敷居の處へ跪坐んで私の傍の机の上から祖母はそこにあつた寫眞を取上げました。

「オヤ男だね、これは何處の人?」

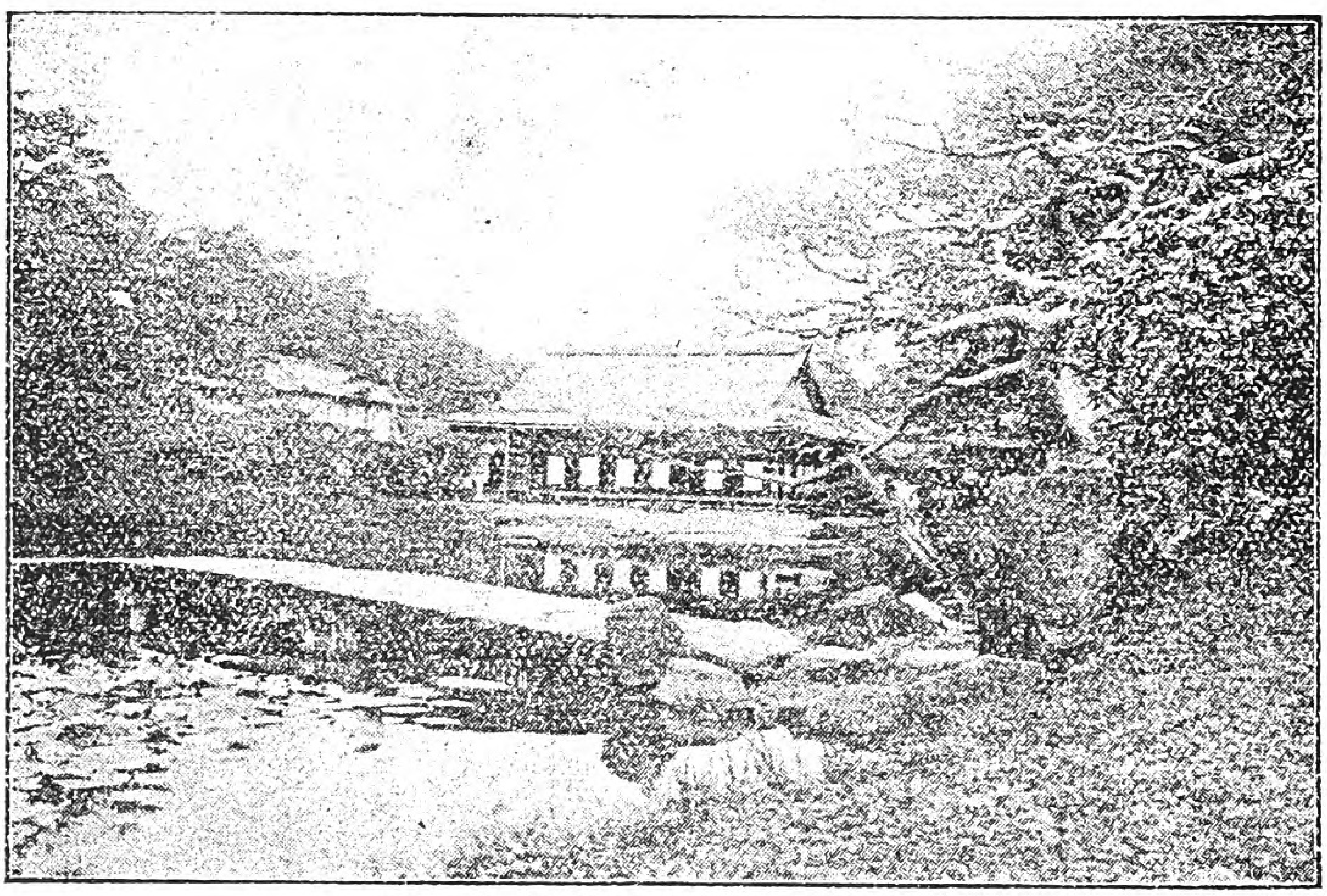
「私のお友達です……」ハッと思ふと胸はわく〳〵混亂して了つて自然にかう答へが出て了ひました。

「お友達……さうかい男のお友達――」

定めし色々聞かれるだらう、叱られるだらうと恟々して總身の血は皆頭へ集まつたやう、胸は早鐘打つて祖母の顏も見る事が出來ませんでしたが、案外にも祖母は恁う云つたなりずつと立つて土藏の方へいつて了ひました。

がら〳〵と鳴る土藏の戸の音を聞いて、出て來てから何か云はれやしないか。大變な事をして了つた。何故又机の上へなんか寫眞を出して置いたのだらうと、もう心はその事ばつかりです。どうしたらい丶だらう困つた事になつて了つたと心配しい〳〵土藏の戸の開く音が氣になつてゐましたが、暫くたつてから出て來

た祖母は、手に何か布裂を持つて私の方を別に見せずに茶の間へ歸つてゆきました。
寫眞といふのは絣の着物に絣の筒袖羽織をきた青年の半身でした。ふとした機會から相知るやうになつて手紙のやりとりなんかしてゐましたが、雖然別に此寫眞を持つてゐるといふ事について私にはやましい心持はありませんでした。
　しかし私の家は大分嚴格な上に、祖母といふのは若い時に御殿勤めをしたゞけあつてどこか皮肉な調子の離れない非常に八釜しい人で殊に私には特別やかましかつたやうです。一つは其頃私が祖父母のゐる家をつぐべく定められてあつたからでもありましやう。何しろ私は祖母に餘り深い愛を享けて居なかつたやうでした。けれど何と云つても眞肉の孫ですもの、時にはふつと沁々した愛情を見せる事もありました。
　女大學風に鍛へられて來た祖母は私が讀書に耽つたり物を書いたりすることを甚く嫌つてよく小言や皮肉をきかされました。それ位ですから私が見もしらぬ若い男と交際をしてゐるなんていふことは祖母にとつては一大事件ではなかつたでせうか。私は今か〳〵と呼ばれて叱られ相な氣持がしてする事が何も手につきません。
　色の褪せた藤の房に夕風が渡つて若葉の色も暗くなりました。晩餐だけは私たち姉妹と一緒にする祖父母の膳が八疊の茶の間に並ぶのを見ると私は罪の判決を



彦根樂々園

待つてゐる四人のやうな氣持でお膳につきました。御飯を食べながらも氣になつて〳〵たまりません。祖母は祖父に話したのじやないかしら、祖父はもう知つてゐるのじやないだらうか、と思つてばつかり、けれど祖父母の顔には別にいつもと異つた色の動くのも見えませんでした。

不安の中に其日は暮れて翌日になつて、祖母の口から寫眞といふ言葉は出ませんでした。二日三日と經つても何とも聞かれもしません。私の不安な心持もいつか薄れていつて了ひました。

朝晩は涼風が立つてきた其年の九月上旬祖母はある曉方床の上から起上らうとしてそれつきり身體が利かず昏睡狀態に陷つて僅三四日計りで死亡りましたが、それまで遂々あの寫眞の事は一言も云はず聞かずでした。祖父に話した樣子も一向ありませぬ。祖父も今はもうない人ですけれど遂に何ともきゝませんでしたから。

祖母は私を信じてゐたのでせうか。一體何と思つて祖父にも話さず其儘自分の胸に收めてゐたのでせう。いくら考へて見ても私には祖母の心持が分りませんあの嚴格な祖母が打捨て置くべきでない事柄をどうして捨てゝおいたのでせう?

今年はもう祖母の七回忌になります。萩の花のこぼれる九月になつたら亡き人を慰めの法要は營まれませう。淨いお寺の境内に、暗い土を被つて永久に眠つてゐる祖母、あの時の寫眞の主が今の私の生涯を誓つた配偶であることを知つたなら何と思ひませう。

「さうかい男のお友達――」さう云つた祖母の言葉は七年後の今でもはつきり耳に殘つて居ります。

いちご

清白

古翁しまぐれの　白晶の皿をうけ
野にまじり苺摘み　鮮けき乳を灑ぐ
門に生て生鈴の　六月の飲食に
百層に驕りよぶ　けたゝまし虹走る

一年間につゞく

名流婦人日記

四月一日より十日まで

工學博士園孫磨氏令嬢　園　壽美子

四月一日。 昨日けふの暖かさに木々の梢は芽立ちて花はなけれど庭の内なにとなく春らしくなりぬ。

朝七時に起き出で入浴すませて後妹と共に麻布なる琴の師の許に參りぬ。菜若を二三度三味線と合せていたゞき羽衣今小町などさらひて歸る。

午後は襷がけにて二階の居間の掃除をなす。

用ひなれし教科書など見るにつけても何故、學校をさがる氣になりしか、もう一年にて專修科も終るのになど今更かなしく、樂しかりし學校の事のみ思はれて物片づくる手もたゆみ勝ちに、學校をさがれと仰せられし母上の御言葉の恨めしゆう思はれぬ。

されどぐこれもみな一日家に置きて物ごと見習はせ裁縫など教へん御心よと思ひ返せば今更有難くなにとて御恨みなどの申さるべき。

さて漸くお掃除すませ机の上の花さしに赤と白の美しき「チューリップ」の花などさして二階を下りし時は早日もかたぶく頃なりき。

「ゐり善」きたり母上の御見立てにて襟などもとむ。

夕方父上御歸宅、一家うち揃ふて樂しく夜食をすます。夜は久かたぶりにて髮を桃割れに結ふ。

四月二日。 ほころび初めし花の下を妹と

二人お琴へ急ぐ。今日は母樣御病氣にて御やすみになつていらつしやる故、明日の溫習會にひくものだけよくさらひて急いで歸る。

夕方田舍家の方に散步に行く、いつのまに咲いたのか灌木林の中に菫が澤山咲いてゐた。短かい枯れ草の間に浮いた樣に咲いてゐる薄紫の優しいこの花を机の上のお友達にしやうと步きながら一つ二つ摘んでゐたらいつか兩手にあふれる程になつた。まだ摘んでゐる弟をうながして歸る。

夜はお琴のおさらひをなし明日の着物を揃へて十一時にやすむ。

四月三日。今日は神武天皇祭。

美ごとに咲き揃ひし櫻に誘はれて立ち出づる人いと多く賑やかなる一日なりき。

さはれ喪章悲しき門毎の國旗見るにつけても大君の在しませし去年の春の忍ばれて花に浮き立つ心も沈む

朝早く髮を結ふ。

母上は御病氣にて今日の溫習會は聞きに御出でになられず、はり合ぬけ、せめて姉上なりともと、妹と二人もの足らず思ひつゝも支度すませて一時頃家を出づ

砧「あづさ」などおもしろしと思ひぬ。

無事にすませてかへりしは七時頃なりき。

御來客あれば妹 弟などゝ食事すませそれより居間にて「家なき兒」など讀みて十一時半就寢。

四月四日。今日もまた空美しく晴れ渡りて春らしき日なりき。

この日學校より退學許可の御通知參りたり、淋しさのまた新らしく歸りきて我れにもなく、涙の落ちぬ。

十時頃より吹き出でし風に盛りの花の氣づかはる。

一時、お花の先生御出、應接間は白百合、食堂はぼけなどいく。源平桃の心のまゝにいけあがりしはうれしおけいこすみしは四時。

夕方庭に出でしついでに弟とつみし「つくし」を父上母上の夜の御膳にそふ。

夜、弟より過日、飛行機墜落して慘死をとげられし德田、木村二中尉の御葬儀の模樣きく。聞く事みなか

なしき事のみ。ましていとけなき徳田中尉の忘れがたみのあたりに人多きを何と思ひ給ひけん黒目勝ちの眼見張りてうれしげに行き過ぎ給ひし有樣きゝては無心なだけに御いとしく、やがて年たけ給ひて後、飛行機の飛ぶ樣など見ていかに父君を忍び給ふらんなど思ひ、そゞろ胸は迫りあふるゝ涙のとゞめあへざりき。

四月五日。 北側の小窓あくれば田を隔てゝ向ふなる八幡樣の森はいつか薄紅の衣うちかけし如く櫻咲きて昨日までの淋しかりし景色にひきかへいと花やかに見渡る。

九時頃母上は銀座まで御出ましになりしより妹弟など籠さげて背戸へ蓬摘みに出づ、幼かりし折のこと、さては學校の話などなしつゝ樂しくあちこちと摘み歩くうちいつか籠にもみちたれば十一時家に入る今日は午後より西五辻樣と、長の年月御教へ受けし師の君の御許へ御禮に參る御約束なればすぐ支度なして家を出づ、青山四丁目にて御一緒になりまづ依田先生の御宅へ參る。

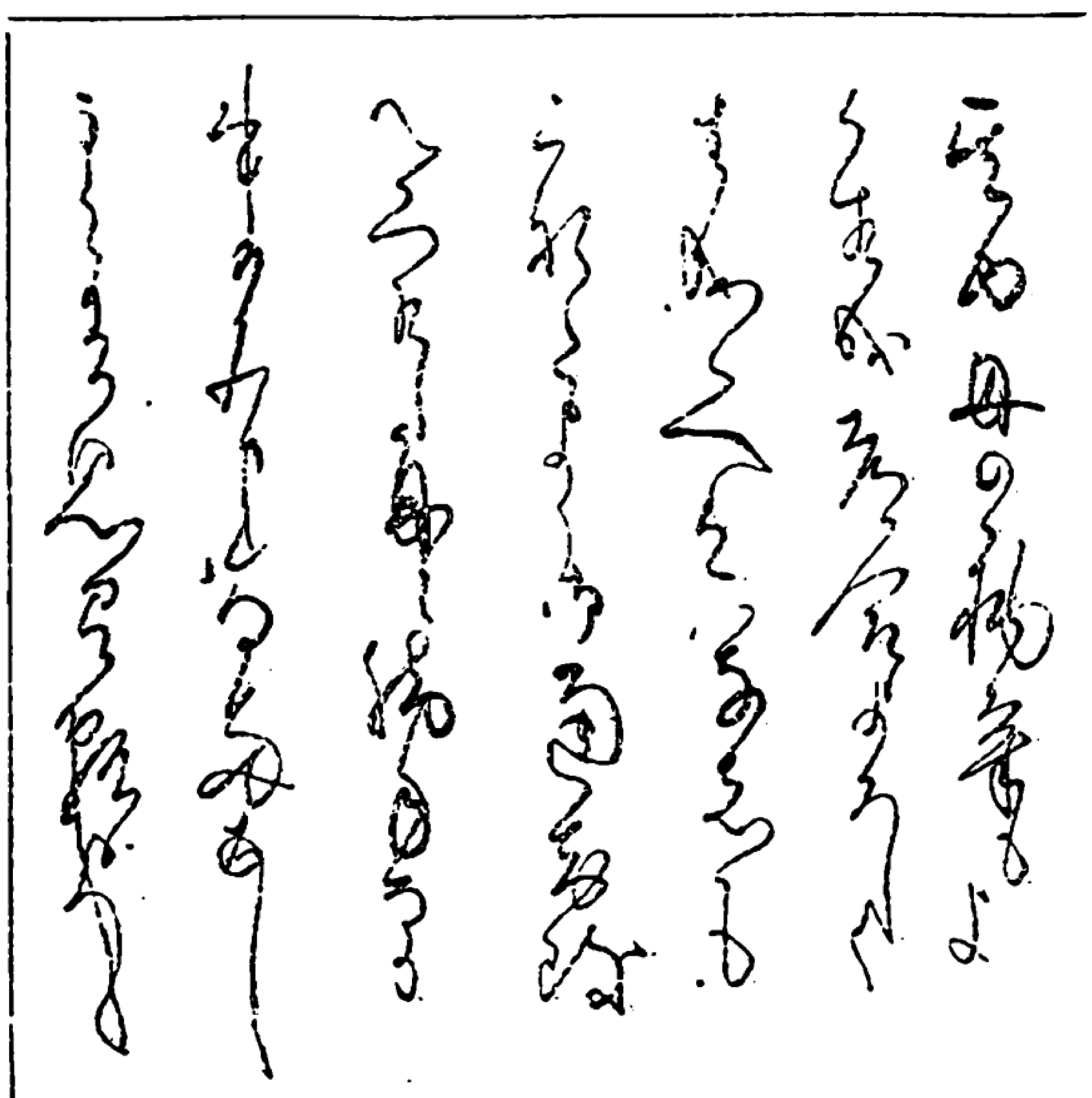
故乃木院長の御寫眞の飾られし御部屋にて漸く御話など伺ひ、やがて御暇す。

中野なる師の君の御宅へ參りて歸宅せしは九時。

たとへ今母校とは別るとも師の君の深き御惠みは忘れはせじなど清子樣としみじみ語りあふ。それより清子樣としばらくいろいろの御物語りなどなす五時半御歸宅。

夜は御來客ありし爲め父上母上とは別に、從弟の武さん、勝ちやん、妹弟など小供ばかりにて食堂を占領し大賑ひの中に食事をすます。

四月六日。 今日は井の頭の辨天樣へ參らんと思ひしもあまり風烈しき爲めやめ、昨日摘み置きし蓬にて朝よ



園壽美子孃の筆蹟

り蓬餅をこしらへる。出來上りしを見ればみな大きさ違ひ、ことに妹のこしらへし內にはつぎの當りしがあるなど珍らしき草餅ばかりなり。

十一時父上母上は美術俱樂部へ御出まし。晝食後はピヤノなどひきて父上母上の御歸りを待つ四時御歸宅それよりみな〳〵にてお庭を散歩す。裏の山櫻の三分ばかり咲き出でゝ美し、菫など摘み歸る。やがて又父上は御出まし。夜、琴とり出だし久かたぶりに秋風、萩の露などひく。

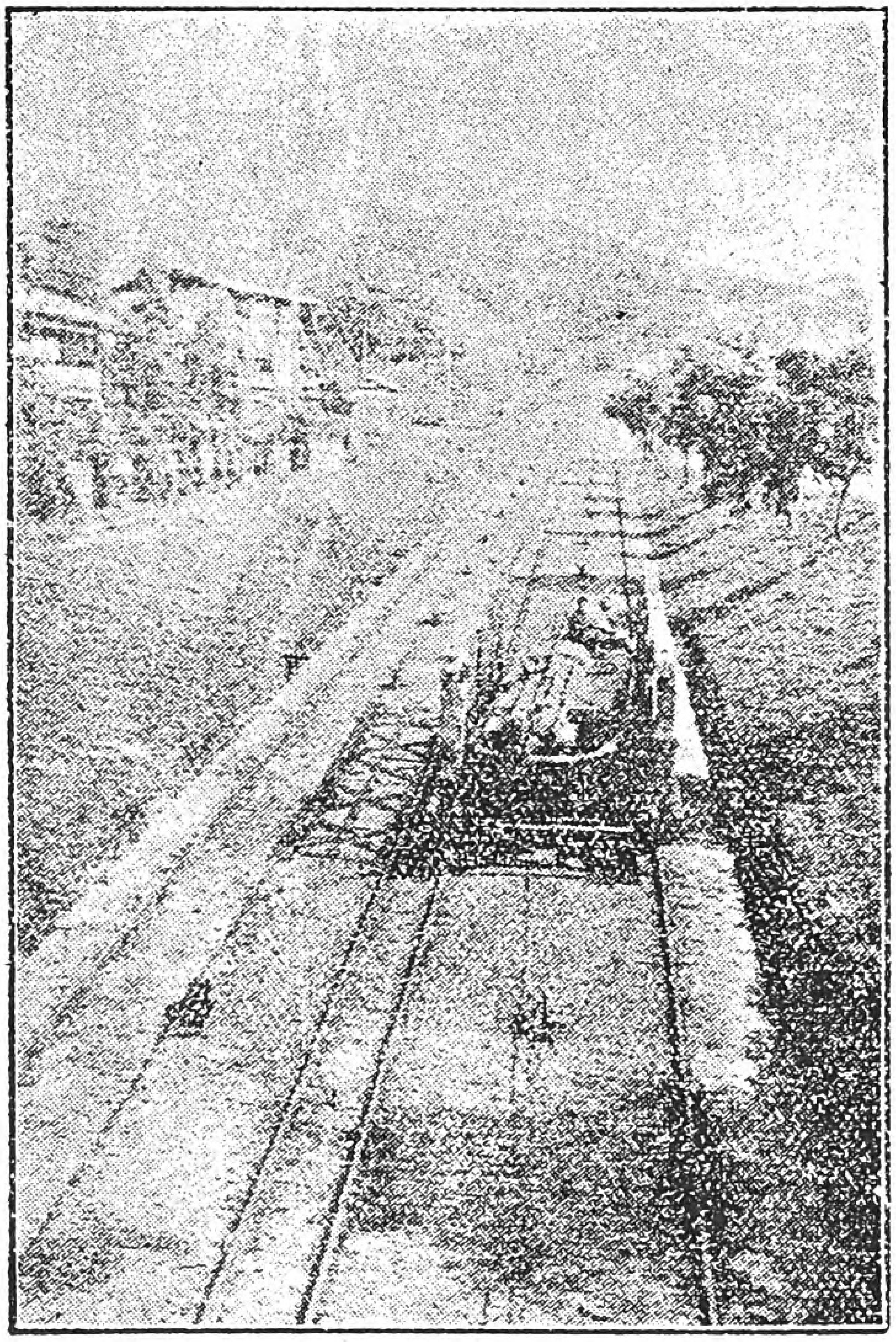
四月七日。風に迷ひて散りくる花の風情いと面白し。朝髮を結ふ。今日は小石川なる師の君の御宅へ御禮にあがる御約束なれば風いと烈しく吹き出しも一時頃家を出づ。四谷見付にて石川樣を待ち合せまた飯田橋にて吉田樣、淸子樣など〻御一緒になりて第六天原町などへ行く。家に歸り着しは四時半。入浴すませて鬢のほつれなどかき上ぐるにハラハラと前髮より落ちて、鏡の中に散りし花びら花の雨にぬれてきし江戸川のほとりの美しさの忍ばれて思はずほゝゑまれぬ。

四月八日。間遠うに落つる雨だれの音に春の朝の靜けさは一しほまさり、軒の小竹の葉摺れさへもきこゆ。なにとなくあたりの淋しきにフト氣づけば春休みも昨日にて終りし妹弟など



初夏の新緑

の今朝は學校へ行きて留守なりしなり。
今までは共にうちつれて行きしにとたゞ獨りとり殘されし如き暗き淋しき心地して、父上の御出ましを御見送りしてすぐ二階にあがり、窓の下に机すえて同じ心なる友に文などしたゝむ。煙るが如き春雨にぬれて杉の木立はいと暗く甲武の汽笛の晝ながらもの淋しくきこゆ。晝頃より陽氣の急に寒くなりてこの二三日忘れてありし「ストーブ」などの戀しく思はる。


京都疎水インクライン

十時頃床に入りしに、宵より胃がいたむなど申されをりし姉上の俄にお惡くなり、とやかくする内に烈しき痙攣を起され、恐しきまでに苦まれぬ。
その內醫者も參られ、少しは落着きしより一先づ安心せしが一時はいかゞなり行く事かと胸轟かせぬ。
一時過ぎ床に入りぬ。

四月九日。陽氣はさして寒からねど朝の內、雨にまじりて綿雪の降りぬ。時節がら落花の雪かとみまがはれて風情深かりし。
明日はお客樣なればなにかと忙がしく晝食後は女中達に手傳ひに表座敷のから拭きをなす。
夕方、早く入浴すませ折から雨もあがりしかば庭に出づ。今朝の雪の消えざりしかと疑はるゝまで地に白く山櫻は大方散る。
田舍家の後の竹林にて筍を見出で、いとうれしく父上、母上に告げ參らせんとて急ぎ家に入る。
今宵は父上早く御歸宅、珍らしく來客もなきより久かたぶりにて謠を伺ふ。

この日織田様より武田先生の所の願書御送り下さる生れつき裁縫のへたなる身のいく度かためらひしも恥かしとて今うち捨てをかばなほくへたになるばかりなれば思ひきりて願書したゝむ。

四月十日。昨日の雨のなごりなく晴れて朝より麗なる日なりき。

九時お花の先生御出、應接間は藤のなげざし、表座敷は牡丹、奥座敷は菖蒲、食堂は木蓮と白百合、居間には櫻など活く、出來上りしは十二時すぎ。

晝食後はなにかと忙がしくあれこれと心にはかゝれどはや四時になりぬ。

入浴すませ支度などして後、母上にかはりて田舍家の方を見廻りに行く。母家の忙がしさにひきかへして別天地かと思はるるまでもの靜にて昨日の雨に水まさりし筧の音のみさやかにきこゆ。

家に入れば心持ちよく清められて部屋の内にお釜の湯の人待ち遠げにつぶやく。新月の姿は梢に面白し。

やがて御客様はひきつゞき御出。

今宵は東洋軒より人々まゐり、手落ちなくお食事もすむ、面白き講談などありて十時半頃みな樣御歸り。

我れさへ疲れしものをまして前日より飾りつけの事、器物の事へあれもこれもと御心づかひ遊ばせし母上の御疲はいかばかりと察せらる。

十二時やすむ。

* * * * *

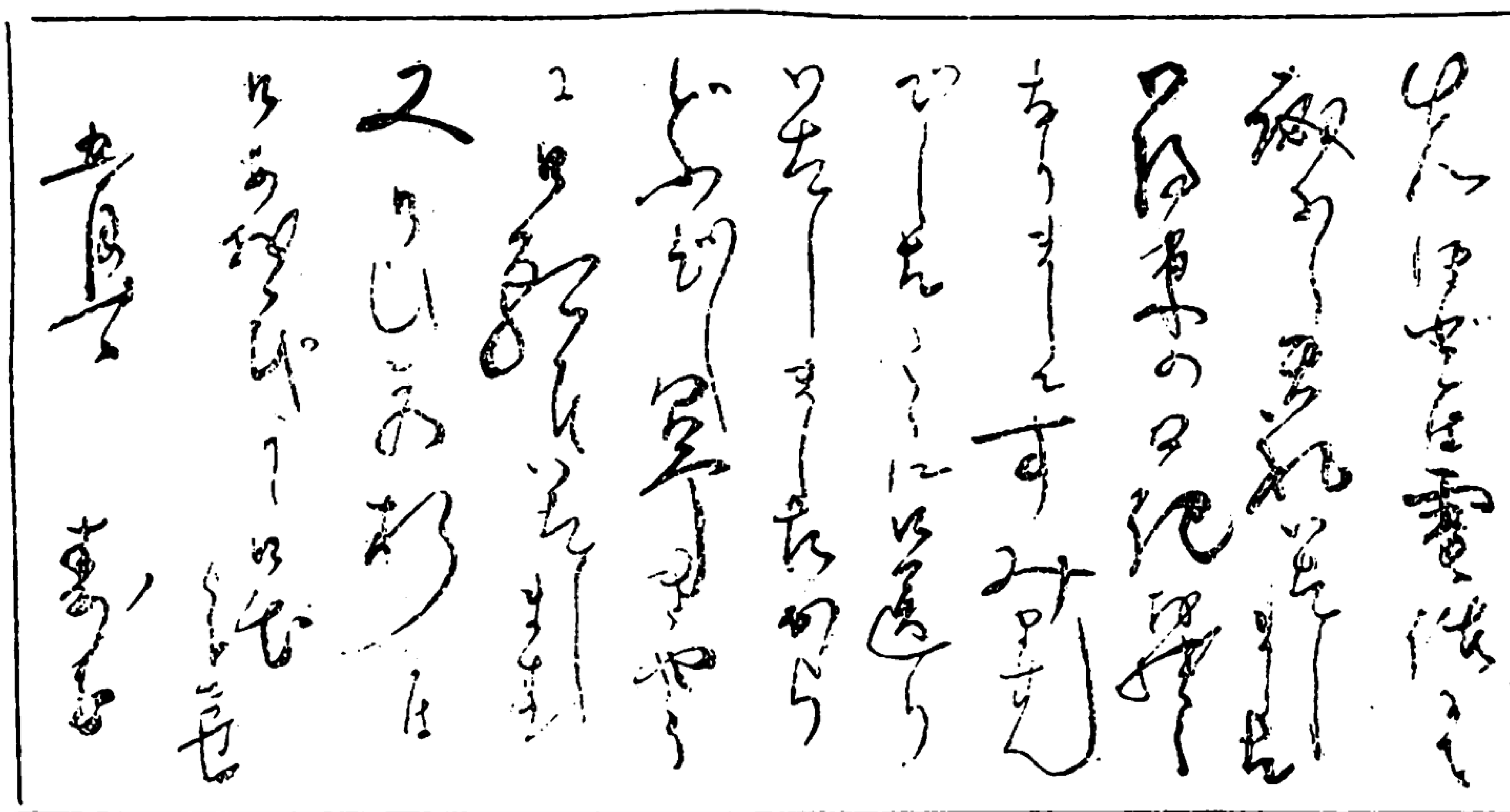
十一日より二十日まで

松本君平氏夫人　松本春子

四月十一日。朝より風吹く。春の嵐に散り行く花を見て我が心は痛む。

主人の君、八時起き給ふ、食事を共にす。此度北京より急用にて歸り給ひて家中は遽かにせはしくなれり十時主人の君は馬車を驅つて家を出で給ふ。午後老ひたる母上を伴ひて向島に行く。舟にて小松島に至り堤をそゞろ歩き、花屋敷に草花の美しく咲くを看る、月見草や、江戸菊などの種、品々を求む。此の日は帝國大學のボート、レースあり、墨田の堤は誠に人出多く雜沓を極む、母上には初めてボートレースなるものを御覧ぜられいと喜ばれ給ふ。五時家に歸り、入浴、八時主人の君も歸り來り給ふ。母上と三人にて食事を共にす。語る事多く春の夜の更くるを忘る、夜二時眠に就く。

四月十二日。心憎き春の風かな。けふも強く吹きて花の散る幾許ぞ。主人の君は七時に起き出で給ひ、朝餉もそこ〳〵に家を出でゝ活動の人となり給ふ。此の數日は田舍より都に來り給ひし、母上のために何物をも打捨てゝ奉養すべしと思ふ。十時家を出で、丸山新町の父上の病を見舞ひて後、母上と弟三郎とを伴ひ、飛鳥山に參る。花は半ば散りぬ。多くの人の猶ほ春に醉ふを觀る。夕暮れに疲れて家に歸る。七時主人の君歸り給ひければ、母上と共々に壽々本に行く。竹本朝重の義太夫をきく。四方やまの話しに、夜は更けぬ。此の藝術の人常に吾が心に無限の趣味と感興を與ふ。



松本夫人の筆蹟

四月十三日。朝より來客多し。けふは亡き母上の世を去り給ひし命日也。谷中天王寺の墓

に詣づ。春深き此の寂漠の裡に、忘れ難き懐かしき、昔の夢を忍びぬ。午後母上の仰せにて三越に行き郷里への土産物を求む。四時頃母上と共に主人の君を日比谷の事務所に訪ひ、帝國劇場に女優劇を觀る。十二時歸宅。

四月十四日。朝より主人の君には二三の來客に接せられて、直ちに外出せらる。午後より母上弟同道にて青山に赴き、御齋場の跡、乃木大將の家宅を觀る。更に九段遊就館に乃木室を拜觀して壯烈なる最後を懐ひ、そゞろに忠魂義魄の身に逼るを覺へぬ。歸途丸山新町に父上の病を見舞ふ。七時主人の君終日奔走、疲勞して家に還らる。發熱あり、先年盲腸炎の爲め切開せられたる舊き患部に疼痛ありとの仰せにて、早く褥に就かる。

四月十五日。主人の君患部の疼痛、更に烈しく發熱三十八度也。宿痾の再發にはあらずやと痛心限り無し。終日床上に安臥、食禁を嚴にせらる。出入の者數名來訪あり、大學佐藤外科に電話を通じ、明日博士の診察を請ふ。夜に入りて主人の君腹部の炎症大に輕快。母上も大に安途せらる。

四月十六日。天氣いと好し。主人の君病症大に佳良午後一時大學に赴かれ、佐藤博士の診察を受く。數日にして恢復せらるべしとの事。吾が喜び何んに譬へん樣もあらじ。終日君の病床に侍す。大阪より米子さん上京、來訪せらる、久方振り也。可憐なる米ちやんは今はもう立派なる母樣となれり。されど昔の無邪氣な愛らしい氣質は少しも變らず。此日米ちやんから歌舞伎座に誘はれたるも辭して行かず。

四月十七日。主人の君の病益々良好。床上に靜臥せられ。終日讀書に耽らる。大濱姉上より電話あり。主人の君の許を得て赤坂の大濱別莊に姉上を訪ふ。夕暮歸宅。此夜は母上の御慰みに蓄音機にて雲右衞門、呂昇などの語り物を聽く。

四月十八日。春雨の降る。主人の君終日床にあり、讀書に耽らる。腹部の疼痛退散す。ライオン商會の鈴木千代三さん澤山に蓄音機の新譜を持ち來られ、母上と

主人の君を慰めらる。何時も變らざる誠ある人の心、悦れしき事限りなし。午後二時小栗富治郎さん來訪、主の君、病床にて御面會せらる數時間に渉りて、快心の宗教論、哲學論あり、病を忘れさせ給ひしが如く見ゆ。吾が夫は、病の時の外は常に終日家にある事極めて稀れ、病は痛むべし。家に在り給ふは嬉し。此の夜本鄕通りにて母上の御歸國の土產物など買ひ求めて歸る。

四月十九日。天氣いと好し。六時に起き母上の御歸鄕の行李を整へ、家のもの供を伴れ新橋に見送る。八時四十分也。いとく御滿足にて御歸りなされたるは悦ばしき限り也。

主の君、病大に好し、二時大學病院に赴かれ佐藤博士の診察を受けて歸らる。

四月二十日。母上の御上京やら、主の君の突然の病の爲めにて、怠り勝ちになりし岡田の父上の事、保養の爲め過ぐる日逗子の大濱別莊に行く豫定なりしも、漸く此日の正午の汽車にて、大濱姉上と共に父上を送りて、逗子に赴く。

新綠滴るゝが如く、野も山も淸新の氣に滿つ。父上の御機嫌もいと麗し。逗子の風光心行くまゝに眺めて夜に入りぬ。八時四十分の汽車にて都に歸る。

二十一日より三十日まで

室町伯爵令姪　室町文子

四月二十一日。月曜日。曇り。

今日は何となくむしあつき日、庭のつゝじもおちてち花を開きぬ。朝例のごとくお琴のお稽古に行く。午後より松本樣、渡邊樣御來訪、母は叔母と三越へ買物に、程なく遠山英子樣御出になり、皆樣とお琴の御さらひして夕刻となる。母歸宅、夜は手習ひをなす。今

日は心地すぐれずしばらくにて止め下婢を相手にさくらのおし花をつくる。

四月二十二日。火曜日。晴後くもり。

午前御けいこ、母左門町の室町へ行く。御産の御祝ひに、女の御子樣とか。御母子とも御すこやかの由、御めでたき事なり。やす子樣の御寫眞いたゞいて歸宅いつも御可愛らしくお取れ遊ばして、母の話によれば此度の御子樣は內藤樣まだ延岡に御歸國なく大阪に御滯在の折御出產の御知らせにとりあへず「好子」と御命名遊ばされしとか。午後より雨しと〳〵と降り出しぬ。咲きしつゝじも露を含みて頭重げなり。夕方おぶんさんよりの大切のおたのみものを書く。後手習。

四月二十三日。水曜日。曇少し雨。

どこからともなくひやりとした風の吹く日、二三日のあたゝかさについ薄着して今日もそのまゝどうやら風を引いたやうなり。午後より松本樣、渡邊樣、英子樣御遊びに御出で遊ばし、程なく池田叔母樣の御出でにいよ〳〵賑やかに日暮るゝも知らで遊びくらす。しばらくして呉服屋來る。今日は帶のみとか。縞がらと藤形と圓形のとを取つて置く。今夜は何となくつかれて手習ひもなまけて早くやすむ。

四月二十四日。木曜日。晴天。

昨日にひきかへて暑き日、かはれんげもやう〳〵咲き初め、フリジヤも花を開きたり。何の花よりも良き香なり。梅の實も今日この頃はめだつ程大きくなりたり。いすらはまだ〳〵ちいさく中々なり。午後より風引きの爲心地すぐれずやすむ。

四月二十五日。金曜日。晴天。

午前御けいこ、午後池田叔母樣の許へゆく。日比谷の人出に賑ふ有樣を電車の中よりながめて二時頃つく叔母樣のところにて色々御馳走になる。そのうち叔父樣の御かへり、御客樣も御いつしよにて急に賑やかになる。程なくお二人にてうたひをはじむ。熊野を凡そ四五十分間位、よく御聲のつゞくもの也。中々面白く伺ひたり、そろ〳〵御暇をと思ふうち御客樣も叔父も「サア今度はお琴を」との事に辭する事も出來ず、止

むなく下手の耻さらしなれど、これも御けいこと極くひきよく短きもの丶都の春、四季のしらべ、嵯峨の秋などやつとのおもひにてしらべ早々帰宅す。机の上に寺田様よりの御文あり。早速拝見す。日誌の事ども。

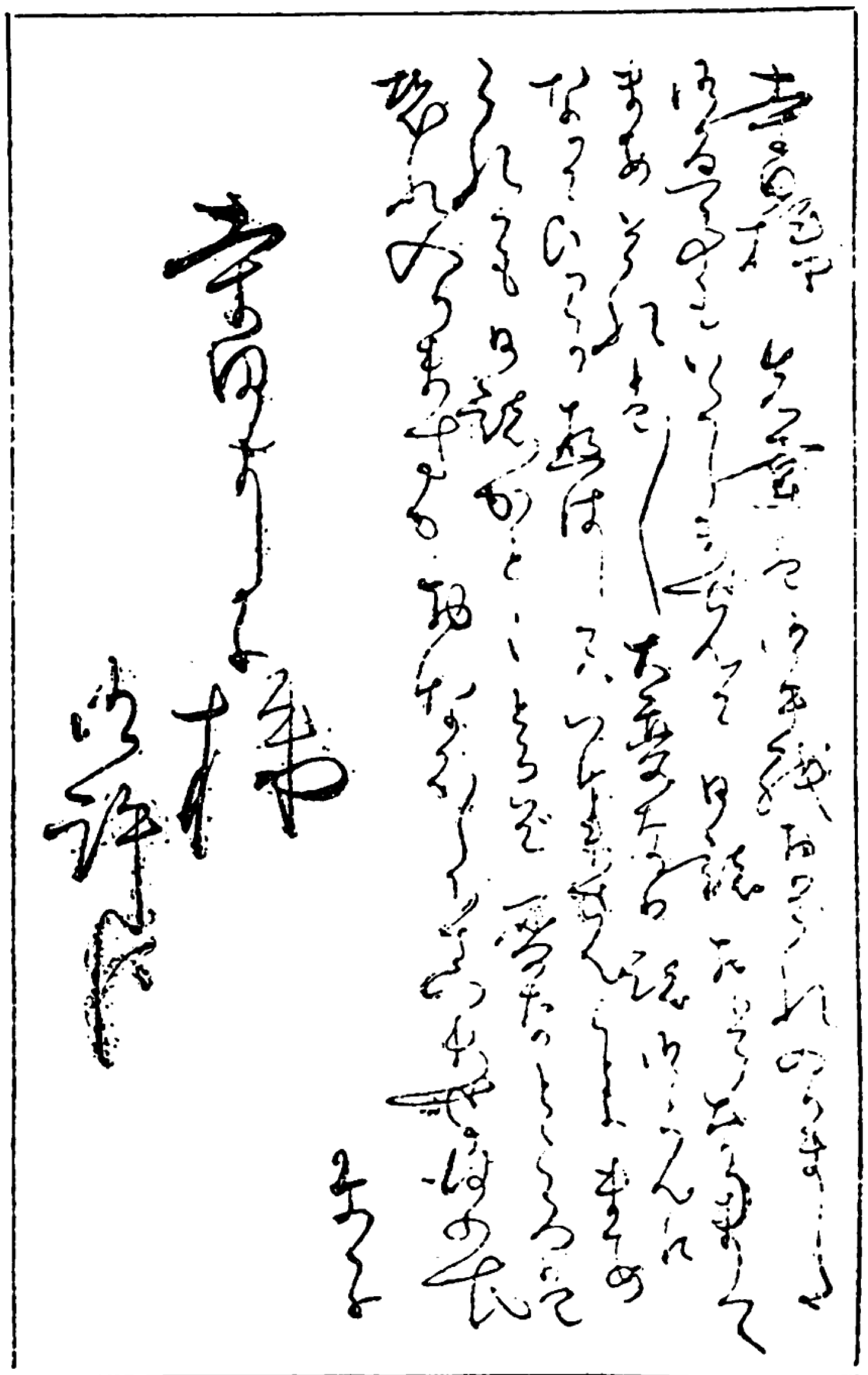
四月二十六日。

土曜日。晴天後雨。午前御琴の御けいこ午後よりお花に、今日はかきつばたを活く。帰りてすぐ御歌の御けいこに行く。故遠山稻子先生の著述あそばされし「歌ものがたり」の御講義を承る。御歌の題は筍、岡新樹也。歌にはならねど其時よみしままをしるす。

筍　親竹は細く見ゆれど竹の子はいづれもふとく生ひ立ちにけり。

賤が男の鍬にあたまを取られけり落葉がくれに生ひし竹の子

重からぬ石にはあれど竹の子の下より出でゝくつがへしけり



室町令嬢の筆蹟

四月二十七日。

月曜日。くもり。むしあつき日「我庭のつゝじの花も咲き揃ひ今日此頃ぞ盛りなりける」午後叔母様の御出でに面白きお話承り夕方となる。

四月二十八日。火曜日

くもり小雨。

朝よりしと〳〵と雨降りさみだれの如き時候、昨日にひきかへ今日はさむし。午後よりしばらくなげやりにせし御茶湯のおさらひをなす。程なく婦人書報届く婦人世界もよむうち夕方となる。しばらくなまけゐた

りし手習を一生懸命に。

四月二十九日。水曜日。晴天。

朝早く五月號女子文壇とゞく。床の中にて讀む。今日は一日下婢にひまをやりたれば大忙がしなり。夕方より清水谷公園に母と共に散歩す。大して多くなけれどつゝじの咲き揃ひいと美しき、夜手習。

四月三十日。木曜日。晴後くもり。

招魂祭にて御琴の御稽古も御やすみ、午後より靖國神社を參拜に、みやしろの前に立てば、そゞろ色々の事の思ひ出されて悲しくも尊くもおぼえたり、思はず口のうちにて

いさをある人をまつれるみやしろは仰ぎ見るだにかしこかりけれ

文子

補遺

朝吹磯子

二月二十七日。木曜日。晴

朝早く茂一來る、全く風邪もなほりしといへど、何

となく顔色あし、妾は母上の髪御そろへ申上げ午食後入湯三時半、木挽町へ參上、かねて御招待うけ居りし福澤桃介樣の舞臺開きに姑の君の御供して行く。はや皆樣集まられて女優の森律子、初瀨浪子を初め一期生紋付の衣服に裝をこらして控へ居たりき。

先づ幸四郎、宗之助の舌出三番叟に初まり、常盤津の宗清、第四期生女優の喜劇渡邊、是より多門店益田樣の失敗談を仕組しものと聞き一としほおもしろし、長唄の勸進帳、梅幸、宗十郎、宗之助のどんつく。幸四郎の老松に目出度終りて、十一時歸宅。

二月二十八日。金曜日。晴

朝より拂に忙し。母上明日は御出立といふに、妾も國府津迄御見送り致さんと定め、夕食後母上、妹などと銀座へ買物に行く、歸宅後間もなく五六年前長岡の家の從卒たりし吉田さん、母上をたづねて來られくさぐさの話に花は咲き九時過歸宅せられたり、臥床十時半、暫く相見ぬ子供等の如何であり大きうなりしなど夢はゝや遠き國府津の空に――。



一人の生きて行く力

（「婦人」の問題として）

水野葉舟

某月某日。

私は今、公にこの言葉を皆さんに送らうと思ふのです。それはあなた方の一人一人の問題ではなく、誰れにも——私は大膽に言ふが、現在の若き婦人の殆ど總てに——通じた問題であると思ふからです。あなた方は一人づゝ私の前に顯はれて來て、一人づゝその心を述べられた。それに向つて、私は暖かい同情者であつたと共に、細心な批判者であつた。私は極めてつゝましく言葉少にものを言はれた皆さんの生活の中から、幾つかの問題の尖端を見付け出さうと思つて、あなた方の細かな心構えをして居ました。これはしかし、世間で淺薄に考へて居る一種の觀察者のする遊戲に似た態度ではありません。私にとつても重要な問題に對する心であつたのです。

それでともかくさし當つて皆さんを圍繞し、壓抑して居る幾つかの問題を明に考へることが出來ました。そして私はまづ自分の言葉をこゝから發することが必要であると考へたのです。まだ、眞底の焦點に立つて「女と言ふもの」ゝ理想の——神の姿を思つてそれを言葉にするのは、まだ早いと思つたからです。勿論、それは私自身もまだ考へられない幻影です。私はそれ故、何よりもまづ、現在を問題について、自分の思ふ處を言葉にしたいと思ふのです。

現在程若い婦人達が、不合理な壓抑の中に、盲目の儘でもがいて居る時はあるまいと思ふ。そして、目を

覺す機會のない人は、その儘に自己を紛し去つて、屈從し、目を覺す機縁に觸れた人達は、自己を忘れて徒らに悶々として日を送つて居る。そしてその人達の目には遠い處に幻が映つて見えて居る。それこそ皆さん方が、如何したら自分が救はれるかと思つて、もがき苦しんで居られる今日に、隨分大きい代償――犧牲を拂つても、現在から脱却して行かうと焦心して居るその目に映つて見えるものがある。私はそれを皆さんの夢だと思ひます。

一體、皆さんのことを考へると、皆さんは實にお氣の毒な地位に居る人達だと思はれる。皆さんはその生れた家の人々からは、疑ひもなく愛されて居る。もしあなた方が緩かな、穩かな眠りの儘で、心が靜かな水の上を滑つて行くのならば、あなた方は今日まではそれは靜かな日が續いたに違ひない。もしあなた方が、今受けられるその周圍の愛の中に柔順に眠り得られたならば、それは身も心も靜かであるに違ひない。だが皆さんは眠ることが出來なかツた。その心が苦痛を生んだのだ。

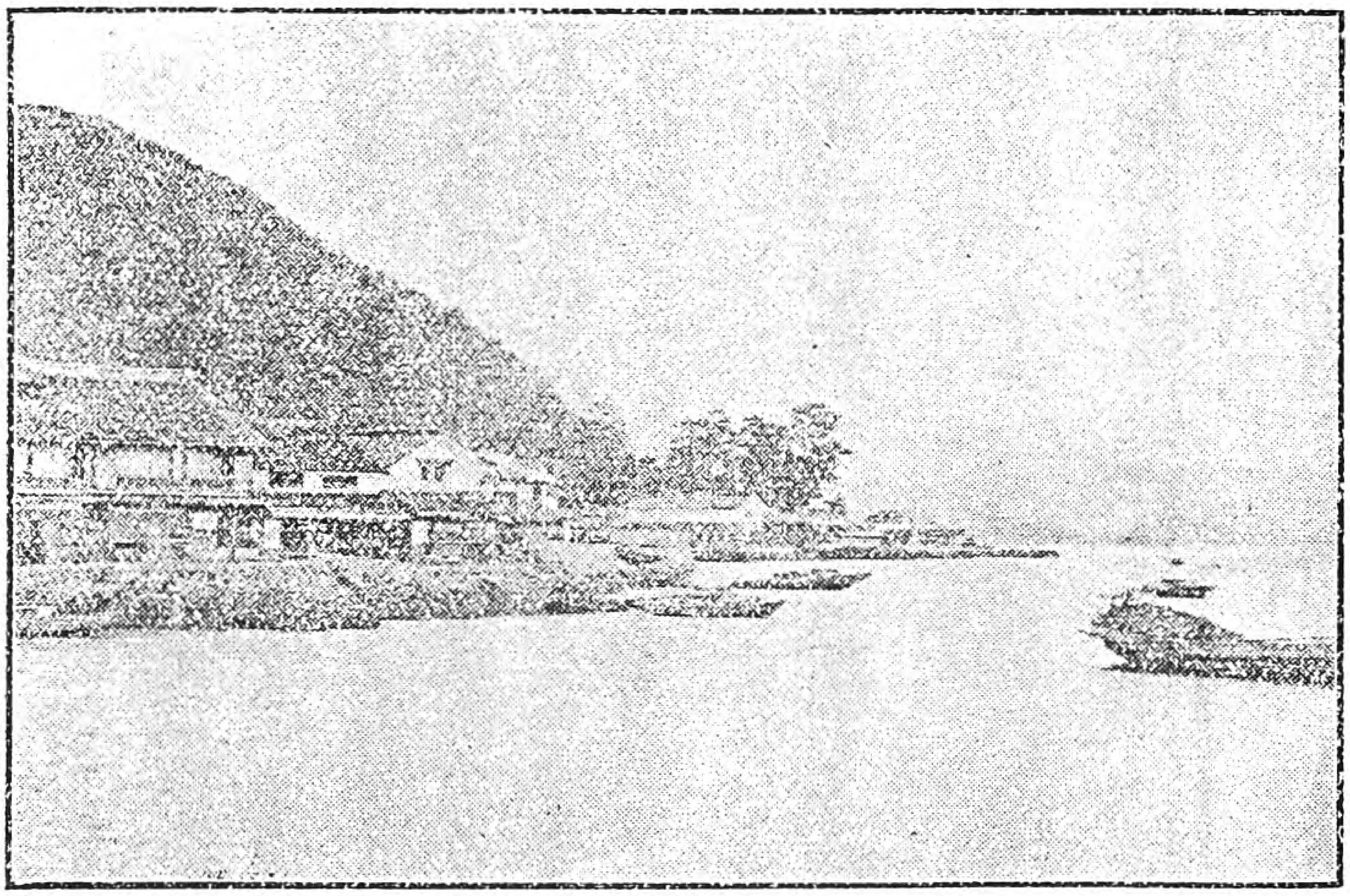
今、皆さんが受けて居られる愛は、目が覺めて見ると、恐ろしい殘忍な心だ。生を無視した心だ。人を侮り蔑にした心だ。女を人間として考へて居ないで、或るかわいゝ生きた家畜だとしか思つて居ない心だ。つまり愛ではない。玩ぶ心だ。それは日本の父老の人人が少しも眞底から考へて居ないことで、その心をも愛であると思つて安じて居るのである。つまりその心に圍繞されて居るので皆さんは、自らの心が開かれる機縁がないのである。皆さんがその生れた家の生活を底のない闇黑の渦の中を望んで居るやうに感じられる所以である。

こゝから諸君の心が突發して破れて來るのである。その幾重にも包んで居る幕の中の生活を苦痛に感ずる心が、何にも見ることの出來ない姿になつて、たゞ苦痛を逃がれると言ふ一事の爲めに、一直線にその幕を破つて出やうとするのである。破壞して、突進するより外はないと思ふ心に、凡ての力が集まつて來る所以

である。

私は皆さんのこの心と、この心の起る状態とに向つて深い同情を持つのです。今の日本の家庭の中で、暗々の中に實に激しい暗闘があり、今にも破裂して居る状態の多いこと、或は既に破裂してしまつて幾多の悲哀と、苦痛とが起つて居ることを想像することが出來る。それを思ふ時に私はその革命者――むしろ謀叛人である若き人々に對する同情者なのです。

しかし、私は皆さんに一つ考へて貰はなければならないことがある。それは皆さんのその突破する力の薄弱な處である。私はその深い幕を突破した人々の行末を考へる。又、その人々がその場合に於ける心の状態を考へる。さうすると、私は實に譯もない事に心が激動して事を行つた人の姿を見るのである。その人々の「生」の姿が如何にも憐れな、空虚なものであるのを見ずには居られないだからその人々は古い息のつまるやうな生れた家に向つて謀叛をして居ながら、必ず、譯もなく世間の因習に降服して居る。中には甚だしい墮落した惑亂した姿にまで行つた人もある。つまり從來の謀叛人の人々は、たゞ身を刺す痛さに向つて反抗し、その苦しみに壓せられた力に、盲目の儘で曝發した、たゞこれだけに過ぎなかッたのだ。あまり息が苦しかつたから息を出したに過ぎなかつたのだ。



海岸の町

この状態は必然の姿に似て居て決して深い處に根ざして居る人間の生育の上から見た

必然の道ではない。皆さんはこの前に歩いた人々と同じやうに、餘りに小さき苦しさに向つて激動し過ぎはしないか？……

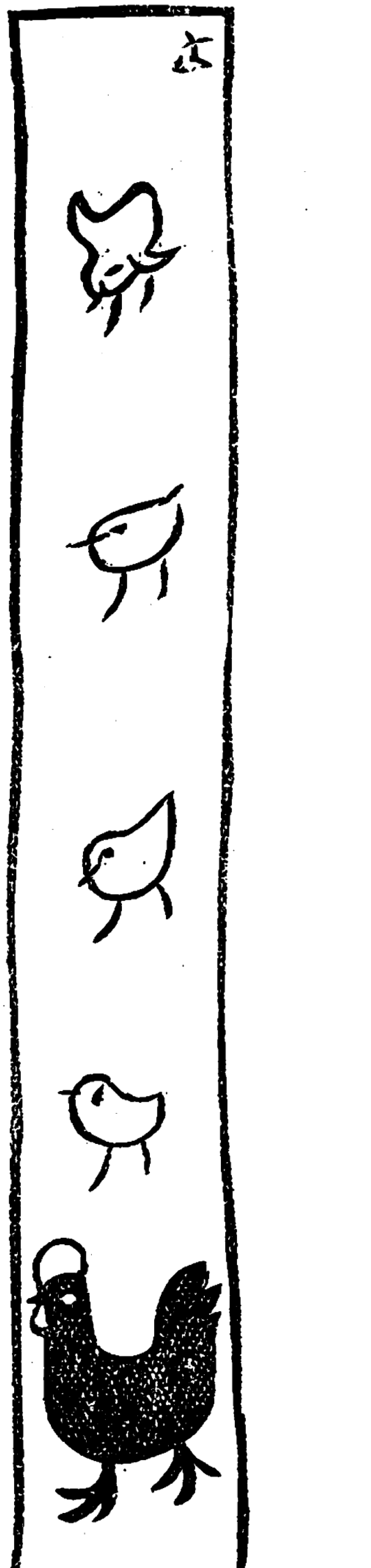
私はこの人々が感情――まだ「生」の中心に根ざして居ない浮動した感情に、餘りに易々とその心も身も托しすぎるのを見る。あなた方は何故、自分の生きてると言ふことを考へないか、自分がこゝに生きて立つて居ると言ふ意義を、何故深く強い心で考へないのだらう。これ程、重大な問題は現在のあなた方にとつて外にはない。

それが少しもしてないから、あなた方の心は薄弱であると言ふのです。

私は皆さんが感じて居る問題の一つに觸れようとした。しかし、これは根本の問題である。皆さんは自分を自由の中に入れて、さてその後にものを考へやうとする。しかし、それは氣樂な考へ方にすぎて居る。人間にはさあこれからゆつくりと息をついて考へようと言ふ時などは一刻もない筈と私は思ふ。皆さんが突破して出やうとする世間は、必ず更らに皆さんを惑亂させる世間である。皆さんの薄弱な心は世間に出るとすぐ暴風に吹きまくられる。皆さんはさう言ふ事情を求める前に、先づ自己の根強き心、確實に生きて居る心を求めねばならない。皆さんはまだ自分の力で自分の泉を湧かせて居ない。自ら深く穿つて行つて居ない。恐ろしいのは、たゞ苦痛に壓せられて見た夢である。その夢に浮かされてした革命である。

私は決して皆さんが謀叛人であると言ふことを恐れも、驚きも、危みもしない。も少し根強い人であつてほしい。私は一人の人の眞に自らの力に依つて生きてとを希ふ。新しき婦人の覺醒は群集の力に依つてなされては困る。





幸福の基礎は生活の獨立（つゞき）

早稲田大學教授　安部磯雄

△結婚後の不運

結婚の成立する場合に、結婚しやうとする人々の生活の獨立が其の成立に影響する事の甚だ多い事は前に述べた處である。然るに生活の獨立は結婚をした後も亦、婦人の幸福、婦人の見識を保つ爲めには、必要な資格となる。

世間では結婚は婦人に取つては一種の冒險であると云つてゐるが、極端に云ふとさうも言はれる程に、日本の婦人の今日の結婚は、婦人に取つては冒險である此の冒險的な今日の結婚によつて、結婚した幾人の婦人が其の幸福を享けて居るかと云ふ事を考へると、三人の婦人の中に一人の割合と云ひたいが、もつと以上に不幸な婦人がありはしないか。私は結婚してから不幸に陷り不運を嘆つてゐる婦人が――不幸とまでは云はれなくとも結婚と云ふ者に失望した婦人が、結婚した婦人の數の半數以上もありはしないかと思ふのである。自分の知つてゐる範圍の婦人を見渡した處でも、どうも幸福なる結婚をしてゐる婦人は少いやうである

果してさうであるとすれば婦人に對して氣の毒の感に堪へない。寧ろ獨身であつた方が幸福であつたと云ふ婦人が二分の一もあるとするならば此れは婦人問題としても亦、社會問題としても充分考へなければならぬ事に相違ない。

△侮辱される原因

其の不幸の依つて來る處を見ると、種々複雜な原因があるやうである。日本の家族制度の缺陷もあるであらうし、社會的影響もあるに相違ないが、私は其の原因の一つを男子の我儘に歸したいのである。

男子の我儘と云つても、其の裏面には婦人に責を歸せねばならない事も時には有るが、大體に於て公平に觀ると、男の二分の一は其の節操を守らない、家庭を不愉快にし、婦人に不幸を嘆たしめ、其の結婚に失望させる所以は、どうも男子の我儘、殊に其の節操を守らないところにあるやうである。私の知つてゐる範圍に於いても、かういふ觀察の間違のない事を思はせるのである。

斯ういふやうに男子の我儘を增長させた其の原因は何であるか、さう煎じつめると婦人は經濟能力がない婦人は生活の獨立が出來ない、其の資格を持つて居らない、其れが男子の乘じる所となつたのであると云ふ事になるのである。

日本の婦人が西洋の婦人のやうに、男子の我儘にむかつて、抗議を申し込む丈の勇氣と決斷、聽かなければ離婚をも辭せぬだけの所信、自分の力で自分を養へる生活上の資格があつたならば、男子は今日程に婦人を侮辱する事はしなかつたに相違ない。

いくら虐待をされても出て行けない、愛せられない事を忍んで猶夫の家に生活をする、もとより出るのを絕對に良いとは云はれないが、ある程度を超したる虐待にも、猶どうする事も出來ないと云ふのは、夫の家を出て行けば自分で生きて行く事が出來ないと云ふ痛切なる生活の問題があるからであつて、たとへ實家に歸つても、嫂もあり實家と雖さう〳〵長い間となると

快い顔もされない事は知れてゐる、寧ろ實家の厄介となるよりは同じ苦痛を夫の家で忍んだ方が、まだしもましである。そこで胸を撫でゝ大抵の事は辛抱をする女が多い。

勢ひ男子は女を見くびつて、これ位のこともいい位に考へて高をくゝり無節操をあへてし、我儘をとほすやうになるのである。此種の婦人の禍はたしかに、生きてゆく能力のないと云ふ點にある事は確である。

△女の見識を保つ資格



然し男子が前述べたやうに女子を奴隷視し、自分の我儘をとほし、あくまでも女を見くびつて是れで幸福を感ずるかと云ふと決してさうではない矢張り男子自らも一種の不快と苦痛とを味ふのは當然の事であつて、恰度奴隷を使ふ人が奴隷を意のまゝに酷使して、内心に一種の不安を感ずるやうなものである。

互に尊敬する事の出來る愛を以つて夫婦となつたならば其の結婚や實に幸福である。

男子が女子を輕蔑する間は如何なる方法を以てしても家庭の幸福は望む事が出來ない。

婦人の方に於て、家庭に於ける大概の折り合は辛抱

をして、婦人たる忍耐をするのは人間として當然の事であるが、若し度を超えたる男の我がまゝ、或は無節操によつて、自分に侮辱を與へられる場合には、充分に自分の見識を保つために凜乎としたところがなければならない。此の家を出ても困らずにやつてゆけると云ふ勇氣があり、決斷があり、資格があつた時は、決して男子に自分の人格を侮辱せられるやうな事はないまして男から見くびられる事もないに相違ない。

△其の實際は妻君ではない

私は今日上流の社會の人々の細君を、西洋の婦人に比べて見て、何たる意氣地のない事かと思はざるを得ない。その夫が細君に隱して、勿論新聞や何かに出されない程、極めて隱くれたる遣り方ならまだしも、然しそれとてもやはり許しがたい事であるがおほつぴらに是れ見よがしに不品行を働き、妾を蓄へ花柳の巷に遊び、其の醜行を新聞に傳へられる程、甚しい無節操であるに拘はらず、細君はその夫に對して、何一つの反抗もせず、もとより離婚を請求する等の事もない、殆んど夫と妻とはさう云ふ問題には全然、無關心の有樣である。

此のやうな上流の細君達は自分が奴隷であると云はれても返す言葉はない。むしろ妻君ではなくして、やや永久的な妾にすぎない、名は細君であれ、やはり妾として取り扱かはれてゐるのであつて、猶ほ且つその妻の位置を去り得ないのは如何と云ふに、唯々、虛榮心に對する執着があるからである。

其の夫から享ける愛は薄くとも、虛榮心の滿足は充たす事が出來ると考へ、妻としての實權が自分に無くても、兎に角夫に縋り付いてゐる間は、華美な生活をする事が出來る、裏面は兎に角表面には、世間の婦人から羨望される境遇であるとすれば、よし、毎日の、家庭は氷の如く冷くとも、虛榮心の爲めには、其の位置を去りたくはない。此んな考が滔々たる今日の貴夫人に多いのではあるまいか。果して然らば其の虛榮と結婚とを交換的な心事の陋劣は卑しむべき限である。

要するに女に生活の獨立がない間は、女に取つて不利である事は、何人も首肯する處に相違ない。あへて獨立を事とする必要はない。たゞ其の生涯に於て自分の權識を保つために、此の問題を考へると云ふ事を、私はすべての婦人に奬勵めたいと思ふのである。

蛇の話

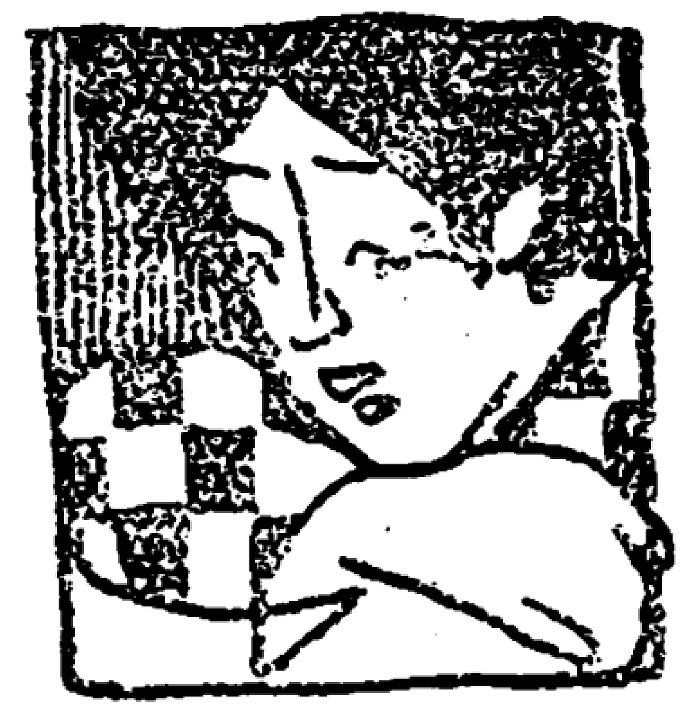
▲其の人には私に氣持のいゝ感じを與へる名が、私一人の心の中で名付けられてゐた。サロメさんと云ふ。何故と云ふに其の人は制帽の裏のところに自身で、ケイ、サロメと刺繍をしてあつたからである。私は時々其の人の本名を忘れて了つて、サロメさんとばかり思ふ事が多い。「サロメさんはある日の歸りかけに寄つて蛇の話をした。サロメさんは林學科の一年であつたので此の冬に伊豆山へ實習にいつた。樹の深い暗い林を學生鞄をかけて歩いてゐた時、斷崖の樹の虚穴から、蛇の尾が二三寸出てゐるのを見付けたさうである。其の尾を握つて引張り出して見ると、大凡四尺もあらうかと思はれる大蛇であつた。有り合せの學生鞄の中へ新聞に丸くつゝんで押し込んで、旅宿に歸つて來た。

蛇を風呂敷にうつして風呂へいつたあとへ、其の友達が來て、お菓子の包みかと思つて、解るとグナリグナリとするので、薄氣味惡くなり紐をといて見ると蛇が其の有樣であつた。そこで女中が騷ぎ出して、頓狂聲を出したので風呂場にゐたサロメさんは蛇ににげられたと思ひ、はだかで飛び出して來たが幸ひにげはしなかつた。けれども旅館の女に氣味惡がられて、とう〱捨てなければならなかつた。握つて生溫いと嫌であるが、蛇の身體は冷たいから心持がいゝ――そんな事を云つて笑つた。

▲自分を自分の戀人から、或は書籍から、人との談話から見出した時の快感が、私達の眞實の意味の幸福でなければならない、市街を歩いて多くの人々の種々雜多な生活を見る間にも、私は自分を見出す　その刹那に慄へる私の心の喜こび――觸るるところ――見るところ――、聽くところ、そのすべてに亘つて自分がその底に光つてゐる。其の光つてゐる自分を發見し蒐集する本能が私に私の生存の價値を肯定しつゝある。

（花世）





群集と孤獨（下）

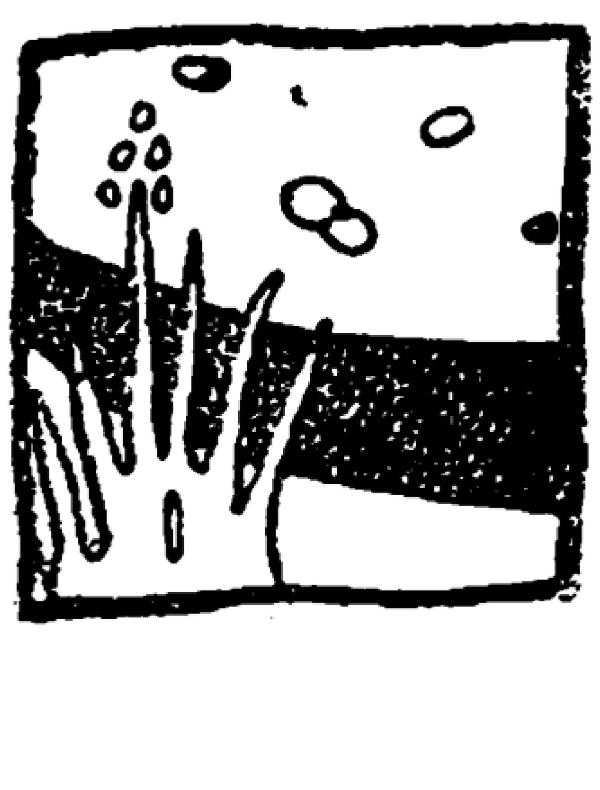
文學士　倉橋惣三

△群居慾の亢進

社交性が人間の本能であると云ふ事は前に述べて置いた。次には社交性にある異常狀態に就いて話さうと思ふ。

其の一つは群居慾が亢進してゆく狀態である、田舍の人が寄合と云ふと仕事があつても、捨てゝおいて、夜晝なく集合する。別段是れと云ふまとまつた話もなく、單に寄合が好で集つてゐるやうなのが其の一例である。

ハイカラな人々に就いて云へば、カフエー等に集つて何をすると云ふ目的もないが唯多くの人の中に集つてゐる事に面白さを感じて菓子や料理の外に何等の見ゐるものもない、又話をする事もないにも拘はらず、其處に行かなければ氣の濟まないと云ふ人等もたしかに此の例である。



或は集會が無暗と好きで、毎日のやうに新聞の集會欄を見ては出かける、會と云ふ會には其の人の顏を見ない事がない、此れなぞを集會狂と云ひますが、斯う云ふ人は貴夫人に多い。暇であるから外に出かける事も出來るのであらうが、聞いて見ると自分は忙しいのであるが、その會には關係があるから仕方がないとか、其の他種々な理屈を述べる事をするが、やはり自分に對する云ひ譯に過ぎないのであつて、其の内心は矢張集會を喜ぶ心理作用であつて、一堂の中に多くの人々が集つて、出入りが賑かで、がやがやしてをれば

愉快な心になるので。此れは社交性の亢進した方面の異狀常態である。

△孤獨者の種類

群居性の亢進する人とは反對に極端に寄り集りが嫌ひで、孤獨を好み、常に單獨でゐやうとする人も亦社交性の異常である。所謂孤獨者が是れである。

然し同じく異狀狀態であつても孤獨者は集會狂のやうに馬鹿馬鹿しいものではない。孤獨者の中に大思想家大藝術家大事業家が居る事は珍しくない此の人々から吾々人類に與へられる恩惠は大したもの



である。決して孤獨それ自身に對して侮蔑を與へる事は出來ない。十八世紀より十九世紀にわたる孤獨的な思想家の我々に與へた感化は偉大なものである。然し是れを社會の發達から云へば、やはり一種の異常々態であると云はなければならない。

今其の孤獨に陷る主なる原因をかぞへると五つばかりある。

先づ第一は高慢か臆病かである。此の二つは全く反對の性格のやうであるが、非社交的なる事に於ては同一である、世間には人から其の仲間

に招いても出て來ない偉い人がある。その應じない譯は其の人が世間の凡人と同じ仲間入をするのは嫌だと云ふ高慢から出てゐるやうであつて、よくしらべると高慢を人のために引き下げられ、傷つけられるのを厭ふ臆病が源をなしてゐるので、世間に出ない事によつて、辛じて自分の高慢を保つてゐると云ふ人がある。

第二には魯鈍と過敏とである。魯鈍であつて仲間に入れないのは云ふまでもないが、非常に過敏な人も亦社交に入れない。あまりに過敏な人は人をよく知ると共に、自分の本來の正體或は自分の缺點をくわしく知つてゐる爲めに臆病となり孤獨で暮すやうになる。古來の思想家等の孤獨性はこれである。鋭敏に己れが見え、皮肉に人が見える爲め臆病となり高慢となつて是れ亦社交に入れない。

△體質、知、情、意の條件

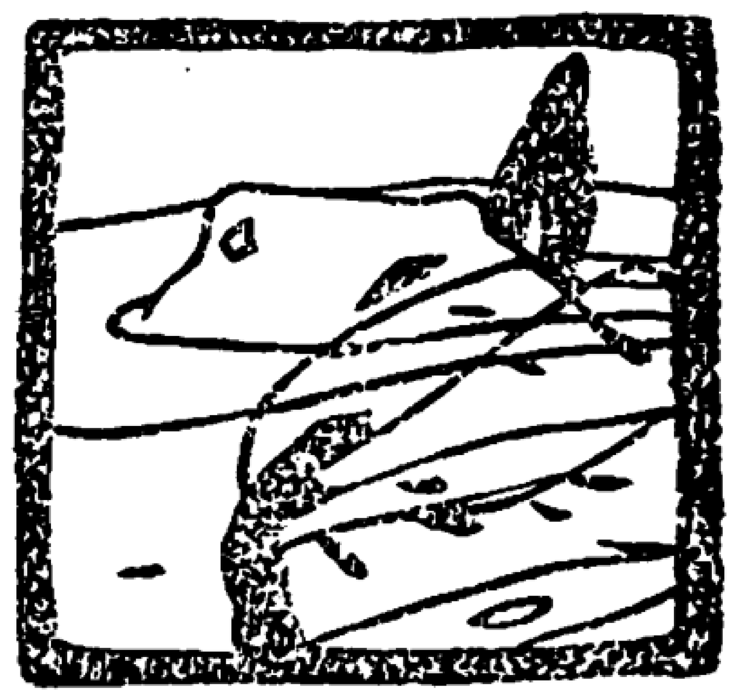
第三にはあまりに我慾の強い人であつて己れの意志をあくまでも主張する時には、人と其の進退を共にする事の出來ないのは云ふまでもない。

然るにその我慾、高慢が內に藏せられて孤獨にゐる人もある。それは所謂自衞家で、發揮する事の出來ない我慾、高慢の爲めに偏狹、狷介の人となり社交に入る事が出來ない。其の誘因は貧であることがある。病弱や不具である事がある。是れが第四、

第五には先天的或は後天的神經衰弱による憂鬱者、空想家、放心家等も社交には入る事は到底出來ない。

此の他數ふればまだ多くある事であらう、然し體質知、情、意、すべての條件が非社交性の原因となることは、これで理解が出來ると思ふ。

此の孤獨の人々について、更に考へを進めると、孤獨の境遇はその人が本來好むところでない事が解る。尤も孤獨を愛し孤獨の中に快感ありと云ふ人もないではないが、既に社交性が人間の本能的性情であるとすれば孤獨はどこまでも其人の已むを得ない處のものである。動物を寵愛し文藝を味ひ或は骨董を好む人が孤獨者に多いのは其の消息を語つてゐる。



病的婦人の行爲

巣鴨病院 杉江董

△行爲は精神の象

凡て人の行爲は、その考へた事が運動を伴つて現はれるのであつて、行爲の源は人間の精神の中にあるものである。精神が外に現れて種々と動作になるのであるから、善い事をするのも、惡い事をするのも、其の精神卽ち腦の働きが源である。精神が善くて惡い事をすると云ふ筈がない。又精神が惡くて善い事をする筈もない。

假令ば行爲は精神の有りのまゝが鏡にうつゝた象と同じ事である。健全な象は健全な精神から出て居るので、一朝それが精神の病氣や、種々の故障が起つて來ると、源が違つて來るから映つて來る象 卽ち行爲も矢張間違つて來る。それで行爲の現れて來る源が精神である事は解つたでしやうが、精神に於ても其の一番大切なのは感情であります。

物を取ると云ふ時にも、其の物が慾しいと云ふ感情が源となり、人を叩いたり傷害けたりするのも矢張其の人を怨む感情が源になつて、それが行爲を發動さす原因になるのです。此の感情が弱いと云ふと、行然の現れ方も自然と弱い、恰度酷い精神病者になると感情と云ふ者が全然麻痺して了つて、嬉しい事悲しい事腹の立つ事怨む事等の感情がない。それであるからして別段さう云ふ事に逢つても、それを喜んで顏に出すとか、そぶりに現すとか、言葉にするとか 行 に出す事が自然に無くなつて來ます。

然しいくらさういふ病人でも食ふ事、痛い事、肉情の事、所謂性慾に關係したやうな感情は殘つて居るから、さう云ふ事の行爲は案外容易く現れて來る事があります。平氣で食ひたいから人の物を取つて食ふ、痛いからと云つて遁げる。猥褻な行爲をする。から云ふ關係で窃盜狂だの色情狂だのが出來るのである。

△取りわけ強い嫉妬心

其の外、間違つて來ると云ふとちやんとした目的がなくして、直ぐと種々な行爲をやる事がある。突然理由がないのに人を叩つたり、火を附けたり、人の物を盜つたり、殆ど自分は考へないで唯行爲だけが先に出て來る、健康な人は如何なる場合にも、先に目的觀念があつて、後に行爲に現れるのが常であるに、精神の弱い者は目的觀念なしに唐突に遣付ける。

一般に女子は感情が強く、其の強い感情が源になつて行爲が容易く支配される事が多い。其の感動が身體の上に現れる事が一層強い。嬉しい時に喜び、悲しい時に泣くと云ふ事が強い。男子に比べると現れ方が劇しいやうである。

殊に病的の婦人（精神病であるとかヒステリーの患者）になつて來ると、些細の感情に驅られて直ぐと行爲が出て來ます。それに元來教育が無いやうな人であると、是非の辨別心なども薄いから、夫に反抗つたり人の秘密などを人中で喋舌つたり、嘘言の事を云つて人を驚かしたりするやうな事が多い。

又斯ういふ病的の婦人になると、殊に其の感情を支配するものは嫉妬心である。で、眞實に夫が不品行であるやうな場合に、多少の嫉妬を起すのは、寧ろ婦人として持つて居なければならない情愛であつて無いと云ふのが却つて尋常でない。然れども其れも程度がある。酷いのになると全然夫に取つて根も葉も無い事を云ひ立てゝ嫉妬を起すものがある。

其の嫉妬はすぐ亂暴な言行に現れて、絶えず其の事を云つて夫に食つて掛かる其の爲め殆んど家内に風波の絶間もないと云ふ事がないでもない。斯ういふ人に

なつて來ると唯に嫉妬心を出して怒り散らすばかりでない。遂には飛び出して自殺をしたり、家出等をして夫の名譽を傷つけると云ふ突飛な事をする。

△狂言自殺をする婦人

然しヒステリー等の婦人は一方から見ると死ぬる死ぬると云つても、口癖に自殺を云ふわりに、實際に遣る人は少ない。或る婦人の如きは其の夫に對する嫉妬心から十何囘も遺言狀をして、身を投げたのであるが、其の度に書置が自分が死ぬる時間よりも先に届くやうにしたり、通行人や巡査を見掛けて川に飛び込むと云ふやうな事をする。



斯ういふやうな云はゞ狂言自殺と云ふやうな事は、ヒステリー性の婦人などには最も多い。毒を飲んだやうに見せて口の中に其の儘ふくんでゐたり口紅を唇から出して血を吐いたやうに見せる者もある。

猶此の種の婦人になつて來ると、新しい事を矢鱈に好む傾を持つて居る。而して世間に成る丈眼立つやうな事をして喜ぶやうな性質がある。何でも自分が一番交際場裡に持てなければならない、何でも自分が花形役者にならなければならないと云つたやうな虛榮の强い性質がある。

近頃新しい女とか云ふ問題が新聞などに見えて居る

が、さういふ種類の婦人は、果して女德の上ではどう云ふ種類であるか、さういふ人の評價は云はないにしても、新しく唱へ出された斯う云ふ思想は、現代の婦女子の思想の上には、一種の影響を及ぼすと云ふ事は云ふ迄もない事である。

殊に我々の方でいふ病的の婦人、たとへば精神病者重いヒステリー患者と云ふ婦人になると、種々なさういふ眼立つた新しい事に影響される事が酷い、其れを受け入れるに速い暗示性を持つてゐる病的の婦人は、尋常の婦人よりも影響される事が多い。

恰度ヒステリの人が催眠術にかゝり易いと云ふのは此の暗示性が強くあるからで、さういふ思想に傾くと云ふと此れを正當に判斷して理解すると云ふよりも先きに、極端までも其れに妄信して了ふと云ふやうになる。

まだ其の上にかう云ふ婦人には模倣性があつて一層さういふ感化を助けると云ふ事がある。それで芝居を見たり小說を讀んだり思想上の著作物を讀んで、普通の人よりは感興が強くて、それを自分の狹い胸中に置いて空想をそれからそれと走らせる。而して動もすれば其れ等の思想、又は人物に憧憬して了つて、遂に惡感化の原因となる事が多い。

斯う云ふやうに、病的の婦人と新しい女とに關係をつけると、猶其の他の事もあるであらうが、茲には只大略を述べる事としました。

店頭の立止り

坪井博士が英京倫敦に於て、市中の諸賣店の店頭に立止りて見て居る男女の數を統計別したものがある、其細別表は此處に揭ぐる餘地もないが、店の種類を八つに大別し、男女の數を百分比例にしたものは左の通りである。

賣品の種類	男	女	男女合計
服飾	三一	七〇	四九
飲食品	四	六	五
家內用品	七	六	七
圖書	九	一	一一
繪畫類	二一	一四	一七
寶用品	六	〇	三
文房具類	六	〇	三
玩弄品	五	三	四

婦人年中行事　六月

▲六月の魚▼

すゞき。蛸。いわし。こち。鱒。黒鯛。鮑。鯨。芝ゑび。鮎。石がれい。河鯵。こはだ。いな。

▲六月の野菜▼

蓮根。夏葱。紫蘇の實。茗荷。新牛蒡。冬瓜。ふぢ豆。新芋。十六さゝげ。枝豆。にんじん。百合根枇杷。杏。梅實。

▲六月の花▼

百合。紫陽花。撫子。石竹。ゑぞ菊、チウリップ。ベコニヤ。夏菊。鐵線花。錦鶏草。夏雪草。葵。澤桔梗。薔薇。合歡花。

▲六月の祭▼

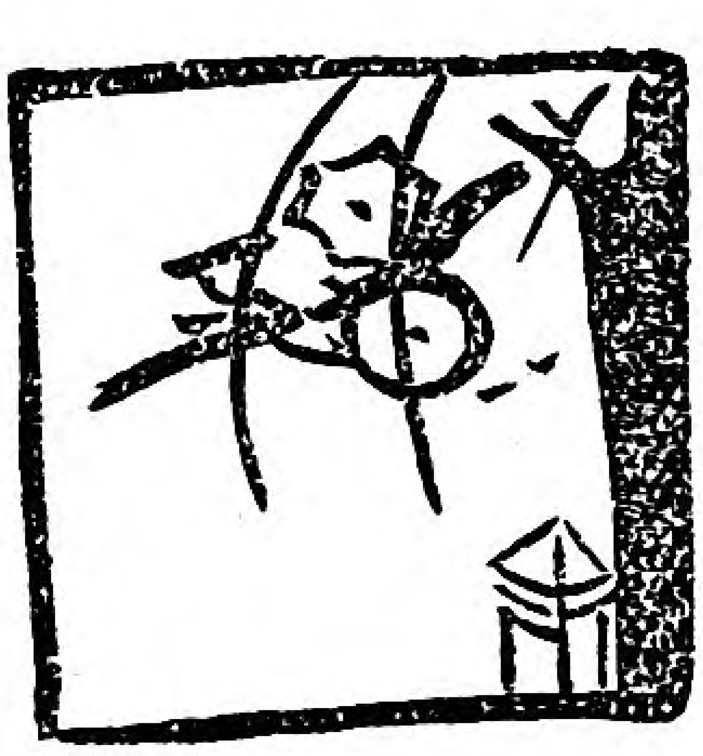
五日。神田明神。
十五日。日枝神社（山王祭）。
十五日。氷川神社。
十八日。四谷須賀神社。
二十日。山谷玉姫稲荷。
二十四日。芝愛宕神社（千日詣）
二十五日。下谷五條天神。
三十日。大祓。

▲六月の暦▼

五日。庚申。
十一日。入梅。
十二日。甲子。
二十二日。夏至。

七曜表

日	1	8	15	22	29
月	2	9	16	23	30
火	3	10	17	24	
水	4	11	18	25	
木	5	12	19	26	
金	6	13	20	27	
土	7	14	21	28	



蚊柱や
蚊柱や
三十三間堂
古白

婦人年中行事

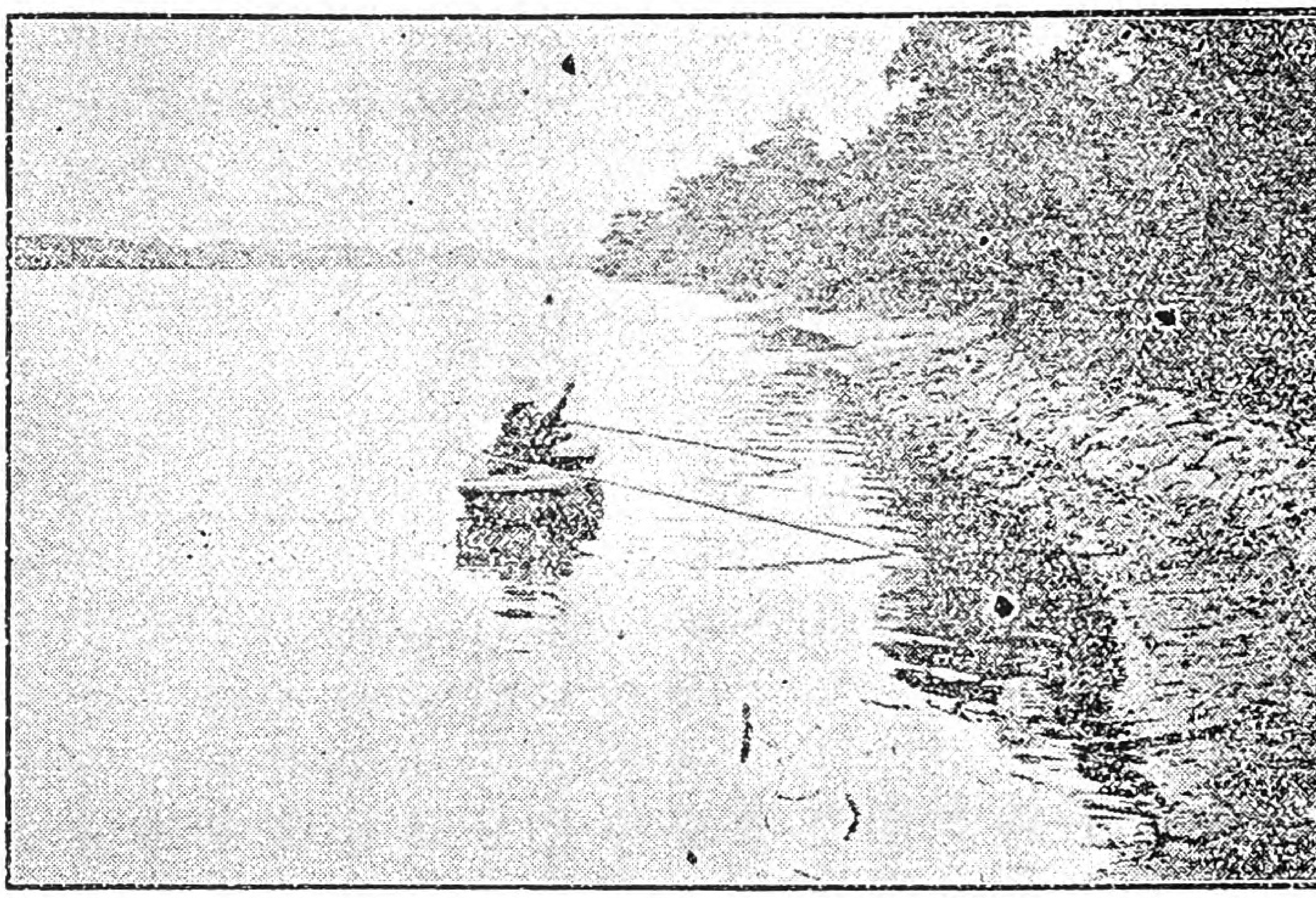
六月

△梅雨の期節。
△黴と濕氣を拂へ。
△能く入浴せよ。
△腸胃を損ふな。
△果實は熟さず。
△森林の逍遙。
△梅雨晴の青き日。
△夕暮の町の散歩。
△夏祭。
△苗賣の呼聲。
△セルの肌ざはり。
△洗ひ髪。
△山百合の花。
△蚊帳釣る夜。
△蔦の蔓伸る。
△窓際のおもひ。



五月雨や滄海を衝くにごり水
五月雨や水に錢ふむわたし舟
浮草も治むばかりよさつき雨
紙燭して廊下過るや五月あめ
さみだれや大河を前に家二軒
蕪村

入日さす片山林おくみえてちるやあふちの花の下かげ　春海
玉だれのみすのひまよりそれと見て招かんとすればゆく螢かな　景樹
かきわけて折れば露こそこぼれけれ淺茅に交る撫子の花　西行



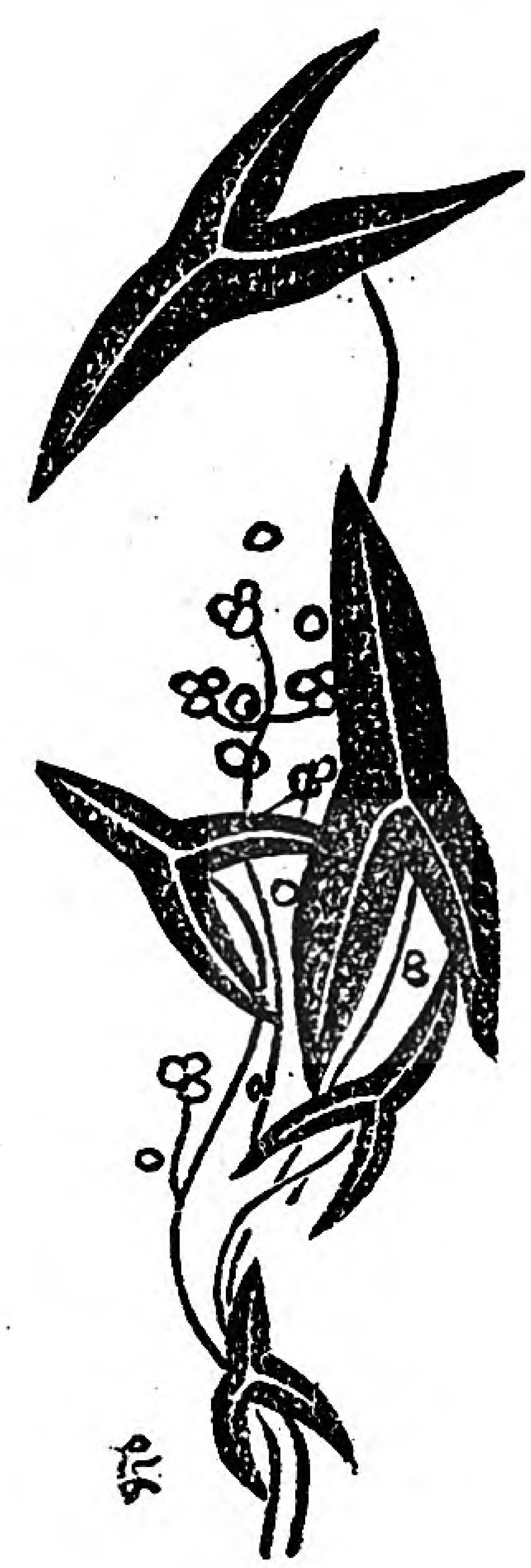
大空の雲のゆきゝを見る如く
心のくもることをよろこぶ
よさのひろし

夏のはじめ

静かな宵だ、若葉の香が薫物でもするやうに近傍に漂ふて來る。木といはず、草といはず、さゝやかな一葉一葉のつく吐息が燻り合つて、美酒のやうに人の魂までも引き入れるかと思ふと、今更に初夏のもたらす生命の烈しさに驚かざるを得ぬ。戀によろしい宵かな。（泣菫）

六月二十一日、われは盛夏を喜ぶ。太陽の美は實に盛夏にあり。夏は宇宙エナアジーの呼吸なり。（獨歩）

螢の火は常よりも蒼く輝き、星の光も亦明かで、野草の香も亦一際高く匂ひ渡るので、自分は日頃よりも一倍深く、あゝ！、此れこそ眞個の愉快な夏の夜だ、地上には花の枯萎む冬も嵐も、死も失望も、何にもなく、身は魂と共に、唯だ夏といふ感覺の快味に醉ふばかりだと感じた。（荷風）



婦人年中行事



六月の運勢

中橋　本清堂

▲一白水星の人（十四、廿三、卅二等）世に云ふ八方塞り、最も恐るべき惡月なり、勞多く功少し、衰運の時なれば何事も用ゆべからず、暗劍北大凶。

▲九紫火星の人（廿二、卅一、四十等）凶月なり、水難盗難病氣の兆有、御注意愼まざれば身命にかゝわる、尙人と不和を生ずる事あり、萬事控目にして吉、御婦人相談事破れあり、暗劍同斷、吉方東西。

▲八白土星の人（廿一、卅、卅九等）運氣下陽したる月なれば百事吉ならず、なれども能く前後の狀況を觀察して進めば失害なし、即ち輕卒を愼む事肝要。暗劍北大凶吉方未申。

▲七赤金星の人（廿、廿九、卅八等）福分多き月、親しく思ふ人よりよき便りを得、御婦人縁談來る纏るべし、暗劍同斷、東吉

▲六白金星の人（十九、廿八、卅七等）盛運の月あだかも朝日の昇るが如し、諸事意の如く通達す、御婦人病氣快方、縁談吉、暗劍同斷、吉方東未申。

▲五黄土星の人（十八、廿七、卅六等）難義迷惑な事多く願望叶はざる月、爭い事愼むべし、御婦人親友の中に苦勞生ずる事有、萬事目上の意に從ふべし、病難御注意、暗劍同斷、吉方東未申。

▲四緑木星の人（十一、廿六、卅五等）水生木の相生にて盛運の月なり、何事も進んで吉御婦人縁談吉亦待つ事速に調ふ、暗劍同斷、吉方西。

▲三碧木星の人（十六、廿五、卅四等）苦より樂に入る月、安心して目的通り進んで吉、人の引立を得、立身あり、亦誤解を受けつゝありし事も判然とし、心地よくなる事あり、婚姻、養子、旅行吉、暗劍同斷。

▲二黒土星の人（十五、廿四、卅三等）心中辛苦多く破れ亂れ散財ある月、萬事進む事凶親友よりよからぬ報來る、御婦人病難失物御注意、待人不來手違いな事多し、暗劍北大凶、吉方東未申。

歴史上の六月

▲一日、學習院創立（明治十年）▲二日、織田信長自刄す（天正十年）▲三日、ペルリ初めて來る（嘉永六年）▲四日、東京天文臺を置く（明治二十一年）▲五日、江戸に鎭臺を設く（明治元年）▲六日、春秋の皇靈祭を定む（明治十一年）▲七日、朝鮮獨立祭を行ふ（明治廿八年）▲八日、和蘭人蒸汽船を獻納す（安政二年）▲九日、小説家ゲッケンス死す（一八九〇年）▲十日、德川光國生る（寛永四年）▲十一日、彼得大帝生る（一六七二年）▲十二日、京濱間鐵道開通す（明治五年）▲十三日、明智光秀殺さる（天正十年）▲十四日、平將門滅ぶ（天慶三 ▲十五日、東北三陸大海嘯あり（明治二十九年）▲十六日、小包郵便開始（明治二十五年）▲十七日、ウオートルローの大激戰（一八一五年）▲十九日、初めて大化の年號を用ゆ（神武一三〇五年）▲二十日、東京大地震（明治二十七年）▲二十一日、星亨刺さる（明治三十四年）▲二十二日、憲政黨成る（明治三十一年）▲二十三日、プラッシーの戰（一七五七年）▲二十四日、佛の小説家ジユーマ生る（一八〇三年）▲二十五日、大統領カルノー殺さる（一八九四年）▲二十六日、陸奥伯布哇に行く（明治二十九年）▲二十七日、吉田松蔭刑せらる（安政六年）▲二十八日、姉川の戰（元龜元年）▲二十九日、ハインリツヒ親王入京（明治三十二年）▲三十日、名和長年戰死（建武三年）

萬歳

御即位式の話（二ノ下）

外島浪之介

（一五）大饗（即ち大嘗祭の節會）

平安朝時代の最も大切な行事として、崇嚴であり華麗であつたものは節會であつた。當時の詩歌小說を初め隨筆類に迄、しば〳〵現れたものは、多く毎年行はれた新嘗祭の節會と、今說かうとして居る御即位後の大嘗祭の節會即ち大饗である。昔は大嘗祭は十一月下の卯日と定てあつたから、大饗即ち節會は辰日に悠紀の節會、巳日に主基の節會、同じ巳日の夜に御神樂があつて、午日に悠紀主基兩國司以下群臣に宴を賜はる所謂豐明節會があつた。然し今回は第一日に昔の辰巳兩日と午日の行事の半分があつて、第二日に昔の午日の儀式がある。そして第二日の夜宴が巳日の御神樂に稍相當される。即ち

（一六）第一日、豐樂殿の大饗

●●●●位置構造、豐樂殿は內裏より東北に在つて、豐樂院（豐樂殿、承觀、明義、顯陽、觀德の四堂を合せて云ふ）の內部は凹字形に殿舍である正面が豐樂殿で左右に續いて、右（凹字形の右）に承歡堂、明義堂左に顯陽堂、觀德堂があり、中央の庭（石疊の所謂南庭）の中央に舞臺を造り、觀德堂の前に樂人の樂を奏する舍が出來る。

●●裝飾、豐樂殿の北廂に千年の松と山水の錦の軟障を張り、四方にも壁代を附ける。中央に天皇陛下の御座（几帳を三方に建てめぐらす）、東の方に皇后陛下の御座を設け、背部の東北隅に悠紀の屛風（悠紀の國の風俗を當時の人の詠みて歌を書いたもの）西北隅に主基の屛風を建てる。そして南、東、西の三方には青簾を掛けてある。此の豐樂殿は兩陛下、皇族等で、顯陽、

承歡、觀德、明義の四堂は參列諸員の席であつて、後方には綾の軟障、庭に面した方は靑簾（中央は絲で褰げてある）を掛けておく。

●●儀式　偖て時刻になると、四方の各門を皇宮警官が警固し、諸儀員と諸參列員が所定の位置に著けば、兩陛下は順次に出御なされて御座にお著きになる。既に席定るや、天皇陛下は、群臣及び外國代表者に勅語を賜ふ。總理大臣及び外國大使の首席の人は共にお禮の詞を申上る。次に侍從と女官は兩陛下に白酒（澄める酒）と黑酒（烏麻粉と云ふもの。又は常山の灰を入れたもの）とを差上げ、諸員にも白黑兩酒を下さる。次に式部長官は悠紀主基兩地方からの獻物の目錄を申上げ、之と同時に內舍人がお庭先に獻上物を排列する（之は古代の產物を知るの便利がある。主基の丹波の國を見ると。開蚫百帖。生蚫五十貝。石花二疋。細螺三疋。辛螺百貝。寄居子二疋。堅魚煎三疋。甲蠃二疋。飯百櫃。酒五十缶。餅五十合で悠紀の近江からは酒瓶。蚫百斤。鮭百疋。千鳥百羽。雉百羽。鶉百羽。堅魚百斤。雜腊百缶。鮨鮒百缶。醬五十缶があつた。）次に兩陛下に御膳並に御酒を供す。そは晴の御膳と同じである。（晴の御膳八盤と云ふのは、酢。鹽。酒。醬。餛飩。索餅。錫餬。桂心。殘の御膳は同じく八盤で、鎚子。黏。餲。鉼鑼。團喜である）、諸員にも同じものを下されて、次に久米舞が中央の舞臺で行はれる。

（一七）久米舞

久米舞は歌のない舞で曲と舞だけである。節は琴である、舞人は二十人左右に列び立つて相互に舞ふ。駿河舞に似たものだと云ふ。小忌衣を束帶の上に著て、冠には蘿葛をつける。此舞は神武天皇が東夷征伐の時道臣命に命じ土蜘蛛を誅させる時、道臣命が歌をうたつて合圖にし、合圖を聞いて久米部の兵士が敵を斬り鬪時を擧げた事から出た舞でおめでたい舞である。舞の中頃に黃金作の太刀を拔くのは、土蜘蛛を斬る意味だと云ふ。

久米舞が終ると兩陛下お肴物を召上り參列員にも下さる。次に悠紀主基兩地方の風俗舞と大歌及び五節の舞を御覽になる。

（一八）風俗舞と大歌

風俗舞は始め諸國の人民が口誦にした歌（風俗歌）に

節をつけて舞つた（風俗舞）ものを、宮中で採擇し大歌所から奉つて優美なものに作り代へ、公事に用ゐる樣になつたもので小筑波以下二十五曲ある。今回のは未だ不明であるが、明治天皇の大嘗會（明治四年十一月）の時のは次のであつた。悠紀は甲斐。

歌は、

白嶺

君が代の光にいとゞあらはれて甲斐の白嶺のかひはありけり

青柳里

大御世の風にしたがふ民くさのすがたを見する青柳の里

主基は安房で歌は、

長狹川

岩間ゆく水のみどりも長狹川いざよふ瀨々の末ふかむらむ



久米舞の圖

蓬島

名ぐはしきよもぎが島は君が代の長狹あがたの神やつくりし

古今集にも大歌は出て居るそして昔は悠忌主基の國も殆ど一定してあつたので風俗舞と云へば悠紀は久米舞、主基は吉志舞を宮中の伶人が奏する樣になつて居た。

（一九）五節の舞と挿華

節會の時五人が舞ふので、五節の舞と云ふし、中古は女童が舞ふので此の女童を五節の舞姫と云つた。一人の舞姫に女房六人童二人下仕四人合せて十二人の供が入用であるから、大低の仕事ではなかつた。いづれも貴族の內でも富裕の家でなくては舞姫を出せない。のみならず美人でなければならな

い。然し舞姫を出した家は名譽であり舞姫は、世に名を知られ、中宮や后になる事もあつた。舞は極めて靜なもので舞臺の西の階に女官が六人燭を秉つて居る、其の處から昇つて相對して舞ふ、美しい姫が美しい衣裝を着て舞ふのであるから其の美しさは想像の外であらう然し今回は日中でもあり、姫もない事故雅樂部の伶人が舞ふのであらうと思ふ。

此等の舞が終ると侍從と女官が兩陛下に挿華を差しあげる。如何花であるか知らないが、昔は階級に由て花の種類を異にしたのである。即ち天皇は藤、親王は紅梅、納言は櫻、參議は山吹（之等は又時代に由て多少變つて居る）と云ふ樣であつた。之を冠の櫛の左右に挿したのである。參列諸員にも挿華を下される。次に兩陛下は入御になつて、第一日の大饗は之で終る。



御神樂人長舞の圖

此日は以上の樣に從來の風を尊重して成べく多く御採用になられたものと察せられる。

（二〇）第二日の大饗及び夜宴

第一日は京都御所内の豐樂殿であつたが、第二日目は二條離宮でなされる。當日は前日にお召にならなかつた人々をも加へられるかも知れない式と稱す可き程の事はない、參集者は第一日の大饗の服裝と同じである。皇族がお出になつて後に兩陛下の行幸啓がある。天皇陛下は大元帥の御正裝、皇后陛下は御大禮服で、兩陛下御着座あそばされると宴を賜はる。其間奏樂があるが、宴も樂も西洋のものであらうと推察される。

●●●大饗夜宴　之は第二日の大饗が終つてからあらため

て、同じ離宮で夜宴を行はれて、日本の古樂、萬歳樂と太平樂とを御覽になつてから和樂？奏樂中に御賜宴がある。

（二一）萬歳樂と太平樂

萬歳樂は大變お目出度い曲であつて、又美しい舞である始めは唐の樂で則天武后が愛して居た鸚鵡が常に萬歳と云ふのを喜んで作らして鳥歌萬歳樂と云つたとか云ふ、それを我國で用ひたのであるから鳥甲を冠り緋の袍を着、半臂をつけ、踏懸をはいて居る。古くは女舞で中古に童舞になつたが後世になつて男舞になつた。此の美しい舞人が六人で、優長な笏、笛、篳篥に合せて舞ふのである。



舞樂萬歳樂の圖

太平樂　萬歳樂は靜な舞であるが、此の太平樂は武舞四曲の一で有名な武人の舞である。冑を冠り、魚袋をつけ、黄金作りの太刀に、腰當をあて、胡簶をつけやはり緋の下着を着、絲鞋をはいて、鉾を持つて舞ふ始めは鉾を執つて四人が舞ひ中頃に跪いて鉾を下に置いて、再び立つて劍を拔いて舞ふのである。（昔は一度階を降り鉾を地上に樹てゝ再び階を登つて舞つたのであつた、此の樂は元はやはり支那の樂で）項羽が高祖を斬らうと思つて鴻門に會し項伯をして宴半に劍を拔いて舞はした其の形を採つた物であるが、日本の樂になつてから典雅な舞になつたのである。

（二二）神宮及び前帝四代の御陵に御親謁

第二日の夜宴が終つてから幾日かを經て、兩陛下は

伊勢神宮にお參拜がある。頗る崇嚴な式で、正殿にお昇になるのは、唯兩陛下のみで、親王以下女王殿下は瑞垣の御門内で御拜禮がある。臣下は、皆玉垣御門外で拜禮しなければならない、神宮御親拜を終へてから順次明治天皇の御陵をはじめとして、孝明、仁孝、光格の御陵にお參拜をなされる。之等の御親謁には文武の顯官が供奉するものは云ふ迄もなく、儀仗兵もあるのであるから、立派な御行列であらうと思はれる。

（二三）東京還御と賢所の御神樂

前帝四代の御陵御親謁を終へてから、行幸と同じく第一公式で東京に還御になる、之と同時に賢所も宮城の溫明殿に還御あそばされる。其後賢所の大前で神樂の式がある。これは神を樂ませ申す樂であるが、神樂歌だけでなく舞があるかも知れない。挿繪にあるのは神樂の人長舞で、卷纓冠に袍を着、太刀を帶き右手に賢木を持ち柄の付いた木輪を添へて持つ、此の輪は鏡、柄は劍に象つたものだと云ふが、森嚴たる舞である。

此式が終つてから皇靈殿神殿に親謁の儀式があつて御卽位の大典は全く終るのである。

要するに古來の御卽位式及び大嘗祭と今回行はるるものとを比較すると種々の點に於て差異があり。名稱が同じで實際に多少の異同がありはせぬかと思ふ處がある。明治四十二年に登極令の御發布はあつたけれど實際に行はせられるのが初めてゞあるから何の儀式は何時間を要するかとか、何は何で作るべきか、とか云ふ實際の事は大禮使の役所でもわからない位であるから、自分が確實に斷言しなかつた部分のあるのは巳むを得ないのである。然し御卽位式の事をこんなに書いたものは未だ無かつたのであるから讀者は其の考へで讀んで貰ひたい。

此の稿を草するに就いては「皇室要典」の著者、和田信二郎氏を煩した事が多い。殊に挿繪の如きは氏の好意に由つた事を感謝しなければならない。

―（終）―



鷄卵の話

農商務省種畜牧場
長崎發生



(1)

腐敗する卵とせぬ卵

鷄の卵、試に卵を割ると、眞中には丸い黄味がある、蛋白質から出來て居る白味で其周圍を取巻いて、白味の中には捲曲した白い紐のやうなものがある。之はカラザといひて黄味を適當の位置に保つためで、矢張り蛋白質から出來て居る。そして黄味の上には必ず白い眼の樣なものがある。之が所謂胚盤の事で之が白味を攝取して次第に發育し、生長して遂に雛となり、卵殻を破て出る、白味がなくなれば黄味を攝取して發育するのである。そして雌は雄が居なければ十分に卵を産まぬものとして居た之迄の考へは、事實上決して斯樣に信ずる譯には行かないので、只雄の唯一の任務は卵を有精にする其胚種をして他日雛となさしめるに過ない、斯樣な關係のある卵を有精卵として、種卵は之等の中から選定せらる譯である。然うでないのを無精卵としてゐる。有精卵は此胚種のあるだけに病者の食養にはよいが腐敗はし易い、無精卵は之に反して腐敗はしない、斯樣な所から其胚種の精氣を殺して保存法が講ぜらるゝやうになつた譯である。

(2)

鷄卵の新古鑑定法

鷄卵の新古の鑑定法には肉眼的鑑定法と、比重鑑定法とあるが、最も簡易なる方法として大體次のやうなものであらう。

一、卵を取つて拇指の爪でがし〳〵と搔いて見て、がり〳〵とコソバイのは新しいのでツル〳〵するのは古い。

一、拇指と第一指との間に、卵を縦に持ち、中央が透き徹つて見えるやうに明るく、黄味の外緣が明瞭に見えるのは新しいので、もうそれが暗くて黒いのは古いものと見て

よい。

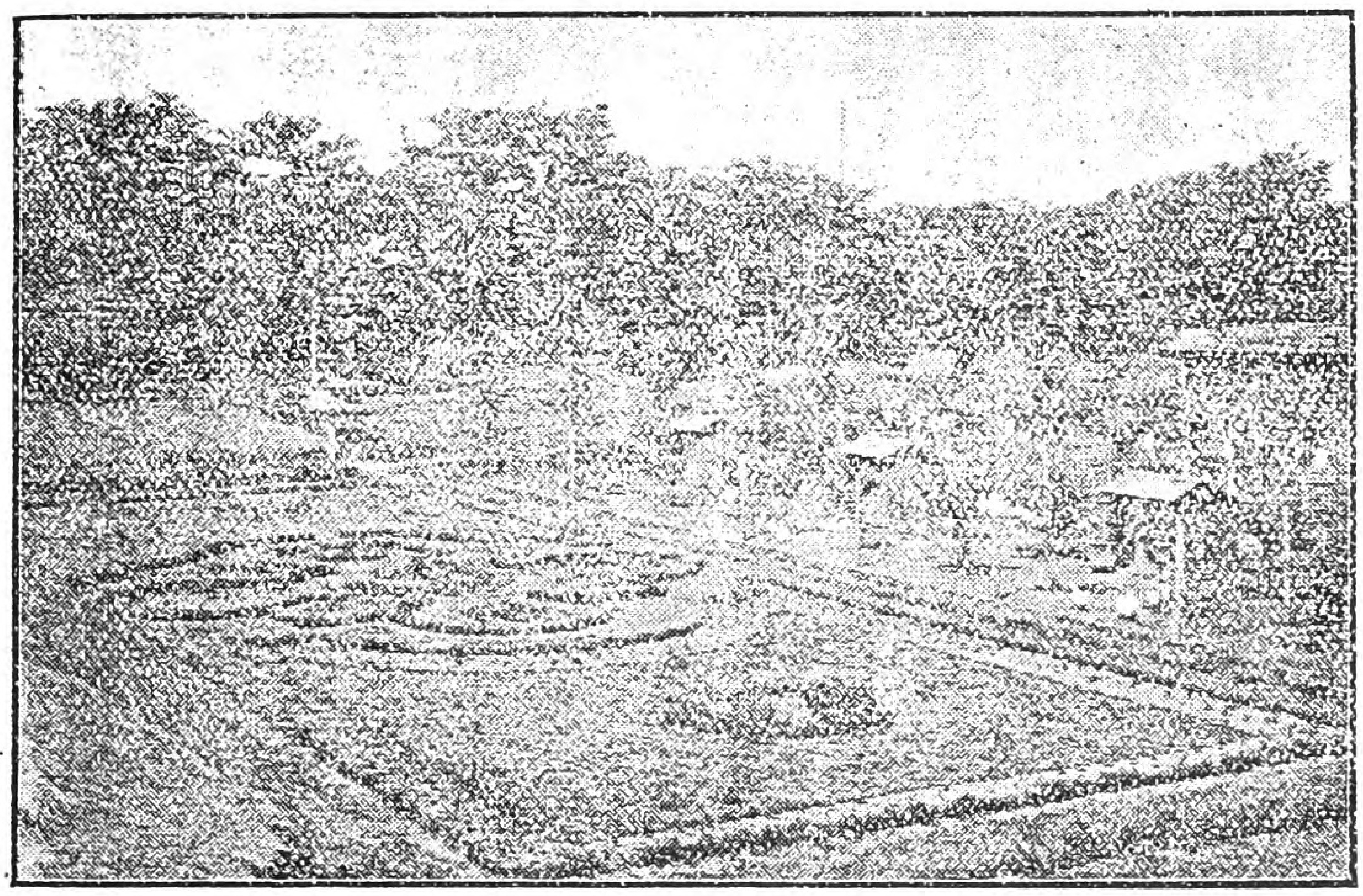
一、卵を舌の端に當て、鈍端(さきの太い方)が溫で、尖端(さきの細い方)が冷たいのは新しい。

一、鹽一、水二の割合で鹽水をこしらへ置き、よき卵を其中に入れると底に沈み、古いのは上に浮く。

一、割つて見て黄味が圓く高いのは新しいので平たいは古い。

一、黄味を箸で挾んで見て中から二つに切れる樣なのは新しいが箸をつけるが早いか直に黄味が散るやうなのは古い。

言ふ迄もなく成るべく新しいのを食べるやうにしたいものである、古卵はプトマインと云ふ中毒性のものが出來るから、生で食べるのは危險である。殊に支那卵の如きは古いばかりか、ヂストマスが居り易いから斷じて生食は避けたい。わけて夏季の生食は以ての外である、生食用としては是非産卵後五六日以内のものでありたい。

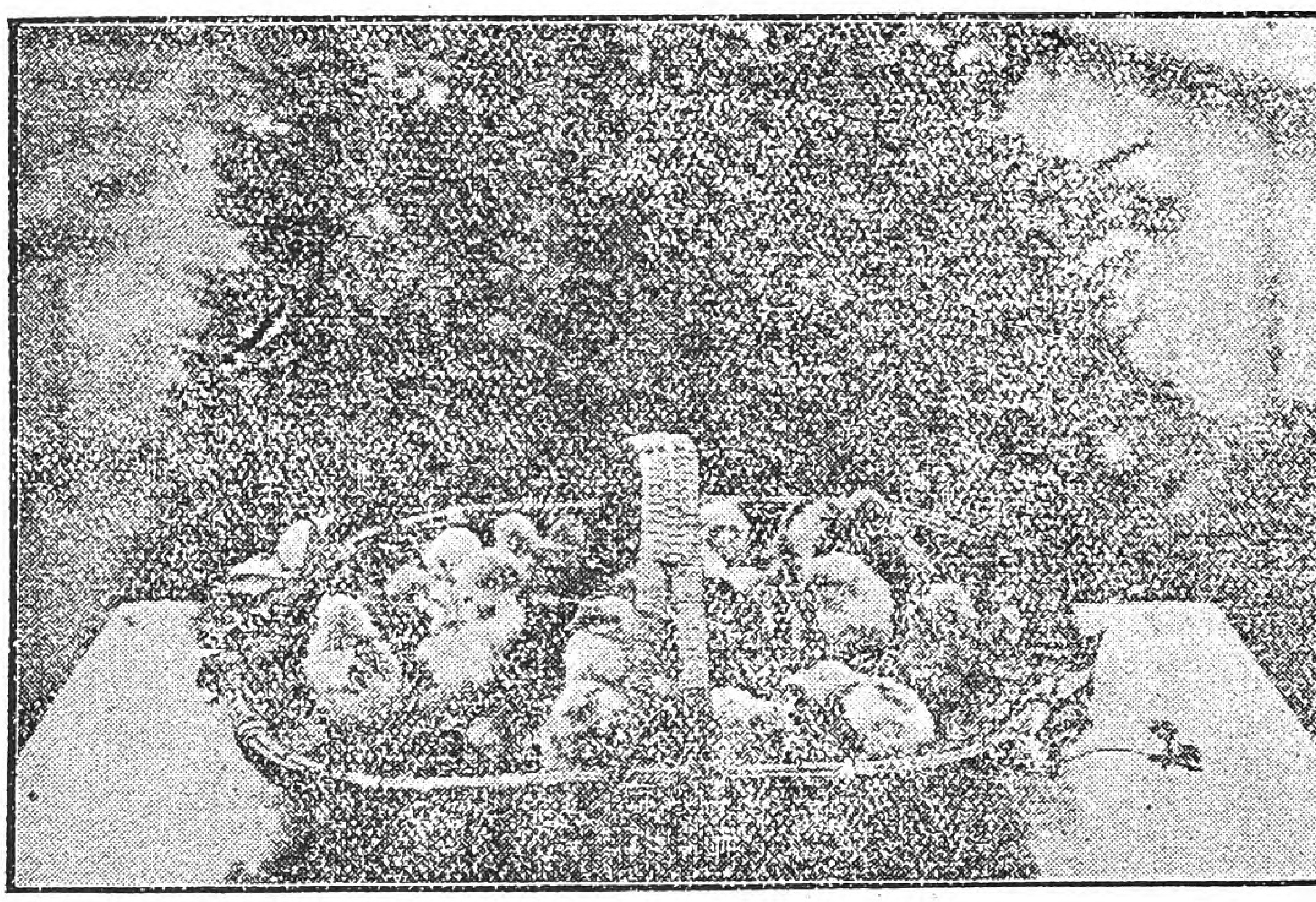


農商務省養鶏場の一部

(3) 生理化學上より見たる價値

卵は人體に必要な價値ある成分を有し容易に消化もし、人體の組織に吸收され非常に營養分に富んでゐる。其中蛋白質の九十七%と脂肪の九十四%は血液中に吸收され、脂肪となりて人體の組織を形成する物を、燐石灰ポタシウム鐵硫黄の礦物質を、又蛋白中に脂肪となりて熱とエネルギーの原料を何れも適當な割合で含有してゐる。且つ多量の水分を

も含有してゐるから、卵は完全なる滋養物である。乍併成年の人の食物としては澱粉と糖分が缺けて居るから、麵麭米若くは其他澱粉質の食料を以て此不足を補ふ必要があるとは生理化學者の說である。斯うして生の儘食するが最も消化がよく輕い緩下劑ともなるのであるから非常の衰弱や健康不振の場合貧血症などの食餌としては至極よい譯である。卵は鷄の種類によりて大小がある、白色と褐色の着色上區別もある。夫れにしても平均其長二吋二七位、最も廣い所の直徑一吋七二重量十二個にて一封度半に相當してゐる。其全重量の十一%は殼の量三十二%は黃味の量五十七は、白味の量と云つた割合である。今尙ほ組織成分を示せば



農商務省種禽場に於ける雛鷄と花籠

	廢物	水分	蛋白質	脂肪	灰分	一封度カロリーの燃燒價
殼の儘	一一、三	六五、五	一一、九	九、三	〇、九	六三五
蛋白	――	八六、二	一二、三	一、〇	〇、六	二五〇
卵黃	――	四九、五	一五、七	三三、三	一、一	一七〇五
沸煮卵	――	七三、二	一三、二	一二、三	〇、八	七六五
白色卵	一〇、七	六五、六	一一、八	一〇、八	〇、六	六七五
褐色卵	一〇、九	六四、八	一一、九	一一、二	〇、七	六九五

之は卵の成分を分析した平均數を、其一封度カロリーの燃燒價比較とで、之に依りて見れば、卵の主成分は蛋白質と脂肪とで、之に水と灰分が加はつてゐる。

(4) 白色卵と褐色卵

卵の外觀から申せば所謂卵形で、之には其短徑と長徑との比例に差があり、鈍端と鋭端の區別のあるものと然らざるものとがある。一般に卵用種の卵に鋭鈍の差が著しく其他肉用種

兼用種は之が著しくない、そして其色澤は大體白色の者と赤味を帶びたると二種類である。此着色は卵殼を分泌する輸卵管の壁から一種の色素を分泌するに依るので鷄の種類に依りて略ぼ定まつてゐる。卵殼の白きは卵用種とてレグホン種ミノルカ種などの鷄卵に多い。着色せるは亞細亞其他血液を混じたもの丶特徴とせられてゐる。そして卵殼の色澤と其滋養價値との關係に就きては、何處にも坊間の説あるも、着色卵は僅かに滋養價値の優るのみにて、是が殆んど問題となる程ではない、強ち卵殼の色澤の如何に依りて別に頭を用ふべきものでもない。

(5) 牛乳の飲めぬ時は白味がよい

元來熱病には卵の白味だけを少量の水を加へて能く泡立せたものが非常な滋養物になるもので、乳呑兒が結腸や消化不良で牛乳さへ飲まされぬ時には、此白味だけは大變に良い。小供が夏まけして何にも食べず非常に衰弱した時にも、此蛋白の能く泡立たのに、細かに碎いた氷と砂糖の少量を混じて飲ませば、目に見えて元氣がつくものである。要するに生卵に酒の少量又は肉羹クリームを混じて飲めば、非常に衰弱した時の元氣を恢復する事が出來る。

(6) 卵の香味のよしあし

十分新鮮な卵は最も良い香味を有する者で、時日の經過したのは、例令腐敗しないまでも、其香味は惡くなるものである。無精卵は有精卵に比して滋味に乏しく、變敗したものは全く食料に適しないは云ふ迄もない。新鮮卵としても飼料が適當な新鮮な者でないと、其香味は甚だ劣る者で、既に含窒素成分を多量に有する飼料を與へたる鷄の卵は、炭水化物の多量な飼料を食してゐる鷄の卵よりも劣れるを見るのである。或は鷄に玉葱とか葱類の少量宛食餌に加與せしに其葱の臭氣が二週間も卵に移つて居た。要するに卵の香味は飼料の如何にも依るが其新鮮なると否らざるとにより其風味を異にし滋養効果も著しく變ずる樣である。(つゞく)



婦人職業案內（六）

山田菊水

女店員及び事務員

▲商店の賣子

昔の商店では丁稚小僧から中僧番頭と、男子ばかり使つたもので、お客商賣の飲食店か、煙草屋の看板娘でゞもなければ、殊更に女子を雇つて店に使ふことは稀でありましたが、近年に至り、會社と云はず商店と云はず、女子の需要が激增して來て、目星い商店では、大抵女子の賣子を使ひ、女子の事務員を雇ふ樣になつて、樞要の位置は格別、比較的樞要ならざる位置は漸く女子の領分となつて來ました、思ふに店主の方から云へば、割合に給料が安くて、忠實に働いて、且つお客相手の商賣では、お客の氣を外らさぬと云ふ、女子の先天的手腕を利用することが出來るのであつて雇はるゝ方から云へば、特別の稽古も學問も要らず、普通一と通りの敎育を受けたものは、必ずしも高等女學校を卒業しないでも、直に雇はるゝことが出來るからでありませう。

そこで先づ賣子から云ふと、店と使ひ所によりて、年齡其他敎育程度等の條件が違ひますが、先づ年齡から云へば十三四歲、學校から云へば高等小學校卒業位の所から雇はれて居ります。一寸三越などに行つて見ると、十四五歲の可愛い娘が、お揃ひの衣物にお揃ひに髮を結つて、お茶の給仕などして居りますが、是等が段々昇進して一人前の賣子となり。又は事務の方に廻されるし。或は又た初めから賣子、事務員として雇



はれるのもありまして、多くは店に關係のあるもの丶身寄りであるとか、由緣のものであるとか、それ〴〵傳手を求めて雇はるゝが常であります。

給料は店により位置により違つて居て、一槪に云へませんが、十三四歲の小娘であれば日給二三十錢、年頃になつて月々十圓から十四五圓、大きな商店で稍や樞要の位置に居る古顏の内には、三十圓の月給を取つて居るものもあります、而して店によりては辨當が出ますし、お揃ひの衣物を着せる所もありますが、斯う云ふ店では勢ひ給料は安くなる譯で、要するに給料の通り相場と云ふものは、こゝで定むる譯には行きません。また勤務時間も朝出て夕方退けるのもあるし、昔風に夜まで働かねばならぬ所もありますが、それでも丁稚小僧の樣に、引きりなしに使はれるやうなことはありません。

店によりては家庭の狀況や本人の性質、容貌等を吟味する所もありますが、それも一通りの條件が具はれば差支へありません。唯だ今日の商賈は稍や事務的

になつて居りまして、お客樣を前に控へてすら〳〵と傳票を書いたり、お客樣の滿足する丈けに、商品の說明もしなければなりませんから、せめて高等小學卒業か、又は高等女學校二年ぐらゐの學力は必要ださうであります。

△商店の書記

少く手廣くやつて居る商店では、店の小賣の外に必ず地方と關係があつて、他の商店との取引關係やら、華客との往復やら、或はまたその時々の商品目錄を、華客の所に配るなど、種々雜多の事務が輻輳して來ます。これ等の事務を處理するために、相當の事務員を要するのでありますが、これは大抵女子で間に合ふので、近年は書記と云ふ名目で、盛に女子の事務員を使ふことになつて來ました。又た會社などにても、此種の事務のため、盛んに女事務員を使つて居りますが、これ等の女子の數を數ふることが出來たならば、恐らく吃驚するほどの多數に上るだらうと思はれます。給

料は會社により店によりいろ〳〵ありまして、一概に云ふことは出來ませんが、先づ十二三圓から十四五圓が普通でありませう。記者の知つて居る一婦人は銀座の某商店に書記をして居りますが手紙も相當に書けますし年配も相應でありますから、月給十五圓に雇はれて居ります。それかと云つて同じ店に勤めて居る他の女書記は、未だ年齢が若いので十圓の月給であります。何れも無論辨當持參、勤務時間は普通の會社並みで、此節で云へば朝八時に出て夕方五時頃退けるのであります。書記の資格としては取立てゝ云ふほどのことはありませんが、仕事が仕事だけに、高等女學校卒業位の敎育はなければなりますまい。時々新聞などに募集廣告を見ることもありますが、多くは傳手を求めて雇はるゝのであります。



▲商店の簿記係

會社や銀行の簿記係は無論男子がやつて居ますが、商店などでは女子も雇入るゝ樣になつて來ました。先日美土代町の大原簿記學校で調べて見ますと、創立以來千人からの女子が卒業して居るさうですが、無論それが皆な職業に就いて居る譯ではないとしても、大分多數の女子が働いて居ることが想像されます。而して校主に見せて貰つた申込書を繰つて見る

と、女子の簿記係の需要は頗る盛んなもので、何時も斷つて居ると云ふ話しであります。且また商家に於て舊來の大福帳の不完不備を漸く感じて來たものと見へこれ等の申込みは大商店とか會社よりも寧ろ小さな商店などに多い樣な傾きがあつて、たつた一人の簿記係で用が足りる樣な店で切に雇ひたがるさうであります會社や大きな商店では、勤務時間もお役所風になつて居りますが、小さな商店になると仕事が樂な代りに勤務時間が長く、朝飯を食つて店に出ると、普通晝と夜の二度お辨當が出て、夜の八九時頃までも勤めねばならぬ所もあります。給料は書記事務員等と大差なく十二三圓から十五六圓に賣れるさうであります。その後は當人の勤め振り次第で、いくらかづゝ昇級して行く譯であります。簿記の稽古は一日三時間位づゝ稽古して普通二ヶ月位、速成を希望すれば、一科一ヶ月でも卒業が出來ます。

▲私設電話交換手

大きな會社や大商店で、電話の七つ八つも加入して居る所では、大抵私設交換臺を備へ付けて居ります。これは二つの目的があつて、一は何の電話で呼んで來ても、交換臺によりて二階にでも三階にでも、自由に接續することが出來るのと、一は同じ會社なり商店なりの、内部に於て此の課と彼の課と通話をすることが出來るためであります。この私設交換臺に使ふ交換手は、お役所では多く男子を使つて居るやうでありますが、會社商店では皆な女子で、少くとも三四人、多きは十數人、三越呉服店の如きは十八人からの女子を使つて居ります。これ等は皆な交代で勤むるのでありまして、電話局の交換手の樣に忙しいこともなく、仕事としては至極樂なものであります。丸の内の某大會社では交換臺が別室にあつて、六人の交換手が、代る代る臺につくのでありますが、その内の一人の話しに依れば、忙がしいと云つても高の知れたもので、何時も毛絲か裁縫道具を膝の上に乘せて居て、電話交換の片手間に編物をしたりお針をして、居ると云つて居ま

した。臺について居る時間は電話局などより長いが、仕事は概して閑散なものであります。

給料は十一二圓位からあつて、概して電話局の交換手と同じものであります。前に云つた大會社の交換手は十三圓ではいりましたが今ではいくらか上つて居りませう。中には十五圓の月給で、夜勤手當や何かで結局十八圓ばかりになる交換手もあります

また銀座の某商店に勤めて居る交換手で月給は十二圓だが晝のお辨當が出るから、結局電話局に居るよりも得だと云つて居るのもあります。



私設交換臺の交換手は、電話局と違つて閑散で簡單な仕事でありますから、少し慣るれば誰れでも出來まして、素人で交換手をして居るものもありますが、然し多くは曾て交換手として電話局に勤めたものが雇はれて居ります

▲女店員の服裝

以上賣子と云ひ書記と云ひ、簿記方と云ひ交換手と云ひ商店會社に勤むる女子は、先づ下級十圓位から上級十五六圓と云ふのが、普通相場の樣であります。而してこれが雇入れは、偶に新聞廣告で募集することもありますが、それはほんの僅かな例外であつて、多くはその商店なり

會社なりに關係あるものに賴み込んで、所謂傳手ではいるのでありまして、今日の如く女子の需要の激增して居る時代には、必ずしも難かしいことではないやうであります。而して勤務は必ずしも樂なことではありますが、而かも同じ店員でも、年季奉公の丁稚小僧などゝは違ひ、相當に優遇さるゝ所もありますから、縱令んば商店であつても、辛いと思ふ程のことはないらしい。女子を澤山使つて居る某大商店で調べた所によると、女子の勤務年限は平均二年位になると云ふことでありますが、而かも段々硏究して見ると、大抵結婚のためにやめたものが多く、雇主の側から見れば勤續年限の短いのは物足らぬ心持がしましようが、雇はるる本人の側から見れば寧ろ目出度い次第であります。

只だ一つ計算に漏らすべからざることは、その服裝であります。十圓から十五六圓の給料と云へば先づ交換手とか貯金局の事務員とか、或は又た曾て本誌に紹介した電信局の通信事務員と同格でありますが、或はお客と接近する關係上、或は男子の店員社員と權衡を保つために、相當の服裝をせねばならぬ必要がありまして、揃ひの仕着せでも出る店は格別、普通の商店會社であれば、服裝に相當の金がかゝるもので、必ずこの服裝と云ふことを算用に漏らしてはいけません。

新刊紹介

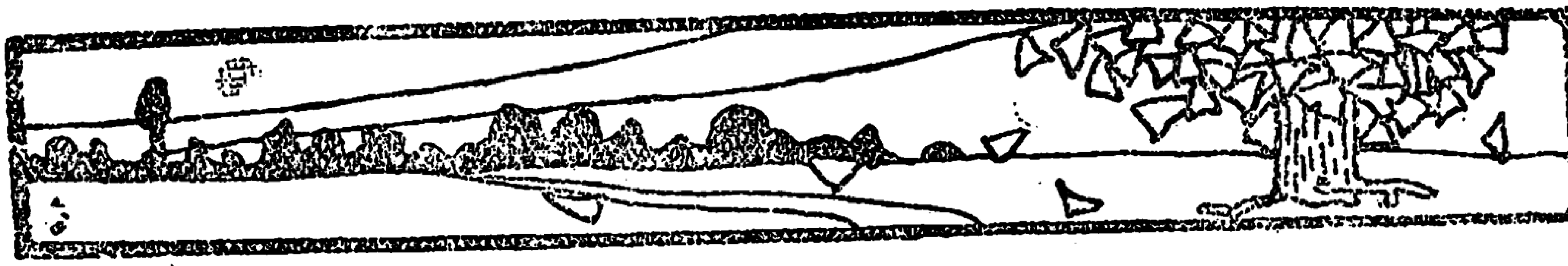
◎**椿**　現代小品叢書の第一篇として田山花袋氏の『椿』が出版された、氏の小品文は小說以外に一個の形が備はつてゐて興味が深い、小品叢書の企ての最初には好い者であらう（金三十五錢、神田今川小路忠誠堂發兌）

◎**新らしき女の行くべき道**　西川文子、木村駒子、宮崎光子、三人の共著で、所謂眞新婦人會の主義綱領とも見るべきものであらう。新しいと云つても此派の主張は文藝的に新しいのでなく、世間的に新しい方で、要するに現代若き婦人達の指針として好い參考になる書物である、內容は穩健であるから恐るゝ及ばぬ。（定價金五十錢、麹町洛陽堂出版）

◎**渚より**　歌集である、作者は藤元夕水氏、若き郡の一人である、「藥の 花の黃いろは忒し白色に返りざきせよ、わがは狂ほし」と云ふのが卷頭にある（定價金三十五錢、小石川劇と詩社發兌）

◎**三人の處女**　山村暮鳥氏の詩集である、今、手にしたばかりだから此處には單に出版されたことを報告するに止めるが、此詩集に就ては一讀の後、必ず何か言ふことがあらうと思つて居る（定價金六十五錢、下澁谷新聲社發兌）

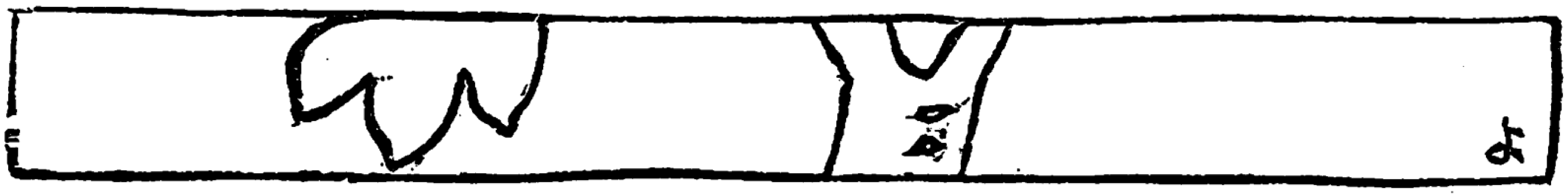
▲歌集『ふるへる花』に就ては次號に詳しく批評すべし



初戀人

三ケ島よし

やうやくに殘るもの無き身となりぬ君にぬかづき君にくだきて
かなしくも言ひつくせしと思ふこと片言なりしさいはひに生く
みづからをそこなはざればまづ君の心おのれに入りがたき世か
いつの日も初戀人の心もてむかひがたくば別れて死なむ
わが知らぬ戀のわざなりあぢきなしかたへに君の泣きて伏せるは
あゝわれら明日を思へば今日あるも今あるさへも堪へがたきかな
おかしがたき弱さを知らでさびしくもこの危さに身をば置くなり
はかなしや刹那の今を除きては殘る我だに無しと思へば
ことごとくゆるすはやがて一切をゆるさぬなればともに泣けとか
伏して泣くみづからなれどわりなしやとゞまりがたし君があめつち
避くべきをいづれの人ときめおかむまたあるまじき狂態のため
越えがたきものおのれなりこれをしも恨むと言はゞ疑はれなむ
殘るもの無しと告げむかゝなしみに消えも入らむと思ふ心を
今といふ今を識らざる我なればげにこそ夢の女なりけれ
いづれにもあやまらせじと思ふらむ我に心を置くと置かぬと



悲しき春

山田邦子

或る時は　牧水が來てやどりける　此河岸の家に人も　住まなく
寂しき日　かくも　續けり　何物か　生れ出よかし　生命　あれかし
あはれめよ　何事も　かも我は知らず　見えず　聞えず　孤なげくに
わが肉を　あざけりつゝぞ春は又　日毎に紅く　迫りくるかも
うら〳〵と　日影　さしそひ鳥聞てゆる　春は　玉座の　さびしかるべし
おしろいの　はげゆく匂ひ身もたゆく　此夕暮に　つかり　淋しむ
うちなぎて　榮種匂へる濱邊をば　心いらだち　たどれる女
一つかもめ　さても　淋しう浮び來ぬ　悲しき海の岩にし立てば
うち見ゆる　遠き濱邊に人もなし　一つかもめよ　われに鳴けかし
此海と此地とそてに浮ぶもの　一つかもめと　吾と　淋しき
荒き海　荒き海見に吾ゆかん　まさをき海に心足らはず
春雨ふる　われと自ら　おとしめて　たれてめてある　生命にしみつゝ
故なくて　母を泣せし十八の　彼の春の日に似て悲しけれ
人知れず泣ける涙の肉に泌み　骨に泌みつゝ春たちにけり
むせび泣く涙のかげに青白く　一すぢ　なやみ光れる薄笑

誌友小集

花の會の記

花は眞にして美なり
花は善にして誠なり
花は色にして熱なり
花は生にして息なり
花は愛にして香なり

酔茗

五月第一日曜の午後、杉浦翠女の發起で、杉浦氏邸に女子文壇誌友小集が開かれた、私は假りに花の會と名づけたら好からうと云つたので、然う云ふ事になつた、集つた人達は何か花に就いて語ると云ふ約束があつた。水野葉舟氏の「沈默せる生」に就いての感想、澤村胡夷氏の「香」に就いての感想、集つた婦人達のさま〴〵な花の話、何れも面白かつた。

主人非水畫伯の心厚き斡旋と、翠夫人の表裏なき取りなしに、歸るを急ぐ人達さへ引止められ勝であつた、殊に家は澁谷の郊外に在つて、新綠の森を前にし、丘あり、林あり、木立あり、花あり、初夏の會合には爽快此上なき場所であつた。花の會の名にふさはしく、藤の花、躑躅の花、野菊、金盞花、矢車草、チユリツプ、シネラリヤ、ゼラニアム、しやぼてんの花、其他黄なる、紫なる、紅なる、さま〴〵の花が鉢のまゝに或は剪りて水にさしたるまゝに、室内にも、室外にも飾られてあるので花の空氣が此家を取まいて、青葉かげに漂ふてゐる。

今、當日の會の思ひ出の料にもと、出席したる四五の婦人の感想を左に掲ぐることゝした。

すゞらん

白木いと子

△二三日前から不快でしたゆゑ出席はどうかと思つてをりましたが、初夏の美しい日光が私の心をそゝつて家の中にヂッとしてゐられませんでした。日がさゝなかつたら私は參られませんでしたけれど、明るい日光が何よりもの賜ものでございました。

△澁谷にある畫家の御住居、それは私の思つてゐた通りの理想的なものでした。色彩の豐富な心地よい畫室に、多くなく少なく人數も丁度いゝ會合、卓の上の盛花もひとしほかゞやいて見えました。清遊とはほんとにこの事でせうと思ひました。家事にたづさはつてばかりゐる身には、時々かういふ催があるといゝと思ひました。くだらないこせ〳〵した事の一切を忘れて、心持がすつかりきれいになりますもの。

△花についてのお話も面白うございました。菊子樣のお話振りはおほやうで落ついたもの、さすがにと感心いたしました。御愛嬌だつたのは寺田樣の花々々はなより團子の落ち、誰方のお顔にも樂しい笑がうかんで居りました。

△青々としたお庭の芝生の上、躑躅の花の紅や、白や、日光の新綠を洩れて斑なすあたり、先月の春鳥紀行のかたみなる撫子や濱菊の若葉を見ましたとき奈何に懷かしかつたでせう。彼折の思出はかくて翠樣のお庭にいつまでも活きて居りますが、此日の思出もまた集まられた誰方ものお胸に永く何物かを殘して活きることでございませう。

△たゝの會合としてよりは一層の親しみのあるのが嬉しうございましたこれが單にある茶亭を借りたとか何とかいふのだつたら、此樣に親しみを感じ得ないだつたらうと存じます。これは杉浦樣御夫妻に感謝いたしますところ、多分皆樣も御同感でせうと思ひます。

石楠花

西崎花世

其の室に這入つた時私は直ぐと自分をこの集會のどの隅に在存させるのが自分に對する深切であらうと思ひ迷ひました。夫れ程私は集會と云ふ事には氣苦勞をするのが常なのでした。書籍のギシリとつまつた書架の隅の筋懸椅子が不圖こゝへ來るがよいと呼んだやうにさう思はれたの

です。そこは集つた人々の眼の焼點を、遠く距つて、自分だけをそつと据えて置く？に都合のいゝ場所であつたやうです。それでやつと座席に安堵した物の、第二の難儀を感じました。それは物を言ふ事でありました。すべて人の集合した狀態は個人をみとめません。個性的にしか物の云はれない人間は集會に於ける劣等者と云つたやうなものでせう。それで私は口を開けないで、顔の筋肉でものを云ふだけで、自分の集會に對する責任を果す事にしたいものだと逃げてかゝつたのです。或る意味の臆病者と云ふのは此う云ふ心理作用に相違ありません。

私の前には濃い朱色の金盞花の鉢があつて、十五六輪の花が光りを吸うて息づいてゐました。そんな時にある人が、話をしかけて來ました。私は左様とも左様でないとも決定せぬ眼づかひでたゞ叮嚀に會釋しました。それは可笑しな滑稽であつたやうです。

集合に出るといつも私はかう云ふ可笑しな滑稽な會話しか私には出來ない事がおもはれるのです。こんな事はくだらない苦勞のやうに見えてゐて、仲々さうではないやうです、畢竟私のやうな性情は集合した席の空氣に反對するあるものを取り除く事が出來ないやうです。

寫眞をうつしました。其の時私は向ふの丘の新綠をみつめてゐました香蘭女學校の高い二階建の校舍が見えてました。女生徒が二三人で歩いてゐました。その廣い青い温かい而して快い……。總の神經の戰慄にふらふらする瞬間の顔がレンズに入りました。私の持前の暗い淋しい顔と貧しい姿とが、………然し兎に角良いと私は思ひました。

日本室に場所をかへて座布團の上にすはりました。その時にはいくらか自分が集會にひきずられてゐると思ふやうな苦勞を忘れてゐました。私の前には綠り色の洋盃がありました。そつと私は唇を觸れて一口飲みました。血が焼ける！　それが嬉しいやうな快感を感じました。或る人がマッチをすつて火を入れると其の酒がひら〳〵と燃えて居りました。

河井先生。

向日葵

小笠原さだ

御葉書有難存じました、此間の會合についての感想をとの仰で御座いましたが、其は私などが無器用な筆で申上げませんでも、皆様方のお筆で充分にお書きつくしになる事と存じますので、わざと差ひかへる事にいたしました。

私はある先生からお伺ひいたしました若草のお話が、大そう面白くと云ふよりも、或る強よい力にうたれて伺つて居りました。

お話の筋は、若草の雌花が水上に浮んで咲き出した、其を望んで水上にどうしても浮ぶ事の出來ぬ雄花は、つひに自分の生命の莖をたち切つて、水上の雌花のもとに浮ぶと云ふ樣な、一寸した挿話でありましたが私にはあのお話が、單に自然の矛盾、戀愛の悲劇と許は見たくはございませんかつた。

極めて短かい間の感喜！　それは雄花にとつては、もう充分でせう、短かい間に其自分の全生命を打込んで、立派な眞の生活を遂げたと云ふものだと思はれました。其強く大きな力が、私には耐らなく羨しくまた欲しく思ひました。生命をたちきる迄に心に迫る或力が、何故私の胸に響かないのでせう。

先生。けれども私の欲する力と申ましたのは、此草の戀愛的熱情をさしたのでない事は申上げる迄も御ざいません、然かしまた戀愛の力でも決してかまひません、今私どもは純にして強よく深かく生きて行かなければならないと信じますから。

* * * *

あの會の席上で申上げました私の言葉が、或は皆様の内には不快に思召になつた方もおありでしたかも存じませんけれど、實は私は決して皆様に向つて申上げたのではなく、自分自身の心に向つて申ましたので御座いました。

今の處、私は自分の心を絶なくむちうつて、或る恐しい力と戰つて行かねばならないのです。

でさう云ふ苦しい心の生活をつゞけて居りまず私には、先生のお話がひどく胸に當つて伺つて參りましたので、つひこんな事が申上げ度くなつたので御ざいます。

水あふひ

白百合

初雷のあつた翌日と云へば、きつと此の日の美しい潔さもフツクラとお目に浮ぶであらうと思ひます。

なだらかな窪みのある下澁谷の上地はすつかり若葉に埋められて、旅に出たやうな丘も見上げられ、また茂り合つた林の下草のその青い呼吸の匂ひさうな緑がしつくり燃えてゐる。私は草をちぎつてそのいさゝか指をそめる汁が喰ひ付きたい程やるせなく好きなのです。

私は今日のまどひをするといふお家の主婦翠子樣のお居間に通りました。水色塗りの洋館のお二階は向ふに小高い丘をひかへて白レースのカーテンがしぼられてありました。

青々しい活力のみなぎつた林はその丘を大半包んで、其の上に翳るプラチナのやうな光る雲が初夏らしい氣分を漂はせて和らかにグラスに照ります。

少しも心置かれない翠子樣と、ふつと瞳を合してから不思議に話の糸口がほぐれ出しました。一聲おつしやつても氣持のいゝ方なので、御門をば入つてベルを押しながら思つてゐた片苦しさがすつかり引込んで、

「あなた誰のお作が好き？」

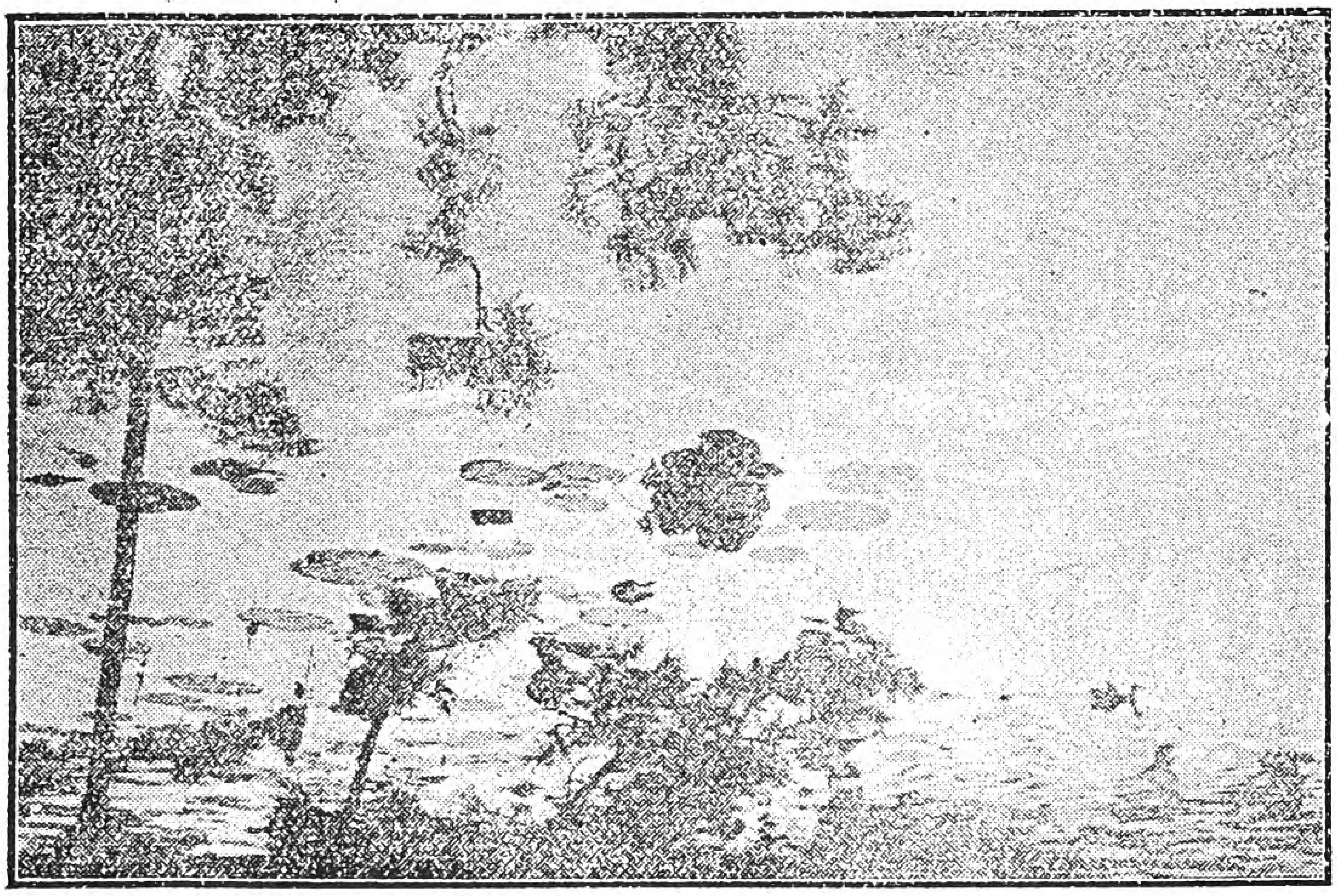
かうおつしやられて、はつとしたけれど思ひ切つて、

「私三重吉樣の、あの闇いじめぐしたねばり付くやうな、誰でも抵抗する事の出來ないやうに引くるめてしまふ……」

「あなたも」翠子樣のはづんだお聲が強く響きました。三重吉後援會！そんなことも話されました。もう少し伺ひたかつたと思ひます。

兼て一時頃迄にはお出の筈な河井先生が二時過ぎでしたから他は押して御推量出來ませう。私はこの日五時歸宅の約がしてありました。

正午との定めでもありましたので一時半迄にはお揃ひであらうと思つた方々は、いたづらに私に落ち付きをあたへずに時をきざんで行きます。ザムボワ色の日は芝生の上を靜かに足跡も見せずにすべつて行きました。寫眞をとつたのは四時を過ぎてもゐたでせう。さつきと霧島が褪せゆく春の印象を敷いてゐました。



雨後の池

松の陰にあつた可愛いゝ鸚鵡を邦枝さんが呼びかけました。つぶらな瞳をつむつたり開いたり沈思するやうに小首をかたげた姿がまだ目についてゐます。

子供はきらひと標傍する邦枝さんと、愛兒をうしなはれた暗愁にとらはれにお見上げした白木糸子樣とは、とりかへて上げたいやう私も一人はほしいと思ふ。

應接室の壁には私の好きな豐頬の美人畫がけばけばしい油畫によい對照をもつて見られました。

こゝで申上たいのは當所の御主人は青年畫家で有名な杉浦非水樣であるといふ事で、何となく藝術的に匂ひ高いお部屋であつた事と、ものやさしい御樣子が幸

福の手をのべて翠子樣をつゝんでおられると云ふ事を特に申上げたいと思ひます。

一碗のお茶と共に河井先生から今日の集會の御話がありました。花にちなんだ事でした、次に水野先生は花から引いて生命といふ事を話された、私がすつかり魅せられて、小さい芽からいさゝかの熱を發したといふやうな事がしみ〴〵とうれしく胸にひゞきました。澤村先生は薫りといふやうな事に就いて、誌友では山田邦枝さんが誌友を花にたとへたり花世さんの隨所に於て變る嗜好と云ふやうな話し、皆樣がそれ〴〵になさいました。私はふとした物のまぎれに切角の興味に少し角だゝせるやうな花といふ題に不似合な質問的口調になり渡つてしまつて、いさゝかでも聞い妙な翳りがをだやかでなく皆樣のお胸に流れたであらう事をおわびいたしたいと思ひます。

實は私のお話し申したい事は、山中に於ける岩つゝぢの美と、八ツ岳や金峰山の高山植物の特異なものでしたが、ふとしも魅せられた土の生命といふやうな語の中から、ぬけ切れずに押し進んでしまつたといふ失態を、直とりかへす程世なれてゐませんので逸し去つてしまつた機會のあとをぢつと、かう云ひ直したら宜からうにと思ひながら、時刻も私をせきましたのでその儘にすまして「それではおとめしませんから」となさけ餘る河井先生のおことと葉に涙ぐみたい程後髪引かれながら、前途に横はる吾家といふものに引かれて、非水樣にお見送り頂きながら惜しいお門を出ました。

微かな笑聲が崩れた時、私は目を上げて戀人に別るゝ如くに丘のお家を見返りました。

夏雪草

山田邦子

翠樣の歯切れのいゝお言葉と百合樣がいつもながらの明るいお顏、ヒヤシンスのやうな小笠原樣の笑顏と、菫の花をどうしても思ひ起させる若葉樣、うつむいてばつかりいらつしやつた靜代樣がおつしやつた「あんまりお責めになると泣きだします」といふ細いお聲。白木樣の玉のかんざし、寺田樣のお持になつた自分の大好きなおしたぢのお團子、吉田樣の襟をつめたお着こなし、青山時代を思ひ出してなつかしかつたのは西崎樣の帶、百合の花のやうな方だと思つたらば其方のお名前が百合子樣だつたのも忘れえぬ印象の一つであつた。非水先生のお筆に成つた青いカマキリの上に、葉舟先生がお書き下さつた氣持のよい小唄。

草むらより〳〵刃が光る。
夢を見て驚く人
かすかなる聲をてゝ
なくは白き歯

すつかりと胸がすいた。

澤村先生はだまつて柱のそばで香を焚いておらつしやる、さつきの先生のお話を思ひ出して「先生匂ひの藝術を味つておらしやるのですか」と申上たらばアハヽヽヽとお笑ひに成つた。

青いお酒を召あがつた河井先生の、少し紅いお顏をふとお見上げした時、私の心には何故か五年前の自分の姿がはつきりと浮んで來た。さうして私今まで華やいでゐた私の心のなかゝら只一筋におすがり申したなつかしい其の頃の記憶の糸をたぐつて私は「先生！」とお呼びかけ申した「先生どうぞこれに何かお書き下さいませんか」。かう言つて私は先生の前に色紙を置いた。先生は快よくそれに「青き酒の色」とお書きになつた。

來信

先日は失禮いたしました、私は彼の日くすぼつた田舍の町から東京に參りましたばかりで、初めて光線の明るい室に皆樣にお會ひいたし、只もうぼんやりしてしまいましたので、定めて失禮の事も多かつたらうと皆樣にお詫申ます。せめても松井さんをお力に參つたのでございますが、何分田舍ものゝ事とて一向ぶてうはうで、只皆樣のお話を承るばかりで、失禮ばかりいたしました、お序の節皆樣によろしくお傳へをねがひます。

わかば

河井先生

▲猶ほ一一二頁に吉田清子の一文あり▼

講談
賢母の遺書

寶井琴窓 講演

御求めに應じまして伊達評定の中を一席拔讀をいたします、豫て奥羽六十餘萬石の大領主伊達上總介殿御代に御家に騒亂が起りました、之は御分家伊達兵部少輔殿、時の大老酒井雅樂頭殿と內緣ある處から、之を後ろ楯として伊達の御家を横領しやうといふ、惡辣の手段を廻らして、當主の上總介殿を害し、伜市正に本家相續をさせやうといふ考へにて、大庭道益といふ御匙に毒藥を配劑さして、鹽澤丹三郎を以て、此の毒藥をお茶と交せ、上總介殿を害さんといたしたる處へ松前鐵之助、淺岡局の誠忠に依つて之を仕損じ、鹽澤丹三郎は返り忠、其の後、菅小助といふ忍びの名人を御寝所へ忍び込せましたが、之れ亦淺岡の爲めに見現はされ鐵之助の剛勇に打殺され、二度の失敗、夫にも懲りず三度目に忍び込せましたのが本名荒浪梶之助、當時兵部少輔殿の納戸役を勤めて居る荒木和助、力士上りで力量衆に勝れ、御曹司上總介殿の御居間の床下へ立入つた、時恰も松前鐵之助も思ひも寄らぬ濡衣を着て御前の勤めを遠ざけられ、我が小屋へ歸つて謹慎して居りましたが、如何とも穏やかならざる家中の様子日頃念ずる鹽釜明神へ、御館の首尾恙がなきやうにと

夜參りをいたし、主君の武運長久を祈つて歸り掛けに御庭前に圖らずも荒木和助の姿を見て、之を取押へた翌朝後見の伊達兵部少輔、田村隱岐守殿取調べ、流石惡人ながらも覺悟いたして居りますから眞を吐かない之に依て品川の袖ケ浦の下屋敷へ牢を出來へ、之へ入牢申付けることになりました、其の夜麻布廣尾の屋敷に惡人伊達兵部少輔、原田甲斐高矩、渡邊金兵衞を初めとして一味の者が集會をして、どうも不憫ながら荒木和助を生して置くのは危ないゆゑ、之を殺して終はなければならん、其の殺す役目は兄弟分の神並三左衞門に之を命じやうと、三左衞門を招じて原田甲斐が

甲「其方大儀ながら此の藥を持つて袖ケ浦の下屋敷へ罷り越し、荒木和助が仕損じたのは本人の不運だ、今日の拷問に大分身體も疲れて居るゆゑ、氣付だといつて服して呉れ」三「畏こまりました」と三左衞門は該の藥を懷中にして、品川袖ケ浦の屋敷御通門から通り牢番をして居る者が一味の惡人今村善太夫の組下だから三左衞門の姿を見ると、便所へ行く態をして其の場を外して終つた、之れ幸ひと、牢の傍へズッと忍んで中の樣子を窺ふと、强力無雙の松前鐵之助の咎に當てられ、力士上りの和助、其の場は堪らへて居たが、今は其の打たれた處の痛みが一層烈しくなつて、ウーンウーンと迂鳴つて居る　三「和助、和助」邊りを憚かり小聲で二度呼んだ、迂鳴つて居た荒木和助が頭を上げてヒヨイと見ると、表から中は能く見へないけれども中からは能く表が見える　和「オヽ、之は三左衞門か、アア苦しい、能く來て呉れた」三「どうだ、嘸ぞ痛からうけれどもモウ少し我慢をしろ、ノウ、今にもお奉行の原田さんや御後見の兵部樣が何とか計らつて下すつてお前の命が助かるやうになるに違へねへ、就てはな、此の藥は御奉行樣から下すつた氣付だ、嘸ぞお前が敲かれて苦しからう、之を呑みやア少しは樂になるだらうから、持つて行つてやれと斯ういふ御言葉で乃公が持參致した、サア服みねえ」和「ウム夫は有難てえ」差出す奴を受取つた和助、暫らくの間藥を見て居りましたが、苦笑ひをして　和「之はどうもお前分らねへと

いふもんだ、俺を欺して殺さうとするな、其の計略はチト淺墓だ、之は毒藥だらう、ウーム、イヤさうだ、生して置けば露顯をすると殺しに來たんだらう、俺はふん捉まつた其の時から、命はねえものと覺悟はして居るけれども、舌を嚙んで死ぬとしても夫が凡惱で死に切れねえ、假令御後見や御奉行樣が何と仰しやつても手前と乃公とは兄弟分、手前の手から毒を食つて死んで呉れ、菩提は乃公が吊らつてやると、ナゼ明らさまにいつて呉れねえ、然うすれば乃公も死甲斐があるといふのだ、夫をお前が欺して乃公を殺さうとするのは他人行儀兄弟分の好誼がなさすぎやアしねえか」星を指されてビツクリ致しました神並は 三「オ、和助之は乃公が惡かつた、濟まねえ、勘辨して呉れ、汝のいふ通りだ、打明けて話しをしなかつたのは乃公の過り、けれども、迚も助かる命ぢやアねえから毒を喰つて死んで呉れ」和「手前が然ういつて呉れりやア、乃公も死心が宜い、此ア粉藥だな、水がなくつちやア咽喉へ通らねえから、水を持つて來て呉れ」三「オイヨ」傍らの溜りへ行つて、手拭へ水を含まして、牢の格子の間から入れる、粉藥を口へ含んで和助が手拭の水を絞つてグーツと呑み干した儘暫し俯向て居りました和助 和「ウーム三左衞門」三「ウム」和「今度の御後見や御奉行樣の企ては迚も之ア駄目だぞ、何と兄弟、乃公が臨終の際の遺言だ、足許の明い中に尻を端折つて、何處へでも身陣幕を付けて呉れ、然うしねえと、汝も乃公の二の舞を踏むぞ、乃公は今眼を眠つても、義理にも涙の溢し人はねえが、乃公と違つてお前には大事の阿母がある、殘る者に難儀は掛けなきやアならねえ、能く此奴を耳の底へ止めて置て呉んねえよ、ウーン、アヽ、苦しい、モウ往かねえ、之はお暇乞だ」、鳥の將に死んとする時啼く聲悲し、人の將に死んとする時言ふ事良し、苦しき息を吐きながら兄弟分に遺言をいたした儘、虚空を摑む斷末魔、ゴツクリ前へ首が垂れた三「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛〳〵」と念佛を唱へて三左衞門、其の儘直ぐに廣尾へ引返して參りまして右の趣を兵部少輔、原田甲斐へ申述べると酒を呑んで

待受けて居りました二人が　原「三左衛門大きに大儀であつた、和助の失策が其方に僥倖、之から其方が首尾能く行けば三千石の出世、先づ目出度い、一ぱいやれ」三「有難う存じます」兵「サア今度は貴様が十分にやらなくつちやアいかんぞ」三「ヘエモウ旦那様、私は和助のやうな粗忽の事はいたしません、人の噂も七十五日といふ譬もありますから、餘炎の冷めるのを待つて五日でも七日でも、御殿の床下へ忍んで、茲で一番といふ所でいたしますから、當分私に猶豫を頂き度う存じます」原「ウム成ほど夫が宜い、萬事頼んだ」三「畏てまりました」酒の馳走になつて暇を告げて我家を指して戻る神並、口にはいへど何となく心が動き、我が家へ戻つて來て、腕拱いて考へた、どうしたものだらう、首尾能く行けば三千石、妾の三四人も居て、二人に合奏をさせ、二人に酌をさせ、御前様といはれる喜見城の樂しみも、仕損じりやア鯨の鞭で引叩かれ、袖ケ浦の牢へ叩き込れて、薬と名を付けて毒を呑まされ、到頭血を吐いて死んだ那の和助、臨終の際の一言が、耳

の底に殘つて居る、歸つて來て御後見様と御奉行様へ申上げると、和助の失策は其方の仕合せ、之から其方が首尾能く行けば三千石に出世、先づ目出度い〳〵といふ、乃公も矢張り仕損なやア其の通りだ、扨どうしたものだらう、併し此の太平の世の中に、三千石といふ立身は迚も尋常の事では出來ねえことだから、石橋を叩いて渡るやうな量見ぢやア生涯出世は出來ねえ虎の穴へ入らなければ虎の子を獲ることが出來ねえといふ、つまり三千石と命の賭事、伸るか反るかやツつけるか一番、併し本郷の丸山に居る阿母が仕損じた曉には嘸かし嘆くだらうから、一寸行つて外ながら暇乞をして、夫から事に取り掛らうと、大體が親孝行の男だから、斯くの如く覺悟をいたし、其の夜は過して翌日土産を携へ、懐ころに金子を用意、麻布廣尾の伊達兵部少輔屋敷を出で、本郷丸山の阿母さんの處へ參りました、ガラ〳〵と表の格子を開けると、下女のおきくが立出でゝきく「オヤ之は旦那様御入來なさいまし……アノ御隱居様、旦那様がお見えになりましてござい

ます」母「オヤ三左衛門かえ、能くお出でだね」三「ハイ阿母様、えゝ此の頃は御無沙汰仕つりました、何日も御機嫌宜しう……」母「サア／＼此方へ……」三「ハイ有難う存じます」きく「旦那様御茶を召上りませ」三「ア、きくや、能くお前は阿母さんの面倒を見てお呉れだ、厚く禮をいひます」きく「どうも恐れ入ります」母「アノきくや」きく「ハイ」母「伜が久し振りで見えたがお前何が宜いね、今日はそしてお急ぎでもなからう、御酒をお上りかえ」三「ハイ頂戴いたします」母「鰻が宜からう鰻をお前申付けて……」きく「畏こまりました」と忠實しく下女が鰻を誂へて來て、酒の仕度きく「さアどうぞ此方へ」と庭を見通します座敷に親子水入らずで酒を呑み初めた　三「扨阿母さん」母「何だえ伜」三「改めて申上げますが、實は今度私が殿様の御用でチト遠方へ參らなければなりません」母「オヤさうかえ」三「付ては之は少々難かしい役で、事に依りますと命に關はるやうな場合がないとも限りません、大切の御用、其の代り尾首能く勤めますれば三千石に立身出世が出來ます、若し出世をいたしますれば腰元を置き、何一ツ不自由をお掛け申しはいたしません、御喜こびなすつて下さいまし、萬に一ツ仕損いましたる其の時には定めし便りも少なく思召しませうが、子の無い昔とお諦めを願ひます、就て此處に五十兩持參致して參りましたが、之は當分のお小遣になすつて下さいまし」と酒の威勢で思切つた話をいたしながら懐から取り出す金子を前へ置けば暫し其の顔と金子を見比べて居りました阿母が　母「イヤ御奉公の身は是非もない、三千石の加増といへば是は莫大な事どんなことかえ」三「へエ、夫は只今チトお話しが出來ません、何れ追つてお分りになります」母「そんならお前出世をするといふ際先、不吉の事はいはずに首尾能くお勤めなさい」三「へエ、立派に勤めまする心得でございます、イヤ阿母さん、モウ大變に頂きまして、宜い心持に酔ひました、今晩は一晩御厄介になつて參ります」母「アヽ泊つて行つてお呉れ」跡は浮世の雜談に押移り、酒酌交はし、流石の三左衛門も之が親子一世の別れになるのかと、母の面を

ジッと見て、思はず落す一雫。母「三左衛門」三「ハイ」母「お前どうしなすつた、私の顔を見てお前涙を溢しなすつた・・・」三「イエ涙を溢したのではございません何んだか妙な感じが起りまして・・・イヤ大層酩酊いたしました」母「デはお前お寢みな」三「左樣でございますチト頂き過ぎましたから御免を蒙むりまして・・・・・」母「きくや、旦那樣のお床を二階へ・・・」きく「ハイ畏てまりました・・・アノ旦那樣お二階へお床を延べました」三「ぢやア阿母さん、御先きへ、御機嫌克しう」下女の案内で二階へ上つて臥房に入いつたが寢ても寢られず、モジ〳〵して居る中に待たぬ夜の明け易く、ホガラホガラと告げ鴉、勝手許で下女がガタ〳〵働く樣子二階から支度を直して三左衛門降りて參りました、きく「オヤ旦那樣お早やうございます」三「オヽ一寸顔を洗ふから水を取つてお呉れ」きく「畏てまりました、まだ御飯の支度も出來ませんから御迷惑でもモウ少々お寢みなすつて・・・・」三「イヤ〳〵少と急の御用があるから飯を食はんで參る、阿母さんは・・・・」きく「御隱居樣は未だお寢でございます」三「アヽさうか、デはお起し申すに及ばん、直ぐに戻るから」と顔を洗つて三左衛門 三「おきくや、お前も長く勤めて呉れたが、どうか阿母さんのことを此の上とも何分お頼み申す」きく「恐れ入りましてございます」三「之はホンの僅かであるけれどもお前に・・・」きく「斯樣なものを頂戴いたしましては・・・」三「イヤ夫はいはれては困る、僅かだが取つて置いて呉れ、志しだから・・・」きく「左樣でございますか、有難う存じます、夫では直ぐにお歸りになりますか」三「オヽ直ぐ行きます、返す〴〵も阿母さんのことを頼みますよ」きく「恐れ入りましてございます」支度を直して其の儘丸山の家を立出でましたが、前へ一足後ろへ一足、何となく後ろ髪を引かれるやうな心持がする、カア〳〵カア〳〵〳〵といふ鴉啼、アヽ氣に掛る鴉啼、何だか忌な心持だが、寢て居なさるのを起して、御暇乞をするでもないと思つたから出て來たがどうやらモウ一遍阿母さんの顔を見て行きたくなつたと、途中から引返した三左衛門 三「きくや」きく「オヤ



旦那樣お歸り遊ばせ、何かお忘れ物でも‥‥」三「イヤ一寸何だ、出は出たけれども、阿母さんに申し殘したことがあるから‥‥」き〻「アヽ左樣でございますか、まだお寢みでございます」三「アヽさうか」き〻「御隱居樣〱、旦那樣がお歸りになります」昇つて參りました三左衞門、母の臥房の表へ立つて 三「阿母さん御暇をいたします‥‥アヽ大層能くお寢みなすつて在らつしやるな、年は老りたくないものだ、鼠がガタリといつてもお目の覺めた阿母さんが、大層能くお寢みなすつた」と何氣なく立廻してある屛風に手を掛けてスラリと開けて見ると、這は开も如何に這は如何に、時ならぬ龍田の紅葉、母が自害の有樣に、之はと驚く神並が、早腰拔かして後へにバツタリ 三「コリヤ何故に自害なされたか、エー情けないことをなさいました」呆然たる中にヒヨイと向ふを見ると、血にまみれた書置一通執る手遲しと取上げて、上封見れば三左衞門どの母より封じ目切つて讀み下せば

一筆書殘しまゐらせ候 妾相果候次第は、今更いふも繰言

ながら、そも我身若かりし時、奧州伊達信夫の里に農を營み、夫に別れて其の時に、共に死なんと思ひしかど、遺兒の幼年の其方ありしゆゑ、惜しからざる一命を存らへ居たるに、日頃懇意の里人達、二度の良人を迎へよと、世話する人ありしかど、忠臣二君に仕へず貞婦兩夫に見えずとやら、昔の人の敎を守り、洗ぎ洗濯賃仕事、末の落葉や折焚く柴、朝な夕なの煙りさへ、立兼ねる苦しき中に其方を世に勇ましく育てんと、這へば立て、立てば歩めと親心、惡き友に交はらせじと、育て上げたる十三歳の折、信夫の里に相撲興行、大關黑雲伴右衞門といふ人、其方を見て、此の子筋骨逞ましく、相撲にすれば天晴者、我等に呉れいと賴みしかど夫の名蹟を立てさすには武士にならねば叶はずと、弓馬槍劍の道も敎へたく思へども、何をいふにも貧しき上に片田舍、殊に親とも子とも只一人の其方、如何はせんと迷ひしかど、日本は神國なれば、神のお告げに隨ふに如かずと、日頃念ずる鹽釜大明神樣へ一七日の跣足詣

り、御籤を取れば大吉といふ御告あり、神佛の御籤は取り冒さぬ者なれど、燒野の雉子夜の鶴、子ゆゑに迷ふとは之なるべし、三度が三度取つたる御籤、皆大吉を授けられ、思ひ切つて遣はした、其の節母の心のいひやうもなし、夫より十ヶ年を經て多くの人を以て妾を迎へに遣はされし時の嬉しさは、何に比ふべきものもなく、參つて見れば大關とか、名前も聞くも恐ろしき、鳴神峯右衞門とて、諸侯樣へのお出入り力士、昔の嘆き今の喜こび、間もなく奥州五十四郡の旗頭、伊達陸奥守樣へ御召抱へになり、御恩になりしを打忘れ、有らう事か有るまい事か、先君綱宗卿を廓通ひに引出し、放蕩に仕立て奉つりしは死せし和助と其方の爲す所、然るに御國表より御一門家老方御出府に相成り、綱宗卿は御痛はしや袖ヶ崎のお下屋敷に押込め御隱居と相成られ、已に其の和助と其方は、磔刑になるべき處、却つて御分家兵部樣の御納戸役と身の出世、仔細なくては叶ふまじきにと、思ひ居る中昨夜參りての物語り、此の泰平の世に、させる功名もなく、三千石の加增とは餘りと申せば莫大なり、察する處其方も兵部殿や甲斐の惡事の手先を働らく者に相違なし、汝知らずや此の惡事に黨せし者一人として身を完ふせし者あらず大庭道益、園田吉兵衞、多田武助、鹽澤丹三郎の無殘なる終りを見ば、汝の行末も思ひやられて隣れなり此の母は惜からぬ命を存らへて情なき汝が最後を見るよりは、一日も早く冥途に赴かんとて斯くは覺悟を極めて相果候也假令又汝が惡事成就なし、三千石に出世なし、千部萬部の經文を讀上げるとも、母は必らず八大地獄へ落ちるぞや、願はくば善心に立歸り、御幼君を扶け奉つり、惡人の根を絶ち、御家の長久を計りなば、此の身安養淨土へ赴かれん、一人の母を地獄へ落すとも安養淨土へ導くとも、之れ皆汝が心一つにあるぞかし、まだ〳〵書殘したきこと山々に候へども最後を急ぎ候まゝ廻らぬ筆を止め書殘しまゐらせ候

母より

三左衞門どの。

讀畢つた神並が　三「エ、勿體至極もない、斯んな發明な母さんの腹からどうして私のやうな人間が生れたか阿母さん、御書置に從ひまして、必らず改心いたし、殿樣の武運長久を之より祈りまする、心得違をいたして相濟みません、手を下して殺さずとも、命を縮めし此の三左衞門、不幸の大罪お許しなされて下さいまし」前後不覺に泣きくづれてあつたりしが、斯くてあるべきことならずと、下女のおきくも共々に嘆くを却つて三左衞門が勵まして、此事他言せぬやうにと、固く口留めをして、母の死骸の取片付を濟して、之から麻布へ立歸り、何喰はぬ貌をして、惡人の證據物を取纏め生れ故鄉の奥州伊達郡涌谷の館主伊達安藝宗重の許へ返り忠いたしました、此の三左衞門が母の自害に依て返り忠をしたばかりに、伊達安藝宗重殿が江戸表へ出府して、惡人を取て押へ、主家を富嶽の安きに治めたといふ、伊達評定中、神並三左衞門返り忠の一節、此の邊で留め置きます。

含羞草（花の會の記）（一二）

吉田清子

雨あがりの日光に、柔らかい土の香と心をそゝる樣な青葉のゆらぎを夢見る樣な心持ちで味ひながら、きちんとしたきまりのいゝ河井先生のお書齋でしばらくいろ〳〵の御話を伺つてゐた。やがて澤村先生と白木いと子樣御出でに成る、いと子樣はつゝましく雜誌に御目をうつして居られる。

水野先生を待つ間、河井先生と澤村先生の御話に耳を傾けてゐた、その中に水野先生御出でになる。

青山四丁目から電車に乘る、腰下ろす席がないので釣革にぶらさがつて居た。

『あれ、水野さんらしいわねへ　』

『葉舟さんだわ、………あら醉茗さんも居被つしやるわ』

小さな聲でさゝやくのが聞へたので、ふと目を落すとローマに結つたふたりづれ、私は、ひとりほゝ笑みながら知らぬふりして居た。ふたりの視線は偸む樣にしては絕えず先生方の御顏に注がれた。何も御存じない水野先生は、二枚の切符を私に御渡し下さる、すると初めてびつくりした樣にローマのふたりは私と白木さんの顏を見上げて居た、あとは聞きとれぬ程の小聲で、私等の降りるまで何かさゝやいて居た。

先生方のお足が早いので、捨てられてしまひさう、私も白木さんも坂を登る時は苦しみ〳〵一生けんめいであつた。

燃ゆる樣な血潮のみなぎるハートを抱いた若き人々十餘名の集り、華やかな笑らひ聲と甘いコーヒーの香りが美をつくした明るい室一ぱいに漂ふて居る。窓のカーテン越しに見ゆる削りをろしたやうな赤土の山や靑葉の森にほの見ゆる女學校の屋根、すぐ家の下を通る電車のひゞきと隣家からもれてくる蓄音機の音が、もつれ合つてひゞいてくる。すべての感じが夢の中に引き入れられる樣である。上野の誌友會からもう二年立つ、相變らず若いお美しい平塚樣、明るい顏、濃い眉、人を引きつける樣な情を湛へて居る瞳、白百合樣は人をチヤームする一種の力を持つて居被しやる邦子樣は日本髮の時よりたしかにお若く見へた。花に付いての感想も皆さんゆづり合つて居被しやるので、皆さんが籤引きになされた。御三人の先生の次には邦子樣、とつさの間にお考へ遊して皆樣を花にお たとへ成さつた、何と言つても才智ある方は違つたものと感服の外はない。白百合と小女の思ひ出をのべた私は、自分ながら筋道の立たないのには呆れ返つた。

三泣車（五）

子供の戀は

吾々が子供の時分の今は全く忘れ果てた無邪氣な戀が大人になつてからの生活に及ぼす影響は非常に大きい、吾々大人が赤よりは綠が好だとか綠よりは赤がいゝなどいふのは、今頃は孫があらうと思ふ幼馴染のリボンの色に支配されてゐるのだ。普通健全な男子は老年に至るまで戀をするものだ。そして其最初の戀人――大きくなる前に名も何も忘れて了つた戀人が其一生を彩るものである。人の最初の戀人は其兩親である――男は多少母に似た女を求め、女は父に似た男に行かうとする。が萬人結婚の運は相手の親次第かも知れないまた一切は單に痴夢かも知れない。

ちんぷんかん

平賀源内がこしらへたマアストカアトル（蚊よけ器械）ヲストデール（萬年糊）エフトホエル（呑だくれ）スポントワースル（覺えの惡い人）は名高い英語？だが（スワルトバアトル氏、カネガール氏など明治時代にも天晴な言葉があつた）後藤朝太郎さんのお話に、同一の漢語で日本內地と朝鮮とでは滅法な違ひの有るのがあるといふ。新人といへば新しい人新しい女卽ち『青鞜』のらいてうや女子文壇の一部の孃さん達を指すやうなれど、本來は花嫁のことである。一つ二つ珍らしい熟語を擧げやう。

日本朝鮮同熟語	朝鮮特有意義
內相內務大臣は	內室　おく樣
議論は	相談
發明は	言ひわけ
天眞は	間ぬけ
引導は	案內

丁寧は　屹度　かならず
三寸は　叔父
斟酌は　想像
病身は　片輪
生涯は　職業
山所は　墓
獨身は　一人子
身體は　死屍
一色は　べつぴん
薄色は　お龜

「あなたは獨身だなんて、うそつき!、七人もうへしたがお有りの癖に」と言つたら河井醉茗さんなんか呆然として言ふ所を知るまい。「婆さんやめつ法一色なお孃さんがいらしたぜ、早く引導を渡してお上げ」と言つたらどんな人だつておてるだらう。

女の子の財産

十歳になる女生徒の身のまはりの財産?を調べた先生がある。絹小紋長着十五圓、縮緬羽織二十圓、メリンス長着八圓、絹小紋羽織十圓、絹綿交織長着八圓、飛白羽織三圓、博多帶十五圓、繻珍帶八圓、メリンス帶二圓、瓦斯博多五圓木綿袴五十五錢、ショール三圓五十錢、双子着物二圓木綿着物三枚二圓六十錢、メリンス兵子四十錢、帶止め四十錢、足袋十二錢、繻袢二枚一圓二十錢、リボン二、二十五錢、櫛二三十錢、簪三、二十三錢五厘、合百二圓五十五錢五厘、先生嘆じて曰く、百圓の金は正に彼女の師が一ヶ年の報酬に當ると斯の子弟にして斯の教師あり慘ならずやといふ所だがこれ一女生の財産のみ、某貴婦人の新衣を見よ。

▲金五十圓…縮緬金縫入繻絆仕立共▲金六圓…縮緬縫模樣半襟一掛▲金三十圓…縮緬腰巻一枚▲金百七十圓…二枚重裾模樣紋附▲二百五十圓綴レ織無地帶▲金二十五圓…絞り縮緬シゴキ▲五拾圓…金金具帶留▲四十圓…金平打簪▲金百七十二圓…本珊瑚根掛▲金七圓…元結留ピン

〆金八百圓也

此外に新調した時計と持物の値段は

▲金百圓…懷中時計▲金六十圓…金鎖▲十二圓

…古代更紗紙入▲金三十圓…金製二ッ折鏡入▲金八圓綴レ織煙草入▲金三十五圓…金緣煙管▲金二百五十圓…ダイヤ入指環
〆金四百九十五圓也
二口を合して大枚千二百九十五圓也矣。

『醜婦』さん貰って

前に朝鮮のちんぷんかんを書いたが、これは中華民國。そろ〳〵螢の時節が來るからチヤンの螢來いの歌をうつさう。火金姑、請汝仔食茶、一鍾酒、三尾蝦、蝦能香、酒就紅、娶媳婦、做大人。これがうたで候では月琴にものりさうもない、譯に曰く『螢來い、お茶しん上、お酒一杯海老一尾、蝦は新し酒は濃し、お媳婦さん貰って、早く大人に做れ』臺灣の生蕃中には首狩を行ってお祭をする時、汝、妄に天より下りて祟をなす勿れ速に天に上り行け」とうたって引導を渡す、人の首を捻っておいて、速に行けも無いもんだ。

婚禮の夜の土產

愛知縣東春日井郡志段身村字吉根には、婚禮の夜花嫁手づから、村の若衆の空煙草入に煙草を容れて遣る風習あり、富者は一荷、貧者も一風呂敷の煙草は之が爲に充てられ、其品質の高卑と分量の多寡は、大に村民の氣受に關し、ケチだと認むる時は、其家に人糞を撒き、墓碑を持込む等の返報を試むるを以て、丸裸の花嫁も煙草の荷丈は背負ひ來る由、現今の標準煙草は「あやめ」なりと。

女名前の二壯丁

佐渡に於ける本年の徵兵適齡者に女名前の壯丁二人あり、加之も兩名共阿野きさといひて、一は澤根村甚平の弟、一は同村石松の弟なるが、一村に同姓同名の女名前の壯丁は頗る珍とすべく、こは戶籍法の嚴ならざりし時代に、戶籍吏の疎漫より、斯の如き奇異の錯誤を生ずるに至りしものならんと。

世界一の嫉妬女

朝鮮仁川龍洞に李元植（四三）といふ男あり、妻金氏（四〇）は滅法界の嫉妬家にて、夫の一言一行を邪推して詰責し、答辯曖昧と見れば、直ぐ棍棒にて亂打するにぞ、李サン堪らず、實弟の許へと敗走したるに、愈々以て怪しいと、金ちやん出刄庖丁を提げ行きて斬り付けたることあり。近來は一室に閉ぢ込めて、且つ愛し、且つ苦しめるてふ濃情に、李サンほと〳〵世を悲觀し、縊死を計った。

當月の園藝



薔薇

薔薇の栽培は容易なもので戸外でも溫室內でも植込まれます。植鉢も出來ます、然し根元の土が乾燥せぬやうにすると同時に、肥料が缺乏しないやうにする必要があります。四季咲きに於ては肥料を缺乏させぬと言ふことは特に注意する必要があります。何故ならば四季咲きは常に新しい芽を出して蕾を見せるから肥料が缺乏してはよくありませんと申してあまり肥料をやりまするると新芽のみ出して、そして蟲が付きやすいものです。植ゑる所は日光が强射する土地でも、半ば濕地でも立派に育ちます。たゞ風通しのよい所を選擇しなくてはなりません。地鉢は日常りの惡い、日光直射の少ない所に置きますと蟲害に罹り易いものですから注意する必要があります。冬期は霜除をしてやりますと勢を削ぎません、十一月の中頃から翌年の三月初旬まで簡單に霜除をすればよろしいのです。

四季咲きに付いての注意は常に枝條を剪むことを怠らぬこと、花が濟んでからそのまゝに置かぬこと、もし打捨てゝ置きますと柔弱な芽ばかり出て充分强健には枝を出すことは出來ません。そして蕾も少くなり、花は衰へますから花が濟んでから新しい枝を岐れた部分から二芽位殘して切取ることです。

移植するなら鉢植なら七八の兩月を除くこと、この外は何時でも出來ます。花壇や畑のは十月下旬より寒中まではこのまゝにして、あとの月は翌年の四月頃まではよいとしてあります。移殖する場合は申すまでもなく、小枝を切りつめ、根は細根までも傷けないやうにして掘上げ、植ゑやうと思ふ所は、耕しておいて、深く大い穴を掘り、下層にはよくなれた馬糞や肥料を入れ、その上に二三寸の厚さに土を入れて後バラの根を廣げて植ゑることです。これが濟んだならば灌水し

て、雨天であへなれば土が乾上らぬやうに忘れずに水を灌ぐことです。

薔薇は英國の國花になつております。古代の人はバラの花をキユーピット及びヴイナスの二神の花としまして、歡びと愛と智慧の標としました。開きかけて居る蕾は無邪氣と純愛或は少女心の可憐さを意味し、滿開の花は美人にたとへ、紅白取交ぜての花束は暖い心を意味し、草花に一輪のバラの花を交へれば欲するものを友より受けんの意味ありといひ、二個の蕾の上に滿開の一輪を添へますれば秘密の意味をあらはすのださうです。

含　羞　草

よく動物と植物との區別に出される草で、一寸葉に手が觸れますと、過ぐ葉と葉とを合せて、しまひには葉柄が元から折れた樣にブラリと下りますが、暫時すると又元の通りに起上つて葉を開きます、夜は全く葉が垂れますので別に眠り草とも言ひます。元々花より葉を愛する花で、花も淡紅色の毬の樣に愛らしいのが咲き實を結びます。春の彼岸すぎに蒔いて二三回薄い水肥を掛けてやりますれば容易に成長します。

カ　ン　ナ

日比谷公園などによく見掛けますが、あの紅い燃える樣な高い花です。その莖の雄大な姿はいかにも壯美です、花の色は黃、紅、紫、覆輪、斑入、筋入などがあるばかりではなく、葉にも綠、樺、黑、紫などがあります。花の乏しい夏の日には何より眼につく花です

日本では昔から曇華と言ふのを改良したのでありまして、元來が年中莖も葉も枯れないものです。熱い所でない以上は根のみ殘りますから、冬は掘上げて凍らないやうに藏つて置きます。暖い所ではその必要はありません。何れにしても作り方は容易で、餘り濕氣のない所を選びますれば、一本の根にてよく七月から霜の降る頃まで絶えず花を見せます。種子でも繁殖はしますが、種子は果を結び惡いものである上に、非常に堅いものですから、蒔く時に皮に切目を入れるか、ヤスリか砥石で芽の出る部分を磨り下してから蒔かねば不可ません。蒔くのは春の内です。



化粧問答

化粧研究會婦人修容會顧問
藤波芙蓉

問　神田旅籠町の文光堂から御わけして下さるニキビ新劑を求めてつけました處が、顔がヒリ〱致しアトが黑くなり、却つて見憎くゝなりました、ニキビも一向に直つたやうでございませんが、何をつけましたら綺麗によくなりますでせうか(芝、ニキビ女)

答　それは御氣の毒でした、實はそのニキビ新劑は、先に文光堂主人よりの、强つての依賴で、私自ら處方して調方致したのでしたが、爾後所故あつて、その調製方を御斷り致し、今猶同堂より同様の名で販賣して居るとのことですが、それは私の關知する處でなく、從つて如何なる性質の藥劑によつて調製されて居るか一向に存じませんので、果して顔がヒリ〱するか、つけぬ先より更に見憎くゝなるかも、いまだ實驗致して居りません故、何とも御確答は申上げかねますが、その旨直接文光堂の方へ御問合せ下されたら如何ですか、而してニキビの療劑としては、その發生原因や、症狀等によつて、種々の處方がありますけれど、尤も正確に有効で、そのアトを除き去りますには、剝離劑の應用に若くはないと存じます。

問　御高著新式化粧法に內用白色劑として冬瓜子、桃花、白楊皮の三品を云々との御示しで御座いましたが、右の三品と外に御敎へのベンヅィンとは當地の藥店にございません何れで求めましたらよろしいでせうか(釧路、伺ひ女)

答　冬瓜子外二品は漢藥の問屋、ベンヅィンは相應の藥店には大抵あることゝ存じますがむしろ女子文壇社の代理部に御依賴になられたら御便宜かと思ひます。

問　(一)私はキメが大變あらく、その上顔がアブラぎつて、此頃でも白粉が一時間と落付いて居らず、殊に夏季になりますと、ものゝ二十分と保ちませんので、何とかしてアブラの浮かぬやうのお化粧の仕方と、キメの細かになります化粧品とが御座いますなら。(二)素顔を美しく致しますには、先生御發明のお化粧品中何を使ひましたら宜しう御座いませうか、尚その使用法をも(三重、濱荻)

答　(一)先づ純植物性洗粉で御洗顔なさつて、一度洗面器の微温湯を汲み換へ、それにベンヅィンを乳狀を呈す程度に混合させ、それにて再びお洗ひになり、濕氣ないまでよく拭き去り、コールドクリームの少量を指先にして徐かにすり込むやうに御つけになり、それを紙にてサツパリと拭き、艷肌劑をすり付け、アブラの多く出る部分にアブラ止(拔毛止を代用なさい)を擦りつけキセロルクリームを化粧水若くは橙花水で薄目に解き、ムラのないやう叮嚀に平に塗り、その上に化粧皮又は西洋眉刷毛で、キセロル粉白粉を少しづゝ段々に濃くお打ちになれば翌朝までお化粧が動かずに落付いて居るを、芙蓉が長い間の實驗から御受合致します。キメを細かに致しますには、右のお化粧の仕方を長く續けて御實行になりますれば、自然に御希望を滿たすことが出來ます。(二)丹砂劑又はイヒチオール劑を內服すると共に、過酸化水素水を外用なさつたら宜しいでせう。

問 (一)コールドクリームを塗りてよく拭き取り、艶肌劑を付けますが、いくら拭きましても多少ベタ〳〵致しまして、常にアブラが浮き出ますが、若しや使用法を間違つて居るのでは御座いますまいか、全體私は大のアブラ性でお化粧致しました時は、美しう出來ますが、二時間も經ちますと、アブラが浮き出ますので。(二)先生御發明の化粧品を使はして頂くやうになりましてから、大層美しうお化粧が出來るやうになりましたが、この上の望みには、アブラ性に適した化粧水を。(三)修容倶樂部のお化粧品を私にも御わけして頂くことが出來ますまいか、如何致しましたら御たのみ願はれませうか(山口、千代子)

答 (一)コールドクリームを澤山に御つけになるためではないかと存ぜられます。それにこれをお顔にすり込む場合に、只普通のクリームや化粧水を御つけになるやうに、御つけになつたゞけでは、何の役にも立たず、却つてアブラを浮出さす緣因となりますから、少量をお顔全部にずり付け、その上を指先にて徐かに皮下にすり込むやうになさつて、而して後そのノコリカスを紙でよく拭き取るやうにせなくてはいけません。他は直ぐ前の(三重、濱荻)さんへの(一)の答を御參考願ひます。(二)果して仰しやる通りでしたら、私の光榮であるのみならず、千代子さんの御幸福とお喜び申上げます。御望みとあればアブラ性の人の特殊用化粧水を私手づから拵へて差上げませう。(三)修容倶樂部の粧化品は、一時皆樣に御わけするやう廣告にまで出したのでしたが、會員方の中に反對の議論が起りましたので、また元の通り會員外には御わけせぬことゝなりました一層のこと會員に御なり下さつたらよいではないかと存じます。

問 (一)レモンの實をシボリて取つた液が大層濁つて居りますが、その儘置きましても夏まで腐敗せずに居りませうか、尤も脱脂綿で濾して用ひては居りますけれど。(二)レモン液その儘の濃厚なるを、他の藥品又は水と混和して用ひても宜しいものでせうか。(三)レモン液は化粧用として如何なる場合に最も有効なものでせうか。(四)化粧用以外に於けるレモンの用途を(觀音寺、歆音)

答 (一)化粧用としては搾ツぱなしの液ではいけません、濾過紙で濾して御使ひなさい、斯く濾した液なら、無論夏までお置きになつても腐敗するやうなとはありません。(二)アブラの強い人が、吹出物のある人なら、濃厚のを其儘、普通の御方でしたら、蒸餾水十に對し一の割合位に薄めて化粧水の代用になさつて差支ありません。(三)顔に吹出物したり、シミの出來た場合、化粧して置くアブラの浮出る人に使用さるべきものです。(西)本欄で御答すべき問題の範圍に屬すまいかと心得ます。

問 私は今まで荒仕事を致したとありませんので手の皮薄く、洗濯のたびにアルカリ性の強い石鹸を使ひますと、皮が剝けて血がしみ出します、一時は布の手袋をはめてやつて見ましたが何の役にも立ちませんでした。或る本に西洋人は皮の手袋をはめて洗濯すると御座いましたが、それは何處で賣つて居りませうか御序手に代價も(岡山、佐與子)

答 皮の手袋とは、恐らく誤りでせう。私は護謨の手袋を使用して居ると聞き且つ見つゝあります。現に私も何か化學的の試驗を致す場合に、強いアルカリ性又は酸性の強い液體に手を入れる時には、このゴム手袋をはめて、それより受くる害を防いで居ります。それは出來合のもありませうけれど、私のは特に拵へさしたので、手袋の長さは丁度肱の所までありますが、それで十八圓でした。

答 先生の御高著「合せ鏡」及び「新式化粧法」を拜見致しましたら、幾多化粧品中、比較的完全なるは佛國製キセロル化粧品であるとの仰せで御座いますので、私もこれから其化粧品

を使用致したいと存じますが、代價が何程位のものでせうか、せめてクリームとブードルドリと、尙ほ御高著中に御示し下さいましたベンゾインの代價と賣店とを(佐賀、速子)

答 この御尋ねは二月一日御住所から御姓名まで御明記の上、文壇社代理部宛にて御差出しになられた御手紙で、四月中旬本社編輯局から私の方へ廻送して參りましたので、其當時直接御返事申上げたやうな心地致しますが、未答來箇箱の中に這入つて居りますので、兎も角茲で御答致すとに致しました。キセロルクリームは壹個七十錢、キセロルブードルドリは八十五錢、御地近くでは神戶の丸善洋品店、當所なれば三越、白木屋、丸善等にあります。ベンヅインは大抵な藥店にありますけれど、多くは蘇門答剌若くは瓜哇產の粗製品にかゝり、化粧料として適當致しません。高價でも最良の暹羅產かペナン產のものでなくては駄目です。

問 鼻が低いので隆鼻術の手術を受けて見やうかと存じますが、いつぞや先生の御答中に手術後、何うやら皮膚に障害を起すやうのとあるかに伺つた覺えが致します、それに或醫師はパラヒンを注射するのであるから夏季になるとそれが液狀となつて、却つて自然の美をそこねるとか申しました。果して其樣な不都合のものですか(牛窓、鶴惠)

答 御尋ねの通り、隆鼻術はパラヒンの注射、而も熱氣にて液狀に溶解したパラヒンを注射するので、如何なる巧妙の手術者でも、その注射の傷口を疵なく塞ぐことは絕對に不可能で、結果は其處から外圍の黴菌を誘致し、啻に自然の美を障害するのみならず、生れもつかぬ片輪者となつた實例は、升で量る程あります。

問 (一)アブラ性で、ニキビ吹出物が顏一面に出て居りますが、これを全治する法を。(二)ニキビの跡が少さな穴になつて居ります、これが全治藥を。(三)沒食子酸蒼鉛、杜松子精、並に輕石鹼は何れにありませうか。(四)剝離劑の原料は。(五)輕石鹼とは加里石鹼のことでないでせうか。(六)加里石鹼で洗顏してレート化粧水を使つて居りますが、ニキビも吹出物も一向に直りませんが(室蘭、愛讀女)

答 (一)と(二)は剝離劑の應用をなさるのが、一番有效でせう。(三)何れも醫療用の藥品ですから、何れの藥店にもある筈と存じます。(四)其剝離すべき症狀や皮膚質によつて、素より一定して居りませぬが、そのうち尤も簡便なツアイセル氏の創製せる泥膏の處方をお示し申上げませう。即ち沃降硫黃、グリセリン、酒精各七匁五分、炭酸加里一匁五分を煉り合せ、夜間塗布するのです。(五)御察しの通りです。(六)そんなことで直る筈はありません、尤も輕度の吹出物などでしたら加里石鹼で治することもありますけれど。

問 御願ひ致した藥劑、日外も申上げた通り、幾回塗布するも何等の効驗なく、先生を信賴するものから、定めし立所に功を奏することと豫想せしとは全然の相違、是非これが御說明を願ひます(千葉、中川)

答 千葉の中川と仰しやると、たしか澄子さんと仰しつて脫毛劑を差上げたお方のやうに覺えますが、この御難詰によつて、貴方は女性らしい名に素性を僞はる男子であつたことが解りました。私は貴方を女性と認め、そのウブ毛を脫くものとして、特に脫毛劑中で力の弱い硫化バリウム劑を撰んだのでした。若し男性で硬い毛のでしたら無論、雄黃劑か硫化ナトリウム劑にするのでした。全體此等脫毛劑に應用する硫化類は、大氣に觸るゝと極めて分解し易く、一度分解すると何れも毛質を溶解する力を失つて御難詰のやうな無効に終ることと決して珍らしい事ではありません、それ故名を重んずる醫師は、その脫毛すべき時に臨んで、該劑を調製し直ちに使用することに致して居ります。私も其邊のことを承知して居ります。



文藝欄

小説

道子

近江わかば

「あゝ〳〵辛度かつた。」と母親はさも疲れ切つたやうに云ひながら、拔ぎ捨てた晴着や塵埃に染まつた白足袋を一まとめに壁際へ押遣つて、ホツとしたやうに火鉢の側に寛いだ。

電燈の下にはいつもの小さな餉臺が持ち出されて、父親は獨酌で淋しさうに、クビリ〳〵つ遣つてゐた。

「矢張何うちても家がえゝな、年を寄ると何やら辛度うて〳〵て何處へ行つても早う去にたうてならん」と母親は今つぎ添へたばかりの、ぽつぽといきりの立つ炭の匂ひを懷しいやうな心持に嗅ぎながら、落附いた居心持のよさゝうな容子に、緩く煙を吐いてゐた。

道子は、晴着のまゝの潮色ちりめんの羽織の裾を疊に引いて華やかに裝つた姿とは入れ合はないやうな沈んだ心持を抱いてぽつつりと其處に座つてゐた。電燈の光が餘りに明る過ぎるやうな氣もしてゐた。いつか道子は取り止めもなく今日の一日を思ひ浮べてゐた。それも青黒い木立に織り込まれた燃ゆるやうな紅葉の色や、其間を華やかに綴つた衣服の色彩なぞは只ぼんやりと眼をかすつていつたに過ぎないやうな氣がするが歸途に車の上から望んだ寂しい湖の夕景は、妙に心に染んだ。ひた〳〵と薄暗がなめるやうに寄せて來る黒ずんだ水の面や、風を孕まない鈍色の帆前船やぼうと薄墨色に暮れて行く遠山の際を僅かに染めてゐる名殘の夕映の色なぞは、染み着いたやうに眼に殘つてゐる。今迄にこんなに寂しい悲しい湖の夕を味はつたことはないやうな氣がする。此頃の自分の心持を其儘に現はしたのではないかと思つた。ギィ〳〵と艪の力に僅かに搖られながら、グツタリこうなだれてゐる帆前船や、彼の悲しい夕映の薄墨の混じつたやうな褪せた紅色は、自分の心の色である。心の形である。

「道さん」と呼ばれて、つと彼女は顏を上げた。

「不精せんと早う着替へてお了ひ、まだそないに寒うもないのに」と母がいつた。

「其麼處に座つてゝはえゝ衣服が汚れるぞ」と父親も側からいつた。それが何だか四つ五つの小兒にでも云ふやうな調子だつたので、道子は思はず微笑んだ。けれど暖かい此場の空氣に混じり合つたやうな輕い氣分になつたのもほんの瞬間ですぐ〳〵また元の暗く閉された樣な氣分になつた。母は斯うした空氣の中に云ひ知れぬ暖かさと懷しさを感じて、やすらかに其中に自分を憩はすことの出來る幸福な人間だと思つた。父も矢張さうらしい。自分はもうさうした中に暖かに抱かれることの出來ない人間になつた。自分は今父や母の見も知らぬやうな苦しい世界にさまよふてゐる。一日〳〵物の色の褪せて行くやうな寂しみにも閉されてゐる

父母のふところに、やすらかに息づいてゐたのももう遠い昔となつた。道子はそんなことを考へると、妙に淋しくなつた。父や母の平和な顔も電燈に眩しい室の中も、味氣なく眼に映つた。

母親は今日いつた先の人出の多かつたこと、紅葉の美しかつたこと溪流の綺麗で爽さうだつたことそれから料理屋の混雜なぞを燥やいだ調子にのべつに話立てゝゐたが、ふと何か思ひ出したやうに一寸顎を引くやうにしながら、父親の方へ眼を向けて

「あの今日久しぶりに、増美さんに逢ひましたの、瀧樓の廊下でパツタりと……すると増美さんがな、「只今お孃さんは何方になんて云はゝるのどすがな無理もおへんけんど、女學校を出てから三年にもなりますものなあ」と何だか歎息するやうにいつた。

道子は話が面白くもない方へ反れて行きさうなので、そつとその場をはづして着替へに立つた。居間へ入ると、ランプに燈を點けて、ぼんやりと其處の座布の圜上に座つて見たが、不快な氣持は去らなかつた。

どうすれば見えがいゝとか、惡るいとかいつて兩親達は、子供を自分の生活の虛飾にしやうとしてゐる。それが思ふやうにならないといつてはすぐ叱言を幷べる。自分は自分を支へて行くがやつとであるのに、その上に親達の虛榮心迄滿足させなければならないと云ふのは、思へば苦しい負擔だと感じられた。自分は家庭から暖かに抱かれるやうな心持は消えて了つて、只其煩はしさのみがヒシ／＼と自分を責めてゐるのにいくら迫られたからつて、その上に眼隱をして引き合はされたやうな男と新しい家庭なんかを造つて行く煩はしさにどうして堪へられやう。じつと斯んなことを考へてゐると何だか次第に物臭くなつて來て立上るのも可厭だつたが、道子は思ひ切つて衣桁から着替をはづして手を通した。ヒヤリと冷たい肌ざはりに思はず身慄ひしながら、襟を搔き合せやうとすると、はらりと袂から何やら紙切が落ちた。取り上げて見ると、知己の或青年からの手紙で今朝行きがけに衣服や髮道具なぞの一杯に散らかつた慌しい中でろくに眼も通さずに押し込んで置いたのだつた。別に讀み返して見るやうな氣もしないけれど、何となくまたそれを擴げて見た。いつものやうな色の濃い文句が厭味らしく眼についた。此人にも隨分無沙汰したと、道子は思ひながら、何だか其男から負債でも責めたてられてゞもゐるやうな氣がした。だが何といつて此男に書いて遣る懷しさうな文句は見つからなかつた。そんなことをいつてやるのは可厭だつた當地の女學校を出てから、東京の兄の宅に一年間ばかり身を置いた頃に知己になつた男で、義姉の遠緣に當るのだつた。當地へ歸つてからもよく手紙を寄越し／＼した。義姉の親族といふので兩親は別に言葉に出しては咎め立てはなしかつたが、それでも手紙の來る每にする兩親のまづさうな顏は、道子には讀めてゐた。此男の手紙をそんな兩親達の眼の光る前で受取らなければならないのが腹立しくもあつた。それに近頃に此男から來た二三週の手紙を考へ合はせたり、去年の春突然に東京を去るといつた時のたゞならぬ顏色を思ひ浮べたりして見ると、ひよつとすると自分のことを何とか思つてゐるのぢやなからうかと云ふやうな氣がして來た。もしさうだつたら可厭だと思ふ、此方ぢや何とも思つちやゐないのに――それは若い淋しい氣まぐれな心から時には懷つこい瞳を交し合つたことはあつた。只其丈だのに、何とか取り違へられてゐちや迷惑だと思ふ。

――兄は留守である。義姉は夕餉の差圖に臺所へ立つていつた短かい冬の日は早黃昏の色が邊りに迫つて來て、白い唐紙や疊の表には薄い陰影が柔かに刻まれる。殘された若い二人は何となく胸のときめく心地しながらお互に言葉もない、道子は男がやたらに吹かす煙草の煙を何となう鼻に柔かに感じながら眼を下に落して、つく／＼と蜂の巣のやうに火鉢の灰にさした吸殼をぼんやり見つめてゐた。知つてか知らずにかいつか男の長い指は、道子が火鉢の緣に掛けた柔らかな手に觸れてゐた。道子は其れを氣附いてからも別に引かうとはしなかつた。そして媚を含んだ大膽な瞳をも男に送つた。――道子はさうした時のことを今思ひ浮べて何だか悔いるやうな氣もして來る。自分は其男に戀してたんでも何でもないけれど、たゞ異性と云ふ溫味だけを別にそれと意識せずに、何となく物柔かに感じてたんだと思ふ。それを自分が何んとか思ひながらも、女氣の心弱くて明し得なかつたのだなぞと、思はれてゐちや心外だけれど道子には彼の頃の生活が懷しかつた。心持も今のやうではなくもつと柔かに初々しかつた。彼の頃の桃色の情緒は今はもうスツカリ色が褪めて、其上にどす黑い薄墨色がにじんで了つた。今はもうそんな異性に對

して感ずる物柔かな情緒も羞恥の影もない。道子は何だかそれが淋しいことに思はれた。道子は是迄から思つたり思はれたりした人の幾人かあつたけれど、皆自分の心の上皮にかぶつてゐる誇と云ふ堅い殼が邪魔をしてその何れの人とも熱い手を握ぎる迄には至らなかつた。けれども、それも破つて見れば何でもなかつた何だかそれが馬鹿らしくも思はれるそんな僞られた誇の爲に生々した歡樂の中に身を溺らさなかつた自分の過去が物足らなくも思はれた、だが道子は自分は此儘で終つて了ふとは思はれない。そう絕望して考へたくはない。自分はまだ若い。自分の前途にはまだ生々した廣い世界が擴げられてゐるやうな氣がする。どの道をどうたどつて行つて……と云ふことはまだ自分の心の上に具體的に現はせないけれど。――



（天賞）洗濯　廣島縣　池田のぼる

「道さん……道さん」と襖の外で母親の聲がした。道子は、何だかはつとして聲が咽喉に塞まつたやうな氣がしたが、やつと經つてから「はい」と返事した。

母の黑い影がしのびやかに自分の身體の中に入つて來て臟腑の底迄も見すかして了つたやうな興ざめた心地がた。「何しとゐるのや、もう先刻に九時が打つたえ疲れたやらうさかい早うお休み」と云ひ捨て．スタスタと廊下を彼方へ引返していつた。

道子は、ぼつとした眼で、ランプの火影を見つめながら、耳に入れるともなく一つ／＼暗に消えて行く足音を聞いてゐたがやがてふつと燈火を消してふら／＼と廊下へ出た。青白い月の光は、漲るばかりに庭に降りそゝいでゐた。大きな

枇杷の葉が重なりあつた黑い影を、クツキリと文庫藏の白壁に映してゐる。もう大分鋭どみを增して來た夜風はヒヤリと頰に觸れた道子は何だか急に身も心も引きしまつて來たやうな氣がして、思はずシヤツキリと其處に佇ずんだ。（天賞）

平和

長谷川赤女子

「もう被居らなければいけないんでせう？夏子さん」もはやさつきに食事の鐘が鳴つたので房子は氣が濟まぬらしく斯う云ふた、夏子は、「エ！」と長く引いて後を又續け樣としたけれど今の言葉に話の繼穗を失ふたので其儘默つた。

廊下にはもう足音が途斷えて恰度西洋館でドアーを閉めた音が大きい建物に強よく響いてかすかに家がゆれた、チツト耳を澄まして居た房子は「あらもう皆さんさつきに行つてお仕舞になつたのネまあ早く行らしつて頂戴、本統にこんなに遲くおなりになる迄居て戴いて……御免遊ばせね」

房子は時間正しい此學校の規則を又夫を守つて居る夏子の平常の性質を想出すと自分の爲めに斯うして居て吳れる夏子に眞に氣の毒になつて今迄考無しに口に出した「寂しい」と云ふ言葉を心密に呪ふた。

夏子は少しも氣に掛けぬらしく輕く笑ひながら、

「好いんですよ少し位遲くれても……でもネ貴女が御心配なさると却つていけませんから、ぢや行つて參ります、ちよつとの間お寂しいでせうけれど私早く濟まして來ますから――」と漸く中腰になつた。

「えーどうぞ私もうちつとも寂しく有りませんの、ですから御ゆつくり召上つていらしつて頂戴、ね、ね」

「さう？では」と靜に夏子は障子の外へ出た、そして草履をかけながら戶口の方を向いて見送つて居る房子の顏を一寸見て、其黑く澄むだ瞳に微笑した、それに釣り込まれてニツコリしたのを機會に「行つて來ますよ」となつかしげに云ふて戶を閉ぢた。

ハタ〳〵と一つ〳〵輕く廊下を踏む小刻みな音を房子は數える樣に耳を澄ました、夏子の足音は漸々に低くなつて、階段に掛かる音に變つたと思ふと、間も無く最後の足音がやゝ強くパタンとした後はもう靜に〳〵成つて、何所とも解らぬあたりの硝子のユレル音が折々微にする許りになつた。

房子は夫れを聞き終ると、全く事が成し終えた時の樣にユツタリと寢返りを打つた、そしてやり場の無い眼を電氣に持つて行つたけれど、間も無く閉ぶつて仕舞つた。

眞黑な雲の樣な物が暫く眼の中で烈しく動いていたと思ふと、やがて夫が靜まつて、何とも云へない伸びやかな平らかな氣分に落付かされて行くのを感じた。

かう何と云ふて好いだらう、此頃の房子の心持、夫は本統に美しい圓滿な感情に支配されて居る比較的堅苦しい此學校の規則は、曾つては果てなく廣がらうとする房子の翼を少からず縛る樣に感じられた、或時等は全く自由と云ふ物を奪はれたとさへ思ふた時も有つた、其の度に若かい房子の心は無智な憤りに堅められ縮められて行つた、けれど此寮内に漂ふて居る或力――夫は取りもなほさず宗敎の力である――が自然と房子の心を今の方に導いて行つた、そして夫は或晚勉强の無い自由の夜だつた、食後の拜禮の時例になく隅つ子に獨で腰掛けて眞向ふの壁に掛かつて居る額の廣野に牧師と共にゐる多くの羊が脊ばかりが柔かく光つて居る畵を見詰めながら、物も云はず皆の歌ふ讃美歌を聞いて居たそして何共云へない靜な平和な平らかな氣分に落付かされて行く自分の心地を、チツと見守りながら、別に逆らうともせず、其次の聖書の朗讀迄さうして居た、低い謙遜な少女の祈禱が半ば過ぎた頃、房子の眼から熱い〳〵泪が押えてゐる掌に滲で來てとう〳〵泣いて仕舞つた。

何の故の泪かはわからない、其瞬間房子自身には云ふ事の出來ない曾つて經驗しなかつた滿足と感謝とそして美しい生とを沁々思はせられて電氣の消えた眞暗な講堂をいつ迄も出樣とはしなかつた。

其事が有つた時から、お房は碎かれた心地で自分の周圍を受入れ、又注視するやうになつた、起床の鐘で起きて勉强してまた鐘で一所に皆眠る――凡て定められた時間で每日同じい事を繰り返す、そして土曜日より

外に外出されない今の生活——人は不自由とも平凡とも亦無趣味とも云はふ、けれど房子にはもうそんな言葉は決して出なくなつた。放たれた刺戟の多い惑ひの迫て來る中に抵抗して、高潮な感情に生きると云ふのも意味ある生の一種かも知れないけれど、亦此寮と云ふ懷かしい氣分の漂ふて居る中に、此若かい日の感情を若かい人と共に置いて實社會——若し然う云ひ得るならば——から離れて處女の美しい感情を裕に伸び〳〵と歌ひ得る今の身を平凡と嘆くより以上に平和を感謝して居るので有つたからだつた。

「眠つていらつしやるの?」

晩の膳を運むで來た夏子は考へ耽けつてヂットしてゐる房子の平らかな呼吸を伺ひながら低い聲で云ふた

「イヽエさうぢやありませんの、まあどうも有りがたう御座いました——」

房子は起き上つて靜に箸を取つた、けれども今の前の靜な考へが未だ續いて居て折柄はじまつた夜の禮拜の讃美歌にともすれば聞き取られてヂツと耳を澄ます事があつた、そして「おいしくないんでせう?」と氣の毒相に聞く夏子の聲に氣が付いては又箸を動かすのであつた。(地賞)

迷ひ道

紀州　林口和香子

「私は貴女と二箇年間一緒に居ましたから、兄妹だと思つて忌憚なく言ふと、御兩親のお考の樣になすつた方がよくはないかと思ふです。失禮ながら無暗と東京へ飛出して行くのも考へ物ではないですか。よく思案して御覽なさい」。

と校長が親切に忠告し且つ相談相手となつて吳れた。雪代の心はいとゞ迷つた。無論校長の言ふ通り十五や十六の少女ではなし、二十一と言へば是から修養すると言ふには已に晩い、自分一身の安全から言へば今起つた緣談……。殊に父母も兄も非常に進んで居る事ではあり自分には過ぎた緣談だと雪代も思つて居るのであるから身を極めた方がよいかも知らぬ。併しながら上京と言ふ言葉はともすれば若き彼女が血を湧かしめた。

雪代は幾度か在京中のI生からの手紙を繰返した、そしてこんな言葉が電の如く雪代の目を射た。

「あなたは決して××村に朽ち果つべき身にあらず藝術家たるべき素質は充分備へて居るではないか、蛟龍はつひに地中の者ならず、是非とも上京して文筆を以て世に立ちなさい。僕不肖ながら一身に引受けて御世話申し上げる」草深い田舍に引こもつて居ては駄目だ、成功しようと思へば、必ず上京しなければいけないと繰返しI生は說いた雪代は無論自ら作家を氣取ると言ふではなかつたが、好める道には一生を委ねても惜しいとは思はなかつた。藝術の香匂ふ都會の空氣!。華やかな活動の舞臺!。雪代は此樣な事を考へる度に恍惚と成功の影を夢みるのが常であつた。徒に躊躇して居るのが何だか惜しい機會を逸して終ふ樣でもあり、また折角誘めて吳れるI生にも濟まない樣な感がしてイラ〳〵してならなかつた。

さうだ、愚圖ついて居るべき場合でない、上京するんだ上京々々と心に叫んでも又忽ち暗い影は雪代を襲ふ。上京するとすれば父母の意に逆らねばならぬ、若し失敗した時に弱い母の歎を見るに忍びないさりとて父母の意のまゝに結婚すれば安全ではあらうけれど一生鳴かず飛ばずに無意味?な生を終るに過ぎぬ、

雪代はあまりに意氣地のない妻と言ふ境遇を疑つた。否それに甘んじて居る世の多くの女の心事を疑はざるを得なかつた。

「女は果して嫁さねばならぬものだらうか?」とは彼女が年來の疑問であつた。そして譯もなく丸髷に憧るゝ多くの友を心中で冷笑した事もあつた。それがやがて今自分の身の上に降りかゝる問題となつたのだ。

「お前が嫁つて吳れゝば……」と賴む樣にする母の顏を見れば燃え立つた雪代の心も鎭らずに居られなかつた。けれども直にまた心は妻と言ふ束縛より脫れて、よし縛れてもいゝ、上京して思ふ樣戰つて見たいと言ふ方に走つた。そして破れても死んでも決して惜しいとは思はないけれど……。「あゝ私も二十一だ。母樣が心配するのも無理はない……。いつそ此まゝ上京と言ふ慾望も起らず、緣談なんか持上ずにいつまでも生徒らと遊べればいゝなあ」と果は投出した樣にかう思ふのであつた。(人賞)

詩



去りし吾家の跡

豊後 散殘る花

日はくれぬ
月はてらしぬ
しかあれど
いくとせか
わがすみなれし其家は
むかしの影をそのまゝに
淋しうたちぬ家の門
日はくれぬ
あゝわが家はこゝなりき
われらが家はこゝなりき。
すぎし昔のありさまを
小さきむねにしのびつゝ
たゝずみをれば
黒髮に
ハラ〳〵とちるひざくらの
さても生ひしよ空高く。
みそらの星はまたゝきぬ
折しもきらめく燈火に
障子にうつる人の影
あゝなつかしき其かげよ
いかなる人の住みそめし。
あゝわが家はこゝなりき
われらが家はこゝなりき
吾れは思はずたゝずみぬ
昔にかはらぬ面げかを
小さき胸に忍びつゝ。(地賞)

舊いには違ひないが、斯ういふ舊さは却って
なつかしみがあつて好い。(評)

我が寶

富山 鈴木くが子

×

我が清き眸は、よき詩のために輝き、
我が尊き唇は、よき詩のためにうち顫ふ。
さても我が寶ぞ、
此上なきたからぞ。
この眸と、この唇は……

×

橇を引く北國の子よ！
強くあれかし。
氷を渡る白熊の如く。
木枯のごとくすごく淋しく……
あゝされど、な忘れそ、
林檎畑に眠る心を。……

×

あゝ神よ！
いかなれば我に、かくばかり人[illegible]ふる
心を與へ給ひし!?!
かくて終日、終夜

君戀ひて泣けるを……(人賞)

三篇ともすなほでよい。(評)

小雨降る夕

神田 小島和子

シト〳〵と
かぎりなくも
小雨は降るかな。
窓に倚れば
憂鬱なる夕の匂、
遣瀨なき箏の音のむせびなき。
吁、思へば去年の秋
逝きし姉君の哀の曲、
哀歌のひとくさり。
かゝるをりしも
夕は刻々と薄き闇を籠め、
シト〳〵と
小雨はわが胸に沁み入りて
心冷たし。
遙かに彼方、高き窓より
洩れ來る灯は
わが窓先の木犀の葉に光れり。
刻々と、濃き闇は
窓口より流れ入り、
わが室を暗につゝめり。
シト〳〵と
小雨の冷たさひやゝかさ、
遣瀨なき箏の音のむせび泣き、
暗き室に

わが心はすゞりなく。

柔かな感じが能く出て 女性らしい作だ。（評）

磯邊

茨城 丘ゆう

あゝゆかむ
いかにしても明日こそは。
淡き雲、さすらふ磯邊
　波の音はけふも砕けて。
あゝ君は一日、のどかなる
空の下にて終日
たゞ蒼き海のぞき給ふ
わかうどの漁人よ
見もしらぬ膝なれどすがり
て
あすこそは、孤獨のわが旅
をやもの語らむ
みも知らぬひざなれどすが
りて

　一句〳〵見てゆくと力はあるが全體としては徹してゐない、詩を作ると共に、頭腦も作り給へ。（評）

よろこび

姫路 九十子

うれしさに
女心のはしたなさ
水の面に、雨のしづ〳〵の
とび上りたる如く
あやしうもかき亂れ
呼吸ぐるしう胸の湧く
　苦しいよろこび
　重いよろこび



（地賞）はうた　小石川　しげゐ

心の野

たまゆらに
君が蒔きたる黒き種
咲くは何花名は知らず
絢爛の野をば夢みつゝ
こゝろの野をば飾るべく
　名も知らで
おそれ心地に、われは培ふ
雨よ降れふれやはらかく
しつとり濡るゝわが心。

心の野の方がよい、あなたも一歩〳〵進んで來る（評）

紺の匂ひ

大阪市 井上園子

春の日の眞晝時
そよりそよりと風が吹く
隣りの染屋の物干に
幾つも幾つもかけられた
艶な姿の紺しぼりに
しなやかな小娘の
ほの暖かい肌のよな
優しい春の風が吹く
そつとからかわれた紺しぼ
りが
おかしそうに身をゆする
と、おだやかな柔かい
そして又嗅覺をそゝる樣な
紺の匂ひがぬけてゆく
ゆるやかな静かな心持
なつかしい紺の匂ひよ
しなしなとはづかしさうに

可愛い春の風が吹く
　紺の匂ひは好かつた、紺の匂ひをもつと唄つ
　て欲しかつた。(評)

春の夜

栃木　小森いつ子

春の夜のさびしみは
賣子の呼ぶこゑのかなしきふるひよ
其の聲の電車の音にまつはれば……
人は悲しみに悶えたり。
停留所の赤き灯よ
人去れば車されば……
うらわかき賣子は
夜の風のやゝ寒むきを覺え……
ひとりわびしく柱によれり。
青き光り――車の後を見送りて――
涙はみえねど――
若うどは――
とことはに今宵ぞ忘れね。

小曲

上毛　雲　路

庭のあまたの小さな石に
小雨きらく光る時
櫻の花びらしみぐと、
ものうき顔にすゝり泣く

眞晝の夢

京都府　薗田　久

花や泣く。
白き眞晝の夢かなしさに、
　こみどりの
葉かげに面を伏せつゝ泣く。
わが胸寂し。
靜けきひるの夢の姿よ、
打ふるふ双手のを指に
いたましき戀の影やどる。
花や泣く。
赤き脣おのゝかせ
みどりの葉かげに花や泣く。

音の滴り

宮城縣　小花花子

吾が愛づる歌の一曲
　かゞやかの光の肌に
音もなき音のゆらめきつ
　夢白く水にうかぶ
鶯鳥よ――白き雲――
　若葉をこめて吾が瞳に
只よろこびの美しき涙
　音の滴り
うち顫ふ翠の肌
　あたゝかき光の肌
色もなく空虚の胸に
　こともなく只よろこびの
たゞたゞ

醒めし人

伊藤夕陽子

涙なきを冷たき心とや思ふ
　あな淋し
「廢園のコスモス」と
眉清き若人は云ふ
術もなし
(若き)誇りに輝く瞳を
黑色の羅は悲しくも掩ひぬれば
隙洩る涙は人の子には悟られじ
まどろみの夢に見るやすけき春よ
南國の紅は胸の血潮をそゝる
儚なくも醒むるがくやし
永久の夢に生きんとはねがはねど。

夕の空の歌

伊賀　末田美代子

薄赤う
力なき光のみだれ
疲れし日の靜かなる中に
さびしき愁あり。
丸き背の
丘
並みて林なす白楊の一むれ
ほとりを
縺れ、縺れてさまよふ暮光――。
夕の空、
かゝり立つ根なし雲と侘しき心を
吹きなやむ一列の風――
默しつゝ
黑き鳥はとぶ――
傷ましく爛れたる空の涯を。



小品文

燕の來た日

伯耆　ふみ子

柏楊の一枝と、李の枝とを、美いちやんが、何處から、折つて來たのか、私の机の上の花瓶にさすつて、どん〳〵私の部屋にやつて來た柏楊の方はもう大分若葉が大きくなつて、若々しい葉綠が滿ち〳〵てゐる。李の方はまだ、蕾か新芽かわからない樣な、思ひなしか、少し此の頃の春日に日燒けた美いちやんの顏は、頰のあたりがリンゴの樣に、よくうれてゐる。私は何だか柏楊の若葉李の新芽美いちやんのリンゴの頰、此の三つをいつとはなしに對照してゐた。すると、裏庭の築山の向ふの、白と紅のまだらな八重椿の花が、ポタリ地に一つ落つた。俄然チイと一聲――輕い珍しい聲がした。私の胸はハツト慟悸がうつた。オヤ南國に旅せし、燕の君！　早速お參方に經節のせて、上り口の小椽に出して置くと、二羽の燕は軒さきに靜かに休んで居た。私は此の二羽の燕の君の幸を、瞑目して一寸祈つて直ぐ芹つみに出た。（燕の來た日には、必ず芹をお浸物にして食べる家例である。）

ちよろ〳〵水の流れる小川のへりにはえて居る芹を、根こぎにして取つたすつぽん〳〵、及物を入れないでも軟い土にはえてゐるのであるから、面白い程よくぬける。うら〳〵とてる春の日に、川べりの白い路のとうの花や、自然ばえの煙草の廣い葉が悠長に息してゐる。ふむには惜しい若草の上を、歩いて小川の流れに沿ふて籠いつぱい摘み取つて家に歸つた。

每年巢食ふ戶口の上の梁には、早や少しばかりの濡れた土が積まれてあつた、夕方お膳の上に私の摘んだ芹がのる頃には、二羽の燕は梁の上に淋しさうにしてゐた。「巢がまだ出來ないから寒いわね」って、美いちやんは、しきりに同情して居た。（天賞）

何と云ふ優しい事柄であらう、事實も優しく筆も優しい、近頃の好い小品文である。（評）

黒い虫の多い夜

信州　岩戸せつ

春の樣な氣がしない。四月初旬ではあるが、丁度六七月頃の樣な心持だ。私は、机に向つて本をよみはじめた、今夜は、是非、二時間程、讀まなくてはならないのだ。

しかし、どうしても、しつかり勉强できぬ、只、字を見て居るばかりで、何が書いであるのだかすこしもわからぬ。

一體、今夜は頭の具合が悪い、後頭はなんともないが、前の方はどうも變だ、別に痛いとも思はないが、なにかうすい幕の樣なものが、皮と骨との間に張つてゞもある樣に思はれて仕方がない、それに鼻がしつかりつまつて居る無理にいきを吸ひ込まうとすると、小さな穴があいて、つうと音をたてゝ這入る、極く僅か。で、どうしても、口をあいてゐなくては居られぬ。

それに、今夜は、小さな黒い蟲が、たくさんランプの所へ、集つて邪魔で仕樣がない。蟲が出るなどゝ云へば夏の樣だが、この蟲は雪解に出る蟲だ、所々に消え殘つた雪の上を見るとよくこれが居る、それが夜になると燈火へ集る、今夜の樣に――。

私は、ほそれが氣になつて困る、ランプの圍りや本の上や、顏や頸やの圍りやへ遠慮もなくとびまはる、それがほやへあたつて本の上へおちる、そしてしばらくたつとまたまひたつ、しかしそのまひたつまでが私にはどうしてもまちきれぬ、目は本へ口は蟲へむけてふきとばす。しかし蟲はなか〳〵とびさらぬ。力を入れて强く吹く、さうすると、蟲はとぶが、ランプが、またゝきする、消えさうになる、蟲もいやだがランプの消えさうになるのも困る、身體があつい。着物をぬがうと思ふが頭や鼻の工合の悪いのか風ではあるまいかとおもはれてそれもおそろしくて出來ない。

今夜は駄目だ、明朝にしやう。

ランプを消さうとするときそばにつんであつ

た本の所を見たら小さな黒い蟲がたくさんついてゐた。(地賞)

　氣味のわるいやうな小さな蟲の事が能く書かれてゐる。(評)

或日曜の一日

在米　Y子

カランくとスレーが通る音する、今起きたばかりの私は窓のクロースをあげた、グラスと薄いレースのカーテンとを透してやはらかい春の日は室内を照した。昨夜ストーブへコールを入れておいたのでお湯はグラくにわいて居る、顔を洗って机の前に腰かけて白人風の髪に結ぶあまり白くない私の顔でも朝日がさして鏡に反射してうつるので綺麗に見える、クリームをぬつてよくふきとつてホワイトの粉白粉をつけて眼の上と頬とへピンクのをざつとほどこしたら一層美しさを增して見せる、もう八時。

旦那樣もお起きになつたので御飯をすませる、今日はサンデーだから何處かへ一しよに遊びに行かうとおしやるけれど、少し風ひきの氣味でもあるし、女子文壇が一月十五日の增刊と二月のと二冊來て居るので、次のサンデーにつれて行つて戴くことにしてお留守番をする、新聞をごらんになつて、お出ましになつたのは十時一寸すぎ。今日は一日ストーブのわきで讀書して日を暮した。

お夕飯に茶碗むしをこしらつてお待ちする、八時になつてもお歸りにならない、どうなすつたんだらうと思つて外を見れば眞暗で雪さへチラチラ降つて居る樣子。遠くではカヨリの聲がする、先日の白人の家のベビーが死んだとかきいたら神經のせいかベビーの泣き聲が聞える樣な氣がする、まあなんて淋しい夜だらう？早く歸つて下さればいゝのに……

ぢつとして居るとなほく種々の聲や音が耳に這入るので思ひ出して故國の丁子樣とお父樣へ御伺の手紙を書く、東京にゐらしやるF子樣へも書かうかと思つたけれど、マリーしたなんて書くのが恥かしいから止して置く。時計を見れば九時、まだお歸りにならないので又戸をあけて見ると、黒いかげが一間ばかり前に……おゝ嬉しいと思はずホツとした。

「あはゝ……見つけられてしまつた、どんな樣にして居るかと思つてそつと見るつもりだつたが……今日はN君の家へ行つたらT君等が來て居つたので蓄音機を聞いてとうくおそくなつて可愛さうだつたね、だから一しよに行かうと言つたんぢやないか、ミセスが何故つれていらつしやらないつて言つていらしたぜ」

ほんとに私もおともすればよかつたわ……御飯戴いていらしたとおつしやるので折角おまちして居つたのに一人で食べる

二人で筑前琵琶やら詩吟やら十一時過ぎまで起きて居た。(人賞)

　米國から來た文章と云ふので、ひいき目に見た、同じ書くなら、もつとハイカラの本家らしいことを書いて貰ひたい。(評)

曇り日

丹波　さみどり女

荒し田の中には白い花のなすびや、蓮花草の若葉が柔かく茂つてゐる、薄曇つた空の滴りが落ちて、滲み廣がつた樣な薄霞が、それらの花や葉の上迄、覆ひ被さつてゐるのが重い瞼に感ぜられる。

重り重つて遠い部分は薄紫の色さへ見とめられるがつい目の前には色を作る丈の厚味が無いため、はつきり肉眼には、意識されないのだらう。けれど白い清楚な花にも秋見るやうな際やかさ晴々しさはなくて、どことなく煙つた樣な、かげらふ樣な、朧さを持つてゐるのが彼の霞の奥の遠山から受ける視感と同じ氣分を與へられる

小さい芹の若葉が少し計りの水の上に茂つてゐる。小さい葉の一つ一つに自己と云ふ隔りを示した葉緣の際やかさは淺い水の面では、一層目ざめる樣に感じられる。其葉が含む高い香氣は濁りのない緑の色に表られてゐる。むつくりと葉を盛り重ねてゐるのを見ると、ついそゝられて摘み度くなる。

雨に遠去かつて白味を持つた田の土には、しつくりと持合はぬあらくした塊が、柔い参生の上を抑へてゐる。

トンくと調子を置いて鍬を打つ女の人の態度

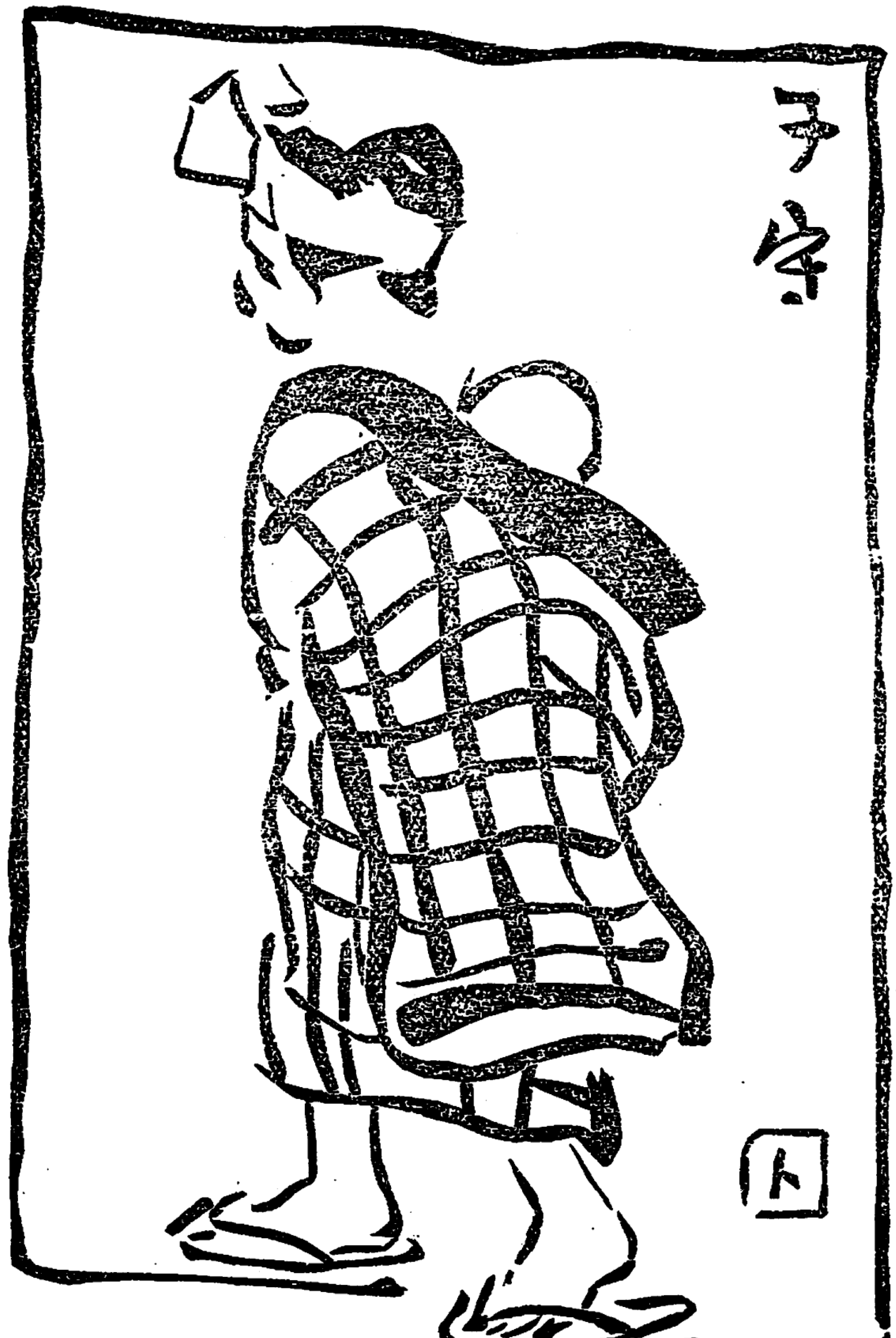
も氣の急かぬ長閑さを、思はせられる。被衣の脱いで丸めたのが、田の畔に置いてある。畔には若葉の中に未だ冬枯れたまゝの茶色の芝が交つてゐる。其中に薄い眞綿に包まれた樣なむつくりしたよもぎが一葉二葉覗いてゐる。之にはあゝした強い香りがあるのが似合はしからぬことの樣に思ふ。此度強い香りは黑い固い根に含まれてゐて、それが幾分葉脈を流れ廻るのだらうと思ふ。曇つた日の足の裏全體をしつくりと土に付けて落着いて歩かれる。そして見る程の物に何となく考へさせられて、逢ふ人にも笑顏を見せることが出來にくい。

自然を忠實に描いたのが此作の價値だ、くだらぬ理窟などはよした方が好い。(評)

郵便

上野禮子

ついさき頃まで深く〱積つてをつた雪も、やうやう消えつくし、さしものこの北國の山里にもちらほら花といふものが見られるやうになつて、小鳥はちゝと淸い音樂をかなでゝきた櫻はまだゞが、綻びそめた野邊の福壽草さては小川の芹など、長い冬籠りから脫した人の心をいかにのび〱せしむるであらう。今し定めの勤めを終へ、艶やかな春の日をあびてお茶をのみながら、美しい雲の行方を眺めてゐると、思ひはそれからそれへさては故郷にはせてうつとりとなつてゐたと窓から勇ましく郵便との聲……嬉しくて飛んでゆくとそれは〱なつかしい〱友からのたよりであつた。おゝしばらくであつた、君よ、雨の日風の日思はぬときとてはない相かはらずまめで遠く海のかなたに活動して居られる君、活潑なお姿がありありと目にうかぶ。うるはしい水莖に桃の花びらそへて……やさしい君の志今更にしのばれる。こちらは桃などいつ咲くことであらう。繰り返し〱なつかしさに堪へず



子守（入賞）山口縣 末富豐子

ほうずりしてをさめた。あゝ郵便の聲げにこは我にとつて天來の聲げにく今の我が身にとつてこれくらゐ嬉しい事はないのである。故郷を離れてかういふ淋しい片田舍にきてゐる身物見遊山といふこともなく、無論親しい話相手などあるべき筈なく、只知れる誰彼の君よりの便りが何より樂しみなのである。げに郵便の聲はどんなに嬉しく私の耳に響くであらう、淋しいやるせない心もどこやらへ失せ、げにいふべからざる慰藉をあたへらるゝのである。その郵便もかういふ片田舍なれば僅に一日一回きり、三里もむかふの郵便局から配達さるゝのである。さき頃或人にいつて笑つたが待たるゝものは郵便配達夫と。げにやかういふ片田舍で一番樂しみなのは親しい友などのたよりである。

郵便を透して、人なつかしさの情が切實に響いてゐる。(評)

切なる願ひ

小石川　北畠經子

あの山麓を長くうねつた白い道、今頃はその道の上を櫻が一杯に咲き亂れてゐるであらう。

そして時折落ち散る花は道に沿ふたあの底の見える程澄んだ小川に、夢の如く流れてゐるであらう。高等小學校時代に「末は何處にか漂ふらん逝く水のまにく」と言つた調子で綴つたもので、非常に讃められたのがあつたが、それは此處の春景色を書いたものであつた。

その櫻の咲いた處から一町も西に行くと、一つの路が分岐れ出てゐるが、それを四五町も行つた所に私の村がある。こんもりと防風林に圍繞された村である。私は祖母を連れて、よくその櫻見に行つた、さう云ふ時にはいつでも、古めかしい信玄袋が祖母の萎びた手に握られる。

日光はこの小さい盆地の上にいざよふて、萬象は夢のやうに微笑む。旅商人の群が通る。さうした日向の路を祖母と二人は、路傍にすつきりとして緑に燃えた嫁菜を摘みつゝ行く。

俛うゝづくまつて嫁菜を摘む瞬間などには、總てのものを冷い沈んだ死に導かねば止まないと云つたやうな冬に、見るかげもなく蹂躪されてゐた自然を聯想することによつて、柔いそれでゐて生氣に充ちた春の力を、より痛切に意識した。何十年來同じ處に同じやうな春を見て來た祖母にさへ、春は美しく樂しいものであつた。

祖母は摘草に手を働かせながら、寧ろ子供に近い微笑を洩らして色々の事を話して吳れたものだ。それは大抵、深い無智の世界に熟睡してゐた昔を、嘲つたやうな話であつた。殿様のお通りの光景などは、身振り迄して、道化者のやうに面白く話した。併し嘲つた心の底には、昔に對する憧憬が仄めき笑ふて話す中には、遣瀨ない一縷の哀愁が流れてゐた。嗚呼、總てが柔かく靜けき中に唯一つの哀傷のトレモロに聞き入ると言ふことが、私にとつてどんなに、懷しみ深いことであつたらう。

なつかしさに堪へられぬといふ心持が稍窺はれるのである。(評)

普請

羽後　その子

今月末頃から倉普請をする、と聞いてからの自分は、只其事ばかりを考へてゐた。考へなければならない或重大な事、のやうに、とやかく思ふて見た。人足等のあたりはゞからぬ笑聲や鑿や金槌の音が、四方に響いて、陽氣な、五月頃の空を思ふて輕い、心の樂しさを覺える。物心のついてから、私はまだ普請と云ふものに出會ふた事はなかつた。去年の秋初さんの家で普請があつた時よく、二階の柱を、抱き込んでは每日眺めた。男も女も、みんな、わだかまりのない、晴やかな顏して、青い空の下に、セッセと、働いてゐる人足共を私は、どんなに、陽氣に心よく眺めたらう。もつともそれは氣候のせいであつたかも知れない、寒いく時に、ハアハア云つて稼いでるのを見たのなら、稼人程みじめな可愛さうな普請程つらい——と思つたのだつたらう。けれ共私は、もう其時から、普請と云ふものは、賑やかで福々しい、ほんとに、いゝもの、と思ひ込んで、しまつたのだもの。だまつてゝ淋しくなるといつも「あゝうちでも普請をすればいゝな」と思ひ思ひした。それが事實となつて現はれた今、どうして、この胸の嬉しさを、おさへる事が出來やう。道具類や着物は皆母屋へ運ばなければ、ならないから

つて一ぱい出し散らしたお倉の中でセツセと片づけ物をしてゐらつしやる母樣を見ては何だか自分も手傳はなければすまないやうな、そして又御母さんと、色々、大人らしい普請の話なども、して見たくてたまらなかつたので急いでお倉にかけこんだ。「お前さんは、しんみり裁縫して下さる方が一ぱん助けになるんだから」、つてさつきあれ程云はれたのも、わすれてしまつて――。

少女の心になつてみなけりや分らない感興であらう。(評)

私の心

陸前　黄川田かよ

何と思つても羨ましい皆樣が羨ましい、

〇〇樣など、茶の湯は出來る御仕事は出來るそれに去年は、機業の傳習染物の講習にも入られた、いつもきちんとしたみなりをして、

私は今まで皆樣の見た事もない知らないあるものを、にぎつてるつもりで、皆樣のそれと匹敵する程のあるものを、にぎつてるつもりで、平氣で居た、にぎつたつもりのあるものは何であつたか、眼に見える何物をも殘されて居ない今私は泣きたい程悲しい。着物だつてさう縫つた事もないし、其の外何も出來ないのだから他人は私を馬鹿だと思つてるのでせう、だからあんな人世話したのだ私だつてもう二年かまわずにおいてくれられたら、まさか此のまゝで過ぎやうとは思つて居なかつたものを、

外からはそれがわからないのだ

たれも私の心を知らないのだ、



うす色眼鏡　下谷　山田いま

人の知らない心を私は持つて居る。

私はやつと安心した、私の心は私の外にたれも知らないのであつた、私は心だけは自由だ、たれの束縛をも受けて居ない、私はこれから自由な心のまゝに動きませう、

美しい着物きるのは好きだけれど、矢張私は眼に見えない、あるものゝために苦しみませう

強ちわがまゝばかりとも思へない、何處かに小さな自信が閃いてゐる。(評)

雨の宵

つばくろ

夕方から絲の樣に、ほそ〴〵と降りだした雨が、十三の絃に流れた手をすつと引いた途端にさら〳〵雨椽にしぶく音が夢の如に耳に入る、

びしよぬれではないんかしら――斯う思ひながら爪をすてゝ雨椽に出た。すべ〳〵と暖かい足の裏にひたと冷たさが泌みる、透してみればばくぎりを立てた如に椽の半分がびしよ〳〵にぬれてゐた。敷居の樋にも春の雨がたまつてゐた。

春の雨！斯う思つた私の心に明るい氣分がよぎる。

戸袋から一枚〳〵くつてゆく。たまつてゐた樋の水が、戸に押されて片方は庭へぽち〳〵したゝり片方は椽の板目をつたわつて流れてゆく

細い横しぶきが、さつと樹々をゆるがして私の頬をたゝく。ふつと仰いだ大空が恐しいほど暗かつた。こんな暗い夜、眞白な木蓮が咲いてゐるなら――と思ふ。たやかにしみ出た灯影に

沈丁の花群をとりまいた葉の一つ〳〵のかゞやき、春らしい鯉のおよぎ、暗になりゆく庭の面

居間に戻ると、ひた〳〵と雨夜の暖さにほのかに汗ばむ心地、閉めない方がよかつた——

戸のすゝけた棧ばかりが目にたつ。私は琴の柱を斜に倒して袋を掛けて鴨井に立てかけた。

何だか變に障子がふるふ思ひながら机の前に戻ると、かすかな！地震、玻璃と障子がかけあひの樣に小やかましくなる。春になつた！

私はぼんやり灯をみつめた。

描寫は細かいが、未だうまみが少い。(評)

名つけ

紀伊 和歌

嫂が出産してから二七夜經つた。赤坊はずく〳〵と屹立つて頬がふくよかに垂れてほんとに可愛らしい。兄は「お和歌叔母さんによう似てお多福だな」と言ひながら、よつぽど可愛いと見えて仕事の行き歸りにちよい〳〵と覗いて行く。來る人も〳〵も「上兒はんやなあ、名は何なのし」と言ふ、「まだ名なしですのよ」と私は其度に答へた。

今夜は桃のお節句で皆な白酒を祝ひ、夕飯が濟むと、ほんのり桃いろに染めた頬が六つ赤兒を抱いた嫂を取卷いて座つた。「今夜は一つ名をつけてお呉れ、皆で……」と兄が陶然たる顏を撫でゝ……。「ひふみと言ふ名は如何だらう」と母が赤坊を嫂の手から受取つた。叔父さん然と構へた小さい弟が「お母さん、學校で一い二つ三いつ。つてひやかされて泣いて來るよ」と言つたので皆一度にどつと笑つた。「さよと言ふのはいゝでせう」と優しく嫂が言ふ後から兄が「さよもいゝが相名が澤山あるよ、乃公は百合香がいゝと思ふ」すると默つて居た高等一年の弟が口を出して、ゆりかなんて僕ア嫌ひだ、兄さん後生だから止して下さい」と強硬に反對したでさあ六かしくなつて來た。赤ん坊は自分の名でもめて居るとも知らず祖母の懐ですや〳〵と眠つて居る。

「ね兄樣さち子がいゝわ」と私。「さち！どんな字なんだ」と父樣がお問ひなさる「幸と言ふ字です。」「うん、そりやよからう」と兄が横手を打つ。「賛成！」と大きい弟が叫ぶ。「桃の節句に幸子とつけたら、屹度幸があるわ、叔母さまありがたう」と嫂は子供に頬摺した、滿場一致、私の原案は通過して赤坊は幸子と名づけた。オゝ愛姪さち子！「さちさん、抱いて上げませう」と私は赤坊を母の手から受取つた。雛壇の燈火が華やかにゆらめく。

雛の夜だけに好い感じがある。(評)

輪櫛時代

因幡 しい柴

桃色と樺色とそしてごむ色と三種類ならべてある。輪櫛をいつも桃色のを買ふてもらつた、九つの年は離れ難い執着となつかし味のある年であつた。

御城のあとの石垣に沿ふたお堀があつた。その岸にはいつたいに、蒼い〳〵若草が春に芽を出して夏になつていよ〳〵茂り、秋冬になると、靜に眠つて了ふと云ふ土地に私は九才の日を過したのである。

あのお堀の中に落ちて死んだ人が何十人てあるんだよ祖母は常にかう云つて近づけまいとしたが、自分の反抗心は青い〳〵水を恐れながら、やつぱりあの美しいみどり葉をつむのを日課の樣にして居たとのだつた。

その中の五六寸の長さで三三分の幅の草はかもじと云ふて、一所懸命つむだ。つむではさき、つむではさきして指を三つ合せた程の太さになると、束ねて髪を結ぶのである。一ばん年重なる自分がこのかもじを彼の桃色の輪櫛でとくのだつた、愉快と云ふより先づ得意でならなかつた桃割と云ふては赤いかのこを掛けさせ、丸まげと云ふたのには青いのを掛けさせたのも幼い時の自分にはどんなに嬉しいかつたかしれない、又さきたてのこの草は妙な香が鼻をついた、それをうれしさと得意さとが一時にこみあげて努とめてとき出したときぽんと折れた。事も一度ではなかつた。腹立ちと失望!! さうしたときの自分にもう何にも打捨てゝ走り歸つて思ふ樣泣く。泣いたとて仕方はなけれど、小供なればこそ！

あれやこれやでやうやく、すかされて又つむでは、きつむではし始めるのであつた。折れた輪櫛をこま〴〵にして皆に與へたものであつた

片割月

越路　俠香

無量の思ひに三人は暫し默した。驛員の擧げた手を合圖に汽笛がピーと鳴つて、徐かに〳〵列車は動き出した「八重さん左様なら隨分お達者でね」二人は窓から半身を乗りだして八重さんの白い兩手を確りと握つた。涙は止度なく流れるそして四つの手におちた。車の歩みはだん〳〵早くなつて小刻な八重さんの足取が伴はなくなつたので仕方なく思ひきつてはなした手に手巾を持つて強く強く打ち振つた。「ぢや左様なら仲よく暮して頂戴よね喧嘩なんかなすつちやいやよきつとね。ホヽお手紙下さいねさやうなら。「左様なら。」夕暮の空氣があたりをこめて灰色がだん〳〵歩廊をおそつてくる。細い身體を歩廊の丸い柱にもたせて熱と動かずに見送つて被居る八重さんの身邊にも容赦なく迫つてゆく歩廊をはなれた汽車は線が替はるのでゴト〳〵といやな音をさせて激しく搖れる。

二人はいひ合したやうに硝子窓をピタリとしめて身を投げるやうに腰を下した。新しい涙は止度なく頰を流れるのをぢつと抑へて私はトランクの上にうつぶした。頭がグワン〳〵してまはりの人の話聲や、ゴト〳〵いふ車の音などが妙に耳についてそれがまたたまらなくうるさい

はれぼつたい濡れた目をあけると此方を見てゐらしたお目とヒタとあふ。おやさしいあの瞳は光つていた。はつとして外した目をそとへむける何時の間にか日はとつぷりくれて、春まだ淺いきさらぎの空には細い〳〵片割月が積つた雪を淋しく灰色に照してゐる



二人の女　豊前　つや子

思ひ出の花

隱岐　伊藤夕陽子

思ひ出と云へば思ひ出、たつた三日にしかならないけれどなぜか私の腦裡に印されて、其日を考える毎に、其の花が遠大なるタイプをもつて現はれる。

燒跡は一里も續いてゐたらう。まだ何處となく煙の香りがする縣道の兩側の野路をガタ馬車に搖られて春の日の暖さに四方のかわり行く樣を眺めて五人は行つた。

さゝやかな、けれど家並みの揃つた町に出て馬車は其儘濱邊へと急ぐ。窓から眺めていると町はづれ、きやしやな石垣で立てまはした、小綺麗な内門は石垣よりもやゝ上に出て新しかつた。眞白い花が石垣の上から見えて咲いてゐる其乳のよふな花、紙白、あら綺麗な花が……と云ふ間に馬車はすぎた。見返つたけれど早淡く、きしるまに〳〵、ハツキリ見る事は出來なくなつた。なんて云ふ花だらうかと思ひつゞけて！

小島々をめぐる淺茅灣一帶を一つのボートで乗りまはして、樣々な内海の景色に醉ふた。

群星

**

兵庫縣　さみどり女

▲はやぶさ様は十四から詩壇にお立ちに成つたと夜雨先生は仰しやつた。其頃私は十五と云ふ年で和歌位が關の山であつた。偶々小説等を書くと柳浪先生から要領を得てゐない等とお小言を頂いた。讀むと云ふ程では無く書くと云ふ程では猶更ない。とても私の柄にはないのだ、捨てやう捨てやうと思ひ乍らも、胸の底の一種の廉恥心と、强い未練の情とは、何しても此女子文壇から別れる事を許してくれなかつた。お眼の勢だつたんですもの——と知つてる程の人は、皆私を慰めてくれた。けれど私自身には然うは思へない。よし眼の勢だとした所で、此儘一年間と云ふ長い期間を、呢と落着いて進み行く友の後影許りを眺める事は何うしても出來ない。

勝氣と云へば聞えが好いけれど、分を知らぬ負氣から、一年後の取歸し許りを、おめ〱待つてゐる餘裕などは其頃の私の心に露程もなかつた。

落伍者と云ふ痛ましい名!!私を離れて見る私と云ふ者の姿が餘りに惘然に餘りに意氣地なく思はれ、何うして此淵から浮び出やう、何うして此恥辱を雪がう。

其思ひ許りが、日夜胸の底に蔓延つて、花を見れば薄黑く霞ませ、本を讀めば、灰色に滲ませ人と向へば舌の根を固く引締めて了ふ。

落伍者！此一言が偶と胸に浮かぶと、樂みや賑はしさも一時に搔消されて、私は急に暗い思ひに引込まれた。

一日でも一時でも此煩悶に惱まされる時間が多ければ多い程、進み行く友との距離が增す許りだ。然う思つて偶々相談を懸けても、相手は至極平和な顔付で、——お眼の勢ぢやありませんかと逃げて了ふ。

矢張人は人、自分は自分だ——私は絶望して叫んだ。

「お急ぎなさい。一歩でも早く。でなきやあなたは猶ゝ事遲れて了ふぢやありませんか。」只之丈の言葉さへ、寄せてくれる人は眞に一人も無かつた。

落伍者とは軈て世の總てから捨られた身の名であつたのだ。

女子文壇ゝ云ふ聲が懷しい鋭い響きを胸に傳へた時、私は心から救はれたと思つた。

終日の胸の重荷を下された喜びは、軈て過し日の恥辱を雪ぎ得る唯一の道を得た嬉しさであつた其頃から久し振りに、花にも、鳥にも、自然の儘の優美な性が私の胸に映り出した。希望の光りは遠い乍らも、運び行く我足もとを照してくれる。

我れながら、遲い步みが可悶しくて、横道へ逃れやうとは何遍か心で繰返した。然し振り切つてまで逃れ得ぬほど、懷しい或物を、女子文壇は持つてゐたのである、

それに私は僅か一年と云ふ馴染を捨てゝ、此文壇を去らなければならなくなつた。

女として必然來るべき一身の革命！が年も問はず響きも立てず嚴然と私を襲つたのである。

七年振の女子文壇は、猶過し日其まゝの一脈の氣分が流れてゐる。藝術の底に、どこ迄も女らしい女の權威を含んでゐる讀者文藝欄の空氣は七年振の可懷しさを呼起すに十分である。

只に文藝愛好の女子達丈ではなく、一般新時代の女の好侶伴として、擴張された本欄には、本文壇の主意が明白に示されてゐると思ふ。現代女達を包み込んだ時流の渦巻に惱まされてゐる私の胸は、快よい安息を與へられたやうに感じられる。

けれど普通號の文藝欄は、本文壇の特徴幾分を殺れた感じがないでもない。尤、四月號僅々一冊から受けた感じの事故、自然偏見の罪は免れない。私は又然うした方面の慾求から、豫告に表はれた「婦人文藝」を待ち焦れてゐる一人である。

〃君は餘り田舍に長くゐすぎた〃藤村先生は並木の相川の口を借て恁う仰しやつた。思ひは胸に溢れながら、其一部分も筆に上らない、私は、矢張臺所に長くゐすぎたのであらう。

**

富山　鈴木くが子

よく若い女の口から、都會にあこがるゝ。と云ふ聲を聞くが、私はその度に何ともいへぬ、なさけない氣持になる。かうした平和な、美しい

田舍をすてゝ、どうして都會へ行きたからう。貧弱な心と、貧弱な體を持つて都會へ走つたとて何になろ。しかし私は、何も、保守的思想で云々するのではない。生々とした若い人達は四方に向つて思ふさま發展するがいゝ。だが、都會にあこがるゝなど云ふ女に限つて、實力も何もない。彼女らの心に都會といふのが、どんなになつて響くか知らん。自己を磨かうといふ目的もないらしく、唯かう、はなやかにして地方にゐる友を羨しがらせたいと、かういふあさはかな心とよりしか私には思へない。

私は田舍を好である。さうしてあの、平和な畑に種子を蒔く農人を愛する。誰やらさんは、いつか地主と、小作人との悲慘な戰ひをお書きになつたが、私のみる農人は、あゝしたみじめなものではない。

雜誌などで、女優になりたいなど思つてゐる女の多い事をみるが、あまりに輕卒だと思ふ。何かいゝものが表はれると、すぐそれにあこがれて終ふ。何故もつと重々しくせないか。腰ぬけ女優ばかりたくさんゐたつて、藝術がいちじるしく進歩するといふわけもあるまい。

＊＊＊

東京　みさ子

新しい女！此頃諸々方々で大分盛になつて參りました。――奥樣からお孃樣、お女中に到るまで「妾等新しい女……」てふ騷ぎ。

私も、之れは無論同性の爲に祝ふべきことゝ思ひます。けれども私はこれ等の方々が本當の新しい方か、どうか、疑はれてなりません。それは、あまりに、新しい新しいとおつしやり過ぎやしないかと思ひます。私は、世間の女攻擊者に、新しい女てふ言葉を、辯解語と見做されることを恐れます。

口や動作ばかりが新しくても、眞の新しい人とは云はれますまい。

眞の新しい女は、傳來の惡習慣を退け、どこまでも、女子は女子としての權利を主張し、義務を負はなければなりません。言ふまでもなく清く、そして理想的でなくてはなりますまい。

私等は、少なくとも此れ位な道は踏んで眞の新しい女になり度いと思ひます。

＊＊＊

信濃　みすゞ

▼私の好きなものは百瀬美水さんの散文です、それから望月れい子さんの詩です、みね子さんやちさ子さんの散文も好いけれど、何だか讀みづらいやうです、和歌では江森さんのが好きです。

▼もつと評論を盛んにして下さいね、先生方のも好いけれど、皆で勝手なことも言はして頂きたいと思ひます、記者樣は載せて下さるでせう。

▼小說の六號活字になつたのは心細いやうですやはり五號活字にして頂きたいと思ひます。

＊＊＊

東京　いらつめ

○增刊「婦人文藝」の一口評を書いてみやう。濁血は流石に小笠原さんだと思ふ、生理的描寫？心理的描寫？むづかしいことは知らぬが、何はあれ此作には引きつけられた。なつめは話の筋が面白かつた。前島さんの一年ぶりは、ほんとに一年ぶり、相變らずおとなしい書きぶり、試みはつかまへ處は分つてるが、書きぶりが澁つてゐる、とは失禮かも知れぬけれど――媛はんの群は一寸考へさせる作、思ひの外或る考を持つて入らつしやる方かも知れない。芽生は邦子さんのお歌、久しぶりで拜見したが表白がお上手だと思つた、でもしんみりとした處もある。よく泣く少女は琴子さんの例の個性が能く表はれてゐる、でも青鞜に出るものほど烈しくはない。山裾はすこしひねくれてゐるやうに。思つたのは僻目か、餘り考へ過ぎてゐるやうだ。新しき世は例の通りお若い。杉浦さんの貴婦人に與ふる書は大いに痛快、大いに同感、私等も後をしますから、やつて頂戴。子供が欲しいそんなものでせうか、私等には分らない。障子一重はらくに書いてあつて、うまいものだと思つた。一人者よりを讀んで新しい思想をうんと注入さんたやうに感じた筆の力ですわね。心もそらに、詩は能く解らないが、何でも此方が一等お作に力が入つてゐるやうだ。春の林は好い散文。帝劇女優試驗を受けし記は成程斯ういふ事をやるのかと注意して讀んだ、何です、お前も女優になりたいのかつて、いゝえ、それはお隣りの石田みどりさんのことでせう、私なんか行かぬさきから落第よ。

▲群星欄の投稿を歡迎す　（記者）▼

和歌

○（天賞）　伊賀　古美女

あまたゝびたまはる文をかへしかねもだゆるひまに春は行きにけり

○（地賞）　姫路　九十子

このからだ置きどころなし憎むにも戀ふにもたらぬ人とあるゆゑ

○（人賞）　小石川　北畠經子

草摘めばせめて善けんと出でし子の涙ながらに歸り來しかな

○　麻布　伊東浪子

洗ひ髪五尺丈なす君がかた櫻眞白うちる夕べかな

○　足利　杉山千枝子

血の如き紅き椿の散り落ちぬ悲しき夢の忘られて行く

○　淺草　小川あやめ

何となく人にみらるゝ心地して面はづかしき初島田かな

○　芝　古澤ふく子

君が身を思ふかいなく君はたゞ思ひも知らぬ我とのみ知る

○　埼玉　保科錺子

沈默のしばしつゞけば脈膊のわれにひゞきぬ人なき室に

○　小石川　小野孤兎子

春の日は水を含みて虹つくる日向遊びの子等にまじらむ

○　高崎市　松井茂子

幾歳か身につけなれしカシミヤの袴を脱ぎて別るゝ春よ

○　澁谷　前田敏子

眼をとぢてひたに君戀ふ甘やかさお白粉の香の草に漂ふ

○　釜山　章子

櫻ちる寂しき窓に身をもたせ北行く雲に思ひ運びぬ

○　香川　とみ女

晴れて行く日はうつくしき山裾の畑の上に桃の花咲く

○　山口　千代子

さゞめきの夜のちまたに宿求む順禮の子よ我が姿かな

○　信濃　美草

かの日頃小鳥を愛でし君故に小さきうつはをもて遊ぶ哉

○　小石川　矢澤みき子

朧夜や玻璃戸に倚ればほろ／＼と山櫻散る淡雪のごと

○　兵庫縣　八上俊子

ありし日の御髪のたけを思ひ出で藤の花見る若き尼君

○　伊賀　山中靜子

歸るさの別れをしみしかの驛の君の御姿まぼろしに見ゆ

○　京のはづれ　大橋峰路

疲れてはやすらひ居れる我前に細く靜かに春雨ぞ降る

○　對馬　伊藤夕陽子

對馬路に君いまさぬはかなしやな沖の小島は今日もかすみぬ

○　伊賀　福田ぎん子

朝まだき露ふみわけて君訪へばいさゝか濡れぬモスリンのすそ

○　伊賀　田中千代子

まぼろしに過ぎし夢などゑがきみる春の夕べの淋しきたわむれ

○　堺市　高橋倚子

一人去りまた一人去りわが友の去りゆく後も歌讀みて居ぬ

○　姫路　春紅子

ますらをにふさはしからぬみ言葉よわれ狂ほしと云ひ給ふこと

○　鳥取縣　たみ子

花散りぬ戀散りぬふと君故に散りぬと言ひて哀れなるかな

○　京都　水莖時雨

悲しみてふ物をいだきてあてもなく夕の町をさまよひてあり

○　神戸　石井須磨子

野も山もみな花ながら此の身たゞ一つのことの悲しみになく

○　西多摩　笹本夕美子
春風は春風はにくし黒髪のもつれほぐすに我なやましく

○　宇品港　木本白汀子
しづみゆく夕日の色のさびしさに泣きた
くなりぬ唇をかむ

○　豊後　孔雀
たそがれはいや忍ばるゝ人の上畑に
立ちて乳を抱えて

○　佐賀　おちは
君を思ひ花散る宵は雨の音と蛙なく
音をさびしくきゝぬ

○　兵庫縣　松並ひさ
いとかるくねたましきまで飾りたる
女の友と遠ざかり行く

○　常陸　鈴蘭
雄々しかる君によそへて泌みぐ\と
筑波の山を春の朝見る

○　名古屋　波の花
いたま！き君が瞳のかゞやきよ里を
はなれて山路ゆくとき

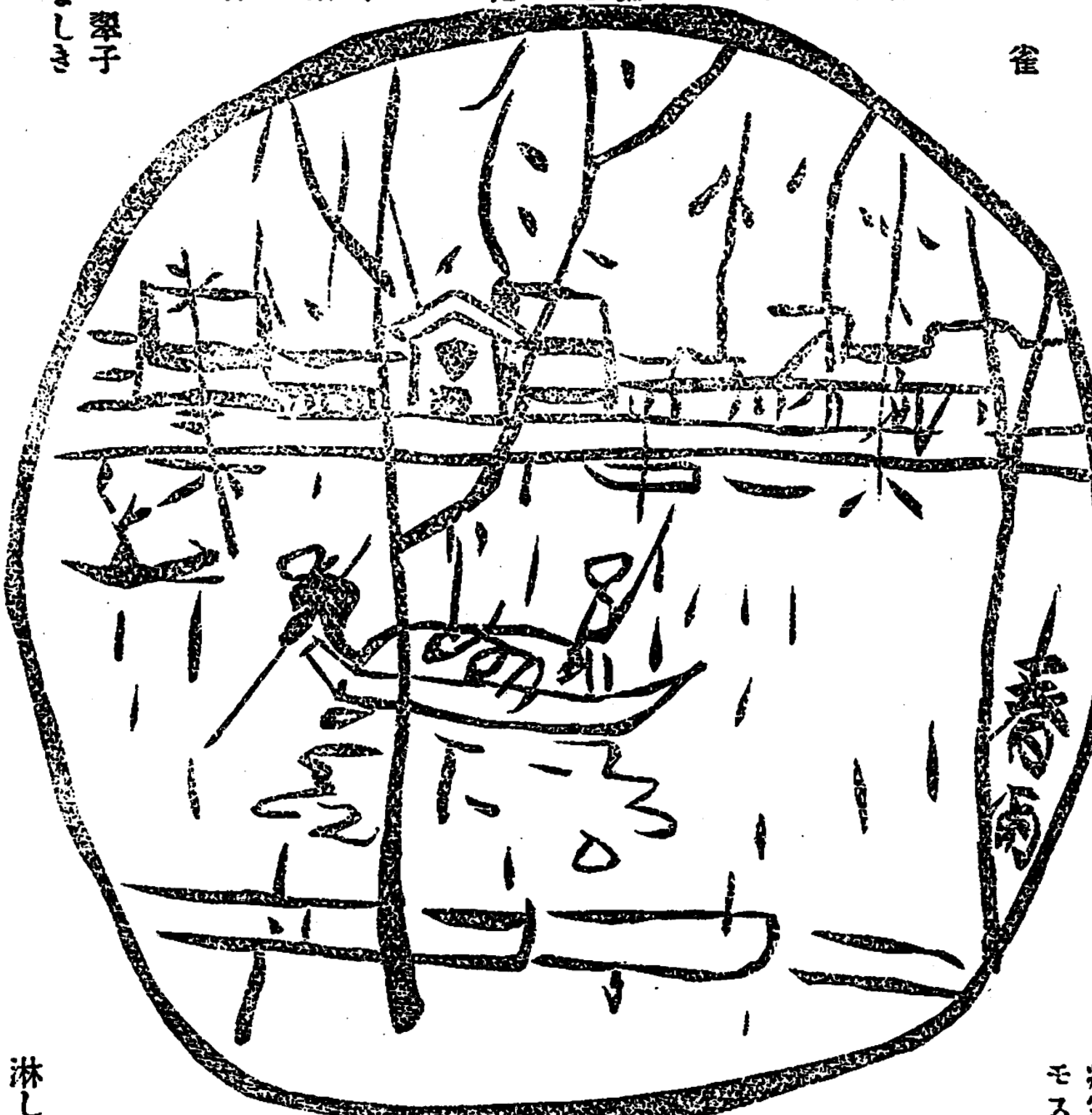
○　姫路　靜子
紅つばき重たきつゆにはらぐ\と淋
しくもちる春雨の庭

○　紀州　林口和香
あはれこのなすこともなき今日の日
を早くすごさんなやましきゆゑ

○　赤坂　松井翠子
散りしける庭の櫻を拾ひをきてかなしき
春のかたみとやせん

○　山口縣　田熊登美子
春の宵離れ小島の海こえて二つ並べる赤きともしび

○　千葉縣　野島とく子
林檎買ふはづかしき夜よ人妻は明るき瓦斯の下をよけつゝ



春雨　伊賀米田美代子

○　本所　片平恒子
病室の窓にもたれて涙目に白く漂ふコス
モスを見る

○　高知　山川幸子
君在す空は彼方のはてなれどわ
が夢のうちに通ひくるなり

○　美作　小林わか子
朝戸くれば朝日さすなり永劫の
眠さめよと朝日さすなり

○　埼玉　佐藤しづえ
はらからも別れぐ\となりにけ
り父母もたぬ辛うすきゆゑ

○　播磨　藤井つや子
憧憬も誇りもあらぬ十八の山の
をとめの心やすさよ

○　佐渡　わくらば子
はてしなく涙ながれぬ別れ來て
運命の前にぬかづけるとき

○　濱松市　嵐敏子
蛇籠編む籠師も見ゆれ野梅咲き
し土手の竹籔鶯の鳴く

○　山口縣　末富豐子
よき人の再思ひつゝそゞろにも
うたゝ寝すらむ長閑けき日哉

○　羽後　その子
淋しさに灰に文字など書きてあれどあや
しきかげの消えがてにして

○　豊後　散残る花

うつくしと思ひみしまに山ざくらいつしかちりて春はゆくかな　城南　鈴枝

○

つくづくと鏡の我を見てあればくろきかげ見ゆ悲しきかげよ　越路　佳香

○

思ひ出てまた泪しぬ草の上に春に背きし我が心かな　京都府　薗田久

○

こみどりの空匂やかに赤き花は打ちふるひつゝ咲きてある哉　金澤　吽の花

○

寂しさは火桶に殘る敷島をそとかみて見ぬ君去りし後　愛知　姫胡蝶

○

しらじらと誠つくりて昨日までいつわりし人呪ふても見る　紀伊　大澤古幽

○

山寺の縁につかれて憩ふ時靜かに散りぬ山櫻花　山口縣　うめのやしき

○

もの思ひするもはかなし人妻はむしろ蓬の芽など摘むべき　栃木縣　小森いつ子

○

水青し舊城趾の堀深し若き柳と舊き柳と　山梨　吉田くにえ

○

しめやかに春雨はふるしめやかに嫁ぎし友は昨日を語る　富山　鈴木くが子

○

琵琶湖とは誰が名づけしぞ其底に琵琶かい抱きて眠る子ありや　備前　長船てる子

○

月暗く靜に音なふ雨の音君がみ足の音ときくかな　丹波　さみどり女

○

泣きつくし果てんとぞ思ふなまじひに恨みは云はじ御文の前　山口縣　總友織野

○

沈默を守りて春の灯の影に涙しおはす君美くしき　神田　小島和子

○

こまやかに雨にしめれる箏の音を聞くも悲しや友を思へば　長岡　秋月すゞ子

○

思出は鯨波邊の砂の上語りあひつゝ落日を見し



（天賞）ほとゝぎす祈願の髪を斷つ夜かな　横濱　小枝子

（地賞）太刀納め酒に淸める花の宮　上毛　阿久津雲路

（人賞）引越して名殘の惜しきさくら哉　金澤　吽の花

交へ折つて白桃奨るゝ嬉しさよ　伊賀　末田美代子

汐干狩のぞいて見るや人の籠　神奈川　紫雲子

菜の花や夜祭りにゆく村の衆　府下　鈴枝

荷の上に櫻そへたり女馬子　山口縣　末富ひさ子

西に筑波南に富士や刀根の水　茨城縣　潮の子

種蒔やなげ出したる鍬光る　新潟縣　河合梭江子

畑掘りて蛙の眠り覺ましけり　紀伊　大澤古幽

臼掘りの臼に散り込む櫻かな　麹町　牧野銀李堂

春雨の侘しきまでにふりにけり　那須野　千代子

咲きゆれて蝶の飛び退く菜種かな　東京　深雪

春淺く京の客あり初櫻　兵庫縣　高原の女

青柳歌の本賣る女かな　千葉　飯田恒子

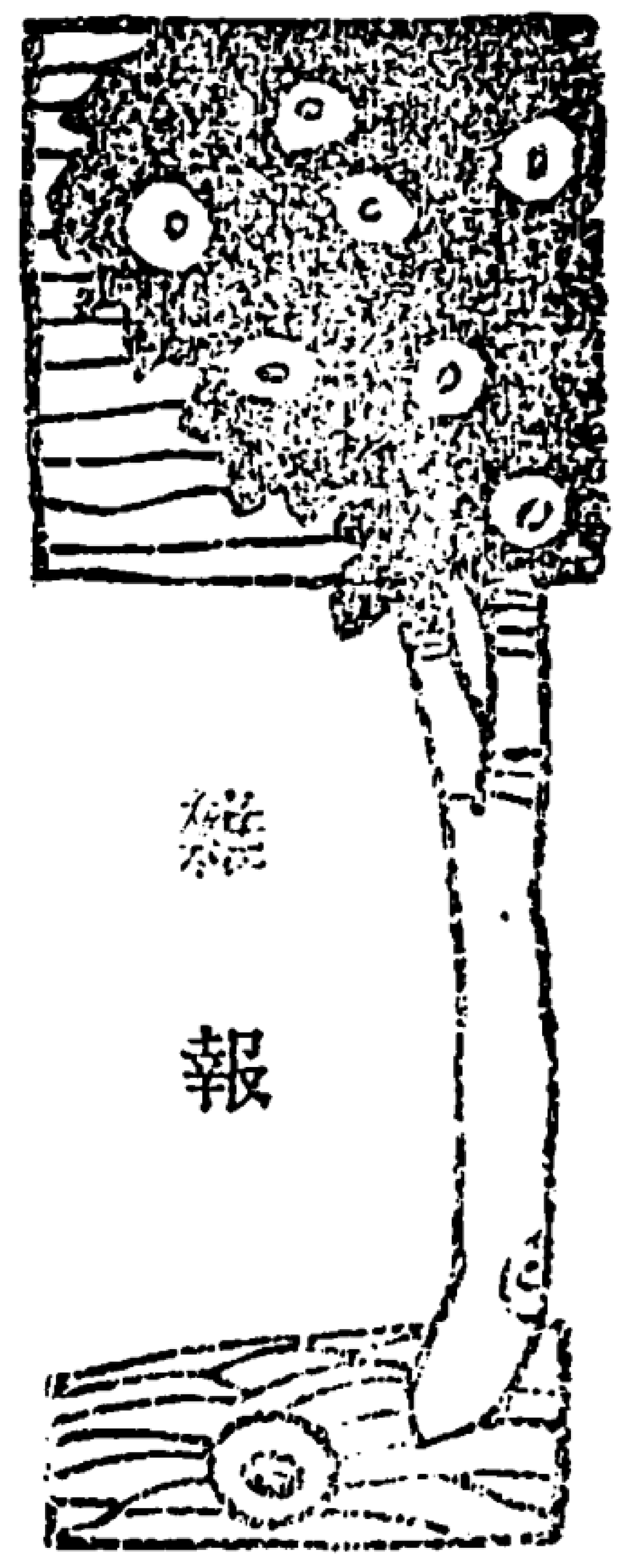
歌枕吉備の中山かすみけり　岡山　東多賀野

うつとりとなる程花の盛りかな　香川　楓雪

梅散るや瓦の上に點々す　麻布　鈴木いち子

金髪を輕くなぶるや春の風　大阪府　宮崎唯代

山吹の下を流るゝ小川かな　伊賀　佐藤千代子



雜報

○櫻桃の花は新綠の影に散つていつた。けれども花見の行樂は絶える事がない。日比谷公園では噴水に近い躑躅の丘に數百の花燈籠が點ぜられ紅花紅燈のうつり榮ゆる美觀をみんとして集る人々のために公園の廣場も狹きを感ぜしめた。堀切の菖蒲、龜戸天神の藤の花も例年にもまして人出が多かつた。

○五月四日眞新婦人社主催の第二回婦人雄辯會が和強樂堂で開催された聽衆は滿員で男七分に女三分、辯士は木村駒子、西川文子、宮崎光子の三氏であつた、盛んなる眞劍の告白は笑聲罵聲の中にもひるまず、それぞれ氣焰をあげた。

○徳田木村兩中尉を犧牲とした飛行界はまた〳〵武石浩波氏を京都深草に墜死せしめた。世間の同情は一齊に武石氏の上にそゝがれ、盛んなる葬儀をいとなんだ。武石氏は米國にありて飛行術を研讃する事數年、篤志苦學の人として世間からの同情が厚い。まことに惜むべき人であつた。

○五月六日千葉縣鴻の臺に遠足した本郷湯島尋常小學校の生徒が歸途栗の市の渡しにて渡船顚覆したために三名の溺死者を生じ、其他は救はれた此の慘事は痛く世の父兄の胸をおどろかしめ、子を持つ人は寄るとさわると此の話をして一種の不安を抱いた。二名の死體は發見されたが、殘る一名は發見されない。然るに此の一名は母親一人子一人であつたゝめに母親は殆んど狂せんばかりである人の子をあづかる教師の責めや大である。

○五月十日正午頃俄に空がかきくもつて驟雨來り雷鳴と共に約三十分間に亘りて、大豆大の雹が降つた。今回の降雹は去る明治四十二年の大降雹が世界的降雹史のレコードをなせしに比較すれば、桑麥等の被害はそれほどの事はないさうである。其の他東京の降雹と前後して、水戸、名古屋、彦根、長野、横須賀、甲州地方にも多少の降雹があつた。

○「ラジール」液の效能　古來リウマチスの藥は幾千百あるか知れないが之れを買つて失望した人も亦幾千百人か知れないであらう。それといふもリウマチスに最良藥のなかつた結果である、然るに東京四谷區大横町杉田藥房から今度發賣した「ラジール」液は急性、慢性リウマチス及び神經病殊に肩の凝、腰の痛みには大效能があつて確かに理想藥である。

▲女子文壇社代理部特賣品

本社へ御申込になれば便利で確實にして安い物が買はれます。此の外廣告欄にある品物は何でも御取次致しますからドシ〳〵此機關を御利用下さい

◉植木式新案特許 輕便防腐器

▲特價｛特製五本用 金三圓八十錢　並製五本用 金一圓八十錢　並製三本用 金一圓五十錢｝各送料三十錢

從來世間にあるものと異り底の構造により湯の沸き早く炭は少量にて且便利品なり。

◉植木式新案特許 簡便哺乳器（完全消毒罐）

▲特價｛完全消毒罐 一號（劃度附）金十五錢　二號（無度）金十二錢　同哺乳器 一號三十錢 三號二十五錢 松印十五錢 竹印十二錢 各小包八錢｝

產科婦人科專門 山本、高橋兩醫學士證明

◉新案特許 冷え知らず（一名子宮保溫器）

▲特價 金五拾錢 送料四錢

此を御用ゐになれば、家に居つても溫泉に入浴も同樣にして、子宮を溫め婦人諸病を根本から治する効能あり、使用法も亦簡便にして何の面倒もありません。

◉東京流行 德用蛇の目傘

▲特價｛◎女持七十錢、九十錢、一圓二十錢 ◎男持八十五錢、一圓、一圓三十錢 ◎學校用小供持三十錢、各送料八錢｝

いろ〳〵種類がありますから御注文の折は男女の別又は年齢を御申越下されば色合等は見計ひ送品致します、御好品も調製致し升。

藤川藥學士先生發明 ◉新案特許 安全帶

▲特價｛安全帶◎甲一圓二十錢◎乙八十錢◎並五十錢◎各一本で四五年使へ升◎安全衣一打金四十錢◎內地送料一組（帶衣共金八錢餘）｝

歐米婦人の用うる月經帶の長を取り短を補ひたる物ですから起居動作にも便利なり、如何なる月經の多き方にも之を使用せば過失の憂なし。

藥劑師間中綱彥先生發明 ◉新ふけ取香水 レゾール

▲特價｛大瓶金九十錢　小瓶金五十五錢｝各送料八錢

如何なるぬけ毛を始め、ふけをとめ髮のくせを直すこと妙なり。

◉新案特許 ハイカラたすき

▲特價｛一組箱入 金八錢　五組箱入 金卅五錢｝送料二錢

今までのタスキとちがひ袖にシワのつく心配がなく掛けはづしにも面倒なく至極便利なり。

◉特許竹中式 小町はり箱

▲特價｛本黑塗製金一圓二十錢、特製金六十五錢　上製金五十錢△送料小包八錢海外三十錢｝

本品は學生諸孃が通學に携帶し易く家庭用としても便利且實用向にて取扱も亦自由なり

女子文壇増刊原稿募集

新しき文藝

結婚前後

結婚前後は婦人一代の中に於ても最も記録すべきことの多き時なり、事實もよし、感想もよし、理想もよし、成るべく結婚其ものを經驗したる諸君の誠實なる記述を望む、感想の切實なるものか、事實の興味あるものかを探る方針なり。一行二十四字詰、二百行以內、振りかなつき（一等金五圓、二等金參圓、三等金貳圓以下掲載したるものに悉く贈賞）

小品文

水野葉舟先生
澤村胡夷先生
河井醉茗先生
共選

不斷の小品文より更に優勝なる婦人の小品文を募る、選者は三人の共選にして、平均點數の勝れたるものを一等とす、選拔は丁重にし且懇切なる批評を附すべし、二十四字詰、百行以內、凡てふりかなつき、題は隨意（一等價格金五圓、二等金參圓、三等金壹圓、四等以下十等迄凡て物品にて贈賞）

現代十婦人

皆さんの愛し且尊敬する現代の婦人十名を選みて其名を擧げること、現代に生存してゐる名婦人に限る、簡單に其尊敬する理由を說明するも可なり（一等女子文壇一ケ年分、二等同上半ケ年分、三等三ケ月分）

和歌

和歌は一人十首限り投稿されたし最優等者數名に贈賞す、なほ紙面の許す限り多くの作を發表すべければ、諸君も亦振つて多數の佳作を投稿あれ。

特に方法を設けて募集するものは、右の四種ですが、元來『女子文壇』文藝號は諸孃の筆の上の自由舞臺ですから、右四種に限らず、何にても面白き文章を投寄下されば、欣んで掲載し、必ず贈賞をいたします。例へば若き少女達の感想文。家庭に於ける日記の如きもの、或は友人間に贈答する手紙の寫し、さまざまの思ひ出、紀行文、天然の描寫、町の人々のことなど諸孃の周圍より材料を取つて盛んに投稿あるべし、別に行數其他に制限を設けず、一切諸孃の自由に任せて、內容の好いものを採ると云ふ方針にいたします。（必ずふりかなつき）

注意

以上各種の原稿には、必ず『新しき文藝原稿』と朱書して下さい、なほ紙上の匿名は自由ですが原稿の一端に住所本名をお書き添へ下さい。（新しき文藝は七月十五日に發行す）

・投・稿・締・切・六・月・十・五・日

文界消息

▲いかるが詩社の成立。詩壇現狀の沈滯にあきたらぬ一派の人々に據り、いかるが詩社といふものが出來た。會員は蒲原有明、薄田泣菫、河井醉茗、北原白秋、澤村胡夷、三木露風、上田敏の七人である。一年に三回づゝ七人の詩作を一冊として出版するので、第一の詩集は『マンダラ』と題し、製本を美にして來る六月下旬、書肆東雲堂より發行の筈である。

▲公衆劇團。と云ふ名乘を擧げて、大谷竹次郎、河合武雄、小織桂一郎の署名で、劇界に新運動を興すといふ主意書が天下に發表された。

▲太平洋畫會。五月廿四日より六月十八日まで上野公園に開かる

▲現代名書展覽會。前月末、高須梅溪氏主幹にて三日間開かれたり。

▲現代詩文。服部嘉香氏主幹の東京代々木山谷詩歌研究會にては會員に『現代詩文』講義錄を頒布する由にて目下會員募集中なり

▲水野葉舟。氏の植物觀察を書きたる『沈默せる生』は近く出版されるであらう、

▲誌友消息。▲太田喜志子は前月一男子を擧げた、名は旅人と云ふ、良人若山牧水氏の面影が先づ其名に傳へられた ▲近江のわかばゝ上京中 ▲近江の細野鈴蘭は茨城縣に移つて姓を變へた ▲板倉はま子は一女を擧げた、まり子と云ふ ▲原田琴子の『ふるへる花』は愈々出版された

◉寫眞募集

諸孃のお寫眞は勿論、風景、風俗各種の寫眞を募集します、掲載の雜誌は必ず贈呈し、寫眞は御入用ならお返しいたします。猶ほ全國寫眞業者諸君にも、同好の方は御寄贈を願ふ

文藝欄 投稿規定

▲文藝欄の投稿は女子に限る ▲原稿は自今振りがなを要せず ▲二十一字詰小品文は三十行乃至五十行以內 ▲小說は二十四字詰百行以內 ▲詩は長短隨意 ▲群星欄も長短隨意二十一字詰 ▲和歌俳句は一人一首限り ▲圖畫は必ず方二寸以內 ▲投稿は每月十五日、嚴に締切る。

▲贈賞 ▲小說は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢 ▲小品文は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢、▲詩は天賞金一圓、地賞金七十錢、人賞金三十錢 ▲和歌は天賞金一圓、地賞金五十錢、人賞金三十錢 ▲俳句は天賞女子文壇叢書一冊、地、人賞は本誌一部宛 ▲圖畫は天賞金七十錢、地賞金五十錢、人賞金三十錢 ▲群星欄は平素優秀なる投稿を送る人に二箇月每に金一圓の特賞を呈す ▲以上贈賞は金一圓以上には物品一圓以下は圖書切符にて贈るものとす。

改正 定價表（每月一回一日定期號外年四回增刊 增刊號同額）

△一冊分（送料とも）	前金拾九錢五厘
△三月分（增刊共四冊）	前金七拾參錢
△半年分（同八冊）	前金壹圓四拾錢
△壹年分（同十六冊）	前金貳圓七拾錢

◁申込注意▷

注文は總て前金のこと◎振替貯金（口座東京一七二九番です）にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと（用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れます）◎郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと◎郵券代用は必ず壹割增のこと（收入印紙は絕謝）◎最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ本社への照會は返信料添付なければ回答せず

◉廣告締切期限……每月十五日の事

廣告掲載料金は御照會次第御報す

取扱所 博報堂、電報通信社、各報社、文明廣告社

大正二年五月二十五日印刷納本
大正二年六月一日第九年第八號發行

不許複製

編輯兼發行人 野口竹次郎
印刷人 松本魁
印刷所 東京國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十一番地 女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替東京壹七貳九番

特約販賣 東京堂北隆館上田屋至誠堂東海堂永久堂良明堂大阪盛文館

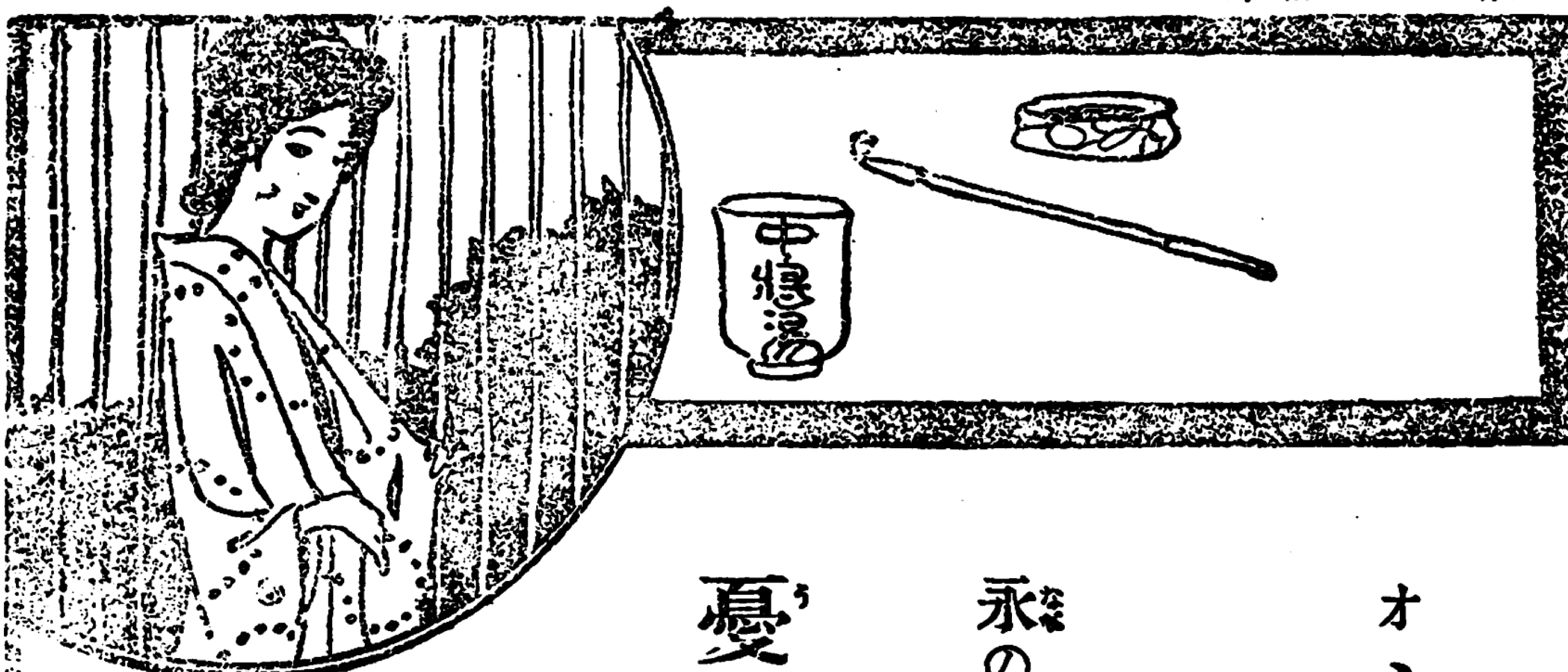
大正二年五月廿日印刷 大正二年五月廿五日納本

女子文壇

第九年第八號 六月一日發行（毎月一回一日）

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

㊞本誌大賣捌所 （東京）東京堂 東海堂 北隆館 上田屋 至誠堂 永久堂 良明堂 （大阪）盛文館 其他全國各地書店取次販賣



オヽ嬉しや辱なや
中将湯の効果ゆゑ
永の婦人病も根を絶えて
今日衣更のすか〳〵しく
憂さや辛さの忘れ草
ホンニ身も世もノンビリと
重荷を卸した心地よさ

中将湯は子宮血の道より起る左の諸症を治す

●子宮病 ●血の道
●内膜炎 ●膣加答兒
●下腹痛み ●夜眠れず
●難産流産 ●つはり
●氣ふさぎ ●月經不順
●産前産後 ●胸先差込
●腰足冷込 ●白帯赤帯
●こしけ ●癇高ぶり
●月經滯り ●逆上頭痛
●月經痛み ●血ふとり

定價

四日分	三拾五錢
一週間分	六拾錢
二週間分	壹圓拾錢
三週間分	壹圓六拾錢
五週間分	貳圓五拾錢

本舗

東京日本橋通四丁目
津村順天堂本店
振替口座六〇八番

大阪市堺筋大寶寺町
津村順天堂出張店
振替口座四五六番

▲女子文壇 改正定價金拾八錢 郵税一冊壹錢五厘